

悪魔の子と、勉強人と 五等分の花嫁達

雨を呼ぶてるてる坊主

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

天と地の戦いで、仲間の一時の幸せを願いながら、最愛の人に斬られ死んだエレン・イエーガー。のほろぼろだが、目覚めると座標におり、ユミル・フリッツに「もう一度人生を歩んでみないか」と持ち掛けられる。第二の人生で悪魔は平穏に暮らせるのか？

もしも、エレン・イェーガーが原作の巨人化能力を失った代わりに賢くなつて五等分の花嫁の世界に転生したらどうなるのかという作品です。

「進撃の巨人の綺麗な終わり方を汚すな!!」や「チートエレンは嫌い」「エレンの性格が原作と違うじゃん」と思われる方はブラウザバックをお願いします。

普段の性格は進撃巨人中学がベースで、シリアス回の性格は原作がベースです
ノリで書きました。

(注意)

顔文字を多用している為、一応PCで見た方が見やすいです。

エレミカ勢の方注意です。

エレン推しの作者が、エレンを自分なりに幸せにしたいだけの作品です

巨人は出てこず、対人戦などが出てくることはありません。

反社会的な言葉が出てきますが、本作は犯罪を助長する物ではありません。

たまに各キャラの性格がぶつ壊れます。

処女作です。

活動報告にも書きましたが、少し諸事情により一時的に未完とさせていただきます。
今は少し、こちらの作品の執筆意欲が湧かなくて……。とは言え、執筆を中断するの

はこの作品のみなので、もしどこかで見かけたら、別作品の方も宜しくお願いします。
ではまた、いずれ再開する日まで。(2024/01/14)

目次

プロローグ

座標にて眠る

1

発見

6

1000年以上先の未来へようこそ

14

「本編開始!!進めええええ!!」

出会い

24

驚愕と胃痛

36

新たな事実。

42

仕事と任務と新たな仲間

65

合計100点

73

歴史と契約

86

悪夢と勉強と料理対決

111

五つ子裁判（審議所）

134

先人の説法

145

「夏祭り編？何それ美味しいの？」

不穏な予兆

158

四女からのお誘い

164

搜索と、叱咤激励

181

目覚めの予兆

194

悪魔と狂犬の蹂躞

202

全員で五等分　そして明かす秘密

217

「中間試験？駆逐してやる!!」

アドレス交換？@って何？

228

試験勉強!? 訓練時代の成績5位を舐めるなよ!!	243	人の頼みを聞く時は計画的に	369
人生ゲームとトラウマ	256	買い物(デートもどき)と看病	396
好みのタイプ? 何だろな。	264	豪雪の中でのお泊り会	419
別の視点から見て、分かる事もある。	289	林間学校本番へGO!!	440
これぞ、前門の虎(先生)、後門の狼(時間)なり	312	カレーを作ろう!!そして肝試しだ!!	447
娘を想う父VS1182歳の高校生	333	え、仕事?冗談だろ?	468
(元兵士)		次女の初恋	477
「林間学校?雪山登山訓練みたいなもんか?」		スキーと捜索。	499
エレン先生のお料理教室	359	苦杯(くはい)の炎(ほむら)と、誓いの炎(ほむら)	499
		「本当に大切なものは、失ってから気付く。」	

犯人は誰だ!!	512
思い出の品	537
亀裂	558
救出	583
過去を知る	592
想い人の旧友	599
月下の懺悔と涙と告白	613
一難去つてまた一難	636
悪魔と五女の連携作戦	644
勝ち取る自由と、仲直り。	668
家族という事以上に、幸せな事は無い。	700
さよならとは言わせない	717

「あけおめ! ことよろ! 姉妹戦争(シズターズウォー)——開戦編」	761
明けましておめでとう!	780
それぞれの道、それぞれの夢	811
何故夢を、目指すのか。	822
火蓋は切られた。	859
「旅館で五つ子ゲーム! 姉妹戦争(シズターズウォー)——旅館編」	879
旅行ですか? いいえ、出張です。と	
思ったら、五つ子ゲームです。	
それぞれの思惑	
少年達と、少女達の関係……。それは	

一体・・・？ | 890

父と悪魔の覚悟 | 913

警告 | 926

襲撃 | 940

激突 | 958

五女の慟哭（どうこく） | 983

しゃあああ!! 試合終了（ゲームセツ

ト）オオオ（C V：子安 武人）

997

盟約の鐘 | 1022

帰郷 | 1036

「新学期も一筋縄ではいかない！ 姉妹戦

争（シスターズウォー） | 新学期編」

新学期に出会えば、キラキラ系男子★

| 1070

本日の天気は、トイレときどきキラキ

ラ男子。その後デート（もどき）と成るで

しよう。 | 1089

新家庭教師のライバル | 1111

1111

プロローグ

座標にて眠る

エレン（ここは一体どこだ？確か俺は終尾の巨人と成って、ミカサやアルミンや同期たち、そして、ファルコ達と戦って死んだはず。）

エレン（見た感じあの世じゃなくて座標だよな。）

??? 「大正解だよ。エレン・イエーガー君♪」

エレン 「誰だよお前」

??? 「いや、私だよ。ユミル・フリッツだって。」

エレン 「え、お前ユミルなの？」

ユミル「だってここ座標だよ、私以外で誰がいるの。」

エレン「あ、そっか。」

エレン「いやいやいや、何でいるんだよ。首ちよんばされた俺とミカサのキスシーンで後ろで微笑ましそうにしてたじゃん!!成仏しそうな展開じゃん!!何でまだ居るんだよ!!」

ユミル「んー、私を解放してくれた恩人に、挨拶をしに来たのと、チャンスをあげる為かな?」

エレン「チャンス?」

ユミル「だって、君の事が可哀そうと思ってさ。」

エレン「何で?」

ユミル「いやだつて。世界の真実に気付いて一人で戦ってきたわけなのに一人で死ぬわけでしょ？ミカサたちはこれから英雄視をされて人命を全うするのに。」

エレン「まあ、そうだけど……。じゃああれか、今から生き返らせてくれるのか？」

ユミル「いやいや、今生き返つたら、ミカサやアルミン達は喜ぶかもしれないけど、壁外人類は君を殺そうとするかもしれないよ。」

エレン「じゃあ、何をしてくれるんだ？」

ユミル「今から君には、少しの間アニみたいに水晶の中で眠ってもらおう。そして適当なタイミングで水晶を解くから、目覚めた時代で生きてほしいんだ。」

エレン「じゃあ、あいつらにはもう会えないのか……」

ユミル「そうだね、でももしかしたら新しい出会いもあるかもしれないよ。」

エレン「わかった。なら暫くは水晶の中で過ごすよ。」

ユミル「へえ、判断が早いね。」

エレン「新しい時代を生きるってのも悪くはなさそうだしな。」

ユミル「じゃあ、シガンシナ区で埋葬されている君の首から下を作り直して水晶で覆うね。あとオプシヨンとして頭も良くしておくね。」

エレン「その後、お前はどうなるんだ？」

ユミル「この世に未練は無いから成仏するよ。」

エレン「そうか、何か寂しいな。」

ユミル「まあ、またあなたが死んだら会えるでしょ。」

エレン「そうだな！」

ユミル「(前向きね) それじゃあまたね。お休みエレン」

エレン「お休み、有り難うユミル」

ユミル「どういたしまして。」

こうして、後に世界史に刻まれる人類史上最大の戦争「天と地の戦い」の終結854年に悪魔の子は眠りについた。

発見

モブ歴史研究者A「ようやく着いたぞお前たち!!」

モブ歴史研究者B「ここが隊長の言っていた1000年以上から衰える事のない大樹ですか!!」

A「ああ!!ここら辺の周辺地形や、木の幹の特徴などを紐解いていけば、1000年以上過去にどの様な環境で育って来たかが丸裸というわけだ!!私の研究もファイナルステージという事だ!!何より日本政府からの直接の調査依頼だ」

モブ歴史研究者C「盛り上がってる所、申し訳ありません隊長。」

A「む、どうしたんだねC君」

C「この大樹の根元に人間が入り込める程の大きさの、穴がありますよ。見た感じと

歴史研究者として数十年以上活動を続けてきた老年の探検家A。彼の目の前に広がるのは、誰もが驚愕する様な異世界の様な幻想的な景色ではなかった。

しかし、歴史家である彼にとっては驚愕の一言に尽きるものであった。

B 「隊長！ご無事ですか！」

C 「何、命綱つけずに飛び降りてるんですか！！馬鹿なんですか貴方は！！」

A 「B君、C君これを見たまえ・・・。」

C 「何なんですか！って、え・・・。」

B 「何か見つけたんですか？って、はあ!？」

彼らは、無言になった。それは現実の時間においては数秒であった。だが、彼らの体感時間は数時間、否数年にも思える時間が流れた。

そこにあるのは、直径2 m高さは3 mであろう巨大なアーモンド状の水晶の中で静かに目を閉じ眠る、一人の青年。鍛え上げられた肉体はしなやかで、綺麗な目鼻立ち。しかも、肌は瑞々しく血色も良好であり、仮に1000年以上前から存在していたとしたら、美しすぎる状態で、何かから守られるように保存されていたのだから。

B 「た、隊長これって・・・」

A 「ああ、間違いなく人だろう。それに、この水晶の状態から考えるに、この青年は間違いなく1000年以上前に実際に生きた人間だ!! 正に、神が作りし芸術作品だ!!」

C 「世紀の大発見じゃないですか! その様な遙か昔の人間がここまで綺麗な状態で保存されているなど!!」 カメラノシャッターカシャカシャ

B 「とは言えどうやって運び出しましょう。こんな大きなもの命綱じゃ切れてさ」

ピシッ

A B C 「んんん???

A B C 「どわああああー！ー！ー！ー！！」

エレン 「ゲホツゴホツ、あ、頭痛てー！ー！ー！何処だここ。」

B 「喋ったー！！」

C 「ていうか生きてるー！！」

エレン 「おい、お前らここは何処だ、ていうか誰だ今は西暦何年だ。」

A 「二人とも落ち着け！歴史研究家たるものこのくらいの出来事で喚くでない！！そこ
の御仁、貴方の名前をお聞かせ願えないだろうか？」

エレン 「俺が質問してるんだ、ていうか、自分から名乗るのが礼儀つてもんじゃねえ
のか。」

A 「これは失礼した。私は歴史研究家のAという。政府の御命令により此処の地質などを調べに来た者だ。あちらで喚いているのは私の助手だ今は西暦2017年だ。」

エレン 「そうか、俺はエレン・イエーガーだ西暦835年に生まれた。年齢は多分16歳だ。2017年という事は、俺が生きていた時代から1000年は経過しているという解釈で良いな。」

A 「ああその解釈で構わない。しかし、奇想天外な事が起こりすぎているこの状況からどう報告すればいいのやら・・・」

B 「隊長、一度地上に戻り、この事を政府に報告しませんか？」

C 「そうでもしない限り、生き返った以上彼の戸籍などの今後の事も決めなければなりませんし。」

A 「確かにそうだな。イエーガー君、一度我々と来てもらえないだろうか。君の今後を決めなければならない。」

エレン「構わないぜ。俺も未来のことを体感してみてえからな!!」(？ω？。、)キ
ラキラ

A「わ、分かった。では、地上に出ようか」

A B C (めっちゃ目キラキラさせてる)

人類の8割を虐殺した悪魔の子が未来を知るまであと少し・・・

1000年以上先の未来へようこそ

エレン「うおおおー、車はマーレに潜入してた時にも見たけど、外見とか、全然ちげー!!」

A「喜んでもらったようで何よr」

エレン「何だあの建物！超大型巨人よりでけー!!あの建物何メートルあるんだ!!」

A「あれは、東京スカイツリーと呼ばれる物だ。高さは634mもある。（超大型巨人って何だ？）」

B「さつきから気になってたんだが、超大型巨人とか、マーレとかって何なんだ。」

A（ナイス質問Bくん!!）

C 「それは思った。何か我々が知らない歴史なのかそれは。」

エレン 「話しても良いけど、信じてもらえるか？」

ABC 「『勿論だ』」

少年説明中……………

A 「つ、つまりは君のいた時代には、人を捕食する巨人という生物が跋扈はつこしており、君はその生物たちと戦う兵士であったという事か。」

B 「けど、見た感じ15歳くらいじゃねえか。良く戦い抜けたな。」

C 「ちよつと待て、とある文献に、とある大陸で広範囲に渡つて人類の8割が死滅したつていう文献が無かったか？もしかして、君はそのことに関係しているのか？」

エレン 「……………ああ、関係してるよ。何せその8割を虐殺した張本人だからな。」

ABC「え……」

運転手「皆さん、国会議事堂が見えてきましたよ。」

首相執務室

総理大臣「そうか、調査チームが返ってきたのか!!」

総理大臣補佐官「はい、何でも歴史的瞬間が変わるような調査結果を持って帰って来たとか何とか。」

A「総理!いらつしやいますでしょうか!」ドンドン

総理「ああ、入り給え。」

A 「失礼します！歴史研究家チームA、只今帰還して参りました!!」

総理 「お疲れ様。無事に帰って来てくれて何よりだ。」

B 「労りのお言葉感謝いたします。」

C 「総理、調査結果なのですが・・・」

総理 「ああ、聞いているよ。何でも日本、いや世界の歴史が大きく変わる様な結果だそうじゃないか。」

A 「調査の報告内容なのですが、実際にご覧になって頂いた方が早いと思ひまして。」

総理 「というと?」

ABC 「「入ってくれ。」」

エレン「失礼します。」ガチャ

総理「む、君は誰かね？私があの大木調査の為に派遣したメンバーでは無い筈だが。」

C「総理、彼は・・・」

エレン「お初にお目に掛かります、総理。私の名はエレン・イエーガー。水晶の中で約1000年の間眠っていた所を、彼らから解放して頂きました。」シンゾウヲササゲヨ
ノポーズ

総理「????」

B「つまりですね、我々もまだ頭の整理が追いついていないのですが。」

—— 説明中 ——

総理「」

総理大臣補佐官「……り、……総理!!」

総理「はっ!!」

総理大臣補佐官「大丈夫ですか？」

総理「あ、ああ問題ない。少し状況を理解するのに手間取っていただけだ。」

総理大臣である山田（仮名）は、補佐である田中（仮名）にこうして落ち着いた様に振る舞ってはいるが、内心は人生史上最も戸惑っていた。何せ派遣したチームが、数週間ぶりに帰って来たかと思えば「歴史的瞬間が変わる物を見つけた」等と言い、どの様な「物」かと期待していた矢先に、1000年以上過去の生きている「者」を連れてきたという、ぶっ飛んだ物であるからだった。

その様な者を見せつけければ、思考を止めるなと言う方が、無理な話である。

山田総理「あー、エレン・イエーガー君だったかな？」ミケンノシワモミモミ

エレン「はい。」

山田総理「まずは、1000年以上の未来へようこそ。私は〇〇代内閣総理大臣と
いつても分かりづらいか、まあつまりこの国のトップの人間だ。」

エレン「つまり、女王陛下の様な物でしょうか？」

山田総理「その解釈で構わない。唐突な質問で申し訳ないが、君はこれからどうする
つもりだ？」

エレン「えーと、適当に仕事を見つけて、住居探しとかですかね？」

山田総理「戸籍はどうするんだい？」

エレン「え？こ、戸籍？」

山田総理「酷な事を言うだろうが、戸籍が無ければ、住居はおろか仕事も見つからな

いぞ、仕事が無ければ基本的な生活をする事も出来ない。」

エレン「う、っ……。そ、それは……。」

山田総理「そこで取引だ。」

エレン「取引？」

山田総理「少しづつで構わないから、君の体験してきた事を、報告書として逐一我々の下へ送付してくれないか。そうすれば、戸籍や居住居、しばらくの生活費は我々が援助しよう。そして、もう一つだが、君は兵士として活躍していたそうだね。」

エレン「そうですが、それが何か？」

山田総理「そのことに関して何だが——」

エレン「だがそれでは、貴方達にメリットが無い。」

山田総理「メリットはあるさ。何せ人類史が変わる様な出来事を我が国が知れるのだからね、その代表者としてこれ以上のメリットは無いよ。」

エレン「そ、そうですか。」

山田総理「それから、君は15歳だそうだが、学びの場である高校に通ってみる気は無いかい？」

エレン「学びの場の高校？」

山田総理「私の知り合いが、経営している旭高校に入学してもらおう。君にとっては、眠っている間にどの様な事が起こっていたかを知る事が出来る、人間関係も構築出来てメリットしかないぞ。」

エレン（人間関係の構築ができる場か……。ユミルの言つてた新しい出会いってのもあるかもしれないな。）

エレン「あんたは、俺が関わってきた連中の誰よりも欲が深いらしい。」

山田総理「君は頭が良い」

エレ・山「取引成立だ。」

悪魔の子、高校入学

「本編開始!!進めええええ!!」

出会い

??? 「焼肉定食焼肉抜きで。」

エレン「チーズハンバーグ定食、チーズ増し増しで。」

おばちゃん「はいよ。」

エレン「風太郎、お前またその精進料理かよ。(呆れ)」

風太郎「何言ってるんだ。2000円のライス単品よりも焼肉定食焼肉抜きにすると、通常4000円の所、」

エレン「焼肉分の2000円引かれて、ライス単品と同じ値段で、味噌汁とお新香が付いてくるんだろ。2000回は聞いたわ。」

俺が現代に蘇ってから1年が過ぎた。がらりと変わった時代背景にも馴染み、高校にも無事に入学が出来た。交友関係も広くなり、様々な情報が入ってくるのは実に新鮮だと思う。

そして、隣に居るのは俺の現代で初めて出来た親友の上杉風太郎である。超が付くレベルの勉強好きであり、アルミンに似ていると感じたのは秘密である。

モブ男子「上杉、またエレンと食ってる」

モブ男子「エレン以外の友達いないのかよ」

モブ女子「あの二人学年トップ2のガリ勉じゃん」

モブ女子「ねえねえ、エレン君ランチに誘ってきてよ〜」

モブ女子「自分で行きなさいよ〜」

筋肉質男子「エレンの奴、正式に空手部に入部してくれねえかな」

今日もいつも通り、多種多様な喧騒を聞きながら昼食を食べる、筈だったのだが：

ガシャン!!

風太郎「・・・」

エレン「お？」

一人の女がトレーを置いた。見た感じ制服違うし転校生か？

??? 「あの！私の方が先でした！隣の席が空いているので移ってください！」

風太郎「隣はエレンの席だ、俺達二人は毎日この席で食事をしている。だからあんたが移れ。」

??? 「私は午前中にこの学校を見て回ったせいで疲れているんです!!」

風太郎 「そんなこと知——」

風太郎 「ツツ!!」

エレン 「ゴゴゴゴゴゴ」

風太郎 「エ、エレンさん・・・?」

エレン 「風太郎、何でお前はすぐに自分の感想をズバズバ言うのかな? その所為で、去年から好印象持たれて無いの知ってるよな? その度に尻拭いしてるのが何処の誰か分かっただのか? (# ^ ω ^)」

風太郎 「ヒイツ (; || 。 ω 。)」

エレン 「俺は隣の席に座る。あんたもそれで良いな? 連れが悪かったな。」

??? 「は、はい。」

——少年少女食事中——

??? 「食事中に勉強とは・・・、行儀が悪いですよ」

風太郎 「二宮金次郎は褒められるのに、なんで俺は怒られるんだよ。」

??? 「状況が違います!!」

エレン 「そうだぞ、せめて秋ナスと普通のナスの味の違いがわかるように成ってからしやがれ（フィクションだけだ）。」

風太郎 「ほっといてくれ、テストの復習をしているんだ。」

??? 「食事中に勉強なんて…、相当追い込まれてるみたいですね？何点だったんですか？見せて下さい！」

その時俺は、すつと目を伏せた。何故なら彼女はすでに上杉の術中にはまっているからだ

風太郎「あー！やめろみるなあ!!」

??? 「100点…?」

エレン（はあ出たよ。こいつの次のセリフは）

風太郎「あーっ!!めっちゃ恥ずかしいわッ!!」

エレン（やっぱりな。ていうかわざと親友の怒りのボルテージを上げさせてんのかこいつは!!というか相手の子絶対怒ってるだろ!!こいつのノーデリカシーのお陰で、アルミンやミカサの苦勞心が分かったわ!!）チラッ

??? 「わ、わざと見せましたね!!」

風太郎「さて、何の事だかな？」

??? 「うう……。悔しいですが勉強は出来る様ですね。私はそこまでなので羨ましいです。」

??? 「そうです!! 良いことを思いつきました。せっかく相席になったのです!! 勉強を教えてくださいよ。」

風太郎「御馳走様。エレン、先行つとくぞ。」

エレン「お、おう……。(嫌な予感が)」

??? 「ええっ!! 食べるの早過ぎませんか? お昼ご飯それだけでいいんですか? 私の分けましようか?」

エレン(頼む風太郎!! 会釈か、最低でも無言で立ち去ってくれええ!!!)

風太郎「満腹だね、むしろあんたが頼み過ぎなんだよ」

エレン（お願いだぁぁー！！）

風太郎「太るぞ」

エレン「＼（＾o＾）／オワタ」

???「ふ、ふと…!?!あなたみたいな無神経な人は初めてです!!もう何もあげませんツ!!」

風太郎「らいはからだ。また後でな、エレン。」

エレン「また後でな」（訳：後で覚えとけよ、このシスコン。）

風太郎「あと、勉強ならそのエレンに教えて貰え。そいつは俺と同じとは言えねえけど、平均90点台後半は当たり前だし、教え方もうまいし、優しいからな。」

エレン「ちよつ、待てよ」

??? 「全く！何なんですかあの無神経な人は！」

エレン「本当にすまんな連れが、あいつの代わりと言っちゃなんだが、謝らせてくれ。」

??? 「い、いえ。貴方が悪いわけではないので。」

エレン「俺は、エレン・イエーガーだ。宜しくな。あんたの名前は？転校生だろ。」

??? 「はい、私は中野五月と申します。宜しくお願ひします。先程は食事中にも関わらず怒鳴ってしまい、申し訳ありませんでした。」

エレン「気にしてねえから、安心しな。それにしても盛りだくさんだな。」

五月「うう……。やはり、食べ過ぎなのでしょう。自分でも分かっているんです。食べ過ぎだという事は……（ω・ω）」

エレン「何で、食べ過ぎたら駄目なんだ？」

五月「何故ってそれは、食べ過ぎは肥満の原因にもなりますし。」

エレン「まあ確かに、その危険性もあるわな。だがバランス良く食べ、適度な運動を心掛けていれば、そんな事も無い筈だぜ。」

五月「た、確かに。」

エレン「何より、あんたが美味そうに食ってる姿、見てて悪い物じゃなかったしな。」
ニカッ

五月「あ、有り難うございます。」

エレン（敬語に加えて、食事好き。サシヤみてえだな。・・・幾ら平和の為とはいえど、あいつには、悪い事しちまったな。）

五月「あの・・・？」

エレン「わ、悪い。考え事してた。ええと勉強を教えて欲しいんだったな？」

五月「はい。実は、余り勉強は得意では無くて。このままだと留年してしまうかもしれないのです。」

エレン「そこで、さつき風太郎に紹介して貰った俺に教えて欲しいと。」

五月「はい、御迷惑とは思いますが貴方にしか頼れる人が「良いぜ」居ないので・・・つて、今何と・・・。」

エレン「良いって言ったんだよ。」

五月「本当ですか!？」

エレン「ああ、困ってる奴を放っておく程、堕ちちやいねえよ。そうだ、連絡先交換しておこうぜ。」ケータイゴソゴソ

五月「はい。」ケータイゴソゴソ

エレン「よし、これでOK。教えて欲しいときは連絡入れろよ。一緒のクラスだと良いな。またな五月!」

五月「はい。ではイエーガー君もまた会いましょう!」

悪魔の子、美少女の連絡先入手成功★

驚愕と胃痛

教室

ガヤガヤワイワイ

モブクラスメイト集団「なあなあ、エレン。」

エレン「ん、どうした？」

数人のモブクラスメイト「昨日の化学のイオン化傾向が分からねえんだけど。教えてくれるか？」

エレン「良いぜ！委員長、黒板使って良いか!?!」

委員長「勿論良いよ！」

エレン「そもそも、イオン化傾向っていうのは。金属が水溶液中で陽イオンになろうとする性質の事。つまりは、鉄は錆びやすく、金は錆びにくいっていう事なんだよ。」

クラスメイト達「(・|・D フムフム (∴) むメモメモ」

エレン「まあ、言っても恐らくだがテストで聞かれんのは、イオン化傾向のなりやすさの順番だろうなあ。」

クラスメイト達「それって覚え方とかは・・・」

エレン「俺は、リッチに(Li)借りる(K)か(Ca)な(Na)ま(Mg)あ(A
l)あ(Zn)て(Fe)に(Ni)すん(Sn)な(Pb)ひ(H₂)ど(Cu)す
(Hg)ぎ(Ag)るしやつ(Pt)きん(Au)って覚えたぜ。」コクバンカキカキ

クラスメイト達「スゲー!!」

エレン「よーし、全員リズムに乗って言いましょう!!」

エレ・クラ 「リツチに借りるかな まあ当てにすんな ひどすぎる借金♪、FOO
!!」

エレン 「よし、今日の講義はここまで!!」

クラスメイト 「起立・礼!ありがとうございます!!」

エレン (今日も良い感じに教えられたぜ。あいつらには、この国の流行とかを教えて貰ったからな。その恩返しをしていかねえと。(・ω・) フンスツ!)

風太郎 「エ、エレン、ちょっと良いか?」 ↑ (食堂の件でエレンに怒られた人)

エレン 「どうした、風太郎。」

風太郎 「ちょっと話があるんだが・・・。」 クイクイ

——人気のない場所——

エレン「どうしたよ。こんなところに呼び出して。」

風太郎「実はな、俺の・・・」

エレン「風太郎、個人の恋愛観は自由だと思うがすまん、俺はノンケなんだ。」

風太郎「は？」

エレン「こういうシチュエーションを日本の性的な漫画では「男同士、人気の無い場所。何も起きないはずが・・・」って言うんだろ。」

風太郎「違えよ!!しかも、元ネタと微妙に違うし!!」

エレン「違うのか。じゃあ、何の用だよ？」

風太郎「実は、うちの借金が無くなるかもしれないんだ。」

エレン 「へえ！良かったじゃん。安心しな、骨は拾ってやるから。」

風太郎 「どんな物騒なバイトを想像してんだ!!家庭教師のバイトだよ!!」

エレン 「教え子に手出すなよ。」

風太郎 「ぶん殴って良いか!？」

エレン 「軽いイエーガー流のジョークだよ。大方手伝えって言いたいんだろ?」

風太郎 「ああ。」

エレン 「良いぜ。つってもこっちの都合にも合わせて貰うからな。」

風太郎 「了解。」

エレン「で、そいつの苗字は？」

風太郎「なんでも、

中野って言うらしい。」

エレン「」

悪魔の子1182歳、人生最大の胃痛を迎える。

新たなる事実。

ワイワイガヤガヤ

担任「えー、皆さん。」

ギヤーギヤー、ピーピー

担任「皆さん!!」

キヤーキヤー、ウホツウホツ

担任「いい加減にしな「お前らー」s」

エレン「先生来たぞー。静まれよー。」

全員「「「了解!!!」」」

エレン「先生。OKです。」

担任「あ、ああ。(解せぬorz)」

担任「えー、今日は皆にお知らせがある。知っているもの多いだろうが、転校生がやって来る。男子は喜べ!!女子だ!!」

エレ・風以外の男子「うおおおおおー——————!!!」

女子「これだから男子は……」

エレン(早く授業始まらねえかなー。風太郎は自習中か。(#? ▽? #) ボツケー。)

風太郎カリカリカリ

担任「では、入ってきてくれ。」

??? 「失礼します。」ガラガラ スタスタ

エレン（あれ、何か忘れてるような・・・って、え!!（旦那。。。）

??? 「中野五月です。どうぞよろしくお願いします。」

エレン（そういえば、五月の奴転校生だったー!!!ていうか、風太郎は!!）チラッ

風太郎「ポホポ（。。旦那。。旦那。。旦那。。旦那。。）ポカーン」

エレン（燃え尽きてるぜ…真っ白にな…。）

担任「じゃあ、あそこの端の席に座って貰おうか。」

五月「はい。」スタスタ

風太郎「ど、どーも」

五月「・・・」プイッ

エレン（あーあ、俺知ーらないつと。）

五月「よろしくお願いします。つて貴方は、イエーガー君!!」

エレン「よっ! さっきぶり!!」

担任「何だ、イエーガー。お前知り合いだったのか。」

エレン「さっき、食堂で会いました!!」

担任「そうか、なら中野さんは今日は教材が無い為、お前が見せてやれ。」

エレン「了解つす!!とところで、さっき「今日」と「教材のきょう」を掛けたっぼいですけど、思い切り滑りましたね!! (ゝゝ♪)」

担任「掛けとらんわ!!」

エレン「真面目つすか!!」

担任「当たり前だ!!一応、授業中なんだから真面目にしろ!!」

エレン「はい(´3´)」

周囲「ｗｗｗｗｗｗｗｗ」

エレン「何はともあれ、宜しく頼むぜ五月!! (ゝ・▽・ゝ)ノ」

五月「はい!宜しくお願ひします!!」

— 授業終了、放課後 —

担任「えー、これで今日の講義は終わりだ!! しっかり予習、復習をするように!! 解散
!」

クラスメイト「エレン! 今日柔道部の助っ人来てくれね?」

エレン「わりい。今日用事があるんだよね。また誘ってくれ!! 主将に宜しくな!!」

クラスメイト「りょうかい。」

エレン(さてと・・・)

エレン「五月、今日はお疲れ。」

五月「イエーガー君。今日はありがとうございました。」

エレン「んー、教科書の件か？どういたしまして。」

五月「いえ、自己紹介のときの話です。」

エレン「へ？（・|・？）」

五月「正直な所、あの時は緊張していたんです。ですが、貴方が空気を和らげてくれたお陰で、他の方々とも打ち解ける事が出来ました。」

エレン「ああ、そういう事か。どういたしまして。」

五月「あの、そのような事をしていただいた後で、図々しいとは思うのですが、勉強を教えて貰えませんか？」

五月「実は明日、父が雇った家庭教師の方が来られるのですが、基礎を分かっておかなければ、呆れられてしまうかと思ひ・・・。」

「エレン「OK!!最終下校時刻まで時間あるし、図書館でやるか。御家族には連絡入れとけよ。」」

五月「それに関しては、すでに入れてあります。」

エレン「御家族は何て？」

五月「「晩ごはんまでには帰りなさいよ」とのことです。」

エレン「良い御家族じゃねえか。じゃあ行くか。」

五月「はい、お手数をお掛けして申し訳ありま「STOP」せんが、はい？」

エレン「今何て言おうとした？」

五月「申し訳ありませんと・・・」

エレン「俺としては、有り難うって言ってほしかったな。」

五月「有り難う・・・ですか？」

エレン「そ、せっかく待つてたのに謝られたら、「余計なお世話だったかな」って思う
だろ？けど、有り難うって言われたら「やってやるぜ」って気合が入るじゃん。」

五月「な、成程。では、有り難うございます。イエーガー君。」

エレン「どういたしまして、五月！じゃあ、今度こそ行くか！」

五月「はい!!」

数時間後

<帰り道>

エレン「いやー、お疲れさん。」

五月「す、すみません。あまり進めませんでした。」

エレン「気にすんな。最初からパーフェクトにできる奴なんて、そうはいねえよ。現に俺がそうだったし。」

五月「そ、そうなのですか？」

エレン「意外だったか？」

五月「(*。D。(*)。|。)コクコク」

エレン「昔、まだ世界の事を知らなかった頃は無茶しまくってな。その頃の友人達は、「死に急ぎ野郎」なんて呼ばれてたもんだ。」

五月「し、死に急ぎ野郎ですか・・・。」

エレン「その頃は大きな夢に向かって、所構わずだったからな。精神的にも肉体的に

も、未熟なクソガキだったよ。視野が狭いせいで、周囲に迷惑かけまくってたし。」

五月「そうだったのですね……。あ、着きました。」

エレン「お、そうか。つて、デッカ!!」

五月「はい、ここのタワーマンションに住んでいます。」

エレン「そ、そうか。」

五月「では、今日はありがとうございました。また明日会いましょう。」ペコリ

エレン「おう。御家族にも宜しくな。また明日。」テフリフリ

エレン（明日から風太郎の授業頑張れよ、五月。）

風太郎「焼肉定食焼肉抜きで。」

エレン「ダブルチーズハンバーグ定食、チーズギガ盛で。」

おばちゃん「はいよ。」

風太郎「なんか今日、量多くね？」

エレン「今日は風太郎の初高給仕事だろ。景気祝いに半分やるよ。遠慮するな。」ヒョ

イ

風太郎「何か、本当にすまん」

エレン「五月と顔合わせ辛いんだろ（・皿・）9 m。」

風太郎「うぐう。」

エレン「俺もフォローしてやるから、さっさと行くぞ。長引かせると面倒だ。」

エレン「早速発見★おーい、いつk・・・」

五月「お待たせしました。」

??? 「もー、遅いわよ。」

??? 「まあまあ、いいじゃん。」

エレ・風（友達と食ってる!!）

五月「すみません上杉君、席は埋まっていますよ（　　）？（　　）。（　　）」

風太郎「くっ!!」

エレン「自業自得じゃねえかw」

風太郎 「うるせえ！向こうで食ってくる!!」

??? 「あれ？君達行つちやうの？席探してたんでしょ？私達と一緒に食べて行けば良いよ。」

エレン 「俺はどつちでもいいけど？」

風太郎 「いや、俺は・・・」

??? 「そのクリクリした目の子は兎も角、目つきの悪い君は美少女に囲まれてご飯食べたくないの？」

風太郎 「・・・」

??? 「彼女いないのに？」

風太郎「き、決めつけんな！」

エレン「こいつ、彼女どころか、鬼のコミュニケーション能力皆無のせいで全然友達も居ないけどな。」

風太郎「喧しいわ!!向こうで食ってくる!!」

???「まあ、待ちなよ。五月ちゃんが狙いでしょ。ん？」

エレン「え、マジで!？」

風太郎「いや、狙ってるわけじゃ・・・」

???「えっ!?!ほんとに五月ちゃんなんだ!？」

風太郎(こ、こいつ・・・(#、ω、))

??? 「ずばり、決め手は何だったんですか？真面目な所？」

エレン 「性格も似てそうでもんなあー。んー？素直になつちまえよー。ニヤニヤ」

風太郎 (前言撤回。こ、こいつら・・・(#^ω^))

??? 「あ、そうだ。私が呼んできてあげるよ。」

風太郎 「待て。自分の事は自分で何とかする。(あんまり知られたくないし。)」

??? 「ガリ勉君の癖に男らしいこと言うじゃん!!」

エレン 「今日のお前かっこいいぞ!!何か変な物でも食ったか!!」

ダブルバシーン

風太郎 「痛ってえ!!エレンは一言余計だ!!」スタスタ

??? 「困ったら、この一花お姉さんに相談するんだぞ。なんか面白そうだし(ω^ω^ゞ」

エレン「何なら、エレンお兄さんでも良いからな（＞ω＜）」

風太郎「お姉さんって・・・、同級生だろ。多分・・・」スタスタ

エレン「無視された（・ω・）」

一花「アハハ、君はあのガリ勉君と違って、ノリが良さそうだし、話しやすそうだね。」

エレン「まあな。あいつが特別コミュニケーション能力皆無なだけだと思うけど。」

一花「良かったら、一緒にランチでもどう？」

エレン「俺で良かったら、全然OK（*^_^*）。あ、自己紹介だな。エレン・イエー
ガーだ。」

一花「へえ！君がああの五月ちゃんの言ってた!？」

エレン「What?」

一花「いや昨日、家から帰ってきたら、「エレン・イエーガー君という親切な方から勉強を教えて貰いました。」って言ってたから。お姉さん、君に興味がわいてきたな。」

エレン「だったら、立ち話もなんだから、一緒に食おうぜ!!」

一花「良いね!君、最高!」

??? 「ずいぶん遅かったわね。って誰よそのイケメン!」

??? 「ご飯冷めちゃう……。誰……。その人……。?」

五月「イエーガー君!!此方ですよ!」

一花「ごめんごめん。つてあれ？四葉は？」

五月「上杉君の所に、向かいましたよ。」

一花「そつかそつか。」

エレン「五月！ヤッホー！」

五月「イエーガー君。昨日はありがとうございました。」

エレン「どういたしまして。復習ちゃんとやったか？」

五月「あ……。や、やってないかもです。」

エレン「あらら、復習は大事だぞ。で、そちらの二人は？」

五月「私の姉達です。二乃、三玖、彼が昨日話したイエーガー君です。」

エレン「どうもー。エレン・イエーガーだぜ。」

二乃「中野二乃よ。五月が世話になったわね。宜しく、イエーガー君。」

三玖「中野三玖。宜しく・・・。」

エレン「あー、ダメダメ。」

一花・二乃・三玖・五月「「「??」」」

一花「駄目って?」

エレン「名字呼びじゃあ、堅苦しいだろ。名前で呼んでくれ。なんなら、「エレンきゅん」とか、「エレンぽん」でも良いぞ。さあ!! Ⅲ(。Ⅱ。Ⅲ)カモーン」

一花・二乃・三玖・五月「「「 「「」」」

二乃「（へ 艸 *）ブツ」

三玖「に、二乃。笑っちゃ・・駄目・・」プルプル

一花「アハハハハハ!!! やつぱり、君面白いね!!!」

五月「ま、真面目な顔で言わないでくださいよ。」プルプル

エレン「ええっ!! 笑われた!! Σ（。 ㇏。）」

二乃「だって、その顔できゅ、きゅんってwww」

三玖「ご、ごめんなき・・・w」

一花「はー。三人ともその辺にしてあげな。(笑い涙目)」

五月「す、すみません。」プルプル

???「ごめーん。帰ったよ・・・むむ？」

エレン「ん？」

二乃「あら、四葉お帰り。」

四葉「ムムム(;、ω・?)」

エレン「えーと？」

四葉「あー!!上杉さんと居た人だ!!!」

エレン「大正解★確か、四葉だっけ？」

四葉「はい！よろしくお願いします!!（　ゝ　ゝ　）Yピース」

エレン「ああ！宜しくな!!」

五月「あ、因みに私達五つ子です。」

エレン「M・A・J・I・K・A・Y・O★」

悪魔の子、最後の最後でぶっ飛んだ内容を知る。

仕事と任務と新たな仲間

ブーン ブインブイン

エレン「俺の名はエレン・イエーガー。過去の人間だ。只今数か月前から特例で雇ってもらった、職場に急行中だ……って言いたいんだが。前が詰まりすぎている!!」

クラクションブーブー

エレン「これが、渋滞って奴か……。初めて食らったぜ。新しく体験出来た事なのに、テンション爆下がりなんだけど。ㄱ、ㄷ、ㄹ」

ブルルル ブルルル

エレン「はい、もしもし。」

??? 「エレンか！今何処にいる!？」

エレン 「ムロさんか。今、初めて渋滞に引っかかてるw」

エレン (この人は組織対策四課、通称マル棒の刑事の氷室隆雄さんだ。日々、危険な犯罪者と戦うエリートの人。年齢が近い為、親しみを込めてムロさんと呼ばせてもらってる。因みに、めっちゃイケメン。)

氷室 「マジかw初体験おめでとさんw」

エレン 「あざーす!!ヒロさんと、ユイさんは？」

氷室 「絶賛、デスクワーク中。ヒーヒー言ってるぜw」

??? 「うるさいわね!!電話してる暇があるなら、ペンを動かさなさいよ!!」

エレン 「ユイさん、お疲れっス。痴話喧嘩っスか？多分、あと数分で着きますよ。」

エレン（電話の向こうでムロさんに文句言ってる人は、同じく組対四課の渡辺唯華さん。女性警官で滅茶苦茶美人で、尚且つ強い。ムロさんの彼女でもある。因みに呼称は、ユイさんである。）

渡辺（唯）「どこが痴話喧嘩よ!!全く・・・。エレン、暗いから気をつけなさいよ!」

エレン「りようかい（、・ω・）ゞ（これがツンデレか!!）」

——愛知県警 組対四課前——

エレン「お疲れーっす。」

氷室「エレーーーーーン!!」ダッシュユ!!

エレン「のわーーーー!!」（回避）

ガラガラガッシャーん!!!

ムロ・ユイ「>十〇 バタツ」

??? 「うむ、御苦労。」

エレン（この大柄な人は、渡辺弘人さんだ。元柔道日本代表であり四課の課長。名字から分かる通り、ユイさんの実父だ。シングルフアザーで、男手一つで育てた為か、ユイさんを溺愛している。ワイルドな感じで、ライナーに似ている。ニツクネームはヒロさんである。）

エレン「んで、今日はどうしたんです？」

ヒロ「実はな・・・」

エレン「愚連隊？」

ヒロ「そうだ。最近、新興の愚連隊が出てきてな。こちら側でも対処しきれっていないんだ。」

エレン「愚連隊には、暴対法が効きませんもんね〜（*・∩、）。」オチャズズズ

エレン「で、組織名は？」

ヒロ「今注意すべきは、羅紗弩らしゃどだ。」

エレン「うわ、すっごい当て字w」

ヒロ「笑い事では無いぞ。奴らは、詐欺や凌●、強盗なんぞもするからな。」

エレン「うっわ（。；∩；；ノ）ノドン引き!!!」

ヒロ「そこでだ、お前に頼みがある。」

エレン「？」

ヒロ「奴らを見つけ出し、叩き潰して欲しい。奴らをのさばらせる訳にはいかん!!」

エレン「良いっすけど。大丈夫っすか？法律的に。」

ヒロ「無法の道を選んだチンピラ共に、法律など関係あるか!!責任は儂がとる!!」

エレン「りよ、了解っす。じゃあ、失礼しまーす。」

駐車場

エレン（ヒロさんのあの様子、始末書待った無しだな。）

エレン「さて、動きますかね。」ニヤリ

肌寒い闇夜の中、
悪魔が嗤った。

合計100点

柔道場

エレン「うおりやー!!」セオイナゲ

柔道部員（3年）「ぎやあーー!!」ドシーン

審判「勝負あり!!」

エレン「す、すみません先輩。大丈夫つすか？」テサシノベ

柔道部員（3年）「ああ、問題ねえよ。それよか、正式入部する気にはなったか？」

エレン「いえ、やはり一つを極めるのも良いですが、あらゆる状況に対応できるようになりたいので。助っ人という形で続けさせていただきます。」

柔道部員（3年）「そうか。じゃあ、他のところでも頑張れよ!!」

エレン「うつつ!!（◇）ゞ」

柔道部員（1年）「あのー、イエーガー先輩いらっしやいますか?」

エレン「どうした?一年坊。」

柔道部員（1年）「何か、上杉風太郎って人が、先輩に用事があるっぽくて。」

エレン「了解!じゃあ先輩、今日はこれで失礼しますね。」

柔道部員（3年）「おう、またな!!」

部室横

風太郎「来たな」

エレン「ああ、行こうぜ。」

——時は遡りHR——

風太郎「エレン、頼みがある。」

エレン「どうした？バイトの件か？」

風太郎「ああ、手伝って欲しい。」

エレン「何があつたんだ？」

風太郎「実は、睡眠薬を仕込まれてな．．．」

エレン「童●を奪われたのか!？」

周囲「ザワツ!!」

風太郎「ち、ちげえよ!!真顔かつ、大声で何言ってるんだ!？」

エレン「冗談、冗談。」

風太郎「何か、俺あいつらから嫌われてるほくってな。」

エレン「そりやそうだろ。」(ハ、ハ、ハ)「ヤレヤレ」

エレン「まあ、眠剤盛るのはどうかと思うがな。」

風太郎「こんな事頼むのはあれなんだが、明日一緒に五月達のマンションに来て欲しい。俺の助っ人として!!」

エレン「了解(、・ω・、)ゞ」

——— 現在、五つ子の号室内 ———

風太郎「という訳で、俺の補佐に任命したエレン・イエーガーだ。」

エレン「ヤッホー。L a n g e n i c h t g e s e h e n. (訳：久しぶり)」

五月「まさか補佐役が貴方だったとは・・・。」

二乃「エレン君。来てくれたのは嬉しいけど、うちは家庭教師はいらないわ。」

エレン「ごめんな。けど、二乃達の今の成績を見ない限りはな。」

二乃「そ、そうなの？」

一花「で、今日は何するの？」

風太郎「今日お前達にして貰うのは、卒業試験だ!!」

五つ子「????」

エレン「教えるんじゃないくて、卒業試験？遂に勉強のしすぎで、前頭葉がバグったか

!？」

風太郎「バグってねえよ!!抱腹絶倒するな、一花、二乃!!さつき、お前は家庭教師は
いらないうって言ったな……。なら、それを証明してもらおうじゃないか!!」

二乃「しよ、証明……?ww」

風太郎「このテストは昨日やろうと思つて、できなかったテストだが……。合格点
を超えたやつには、俺達は金輪際近づかない事を約束しよう。勝手に卒業していつてく
れ。合格点は60点だ。」

五月「つまり、ふるいに掛けるという事ですな。」

風太郎「そういう事だ。後、エレンにも受けて貰う。因みに合格点95点な。」

エレン「なんでやねんΣ(・ω・ノ)ノ!」

風太郎「俺の補助が出来るか確かめたいからな。」

エレン「はいはい、なるほどなるほど。」

五月「分かりました。受けましょう」

二乃「ちよつと五月!!あんた本気!?!」

五月「合格すればいいんです……。これで、あなたの顔を見なくて済みます。」メガネ
スチャ

エレン「お、眼鏡似合ってるな。」

五月「あ、有り難うございます。」

風太郎「では、はじ……」

エレン「あ、その前に二乃。」

二乃「ん、何（・・・）？」

エレン「昨日風太郎に、眠剤盛ったか？」

二乃「え、ええ。」

エレン「次からはするなよ。最悪犯罪になるから。」

二乃「え。」

エレン「その様子じゃ、知らなかったって感じだな。けど、法律は知らなかったじゃ済まされないぞ。もしも風太郎が薬物中毒になったら、どう責任取るつもりだった？ん？」

二乃「そ、それは・・・」

エレン「まあ、風太郎も気にしてないっぽいし、これ以上は言及しないけど、犯罪に手を染めて家族と離れたくなかったら、これに懲りて二度としない事だな。」

二乃「はい……。」

エレン「まあ、嫁にこれ以上説教したくはないし、これで話し終わり!!」

二乃「ふえ／＼／!?」

一花「よ、嫁!?!」

四葉「二人とも、結婚してたの!?!お赤飯炊かないと!!」

三玖「二乃……、どういう事?」

五月「いつの間にその様な関係に!?ふ、不純です／＼／!!」

風太郎「どういふことだ!!エレン!!」

エレン「え?俺と二乃の声優って結婚してなかった(ω?!)」

全員「「「「中の人のネタかい(ですか)!!!」」」」」

エレン「じゃあ、始め!!!」

四葉「も、もう始まったの!?!」

三玖「い、いきなり。」

五つ子「「「「うわあああああああ「「「「」」」」」

二乃「スコーン焼けたわ。エレン君どうぞ。」

エレン「サンキュー二乃!! うめえ!!」

五月「粗茶ですが・・・どうぞ。」

エレン「Ich danke dir! ありがとな。五月!!」

風太郎「採点終わったぞ!! 先ずはエレン。100点だ。」

エレン「当然(。ー、ωー)ドヤア」

風太郎「そして、お前らもすげえ!! 100点だ!!」

エレン「マジで! すげえじゃん!!」クルッ

五つ子「[[[[[.) 。 ω 。 ;]]]]]」

エレン「(・ω・?)」

風太郎「全員合わせてな!!」

エレン「P a r d o n ?」

風太郎「全員合わせてな!!」

エレン「U m m H u h ?」

風太郎「お前ら . . . 、まさか。」

二乃「逃げろ!!」

風太郎「全員赤点候補かよ!!」

エレン「アハハハハ!!!」

——五つ子 s i d e ——

五月「おかしいです。イエーガー君に教えて貰ったはずなのに……。復習もしたのに……どうしてでしょうか? (´・ω・、)」

二乃「エレン君とあいつ、知ってんのかな? 私達5人が落第しかけて転校したって事……」

——家庭教師 s i d e ——

風太郎「前途多難か……」

エレン「まあまあ、のんびりやろうぜ。」

悪魔の子、スコーンでご満悦♪

歴女と契約

上杉家

ピンポーン

エレン「風太郎ー、起きてるかー。」

??? 「エレンさん。おはようございます!」

エレン「おつ、らいはちゃんじゃねえか!!おはよーさん(ゝゝ♪)メセンアワセ

エレン(この子の名前は、上杉らいは。小学6年生の女の子で、お察しの通り、あの風太郎の実妹でもある。もう一度言う。この天使の様な子が、風太郎の実妹である。)

エレン「風太郎起きてる?」

らいは「はい!昨日からずーっと机と睨めっこしてるんですよ。3時間しか寝てな

いって言うんですから。もう！、（、口ノ）

エレン「ははは……。風太郎来るまで、上がってて良いか？」

らいは「勿論です。（*^*）」

??? 「おつ、エレン君じゃねえか!!おはよう!!」

エレン「勇也さん、おはようございます！」

エレン（この人は、上杉勇也さん。風太郎とらいはちゃんの実父である。奥さんを亡くしてから、男手一つで二人を育てたという。）

エレン「勇也さん、これ家庭菜園でとれた野菜です。作りすぎて、一人じゃ食べきれないのでどうぞ。」

勇也「おつ、こりやまた旨そうな野菜だな!!らいは、冷やしといてくれ！」

らいは「はーい（＾＾♪）」

勇也「いつもすまん、うちの勉強馬鹿の為に（苦笑）」

エレン「いえいえ、風太郎君は俺の初めての親友ですから。」

勇也「日本での生活は慣れたかい？」

エレン「ええ、まだ体験してない事は多いですが・・・。」

勇也「何でも、風太郎のバイトのサポートをしてくれるとか何とか。」

エレン「そりゃあ、親友に頼み込まれちゃあね。断れませんかよ。（苦笑）」

勇也「エレン君よ。あいつは、昔は俺みたいにワイルドで、周りとの距離も測れていたが、今では勉強の事しか頭に無い様な奴になった。勿論それが悪い事じゃねえが、一

人じゃ限界がある。」

エレン「そうですね。」

勇也「だからこそ、あいつは無神経な奴だが、宜しく頼む。」

エレン「はい、お任せください。」

勇也「ありがとうな。」ワシヤワシヤ

エレン（勇也さんは、よく俺の頭を撫でてくれる。恐らく、風太郎はあんな性格だし、らいはちゃんも、年齢の割には大人びている為、こういう事が出来ず、寂しいのだろう。勿論恥ずかしくはあるが、悪い感情は浮かび上がらない。）

風太郎「エレン、悪い！遅れた!!」

エレン「遅えぞ、このガリ勉めw。こんな事もあるうかと、サンドイッチ作ってやつ

たから車の中で食べ、んでもってちよつと着くまで寝ろ。じゃあ勇也さんにらいはちゃん、学校行つてきます。」

勇也「応!!二人共、気を付けてな！」

らいは「行つてらつしやーい（*ゝゝ*）」

校門前

風太郎「ふあー。あぶねー、遅れるとこだったぜ、有り難うなエレン!!」

エレン「気にすんな!!ほら降りろ。」

風太郎「了解。つてあの車デツカ!!」

エレン「ホントだな。」

風太郎「これは100万くらいはするな！」

エレン「んな、安い訳ねえだろ。俺の車も3000万はすんのに。リムジンは、一番安い奴でも1000万はするぞ。」

風太郎「嘘だろ、車って高!!」

ガチャ…

三玖「あ、フータローにエレン……」

二乃「エレン君、おはよう!」

一花「二人共、おっはー。」

四葉「上杉さん!! イエーガーさん!! おはようございます!」

五月「おはようございます。イエーガー君。」

エレン「誰かと思えば、中野姉妹じゃねえか！おはよーさん。」

風太郎「お前ら、昨日はよくも逃げ…ってああ!？」

五つ子「「「「（・ω・）」」」」

風太郎「逃げるな!!よく見ろ！俺は手ぶらだ!!害は無い!!」

二乃「騙されねーぞ。」

一花「エレン君が隠し持ってるんじゃないやなくて？」

三玖「油断させて、教えて来るかも…。」

エレン（「どんだけ勉強嫌いなんだよ（；―ω―）」）

五月「私たちの力不足は、認めましょう。ですが、自分の問題は自分で解決します。」

三玖「勉強は、一人でもできる。」

二乃「そうそう、要するに余計なお世話って事よ。」

エレン「オーケー。なら当然、テストの復習はしたよな。特に五月。」

五つ子「「「「」」」」」

風太郎「・・・問一、巖島の戦いで毛利元就が破った武将を答えよ。」

五月「フッ

エレン「お!?!」

五月「(、； H ；)プルプル

エレ・風「む、無言・・・!! (oh・・・orz!!)」

————— 数時間後の教室 —————

エレン「お、テストの復習か。えらいえらい。」ナデナデ

五月「えへへ、ありがとうございます・・・、つて撫でないてくださいよ!」

エレン「Entschuldig. 悪かったな。てつきりテスト、捨ててるのかと思って。」

五月「彼の事を見返すためです。仕方ありません。」

エレン「そして、風太郎と俺を御役御免にすると。」

五月「オブラートに包んだつもりなのですが・・・(――)。それに貴方は、彼とは違います。」

エレン「そいつは光栄だな。分からねえなら、教えてやろうか？」

五月「いえ、もう少し自分の力で・・・!!」

エレン「名前と、問題番号”だけ”しっかり書かれてるな。」

五月「うう・・・(；ω；)」

エレン「ごめんごめん！冗談だから!!あー、もう泣くなよ。教えてやるから。」ナデナ

デ

五月「はい・・・」

エレン「で、こここの問題はこうなって、こうなるんだ。」

五月「成程、ならこの公式が使えますね!!」

エレン「Exactly!!」

五月「段々と、掴めてきましたよ!」

エレン「そうか。つてあれは?」

五月「はい?つて三玖じゃないですか。どうしましたか?」

三玖「二人共・・・、フータローの席は何処?」

五月「彼の席なら」

エレン「あそこにあるぜ。」

三玖「分かった。ありがとう。」

エレン「何か手紙入れてたが……。まさか！ラブレターか!!」

五月「ええ!!」

数十分後

エレン「お、帰って来た。三玖おかえりー。」

五月「三玖!!無事ですか!?彼に乱暴などは……。!!」

三玖「大丈夫。」

エレン「何か、落胆してるな(・ω・)。」

三玖「風太郎の実力が分かっただけ……。大した事無かった。またね。」スタスタ

五月「実力？」

エレン「風太郎の実力ねえ……。よっこいせ。」

五月「あの、どちらに？」

エレン「お散歩♪」

キヤー!! イエーガーくんガ、オサンポッテイッタワ! カワイー!!

イイナー、ナカノサン。

ビシヨウジヨノナカノサント、ビダンシノイエーガーくん。トウトイ!!

五月「何処に行かれるのでしょうか……。? って上杉君ですかそれ!」

風太郎「歴史の本だ!! 負けてられるか!!」ドサドサ

——— 自販機前 ———

エレン「三玖ー♪」

三玖「エレン……」。

エレン「やつほー。奇遇だな。って抹茶ソーダ？」

三玖「うん。美味しいのに皆飲まない……」。

エレン「飲んでみよ！」ピツ ガコン

三玖「どう？」

エレン「んー……!!独特!! (>|<|<|)」

三玖「そっか。きやつ!!」ドン

1年生「でさー、アハハ! ってすみません!」

エレン「危ないだろ馬鹿!ちゃんと、前を見ろ!」

1年生「イ、イエーガー先輩。さーせん!!」

エレン「全く…次からは気をつけろよ。三玖大丈夫か？スマホ落ちちまったな。
…
ん、風林火山？」ヒョイ

三玖「み、見ないで…!!」

エレン「わ、悪いな。もしかして、歴女？」

三玖「ふ、風太郎には話したけど、ゲームで好きになったの。」

エレン「へえー。好きな事があるのは、良いことだ。」

三玖「ううん。良くないよ。」

エレン「へ？（…？）」

三玖「クラスの女の子達は、イケメンのアイドルにモデルさん。けど、私は髭のおじさんだから……。」

エレン「そうか？ 武田信玄とか、現実にはいたら、日本版ド○エイン・ジョ○ソソみたいになると思うけど？ 全世界のイケメンオジサンを舐めるなよ。」↑（1182歳の美青年ジジイ）

（全世界の、ド○エイン・ジョ○ソソファンに謝れ）

三玖「なにそれ？ 俳優？」クスクス

エレン「けどまあ、何かを好きになるのは個人の自由だと思うぜ。嗤う奴がいても、無視しとけ。」

三玖「じゃあ、もしも、エレンが人に話せない趣味があつて、やめる様に言われたら、どうするの？」

エレン「もしも俺が、誰かにその趣味を奪われそうになったら。そいつから全てを奪ってでも、取り返すかな。」

三玖「全てを奪ってでも……。ちよつと、考えてみる。」

エレン「そうか……。長話の詫びだ。鼻水は入ってないからな♪」

三玖「それって……。」

エレン「石田三成が大谷吉継の鼻水が入ったお茶を飲んだ逸話★やつぱ知ってるか。」

三玖「うん。けど何で知ってたの？ドイツ出身って噂で聞いたけど。」

エレン「あ、あー。日本の事が大好きでな。いっぱい勉強したんだよ。（1000年以上爆睡してたなんて言えねえ。）」

三玖「ふーん。あ、チャイムだ。またね。」

エレン「お、おう。(◎◎◎; ;)」

——エレンの教室にて——

風太郎「あー、五月。」

五月「何ですか？」

風太郎「な、なんだ。この前の食堂では、悪かったな。」

五月「(——)ハア」

風太郎(やっぱり、許してくれないか。)

五月「わざわざ、そのような事の為に……。もう気にしてませんし、私も意地になり過ぎました。すみません。しかし、今後は気を付けてください。」

風太郎「ああ!!」

翌日の図書館

風太郎「だから何度言ったら分かるんだ…。ライスはLじゃなくてRから始まるんだツ!!お前はシラミを食うつもりかツ!!」

四葉「あわわわツ（・|・；；）!?!」

五月「イエーガー君。ここを教えてください。」

エレン「ここはこの方程式をだな・・・。」

風太郎「……? 四葉、何で叱られてるのにニコニコしてるんだ…?」

エレン（まさか、Mツ気があるのか?）

四葉「む、何か失礼な事を言われた気が。まあ実をいうと、家庭教師の日でもないの

に、上杉さんが……、お二人が宿題を見てくれるのが嬉しくて……」

風太郎「残りの3人もお前みたいに物分かりが良ければいいんだけどなあ……」

四葉「声は掛けたんですけどね……」

エレン「あと、3人かー。」

五月「いえ、あと2人ですよ。」

エレ・風・四「へ？」

三玖「エレン、フータロー。私。」

エレン「三玖じゃねえか！」

風太郎「来てくれたのか。」

三玖「フータローのせいで考えちゃった。私にもできるんじゃないかって。」

三玖「そして、エレンのせいで考えちゃった。私も堂々と、好きな事を自由に出来るんじゃないかって。」

三玖「だから、2人とも、責任取ってよね。」

風太郎「ああ。任せろ!!」

エレン「右に同じく!」

組対四課

ムロ「デズグワ、ア、ーグ、お、わ、っだー(訳:デスクワーク終わったー)。orz」

ユイ「はいはい、お疲れ。」

エレン「ミイラみたいに干からびましたねw。m9（〜D〜）プギャー」

ヒロ「擲擧つてやるな。」

ユイ「エレンは、何を作ってるのよ。」

エレン「最高時速150kmの蚊型のドローン。勿論カメラ搭載。」

ムロ「すげえ！貸してくれ!!」

エレン「良いけど、何するんすか？」

ムロ「これでユイのスカートの中を・・・」

ユイ「おい。」

ムロ「へ？」

ドカッ バキッ ゴスッ

ムロ「」

エレ・ヒロ「アホかよ（つすか）。」

組対4課の職員「イエーガーいるか？」コンコンガチャ

エレン「居ますよー。どうしたんですか？」

組対4課の職員「携帯から電話だ。中野とかいう人から。」

エレン「え（・ω・？）」

電話中

エレン「もしもし。五月？」

中野?? 「僕は、五月君ではない。」

エレン 「え、お前そんな声低かった？何かのドッキリ？」

中野?? 「違うと言っているだろう。僕は中野マルオ。彼女達の父親だ。」

エレン 「あ、お父さんでしたか。」

マルオ 「君に、お父さんと呼ばれる筋合いはないよ。」

エレン 「じゃあ、マルオさんで。何の用ですか？」

マルオ 「僕が雇っている上杉君からのお願いでね、君を助手として雇って欲しいそう
だ。」

エレン 「風太郎が・・・」

マルオ「引き受けてくれるかい？」

エレン「流石に毎日は無理ですけど、週4とかなら。」

マルオ「了解した。給料は、上杉君と同じ額で振り込んでおこう。」

エレン「あー、すみません。実は自分の勤めてるバイト先、副業禁止なんで、無給でお願いします。」

マルオ「良いだろう。詮索はしないでおくよ。」

エレン「あざっす。明日からシクヨロです。」

悪魔の子、二足のわらじ開始。

悪夢と勉強と料理対決

ここは、何処だ？確か、昨日は三玖を新たに勉強会に引き入れたはずなんだが……。

??? 「久しぶりですね。エレン。」

エレン 「誰だ!! ……ってサシヤ!？」

??? 「久しぶりね」

??? 「辛気臭い顔しやがって」

??? 「何、驚いてるんだか。」

??? 「俺たちを前に、ぼーっとするとはいい度胸だな。」

エレン「オルオさん達まで……。お久しぶり」

オルオ「この、人殺しが!!」

ペトラ「来るんじゃないわよ!この悪魔!!」

エルド「俺達を見捨てた、外道が!!」

グンタ「さっさと、地獄に堕ちろよ!!」

エレン「え……」。

サシャ「何、驚いた顔してるんですか。私の事も見捨てたくせに。」

エレン「サ、サシャ、俺はお前の事を見捨ててなんか……!!」

サシャ「五月蠅い!!この殺人鬼!!」

エレン「つ!!」

アルミン「君の様な化け物が、幼馴染で後悔したよ。」

ミカサ「二度と私とアルミンに近づくな、この化け物め。」

エレン「ミカサ……。アルミン……。」

カルラ「貴方みたいな悪魔、産まなければよかったわ。」

エレン「か、母さん……」

ラムジー「何で、僕の事も殺したの？僕は何もしてないのに。」

エレン「くそつ。嫌な時間に目え覚めたな。」アセビツシヨリ

エレン「……。気分最悪……。」

昼のコンビニ

エレン「エナドリでも買うか。」

三玖「エレン？」

エレン「ああ……、三玖か……。抹茶ソーダ買ったのか？（ つ ☒ 〇 ☒ ）ムニヤムニヤ……。」

三玖「うん。大丈夫？」

エレン「何が？」

三玖「眠たそうだから。」

エレン「ちよつと色々な。心配してくれてありがとう」ヨシヨシ

三玖「うん。どういたしまして。」

エレン「じゃ、行くか。」

三玖「うん。」

マンシヨン前

風太郎「何だこれ!! センサー反応しろ!! くそおお・・・あの五人だけで無く、お前も俺の邪魔をするのか。」

風太郎「あのー30階の中野さんの家庭教師をしている上杉と申します。そのドア壊れてますよ?」

エレ・三玖（なにやってるの（んだ）。フータロー（あの馬鹿）。）

三玖「フータロー、一人で何やってるの？」

エレン「おまわりさーん。不審者がいます（棒読み）」

風太郎「誰が不審者だ!!」

三玖「今時オートロックも知らないんだ。ここに私たちの部屋番入れたら繋がるから。」

風太郎「まあ、知ってたけどな・・・三玖」

エレン「嘘乙。」

三玖「2人とも何してるの？家庭教師、するんでしょ。」

エレ・風「ああ！」

——中野家リビング——

四葉「おはようございますーす！」

エレン「おはよう。四葉。」

四葉「おはようございますー！ イエーガーさん！ 上杉さん！ 準備万端です！！」

エレン「上出来だ、四葉二等兵。」

一花「まあ、私は見てようかな。」

五月「イエーガー君。今日は一次関数をお願いします。」

エレン「サー、イエツサー。(・ω・)ゞ」

三玖「フータロー、約束通り日本史教えてね。」

風太郎「ああ。よし、やるか。」

二乃「あ、なーに？また懲りずに来たの？先週みたいに寝ないと良いよ」

エレン「二乃、この前言った事もう忘れたのか？」

二乃「すみません、何でもないですガクガク（（； ㇿ（（ブルブル」

エレン「うむ、宜しい。じゃあ勉強するぞ。（・ω・）（何で怖がつてんだ？）」

二乃「い、嫌よ。苦手なんだから。」

エレン「こらこら、そう言わずに。」

二乃「そ、その前に四葉。バスケット部の知り合いが大会の臨時メンバー探ししてるんだけど、あんた運動できるし、今から行って来たら？（これ位なら怒られないわよね？）」

四葉「い、今から!?!で、でも。」

二乃「何でも、五人しかいない部員の一人が骨折しちゃったみたいで、このままだと大会に出られないらしいのよ。頑張って練習してきただろうに、あーかわいそ。」エレンノホウチラツ

エレン「ほれ、ここが切片で、こうなつて……」

五月「成程、じゃあここは傾きに……」

二乃（聞こえてないわね。（*ー*ー） || 3 ホツ…。）

四葉「上杉さんすみません！困ってる人を放つて「もしもし？モブ美？」おくには。つて、イエーガーさん何を!?!」

エレン「うんうん。じゃあ代わりに行って。ありがとな。知り合いを代わりに行かせた。ほら勉強するぞ。」

四葉「はい！良かったあ。」

二乃「い、一花。二時からバイトじゃなかった？（これなら・・・！）」

一花「あ、忘れてた。」

二乃（さあ、エレン君。貴方はどうするの!?)

エレン「一花、ちよつと。」クイクイ

一花「んー。どうしたの？」

エレン「お前が務めてるバイト先ってこの芸能事務所？（小声）」

一花「そ、そうだけど。どうして知ってるの!?(小声)」

エレン「了解。もしもし織田さん? はい、はい。お願いします。(小声)」

一花「何で織田社長の事を!?(小声)」

エレン「お前の所の社長と知り合いなんだよ。そこで、お前の名前を聞いてな。(小
声)」

一花「そ、そうなんだ。(小声)」

エレン「今、電話で事情を話したら、「今はなるべく来て欲しいけど、切羽詰まってる
なら学業優先」だよ。(小声)」

一花「ええ!?! 良いのかな?(小声)」

エレン「良いんだよ。というか、女優の卵だったんだな。(小声)」

一花「りよ、了解。皆には言わないで。(小声)」

エレン「OK (小声)」

一花「あー、何か今日無くなったっぽい。」

二乃「な、なら。三玖、あんたが間違えて飲んだあたしのジュース買ってきなさいよ。」

三玖「それなら、もう買って来た。」

二乃「えっ? って何これ!?! 抹茶ソーダ?」

三玖「そんな事より、授業始めよう。」

風太郎「そ、そうだな。(エレン、サンキュー!!)」

二乃「は……？あんたらいつの間になんか仲良くなつたわけ？え、え？エレン君は兎も角、こんな冴えない顔の男があんた好みな訳？」

風太郎「こいつ今、ひどいこと言った。」

三玖「二乃はメンクイだから。」

エレン「三玖も三玖で酷いな。」

二乃「はあ？面食いで悪いんですか？イケメンに越したことはないでしょ？なーるほど。外見を気にしないから、こんなダサイ服で出かけられるんだ。」

三玖「この尖った爪が、お洒落なの？」

二乃「あんたには分かんないk、痛っ」ポコッ

三玖「分かりたくもn、．．．痛い」ポコッ

エレン「姉妹喧嘩すんなよ．．．（呆れ&丸めた教科書装備）」

二乃・三玖「はい．．．。（ω・、）」

二乃「ところでキミ達、お昼は食べてきた？」

エレ・風「ん？」

二乃「じゃあ、三玖の言う通り中身で勝負しようじゃない。どちらがより、家庭的かアタシが買ったら今日は勉強無し！」

風太郎「そ、そんなのやる訳ないよな．．．？」

三玖「フータロー、すぐに終わらせるから座って待ってて。」

風太郎「お前が座つてろ!!」

一花「何々? 料理対決?」

四葉「何を作るの?」

五月「お腹が空きました〜(〽️)〽️)」

エレン「良いぞ!! やれやれ!!」

風太郎「無駄に発破をかけるな!!」

エレン「ていうか、俺も何か作って良い?」

二乃「良いわよ。」

一花「では、3人とも。よ〜い・・・、」

一花「始め!!!」

二乃「じゃーん。旬の野菜と生ハムのダッチペイペー!」

エレン「ふわふわのツヴィーベルクーヘン。」

三玖「オ、オムライス・・・」

風太郎「・・・・・・・・。。（見た目に差があるが、食ってみない事には分からんな。つていうか、エレン料理出来たのかよ!!）」

三玖「やっぱいい。自分で食べる。」

二乃「せっかく作ったんだから、食べて貰いなよー。」ニヤニヤ

風太郎「いただきます。」

三玖「あつ。」

風太郎「うん、どれも普通に美味しいな。」モグモグ

エレン（そういや、こいつ貧乏舌だったー（∥。ω。）ノ。）

二乃「はあ!!そんな訳・・・」

三玖「／／／」

二乃「何それ!つまんない!!」スタスタ

エレン（全く・・・。ガキじゃねえんだから・・・（*、旦、）∥3ハア・・・）

風太郎 「全く、二乃の奴・・・!!」

エレン 「そんな、カリカリすんなって。」

風太郎 「あいつとは、分かり合える日が来るとは思えん。」

三玖 「ちゃんと誠実に向き合えば、分かってくれるよ。」

エレン 「誠実ねえ・・・」

風太郎 「どうすりゃいいんだか。」

三玖 「私に言われても分かんない。それを考えるのが2人の仕事でしょ。」

風太郎 「誠実に向き合う・・・か。」

エレン「風太郎の苦手分野だなw」

風太郎「うっせ。」

五月「あの、イエーガー君。少し宜しいでしょうか？」

エレン「どしたん？五月？」

五月「すみません。買い物に付き合っていたいで。」

エレン「良いって、にしてもすげえ量だな。」

五月「はい、荷物持ちをしてもらって、申し訳あ r 「五月、違うだろ。」

五月「はい？」

エレン「申し訳ありません。じゃなくて？」

五月「そ、そうでした。有り難うございます！」

エレン「はい、正解（＾＾♪。正解した御褒美に、部屋の中まで運んでやるよ。」

五月「有り難うございます（*，▽，）。」

玄関前

エレン「よーし。到着★」

五月「有り難うございます。では、運びましょうk」

二乃「不法侵入ー!!」

エレ・五月「
!!!????」

エレン「何だ!？」

五月「二乃の声です!!」

風太郎「ち、違う。俺は取りに来ただけだ!!」

二乃「撮るって何をよ!!」

カシヤ

風・二乃「!？」

エレン「風太郎、お前何やってんの? (? | ?) (絶対零度の瞳)

五月「最低。(? | ?)」スマホカマエ

悪魔の子、親友に絶対零度の視線を向ける

五つ子裁判（審議所）

エレン（俺の名はエレン・イエーガー。今日は料理対決と五月とのシヨツピングで終わりかと思いきや……。）

五月「エレン裁判長、一花裁判長。ご覧ください。」

エレン（何故か……。）

五月「被告は家庭教師という立場にありながら、ピチピチの女子高生を目の前に欲望を爆発させてしまった……。」

エレン（一花と2人で……）

五月「この写真は上杉被告で間違いないですね？」

エレン（裁判長をしている）。ㄩ。ㄩ。ㄩ（ポカーン）

エレン（ていうか、何で裁判長が2人体制なんだよ！おかしいだろ！うつ！リヴァイ兵長に蹴られた、あの記憶で頭が!!ロキソ○ン何処だっけ？）

風太郎「え……、冤罪だ……。」

エレン（声が小さいんだよ被告人!!冤罪だつて主張するなら、はっきり言え（#ㄩ。ㄩ!!））

二乃「裁判長」

一花「はい、原告の二乃君。」

二乃「この男は、一度マンションから出たと見せかけて、私のお風呂上りを待っていました。悪質極まりない犯行に、我々はこの今後出入り禁止を要求します。」

エレン（俺は、入ってないのか。）

風太郎「お、おい！それは幾らなんでも！！」

一花「大変けしからんですなあ。」

風太郎「い、一花!!エレン!!俺は財布を忘れて・・・。」

一花「(≧H≦) プイツ!!」

風太郎「い、一花?」

エレン「裁判長呼びしてほしいんじゃない?」

風太郎「さ、裁判長。」

一花「(o^▽^o) ニッコリ」

三玖「異議あり。フータローは悪人顔してるけど、これは無罪。」

風太郎「・・・」

エレン「悪人面w」

風太郎「おい。」

三玖「私がインターホンで通した。録音もある。これは不運な事故。」

風太郎「三玖・・・；▽； ジーン」

二乃「あんた、まだそいつの味方にいる気・・・？こいつはハッキリ「撮りに来た」つて言ったのよ!!盗s、痛っ。」ポコッ

三玖「忘れ物を「取りに来た」でs、痛っ。」ポコッ

エレン「ふ・た・り・と・も？（#、）9（丸めた教科書装備）」

二乃・三玖「すみません（、ω、）」

二乃「さ、裁判長。三玖は被告への個人的感情で庇ってまゝす。」

三玖「ち、違・・・／／／」

風太郎「三玖・・・信じてくれると信じてたぜ。」

三玖「それ以上近づかないで」

風太郎（あれー!?)

一花「うーん、でも三玖の言うとおりであったとしても、こんな体勢になるかな？」

二乃「二花、やっぱあんたは話が分かるわ。こいつは突然私に覆いかぶさって来たのよ!」

三玖「・・・それ本当?」

四葉「そうなんですか!」

風太郎「そ、そうだが・・・、それは・・・。」

三玖「やっぱ有罪。切腹(・H・)」

風太郎「三玖さん!」

エレン「いや、打首獄門じゃね?」

風太郎「何でだよ!」

エレン「大丈夫大丈夫。椎間板にびったり入れば、すつと行くと思うから。」

風太郎「具体的に言うなよ!!」

エレン「まあ、漫才はここまでにしとくとして。」

二乃「漫才だったの!?!」

エレン「なあ、一花裁判長、五月。」

一花「んー?何、エレン裁判長?」

五月「どうしました?」

エレン「これさ、棚から落ちた本から庇った風にも見えね?」

一花「確かに」

五月「よく見ればそうとも受け取れますが、違いますか？」

風太郎「そ、その通りだ。」

風太郎「ありがとなお前ら。」

エレ・ー「どういたしましてー。」

五月「お礼を言われる筋合いはありません。あくまで可能性の一つを提示したままです。」

三玖「確かに。」

四葉「よ、良かったよー（〽〽）」

一花「やっぱり風太郎君に、そんな度胸は無いかー。」

エレン「ヘタレだし（〇、▽、*）ケラケラ」

二乃「ちよ、ちよつと!!何、解決した感出してんのよ!!適当な事言わないで!!」

三玖「二乃、しつこい。」

二乃「・・・!!あんたねえ!!」

一花「まあまあ。そうかつかしないで。私たち昔は仲良し五姉妹だったじゃん。」

二乃「・・・っ。」

風太郎「とはいえ、俺の注意不足が招いた結果だ。悪かったな。」

二乃「昔はって、私は・・・」スタスタ バタンツ

風太郎「おかげで助かったが、あいつ出て行ったぞ。．．．良いのか？」

三玖「．．．放つとけば良いよ。」

エレン「．．．．．。」

風太郎「エレン、大丈夫か？」

エレン「ああ、料理対決に、裁判に、シヨッピングで色々疲れた。楽しかったけど。」

エレン「．．．．．。」

風太郎「どうした？」

エレン「いや、二乃の件でな。あいつらはあの空気で良いんだろうかな？」

風太郎 「俺もそうは思う。だが、他人の家庭に口出しするのはナンセンスだろ。」

エレン 「横文字使いやがって、意識高いアピールか？」

風太郎 「違うわ!!お、らいはからメール。」

エレン 「晩飯か？」

風太郎 「今日はカレーうどんらしい。」

エレン 「今日は俺もハンバーグカレーにしようかな。・・・って、あれは。」

風太郎 「二乃？」

悪魔の子。なんやかんや、審議所のトラウマを忘れて、楽しんだ。

自動ドア君（僕でもないよね。　（　・　ω　・　；　）　）

風太郎（鍵、持ってねえのか。）

エレン（んでもって、今更家にいる4姉妹に開けて貰うのもバツが悪いと・・・）

二乃「何よ。」

風太郎「いや、別に？」

エレン「今から帰ろうかなと。」

風太郎「じゃ、エレンまたな。」　スタスタ

エレン「おう（　ω　）ノ。」

エレン（さて・・・と。）

エレン「よっこいせ（———）。」

二乃「ちよ、ちよつと何やってんの？」

エレン「いやね、俺今から帰っても一人だしさ、姉妹が迎えに来るか、誰かが開けてくれるかまでの間、話し相手に成ってくれないかな〜と。」

二乃「え、ええ？ていうか一人暮らしだったの？」

エレン「そうだけど？言ってなかったっけ？」

二乃「pap・・・、お父さんと、お母さんは？」

エレン「It's a secret. 内緒だ。」

二乃「そ、そう。」

エレン「姉妹に、謝りに行き辛いんだろ。」

二乃「うゝっΣ(∥ω∥;) ギク!!」

エレン「家族の事は、嫌いか？」

二乃「ええ。嫌いよ。皆あんなデリカシーの無い男の事庇って、馬鹿みたい。」

エレン「冗談だろう。」

二乃「冗談じゃないわ。あんな得体のしれない奴を入れるなんてどうかしてる。」

エレン「俺の事をどう思ってるかは知らんが、要は風太郎という異分子を、家族皆で築き上げた、パーソナルスペースに入れたくないんだろ。」

二乃「ええ……。その通りよ。」

エレン「お前は、家族のことを嫌ってるって発言していたが、お前のその行動つてのは、結果的に、大好きな家族を守ってるんじゃないのか？」

二乃「うううう／＼／／」

エレン「すまん。いじめ過ぎたか。」

二乃「そ、そうよ。あの子達の事は、大好きよ!!」

二乃「だから、あいつの事は気に入らない。何より、認めたくはなかったけど、五月と仲良くやってる、エレン君の事も認めてない自分がいたのよ!!」

二乃「どう!?!これが、私の本性よ!!家族の事を考えてるとか言つときながら、自分の保身や居場所の事だけしか考えてない、醜い女なのよ!!」ハアツハアツ

エレン「ハア、二乃。」テヲダス

二乃「（＞）（＜）」ビクッ

ギユッ

二乃「ふえ!？」

エレン「お前は、醜い女なんかじゃないさ。他人の事を想いやれる、良い子だよ。（＊
^ ^＊）」

二乃「は、離してよ!!」

エレン「離さねえよ。お前の心から憂いが消えるまでは。」ヨシヨシ

エレン「泣きたいときは泣けば良い。怒りたいときは思い切り怒れ。自分の本心を隠

したままじゃ、いつか壊れちまうよ。」ポンポン

二乃「う、（；ω；）ジワツ」

二乃「うわあああーん（ノ口ヲ、）」

エレン「大丈夫。大丈夫だからな。」ポンポン

エレン「落ち着いたか？」

二乃「え、ええ。ありがとう。（ノω・）クスン…」

エレン「そうか。そりゃ良かった。」

二乃「ねえ、エレン君。」

エレン「何だ？」

二乃「何で、エレン君は私にここまでしてくれるの？上杉の事は、私は嫌いだけど、エレン君にとっては、友達でしょ？」

エレン「友達といえども、怒るときは怒るし、蔑むときは蔑むさ。まあ、あいつの場合にはデリカシーの欠片もないから、胃痛と頭痛が凄いんだけどなw」

二乃「い、胃痛と頭痛って。」クスクス

エレン「因みに俺のお勧めは、胃痛はスクートG。頭痛はロキソオンだぜw、

*（ドヤア）

二乃「ど、ドヤ顔しないでよ。笑っちゃうじゃない。」プルプル

エレン「Entschuldig. ごめんごめん。」

エレン「何でかって言うなら、俺と同じ目には遭って欲しくないからかな。」

二乃「どういうこと?」

エレン「さつき、一人暮らして言ったよな。」

二乃「え、ええ。」

エレン「何でだと思う? さつきは内緒って言ったが、教えてやる。」

二乃「ええと、御両親の出張とか・・・、かしら?」

エレン「ぶつぶー(*ゝ*」

二乃「ち、違うの!？」

二乃(ぎ)、御両親が出張じゃないなら・・・。ま、まさか・・・!!)

二乃「も……もう、お亡くなりにな……？」

エレン「大正解。つまり、俺は天涯孤独ってわけ。」

二乃「ご、ごめんなさい!!ま、まさかお亡くなりになられてたなんて!!」

エレン「気にすんな!!（間接的に殺したのは俺だしね。）」

エレン「まあ、その通りで俺には親が居ない。兄弟も姉妹もな。」

エレン「そして、孤独になってしまいう辛さも知っている。」

二乃「……。」

エレン「だから、お前には俺と同じ思いをして欲しくない。」

二乃「!!!」

エレン「言葉の暴力つてのは、拳の暴力よりも痛くないっていう奴もいるがな、その実は、全くの逆だ。」

エレン「拳の暴力の痛みは、しばらくすれば消えていくが、言葉の暴力は、永遠に呪う事に成る。相手の事も、何より自分の事もな。」

エレン「俺は、母さんが死ぬ間際に、大喧嘩をしまして、出て行ってしまった。けどその日は地震があつてな（嘘）。次に帰ってきた後に見たのは、地震（嘘）で瓦礫に押しつぶされて、動けなくなっていた母さんだったんだよ。」

エレン「しばらくは息もあつたが、最後には力尽きて死んでしまった。」

エレン「今でも夢に見るよ。何で、あの時謝らなかつたんだらうってな。」

二乃「そ、そんな!!」

エレン「人の命ってのは、羽毛の様に軽い。だからこそ悔いの残らない選択をしなればならないんだ。難しいけどな。」

二乃「悔いのない選択……」

二乃「ちよつと、考えてみる。」

エレン「そうか。」

二乃「か、勘違いしないでよ!!上杉の事を認めたわけじゃないから!!あいつに伝えてよね!」「私はあるたを認めない。たとえそれであの子たちに嫌われようとも」って。これが、今の私の悔いのない選択よ!!」

エレン「はいはい(ツンデレってめんどくせー。)(ーωー)」

三玖「二乃、いつまでそこにいるの。早くおいで。あ、エレンもいたんだ。」

二乃「三玖、早く帰るわよ!!」

三玖「エレンとの話はもう良いの？」

二乃「良いから!じゃあ明日ね!!」

エレン「ほいほい、明日ね。さて帰りますかね。」

悪魔の子、柄にもなく説法を唱える

「夏祭り編？何それ美味しいの？」
不穏な予兆

組対四課

ムロ「おーい、エレン。こっちだ。」

ユイ「早く来なさい。」

エレン「へいへーい（―――）。」

組対四課職員A「弘人課長から、話があるって聞いたけど、何だろうな？」

組対四課職員B「また、どこかで抗争でも始まったか？」

組対四課職員C「くっそ、今年は彼女と祭りでデートする予定だったのに。」

ムロ「ヒロさん、これってマジっすか？」

ヒロ「マジだ。」

エレン「文章力が、小学生レベルだなw」

ヒロ「そんな、低レベルな罵倒を言うな……。と言いたいところだが、この文章力は、どうかと思うぞ。」

ユイ「字も汚え。」

組対四課職員「つまり、今回我々がすべき事は、夏祭り会場における警護つて事ですか。」

ヒロ「その通りだ。市民の安全は、我々に掛かっているともいえる。」

エレン「責任重大つすね。ヒロさん。」

ムロ「もしも、奴らの脅迫状が陽動作戦の一つであった場合などは、どうなさるおつもりでしょうか？」

ヒロ「それに関しては、問題ない。組織犯罪対策第5課にも協力を仰いでいる。」

ヒロ「それに、羅紗弩だかしやつくりだか知らないが、奴らをのさばらせる訳にはいかん。今、ここに宣言する。奴等はこの2年で、完全に壊滅させる!!!」

ヒロ「分かったな!!」

組織犯罪対策4課「「了解!!!」」

エレン「なーんか。大変な事に成りましたね。」

ムロ「ああ。ヒロさん滅茶苦茶切れてたな。」

ユイ「あんなに激怒してる、お父さん初めて見たわよ。」

ユイ「ねえ、エレン。」

エレン「はい？」

ユイ「あんたって、国の紹介で入って来た、元兵士なんでしょ？」

エレン「そつすけど。」

ユイ「あんたから見て、パパ、じゃなかった。お父さんはどう見える？」

ムロ「今パパって言った？ねえ、今パパって、「黙れ」(???) *)グフツ」

エレン(ドン(。ム)マイ)

エレン「んー、死に急いでる感じ？」

ユイ「死に急いでるか……。分かった、ありがとう。」

エレン「うつす。」

—— 帰り道 ——

エレン（さて……）

エレン（ゲーム開始だ。）

悪魔が目を覚ますまで、あと少し……

四女からのお誘い

——エレン宅——

エレン「祭りって言ってたな。一応、スーツの上に、和風の羽織でも羽織っていくか。」

エレン「にしても、祭りなんて初めてだから、仕事もするが、楽しむぜ!! (´?ω?、)」

ピロン♪

エレン「ん?メール?」

???「イエーガーさん。今日宜しければ、一緒にお祭りに行きませんか (*ゝ*)?
お返事待ってます!! (ゝωゝ)」

エレン「この感じからして、四葉だな。恐らく、連絡先交換してないから五月の携帯から打ったって感じか。」

エレン「OK。俺も今日行こうとしてたからな。会場入り口で集合しないか？つと。」

ピロン♪

四葉「分かりました!!上杉さんも誘ってますからね。」

エレン「イエッサー(´・ω´)(´ゞ」

エレン「じゃ、行きますかね。」クルマノキーチャリチャリ

祭り会場

ピーヒャラパツパ

エレン「こ、これが祭り……。ん(´Д´)ポカーン」

二乃「エレン君!!」

エレン「お、二乃じゃねえか!!着物にあつてるな。」

二乃「ありがと。エレン君はスーツに・・・羽織?」

エレン「おう、まあな。」

三玖「二乃・・・、速い・・・。エレン?」

エレン「みつくー♪おひさー♪」

四葉「イエーガーさん、来てくれたんですね。」

エレン「おう。風太郎も来てんだろ。」

五月「はい、彼も来ていますよ。妹さんと一緒に。」

らいは「エレンさん!!こんにちわ!!」

エレン「お、らいはちゃん。こんばんは。祭り楽しんでるか?」

らいは「はい♪」

エレン「良かったな(*^_^*)」

風太郎「よう、エレン。」

エレン「風太郎か、その様子からして、五つ子達の宿題見てたな?」

風太郎「大当たりだwお前は何だ?その恰好。」

エレン「まあ、警備のバイトだよ。」

風太郎「あ、バイト中だったのか。悪いな。」

エレン「いや、異変が起これば、無線で呼び出しが入るから、もうまんたい無問題。」

四葉「なら、イエーガーさん。約束通り、一緒に回りますよ!!」

エレン「おう!! (ω?、)」

二乃（めつちや目が輝いてる……。）

風太郎「はあー。勉強するつもりだったのに……」

エレン「まあまあ、せつかくなんだ。楽しもうぜw」

風太郎「お前は何を買ったんだ……」

エレン「狐のお面に、ヨーヨー風船だろ、焼きとうもろこしに、たこ焼きに好み焼

き、それから……。」「。」「。」「テニイツパイ

風太郎「分かった分かった。漫画みたいになってるぞ。」

五月「何ですか、その祭りに相応しくない格好は。」

風太郎「俺は、何て回り道をしてるんだと思って……。」「

五月「(*・q・*?) モグモグ」

風太郎「……。?」

五月「あ、あんまり見ないでください／＼／」

風太郎「誰だ?」

エレン「はあ。」「。」「?」

五月・エレ「五月です!!（五月だろ!!）」

風太郎「ただでさえ顔が同じでややこしいんだから、髪型を変えるんじゃない。」

エレン「それはお前が他人に興味が無さすぎるだけだ（*、口、）||3。」ヨージョービ
ヨーンビヨーン

五月「イエーガー君の言う通りです!どんなヘアスタイルにしようと私の勝手でしょう!」

一花「そうぞー。女の子が髪型変えたら、まずは褒めなきゃ。もっと女子に興味持ちなよ。」

風太郎「そういうもんか・・・?」

エレン「ほら、お前絶対らいはちゃんの浴衣見たら絶対興味引くd」

風太郎「もちろんだ!!」

エレ・一・五（何（ですか）？この格差・・・。）

一花「ほら、浴衣は本当に下着を着ないのか興味ない？」

風太郎「それは昔の話な。知ってる。」

一花「本当にそうかn」

エレ「え、マジで見せてくれるのか？よっしやー！（ωω）??グツ」

一花「ええ?!じよ、冗談だよ（ωω）;」

五月「一花！イエーガー君も、不純です、（ム）ノ!!」

エレ・一「はーい（・・・）」

プルルルル♪

エレ一「一花、電話なってるぞ。（*・φ・*）,, タコヤキモグモグ」

一花「あ、ホントだ。」

二乃「ちよつとあんたたち何時までそこにいんのよ。はぐれちやうわよ。」

一花「ごめーん。ちよつと電話。」

風太郎「何処に向かっているんだ？」

二乃「別にいいでしょ。つたく今日は五人で花火を見に来たのに・・・。エレ一君は兎も角、何であんたまでいんのよ。」

風太郎「俺は、妹と来ているだけだ。」

エレン「風太郎の扱いw(???)オコノミヤキ」

風太郎「うっせえよ。らいは、あんまり離れると迷子になるぞ。ここ掴んでろ。」

らいは「はい、お兄ちゃん。見て見て。」

二乃「……。」

エレン「良い感じにお兄ちゃんやって——っ!!」

三玖「エレン？」

エレン（いま、何か分からないが、殺気のような物が……。まさか!!）

三玖「……ン！」

エレン（ムロさんに伝えるか!?だが、間違いだった場合、余計な混乱を招くんじや…。）

三玖「エレン！」

エレン「ん？あ、ああ三玖か。」

三玖「大丈夫（…）？」

エレン「無問題。祭りの気に当てられてな。」

らいは「エレンさんも見て見て。」

エレン「ん？うわっ!?なんだその金魚!？」

らいは「四葉さんに取って貰ったんです。これも買ってもらったんですよ。」

エレン「手持ち花火か、良いな。」

エレン「四葉、お前絶対金魚すくい屋、出禁になるな。」

四葉「あ、あはは・・・。」

風太郎「ちゃんと四葉のお姉さんに、お礼言ったか？」

らいは「四葉さんありがと。大好きっ。」

四葉「~~~~~っ」キュンキュン

四葉「あーん、らいはちゃん可愛すぎます。私の妹にしたいです♥」

四葉「待つて下さいよ。私が上杉さんと結婚すれば、合法的に義妹いもつとに出来るのでは……？」

エレン「おーい、戻ってこーい。」

二乃「自分で何言ってるか分かってる？」

二乃「上杉、あんた四葉に変な気を起こさないでよ！」

風太郎「ねえよ。」

ザワザワ、ザワザワ

エレン「人の流れがきつくなってきたな。」

風太郎「これじゃあ落ち着いて花火も見れんぞ。」

三玖「二乃が、お店の屋上を借り切っているから、付いて行けば大丈夫。」

エレン「すっげー!!」

風太郎「ブ、ブルジョア……。それなら、さっさとここ抜けて行こうぜ。」

二乃「待ちなさい。」

エレン「(；・；、ム・？)」

二乃「せっかくお祭りに来たのに、あれも買わずに行くわけ？」

エレ・風「あれ？」

三玖「そう言えばアレ買ってない……」

五月「アレやつてる屋台ありましたっけ……」

一花「あ、もしかしてアレの話してる？」

四葉 「早くアレ食べたいなー」

エレ・風 「何だよ？」

五つ子 「「「「せーの」「」」」」

「チョコバナナ！」

「リングゴ飴」

「かき氷」

「焼きそば」

「人形焼き」

五つ子「全部買いに行こー!!」

風太郎「…お前らが本当に五つ子か疑わしくなってきた」

エレン「いや、五つ子だからこそじゃね？」

悪魔の子、警戒心を持っておくべきはずが、拍子抜けする。

???

「いよいよですね。」

・・・この祭りを阿鼻叫喚の地獄絵図にしてあげましょう。」

搜索と、叱咤激励

五月「納得がいきません!!」

一花「機嫌直しなよ(´|´∩;´)」

五月「あの店主、一花には可愛いからとオマケと言って、私には何も無しだなんて! 同じ顔なのに!!」

三玖「複雑な五つ子心・・・」

エレン「まあまあ。俺のやるから元気出せて。お前は食ってる姿が可愛いしな(´*´)」

五月「良いんですか!? 有り難うございます!」

四葉（対応が大人だ。）

二乃「あんた達遅い!!」

風太郎「二乃の奴気合入ってんなー。」

三玖「花火はお母さんとの思い出なんだ。お母さんが花火好きだったから、毎年揃って見に行ってた。お母さんがいなくなっただけから、毎年揃って。私たちにあって花火ってそういうもの」

風太郎「…なるほど。どうりで張り切るわけだ。」

エレン「花火見た後、燃え尽きなきやいいけど。花火だけに。」

一花「上手い!!座布団一枚!!」

エレン「はい、頂きました。」

エレン（こんな感じにほのぼの出来るかと思ったのに・・・。）

屋上

エレ・二乃「・・・（?|?）」。

風太郎「日本で最初に花火を見たのは、徳川家康という説があるんだ。起源は中国だが、ヨーロッパを経て種子島に鉄砲と共に伝わり・・・」

エレン「いや、何の話だよ!!」

二乃「全然つままない!!何が悲しくて、エレン君は兎も角、あんたと花火見なきやいけないのよ!!」

風太郎「お前が悪いんだろ!!」

ブルルルル♪

二乃「四葉！妹ちゃんも一緒？もう花火始まつてるけど何処にいるの？え？時計台？
迎えに行くからそこにいなさい。」

二乃「ぼさつとしてないで、あんたも電話しなさいよ。」

エレン「俺は、五月に連絡入れてみるわ。」

風太郎「ああ、俺の携帯には・・・」

上杉らしいは

親父

風太郎「駄目だ、この携帯使えねえ!!」

二乃「使えないのはあんたよ!」

エレン「コミュ障の弊害w。俺は、五月と連絡とってみるわ。」

二乃「お願いするわ。頑張つて宿題も終わらせたのに……。何でこうなるの……」

風太郎「あれ？あそこにいるの一花じゃないか？」

エレン「あそこには、五月がいるな。」

風太郎「マジで!？」

二乃「んんん……どうして電話に出ないのよ。」

風太郎「気付いてないのか？」

エレン「こうなったら、自力で捕まえに行くぞ、俺と風太郎で。」

風太郎「了解。」

エレン「二人で、移動すれば、効率が悪い。俺が、一花と、五月を連れて来る。それから、二乃には言いづらかったんだが、今みたいな状況が起る事を想定して、お前たち全員に発信機をつけておいた。」

二乃「嘘お!?!」

エレン「安心しな、祭りが終わる時間帯には自動的に取れるから。風太郎、これ発信源な。シエアしてやる。」

風太郎「りよ、了解。」

エレン「さてと……、このあたりに一花がいるはずなんだが。」

一花「後で、掛け直します。」

エレン「一花!!」

一花「あれ? エレンk」

??「あれ? エレン君じゃないか?」

エレン「へ? って、織田社長!」

織田「久しぶりだね。」

エレン「お久しぶりつす。何で社長、一花と一緒にいるんですか?」

織田「今日は、一花ちゃんの大事なオーディションがあるんだ。」

エレン「ちよつ、一花聞いてないぞ。花火どうすんだよ。」

一花「ごめん。エレン君。皆に伝えといて。私はみんなと一緒に花火を見れないつ

て。皆に宜しくね♪」

エレン「ちよつ、待てよ。」

エレン「もしもし、風太郎か？一花を見つけた。何とかするから三玖と四葉を頼む。」

風太郎「了解した。」

バス停

エレン「一花!!」

一花「エレン君。まさか、ここまで来てくれるとはね。けどエレン君は知ってるでしょ？私が織田社長の芸能事務所にいる事を。」

エレン「ああ。勿論だ。」

一花「今回のオーディションでは、もしも勝ち取れば大きな役を貰う事が出来るん

一花「先生、貴方が先生で良かった。貴方の生徒で良かった。」

エレン「ある一部分を除けば、問題無いな。」

一花「そつか。とりあえず、役勝ち取って来るよ」

エレン「その、仮面を被った様な笑みが無けりやな。」

一花「え？」

エレン「前々から気になってたんだよ。本心を隠すために取って付けたような笑顔が。」

一花「な、何の事かな？」

エレン「隠しても無駄だ。俺には分かる。何より、昔の知り合いで今のお前みたいに、

素の自分を隠して張り付けた笑みを浮かべてる気持ちの悪い奴がいたんだよ。はつきり言つて、今のお前はその気持ち悪い奴と同じだ。」

一花「そんなことは……。」

エレン「あるんだよ。長女としての責任感か、女優としての責任感かは知らんがな、俺は今のお前みたいに、何かに縛られて生きている奴が一番嫌いだよ。」

エレン「おまえは誰だ？中野家の長女の中野一花か？女優の中野一花か？」

一花「ち、違うよ！私は！」

エレン「そうだ！お前は、人の話を聞かない、勉強の意欲の欠片もない大馬鹿野郎だ。」

一花「わ、わーお。はつきり言うんだね。」

エレン「だが、それと同時にその大馬鹿野郎の笑顔には人を惹きつける何かがある。

だからな一花。肩の力を抜け。いつも通りの大馬鹿なお前で行ってこい!!」

一花「・・・!・・・いつも通りの私。分かったよエレン君。行ってくるね。」

エレン「ああ・・・。行つてこい!!」

エレン「さてと・・・、一花の方はいいとして、次は五月だな。」

ブーツブーツ

エレン「無線!?まさか!!ムロさん!」

ムロ「エレンか!!今、通報で祭り会場のイカ焼き屋前で、一人の女子高生が人質に取られている!!至急来てくれ!!」

エレン「——ツ!!このタイミングですか!!人質の特徴は!」

ムロ「特徴は……、

星のヘアピンに、アホ毛の生えた女の子だ!!」

エレン「嘘だろ……。くそっ！五月!!」

グラツプルブレスレットパシユツ

封印された悪魔の殻が割れるまで、あと数分……

目覚めの予兆

エレン「五月の発信機の発信源はここか!!」

ザワザワザワザワ

エレン「100%あの人だけだかな。って、あれは。ヒロさん!!」

ヒロ「エレンか!!」

エレン「人質は何処に!!」

ユイ「あそこよ。」

真面目そうな男「く、来るなあ。この女の子がどうなつても良いのか!？」

五月「や、やめて下さい。こんなの間違ってます!!」

エレン（やっぱり五月かよ!!）

エレン「つていうか、あれ半グレ？」

ムロ「そうなんだよなあ。どう見ても堅気にしか見えないっていうか。」

エレン「ですよねえ。」

ヒロ「そこまでだ!!我々は警察だ!!大人しく両手を後ろに組んで地面に伏せろ!!」

真面目そうな男「う、うるさい!!」

エレン（それにしてもあの兄ちゃん目、何かあるな。）

真面目そうな男「お、お前たちも全員離れろ!!そして、車も用意しろ!!そうしないと、

この女の子が死ぬ事になるぞ!!」

五月「ひっ!!」

エレン「あー、ちよつと良い？」

五月「イ、イエーガー君!？」

エレン「やつほー、五月。ちよつと我慢しててな。破ア!!」

真面目そうな男「来るなあ!!ぐふっ。」

ユイ（あれって、ジークンドーのワンインチパンチ！本物初めて見た！）

五月「きゃあ!!」

エレン「よつと。五月、大丈夫だったか？」

五月「は、はひ。」

エレン「良かった。さてさて、おーい兄ちゃん起きろー。」

真面目そうな男「くそつ。くそつ。誰でも良いから攫わないと、彼女があ・・。」

エレン（やつぱりな。この兄ちゃんの目の奥には、恐怖と焦りの感情が渦巻いている。大事な人を人質に取られてるパターンか。）

エレン「おい！兄ちゃん!!」

真面目そうな男「は、離してくれ!!」

エレン「大体事情は分かった!!大事な人が人質に取られて、やむを得ずやつちまったんだろ?」

真面目そうな男「な、何で!？」

エレン「あんたの目の奥には、悔恨の念などが含まれていた。嘘をついてるかどうかは、目を見ればわかる。事情を話してくれ。これでも俺は、警察だ。」ケイサツテチヨウ
真面目そうな男「け、警察!?!なら、彼女を助けてくれ!!僕はどんな罪でも受け入れるからあ!!」

ヒロ「どういうことだ？」

ユイ「つまり、彼女を人質に取られてこのような事をしてしまったと・・・。」

ムロ「反吐が出るぜ。畜生共が。」

ヒロ「その犯人の名前や、組織名は分かりますか？」

真面目そうな男「た、確か、羅紗弩とか言っていました。」

ムロ「やっぱりかよ。エレンよ、どう思っ——
!!」

その時、氷室隆雄はこう語っている。同僚である、エレン・イエーガーの背後に、15mはあるであろう巨大な生命体の偶像が浮かび上がっていた事を。耳は尖り、口は耳元まで裂けたモノ。言い表すならば、

「悪魔」

エレン「安心してくれ、兄ちゃん。兄ちゃんの婚約者は取り戻す。兄ちゃんが犯した罪に関しても、優秀な弁護士をつけて無罪にしてやる。そして・・・」

エレン「人道に外れたクソガキどもは俺達が潰す」

エレン「ヒロさん、ユイさんはその人を署まで連れてつてくれ。そして、ムロさんは一緒に来てくれ。」

ヒロ・ユイ「了解」

ムロ「OK。暴れるとしますかね。」

エレン「五月。」

五月「は、はい!!」

エレン「少し待っててくれ。すぐに戻る。」

五月「わ、分かりました。」

大地の悪魔と、煉獄の狂犬の狂気が爆発する。

悪魔と狂犬の蹂躞

ブオンブオン

エレン「よし、メンテナンスOK。そっちは？」

ムロ「こつちもオツケーだ。情報屋に確認取って、アジトも割り出した。」

エレン「じゃあ、クソガキ全員ぶちのめしに行きますか。」

ヒロ「お前達、交通規制が行われた。早く行ってこい。」

ムロ「はい。全員纏めて、豚の餌にしまーす。」

エレン「そんなもって、糞になった奴らを、自宅の畑に埋めまーす。」

ユイ「物騒な事言わないでよ。」

エレ・ムロ「Let's get to work!!! Foooo!!!」

ブーンブインブイン

ユイ「大丈夫かしら？」

ヒロ「心配だな……」

ユイ「ええ。」

ユイ・ヒロ「あの二人に、愚連隊が病院送りにされないかどうか。」

周囲の人たち（いや、そっちかよ!!!）

エレン「ここつすかね。」

ムロ「そうだな。」

エレン「あ、その前に。来い!!」テヲカザス

ヒューン バシィ!!

ムロ「絡繰六尺棒・引か。相変わらずのスピードで手元に来てるな。」

エレン「まあね。けどムロさんも素手でよくやりますよ。」

ムロ「ありがとさん。さてと、中にいる人数は・・・。」

エレン「この気配からして、10人は確実つすね。」

ムロ「じゃあ行くか。死ぬなよ相棒。」

エレン「死なないでくださいよ。相棒。」

被害者女性「んーんーんー!!んーんーんーんー!!!」

半グレA「ぐへへへ、今回もまたいい女攫って来たじゃねえか。」

半グレB「上物だなこりゃ。」

半グレC「俺としたら、この女の男の目の前でやりたかったのによお!!」

半グレD「まあ、良いじゃねえか。あんな使い捨てる奴でも、また良い女攫ってきて

お前ら!!全員ぶちのめされると良いなあ!!」

ムロ「どうもー!!私が閻魔大王でございます!!本物でございます!!」

半グレF「何だ!!カチコミか!!」

半グレB「ぶつ殺、ぐへあ!!」

エレン「女攫い過ぎて、金●が空になっちゃったか。男として終わりだなあ!!」グ
チャア

ムロ「顎関節破壊じゃあ!!流動食か、ママのおっぱいでも吸ってろよ!!」ゴキィ

半グレA「ぶぎやあ!!」

エレン「どんな脳味噌してたら、男連れの女攫えるんじゃ!!この豚共が!!」

ムロ「全員纏めて、全治六か月の病院送りにしたらあ!!」

半グレC「ぴぎやあ!!」

半グレD「ごほおえ!!」

半グレI「な、何だこいつらあ!!」

半グレF「や、やべえぞ! 島内さん呼んで来い!!」

ムロ「オラオラオラア!! ヒヤツハー、(△。) 人 (。 △) ノ!」

エレン「てめえら雑魚共じゃあ、話にならねえな!! 骨のある奴連れてこいや!!」

??? 「おい、てめえら何やってんの?」

ムロ「あ、誰だ？」

半グレF「こ、この人は、また鉈の島内って呼ばれてる人だ!!お前から終わったぞ!!」

エレン「何?納豆のチンジャオロース?」

半グレI「鉈の島内だ!!」

ムロ「ふーん、名前とかどうでも良いけど、お前達何でこんなことしてんの?」

島内「そんなもん決まってるだろ。女を強●すると、気持ちが良いからだよ。」

エレン「へー、ムロさん。こいつムカつくから、やっちゃって良い?」

ムロ「良いぜ、今回はお前に譲る。」

島内「はあー?いい加減に、悟れよ。お前みたいなヒョロヒョロじゃおれに勝て」グ

サツ

エレン「半グレは、躡けるに限る。腹に穴が開くと良いなあ!!」

島内「ぎやあああああ
!!!!!!俺の腹があああ!!!」

エレン「黙れ」ケイツイヘシオリ

島内「グハツ!!」バタリ

エレン「さてと・・・、残りは雑魚か。」

半グレ達「ひいひい!逃げろお!!!」

ムロ「待て待て、何処に行こうというのかね?ん?」

ドカツバキツゴスツ

半グレ達「ぎゃあ!!!」

エレン「おーい、手加減してくださいよ。」

ムロ「頸椎へし折った奴が何言ってるんだか。」

エレン「そいつは不問って事でお願ひしますよw第5頸髄節が残存するように折りましたしお寿司。」

ムロ「んなことできるかよw」

エレン「人質は気絶してるっばいし、このまま帰りますかね。」

ムロ「ソーだな。」

える気は無いだろうから、不起訴処分だろうな。」

エレン「OK!!」

五月「イエーガー君!!」

エレン「お、五月。大丈夫だったkぐえええ!!」

五月「イエーガー君の馬鹿あ!!心配したんですからね!!! (P D、q*)。」

エレン「ごめんって。じゃあ、ヒロさん失礼します。」

ヒロ「おう、またな。」

エレン「ほら五月、McLaren 720Sに乗せてやるから泣き止めって。」

五月「うう、グスツ。」

プルルルル

エレン「ん？織田社長から？もしもし？」

織田「一花ちゃんのオーディションは、無事に終わったよ。」

エレン「了解しました。今から迎えに行きます。」

エレン「じゃあ、行くぞ五月。」

五月「はい。痛ッ！」

エレン「どうした？」

五月「さ、先程、イエーガー君に助けて貰った時に走ったせいで、草履が擦れてしまった様で。だ、大丈夫ですから。」

エレン「んなわけねえだろ。よいしょ。」ヒヨイ

五月「イ、イエーガー君。こ、これは!?!」

エレン「お姫様抱っただけど?」

五月「は、恥ずかしいからやめて下さい!!」

エレン「うるさい。怪我人は黙って甘えてな。」

五月「うう／＼／＼」

キヤーナニアレ?

オヒメサマダツコ!?

エイガノサツエイカシラ?

ビダンビジョダー。

ツテイウカ、アレツテ、ナカノサント、エレンジヤネ？

エレン「よっこいせ。ほら、乗りな。」

五月「は、はい。」

エレン「じゃあ行くぞー。」

ブーン

悪魔の子、一仕事を終える。

全員で五等分　そして明かす秘密

エレン「二花！お疲れ様!!」

一花「エレン君、ありがとう。って五月まで。」

五月「二花、イエーガー君から事情は聴きましたが、後で具体的に説明してくださいね。」

一花「う、うん。」

エレン「オーデイションどうだった？」

一花「うーん、どうだろ。」

織田「どうも何も最高の演技だった。私は問題なく受かったと見ているね。」

エレン「織田社長の御墨付きなら問題ねえか。」

織田「一花ちゃんあの表情を引く出したのは、おそらく君だ。君も俳優をやってみないかい？」

エレン「んー。忙しいので遠慮しときます。ま、取り敢えず一花借りてくから。」

織田「じゃあ、また。」

エレン「ほーい。一花と五月乗れえ。」

五月「はい。」

一花「うん。今日はありがとね。」

エレン「苦労なら俺じゃなくて、風太郎にしてやりな。」

一花「風太郎君に？」

エレン「あいつ運動不足なのにも関わらず、全力ダッシュしてたらしいからな。」

一花「分かった（*^_^*）。後、女優業の事も全部話すよ。」

エレン「俺も話そうかな。組対四課に所属してること。絶対クラスメイトにばれたし」

一花「ええ!?警察だったんだ!!」

五月「私も最初はびっくりしましたよ。ですが何故、16歳にも関わらず、警察をしているのですか？」

エレン「その辺の事はまたいつか話すよ。一花、お前は今日話すのか？」

一花「うん。スッキリしたいしね。」

エレン「そうか。」

エレン（こいつらや、あいつらは受け入れてくれるだろうか。過去に縛られた俺を。人類の8割を虐殺した悪魔という俺を。）

エレン「よお、風太郎。お疲れさん。」

風太郎「一花と、五月を見つけてくれたのか。ありがとな。」

エレン「お安い御用って奴だよ。そっちも、三玖と四葉の事ありがとな。」

二乃「エレン君!! さつき、会場でサイレンとか鳴ってたけど大丈夫!?!」

三玖「反社会的な人たちが、居るかもって言ってた。」

四葉 「五月、一花!!大丈夫だった!？」

五月 「はい。問題ありませんよ。」

一花 「あのね、その事で皆に言いたいことがあるんだ。実はね・・・」

四葉 「ええーっ!!一花が女優!？」

一花 「う、うん。黙っててごめん。」

三玖 「じゃあ、今日も途中でいなくなったのは・・・」

一花 「役のオーディションがあつたんだ。それで抜け出さないといけないくて。」

風太郎 「まさか、そんな事をしてたなんてな。」

一花「勉強を疎かにはしないからさ。」

風太郎「それなら良いが・・・。」

二乃「何で連絡くれなかったのよ。今回の原因の一端はあんたにあるわ。」

一花「うっ。」

二乃「あと、目的地を伝え忘れた私も悪い。」

五月「私は自分の方向音痴に嫌気がさしました。」

三玖「私も今日は失敗ばかり。」

四葉「よく分かりませんが、私も悪かったという事で。」

一花「みんな・・・」

二乃「はい、あんたの分。」

五月「お母さんが良く言っていましたね。誰かの失敗は五人で乗り越える事、誰かの幸せは五人で分かち合う事。」

五月「喜びも、悲しみも、怒りも、慈しみも、私たち全員で五分分ですから。」

エレン（母親の遺言か？いいセリフだけど、呪言にならないと良いな）

二乃「残り六本。」

三玖「もうこれだけ？」

四葉「やり足りないねー。」

一花「エレン君、好きなを選びなよ。」

エレン「なら、これで。」

二乃「最後に線香花火とは、良いチョイスね。」

五月「なら、私たちは残った物から選びましょうか。」

五つ子「せーのっ！」

一花・三玖「あ。」
センコウハナビ

一花「あは。珍しいね、私はこっちでいいよ。それは譲れないんですよ？」

三玖「・・・」

四葉 「三玖！線香花火より、派手な方が面白いよ!!」

三玖 「私はこれでいい。」

四葉 「へー、そんなに好きなんだ。」

三玖 「うん。好き。」

エレン 「あれ、一花どこ行くんだ？」

一花 「もう一人の、功労者の所に♪」

三玖 「あ、落ちちゃった。」

二乃 「三玖も終わっちゃったわね。」

五月「イエーガー君のは、長いですね。」

エレン「ああ。」

四葉「花火は大好きなんですけど、すぐに終わっちゃうのは寂しいですよね。」

エレン「そうだな。」

エレン「人生には名残惜しいと思う事が、たくさんある。だが、この花火の様にその分良い時間を過ごし、良い思い出が一つ増えたという事じゃないんだろうか。」

五月「そうですね。」

この後、五月の携帯を介して、一花から風太郎の寝顔が、エレンの携帯に送られたのは、また別のお話。

悪魔の子、花火を楽しむ。

「中間試験? 駆逐してやる!!」
アドレス交換?@って何?

エレン「風太郎。おっはー。(≡▽≡)」

風太郎「おう。朝から元気だな。(、ω、)」

エレン「お前が暗すぎるんだよ。早く行こうぜ。」↑(兵士時代0時寝、5時起きだった人)

風太郎「はいはい。」

一花「二人ともおはよー。」

風太郎「おっす。」

エレン「おっはよー!!おっ、冬服に衣装チェンジか!!」

一花「流石はエレン君。鋭いですなあ。」

エレン「いやいや、一花様こそ。」

風太郎「何、越後屋えちごやと御代官おだいかんの台詞せりふをパロってんだ。」

一花「あはは。そういえば、仕事の件を改めてみんなに話したら驚いてたよ。」

風太郎「俺が反対なのには変わらんがな。」

エレン「成績落とさない限りは良いんじゃないね?」

一花「そうそう、エレン君の言う通りだよ。はい、これ。」

風太郎「何だ?その携帯くれんのか?」

エレン「絶対違うだろ。」

一花「大間違いだよ!!メアド交換しようって事。家庭教師的にも、交換しといた方が
良いでしょ?」

風太郎「うーむ。メアドか。」

エレン「良いぜ!!今すぐ交換しようぜ!!」

一花「オツケー(≡▽≡)」

風太郎(この、コミュ力の塊コンビが!!)

四葉「アドレス交換!!大賛成です!!その前にこれ終わらせちゃいますね。」

先生「お、中野。良い所にいた。このノートをみんなの机に配つといてくれ。」

四葉「はい（´・▽・´）ノ」

エレン「ここで風太郎選手のイライラの指数がマークス!!」

一花「さあ、ここからどう動く!?!」

風太郎「実況すんな!!そもそも、俺はお前らの連絡先なんて・・・」

ピロン♪

風太郎「？」

中野一花

かわいい寝顔

広められたいくなければ
残り4人のアドレスを

Getすべし!

困みにエレン君も協力者だよ♪

エレ・ー「(・▽・)ニヤニヤ」

風太郎「みんなの連絡先が知りたいなー(# ^o^)」

三玖「協力してあげる。エレンもいい。」

エレン「マジで!?サンキュー三玖!!」

風太郎「わーい、やったぜ。そういえば、足は平気か?」

三玖「も、もう痛くない」

風太郎「これでよし。五月と二乃は今度で良いだろ。」

四葉「その二人ならさつき見ましたよ。今の内に聞きに行きましょう！」

風太郎「何でお前も行くんだよ！ってか四葉お前のアドレスは・・・」

四葉「早くしないと帰っちゃいますよ！」

風太郎「やっぱ、勉強する気ないだろ！」

エレン「そーいや俺、二乃と交換してなかった。」

ギャーギャーワーワー

一花「良かったね。三玖。」

三玖「うん／＼／」

食堂

二乃「お断りよ。お・こ・と・わ・り・！」

五月「確かに私達には、貴方のアドレスを聞くメリットがありません。」

風太郎「今なら俺のアドレスに加えて、らいはのアドレスもセットでお値段据え置き
の、お買い得だ」

エレン「さあさあ、奥さん。今がチャンスですよ（*・・*）！」

五月「・・・背に腹は代えられません。」

二乃「身内を売るなんて卑怯よ!!」

エレン「二乃は教えてくんねーの?」

二乃「あ、当たり前よ。(エレン君のは欲しいけど・・・)」

風太郎「そうか、なら仕方ない。では、お前抜きで話すでしょう。俺とエレンと四人で、内緒の話をな!!」

エレン(すげー、ゲス顔w)

二乃「・・・か、書くものを寄こしなさい。」

四葉「これで、全員分揃いましたね。」

エレン「誰か忘れてね?」

風太郎「あと一人いるだろ。」

四葉「え？一花、三玖、五月、二乃……（・ω・）」

四葉「あー!!四葉!!私です！」

風太郎（やっぱこいつ、ただのアホだ。）

エレン（コニーレベルの愛すべき馬鹿だな。）

四葉「こちらが私のアドレスです。」

♪

エレン「電話なってるぞ。」

四葉「ああ、私もう一つ頼まれ事があるんですけど。失礼しますね。」

風太郎「は？」

風太郎（何だあいつ・・・）

風太郎「バスケット部ってまさか!!」

♪

エレン「お、ムロさんから電話だ。」タッタッタツ

二乃「あ、ちよつと・・・」

二乃「メアド書いたんだけど・・・」

エレン「何の電話かと思えば、ユイさんとのデートの為の服を選んで欲しいってw」

風太郎「おう、エレン。」

エレン「メアド交換出来たな。」

風太郎「ああ！これまで以上にスパルタでやってやるぜ！！」

エレン（グッバイ五つ子、フォーエバー五つ子。）

五月「二乃！今日のご飯とても美味しいですね！」

二乃「ありがと。」

♪ピコン

三玖「フータローからだ。」

四葉「私も。」

五月「一斉送信でしょうか？」

風太郎

今日の宿題な

長文英語（以下略）

四葉「やっぱり断った方が良かったんじゃない。」

五月「待って下さい。イエーガー君からも来ました。」

エレン

宿題の御褒美

海外セレブの映画DVDセット

高級化粧品

戦国武将のゲームソフト

最新の運動シューズ

スイーツビュッフェ無料券

頑張れよ!!応援してるからな

(? . . ω . .) ? ファイト!!

一花「頑張ろっか。」

二乃「そうね。」

三玖「飴と鞭・・・。」

四葉「飴の濃度が凄いけど。」

五月「私が一番に終わらせます!!」

悪魔の子、五つ子のモチベ上げ成功☆

試験勉強!?! 訓練時代の成績5位を舐めるなよ!!

エレン「やつほー五月。ちゃんと勉強してるか？」

五月「はい。」

風太郎「休み時間なのに、予習をしているなんて偉い！」

エレン「二乃からも、真面目にやってるって聞いてるぞ。」

風太郎「無遅刻、無欠席、忘れ物もしたことがない!!」

エレン「お前は恐らく、姉妹の中でもトップクラスのY・D・Kやればできる子だろうな」

風太郎「ああ!ただ、馬鹿なだk」

エレン「ふ・う・た・ろ・う? (# ^ _ ^)」

風太郎「何でもないです。すみません」(・ _ ・)」

エレン「さー、五月始めるぞ(*ゝゝ*)」。

五月「は、はい!」

風太郎(に、二乃の所に行くか(◎ _ ◎))

風太郎「ホッペタマツカ

エレン(何も聞かないでおくか。)

四葉「上杉さんつ、イエーガーさんつ、問題です。今日の私は、いつもと何処が違うでしょーか?」

風太郎「お前らもうすぐ何があるか知ってるか？」

四葉「無視!?!ヒントは首から上です！」

一花「そっか、林間学校だ。」

五月「飯盒炊爨はんごうすいさん楽しみですね☆」

エレン「俺、幽霊役になっておもつくそ脅かしてえ（暗黒微笑）」

一花（悪い顔してるなあ（^—^；））

三玖「楽しみ。」

風太郎「試験は眼中にないってか？頼もしいなあ。」ゴゴゴ

一花「あはは、分かってるってー。」

風太郎「本当かよ……。」

四葉「上杉さんと、イエーガーさんには難しすぎたかなー。」

四葉「正解は、リボンの柄がいつもと違うでしたー！今、チェックがトレンドだと教えて貰いましたー。」

風太郎「お前の答案用紙もチェックがトレンド中だ。良かったな。」

四葉「わー最先端ー（へへ；）」

エレン「風太郎。今のギャグは良かったぞ!!」

風太郎「ギャグじゃねえ!!」

一花「あははは。」

風太郎「お前らも笑ってる場合じゃねえぞ。四葉はまだやる気があるだけましな方だ。」

エレン「確かに、俺と風太郎は兎も角、このままだと落ち着いて林間学校に行けねえぞ。」

風太郎「そして、中間試験は国数英理社の5科目！これから一週間、徹底的に対策していくぞー！」

一・三・四・五・エレ「「「「「えー（；ω；）」」」」」

風太郎「えー。じゃねえよ！というかエレンに至っては大丈夫だろ!!」

エレン「いやいや、急に腹が痛くなって、赤点に成る場合があるじゃねえか。人生は「かもしれない運転」だけ、風太郎君よ。」

風太郎「どんなかもしれない運転だ!!まあとりあえず、三玖も日本史以外を・・・」

エレン「その三玖は、英語してんぞ。」

風太郎「三玖が、自ら苦手な英語を勉強している・・・?熱でもあるのか?勉強なんていいから休め。」

五月「失礼過ぎませんか?」

三玖「・・・平気。少し頑張ろうと思っただけ。」

風太郎「そ、そうか。」

四葉「よし。みんなで頑張ろー。」

エレ・ー「おー!!」

四葉「あー疲れたー!!」

三玖「一刻も早く帰りたい。」

エレン「腹減ったー。なんか食いたーい。」

一花「いっぱい勉強したもんねー。」

風太郎（くそつ。放課後だけでは時間が足りない……。週末もどこまで詰めれるか……。）

一花「ふう。」

風太郎「ひいいいっ!」

エレン「あはは！何だ今の声!!」

風太郎「わ、笑うな!!」

一花「そんなに、根詰めなくても良いんじゃない? 中間試験で退学になる訳じゃないんだし。私達も頑張るからさっ。じっくり付き合ってよ。」

一花「御褒美くれるんだったら、もっと頑張れるんだけどね。」

エレン「何!? この前の海外セレブの映画じゃダメだったか!？」

三玖「あれは、飴の濃度が濃すぎた・・・。」

五月「どうせなら皆で、美味しい物を食べたいですね。」

四葉「あ、駅前のフルーツパフェが良いです!」

三玖「私は、抹茶パフェ。」

一花「何か、食べたくなってきた。」

エレン「じゃあ、今から行くかー。」

四葉「上杉さんっ！早くしないと置いて行つちやいますよ!!」

エレン「って、何で風太郎の奴来てねえんだよ!!」

一花「多分勉強じゃないかな（；^ω^）」

四葉「もおー。上杉さんめえー（っ・H・、）。」

三玖「四葉、落ち着いて。」

エレン「このクリームチーズパフェ、うめえ!!」

カランカラン

五月「お待たせしました（―――）。」

一花「遅いよー。もおー。」

五月「申し訳ありません。」

エレン「五月。なんかあったか？」

五月「いいえ。何もありませんよ。」

エレン（絶対何かあった奴じやねえか!!）

プルルル

エレン「あ、ちよつと電話。」

一花「いゆつくりー（*・ゝ・*）」

パフエ屋の外

エレン「もしもし」

マルオ「やあ、久しぶりだね。イエーガー君。」

エレン「マルオさん。お久しぶりですね。」

マルオ「調子はどうだい？」

エレン「ぼちぼちですかね。怪しい部分がありますが、基盤を固めて行けば何とか。ただ若干一名、勉強嫌いな奴が居まして。」

マルオ「上杉君から聞いていた話と違うね。まあいい、今回の中間試験では、君にも

ノルマを課させてもらうよ。」

エレン「と、言いますと?。」

マルオ「一週間後の中間試験。五人のうち一人でも赤点を取ったら、君と上杉君には家庭教師を辞めてもらう。」

エレン「了解です。」

マルオ「素直だね。ごねるかと思ったんだが。」

エレン「そんな事で一々、悩みたくないタイプなので。」

マルオ「勉強嫌いな子がいるのに、ノルマを達成できるとでも?。」

エレン「あのねえ、マルオさん。出来るか出来ないかじゃない。やるかやらないかですよ。」

マルオ「そうかい……。まあ、健闘を祈っているよ。」

エレン「了解です。（成績5位訓練生時代を舐めるなよ!!）」

悪魔の子、成績5位の意地に向け、奮闘することを誓う。

人生ゲームとトラウマ

——中野家——

風太郎 「(———<□>)」

エレン(大方解雇の件だろうが、五月との間で何があったかは、聞かないでおこう。ストレス増やしたくないし。)

四葉 「イエーガーさんっ、私結婚しました!ご祝儀下さい!」

エレン 「おー!!おめでと!」

四葉 「上杉さんも!ご祝儀くーださい!!」

風太郎 「えっ?」

一花「おめでとー。」

三玖「じゃあ、次私の番。スカウトされて女優になるだつて。」

一花「もー!!それが狙ってたのにー!!」

三玖「次、エレンの番。」

エレン「了解。つて、何だこのマス？」

<最愛の人に首を斬られ、転生する。所持金を全て捨てて、スタートに戻る。>

エレン「」

一花「お、重い。重すぎる。」

四葉「というか、こんなマスあつたっけ？」

三玖「無かつたと思う。」

風太郎「つて、エンジョイしている場合かー!!自分の人生をどうにかしろ!」

一花「でも、今日は沢山勉強したし、休憩しようよ。」

四葉「もう頭がパンクしそうです。」

エレン「そう。だぞ。あゝめゝどむゝぢだ（訳：そうだぞ。飴と鞭だ）」

三玖「声ガラガラ。お水飲む？」

エレン「あ、りがどな」（訳：ありがとな）」

一花（さっきのマスが、余程ショックだったんだね。）

風太郎「それはそうだが……。何でエレンは、赤点取ったら解雇の事を知ってるのに、こんなのにびりしてんだよ!!」

三玖「フータロー？なんか、いつもより焦ってる……。私達そんなに危ない？」

風太郎「実は……」

ピロン♪

風太郎「ん？」

エレン

やめておけ。プレッシャーになっただら、どうするんだ。

風太郎「むう。」

一花「……。それなら私から、提案があるんだけど。」

二乃「あー!!何だー勉強サボって遊んでるじゃないな……って、エレン君どうしたのよ!!」

エレン「人生とは何かを考えていた……。」

二乃「そ、そう（．．；）。私もやるわ。上杉、あんた変わりなさいよ。」

三玖「実は？」

風太郎「いやっ！何でもない!!」

風太郎（この事を二乃に知られてみる。こいつが、どんな行動に出るかは火を見るより明らかだ。）

二乃「あんたも混ざる？」

風太郎「五月．．．、昨日は．．．。」

五月「私は、これから自習があるので失礼します。」

風太郎「お、おい！」

二乃「……。ほら上杉、それにエレン君も家庭教師の仕事は終わったんでしょ。」

エレン「じゃあ、帰るぞ風太郎。」

風太郎「お、おう。」

一花「待って、二乃。フータロー君にエレン君。何言ってるの？」

一花「今日は泊まり込みで、勉強教えてくれるって話でしょ。」

二・風・エレ「えっ?」

エレン「Could you say that again? もう一回言ってもら

好みのタイプ?何だろな。

カポーン

エレン「あー。極楽だー。」

エレン「ていうか、めっちゃ広いな。流石はブルジョア。」

二乃「エレン君。湯加減どう?」

エレン「良い感じだな。一生入ってたいってくらい。」

二乃「大げさねえ(苦笑)」

エレン「とはいえ、もうそろそろ出るわ。風太郎に入る様に言ってきてくれ。」

二乃「・・・わかったわ。」

エレン「何だ？今の間？」

エレン「良い湯だったー。」

一花「あ、エレン君上がt」

二乃「ご飯は上杉が出てかr」

エレン「何だよ二人とも（・ω・？）」

一花（す、凄い筋肉。）

二乃（は、はだけてる胸元しか見えてないけど、なんかセクシーね。）

三玖「次、フータローの番。」

四葉「上杉さんが上がれば、ご飯ですよー!」

風太郎「あ、ああ。行ってくる。」

エレン「二乃、ちよつと五月の所に行つて来て良いか?」

二乃「ええ、但し五月に変な事したら、いくらエレン君でも許さないからね。」

エレン「了解しました。」

エレン「五月、居るか?」コンコン

五月「はい、つてイエーガー君でしたか。」

エレン「どうだ?勉強の進み具合は?」

五月「ぼちぼちです。では。」

エレン「ちよつと待てえい!!そこは分からないところがあるので、教えて下さいじゃねーの!?!?」

五月「所詮、貴方もお金の為ですか。」

エレン「ゑ(; . ω .) ?」

五月「ですから、貴方も父から与えられるお給料目当てという事なのでしょう。私たちはあなたたちの金儲けの道具ではあ r」

エレン「待て待て待て!!」

エレン「え?俺が給料もらってる?何の話?」

五月「え?だって、貴方も家庭教師の仕事をしている以上、お金を貰っているのでは?」

エレン「何言ってるんだ?俺、組対四課所属だから副業禁止だし。」

五月「あ、そういえばそうでした。で、では何故ここまで私達に?」

エレン「お前らと関わるのが好きだから、じゃダメか?勿論、いやらしい意味合いじゃないけどな。」

五月「そ、その様な単純な理由で・・・!!」

エレン「何事も単純が一番だよ。分からん所があるなら教えてやるけど?」

五月「・・・では、こここの問題を・・・。」

エレン「了解(*^_^*)。」

二乃「ご飯の時間になったら呼ぶから。」

エレン「Thank you♪」

——玄関にて——

風太郎「えーと、エレン？」

エレン「あゝ？」

風太郎「何で、俺は肘ドンされてる訳(；・ω・?)」

エレン「自分の心に聞いてみるよ(#。|。)」

風太郎「え、えーと。」

エレン「二乃と何があった？」

風太郎 「い、いや。大した事じゃないんだが……」

エレン 「言え。」

風太郎 「はい。解雇の件がバレました。」

エレン 「経緯は？」

風太郎 「(風呂場の事を説明中)」

エレン 「いや、お前馬鹿なの？」

風太郎 「ば、馬鹿って……」

エレン 「何だよ。普通人が謝るときは、面と向かって謝んのが筋じゃねえか。しかもあの真面目な五月が、ドア越しに謝罪するとも思ってたのか？」

風太郎「うっ。」

エレン「とりあえず、二乃の件だが・・・」イグスリゴクゴク

風太郎「な、何とかして勉強会に引き込むしか・・・」

エレン「切り捨てるぞ。」

風太郎「は？」

エレン「は？じゃねえよ。あいつがやる気になってない以上、こっちがいくら仕掛けても時間の無駄だ。」

風太郎 「み、見捨てるっていうのか!？」

エレン 「そうだけど？」

風太郎 「何でそんな事が出来るんだよ!!」

エレン 「じゃあ何か?あいつに感^{かま}じてる間、三玖や四葉達には誰が勉強を教える？」

風太郎 「そ、それは……。」

エレン 「やる気のねえ人間に構うより、やる気のある人間に構う方が有効的だ。」

エレン 「それにな、何も捨てる事が出来ねえ奴には、何も変える事は出来ねえよ。」

エレン 「社会に出たら、使い物にならない人材は切り捨てる。当たり前の話じゃねえか。」

風太郎「……」

エレン「もう、あいつには構うな。」

風太郎「……分かった。」

エレン「そうすれば、光明も見えてくると思うs。」

一花「あー！二人とも此処にいた！ご飯だy」

現在の状況

エレンの服装は胸元がはだけてるシャツ

肘ドンされてる風太郎

男二人きり

一花「え、えーと。ごゆつくりー(；ω；)」

風太郎「ご、誤解だああー。」

エレン「(； ；) 「ヤレヤレ」

エレン「よし、五月やるか。」

五月「はい。ところで本当に・・・」

エレン「ああ。合格不合格に関わらず、パフェ奢ってやるよ。」

五月「分かりました!!」

エレン（チョロいなw）

風太郎（とりあえず、二乃以外は揃ったな。）

一花「はい。詰めて詰めて。」

エレン「おつ、三玖！積極的だな！」

一花「そうなの。三玖が分からない所があるつて。」

三玖「エレンっ、一花・・・っ／＼／＼」

風太郎「くくっ。ああ！答えてやるぞ！お前ら、分からない所あったら、何でも聞いてくれ!!」

四葉「上杉さん！「討論」って英語で何て言うんですか!?!」

風太郎「良い質問ですねえ! debate、これは確実に今回の試験に出るぞ!」
ばて」と覚えるんだ!

エレン(有能アピールをかましてるな。)

三玖「教えて欲しい事……。」

三玖「好きな女子のタイプは?」

風・四・エレ・一・五「「「え?」」」

二乃「……。」

五月「す、す、す、好きな女子のタイプ!? ふ、不純です!! / / /

エレン「餅つけ五月。」

風太郎「それ、今関係ある?」

四葉「私は、俄然興味がありません!」

風太郎「そんなの・・・。(否、これはチャンスか!?)」

風太郎「そんなに知りたければ教えてやる! 俺の好きな女子の要素TOP3をな!!」

風太郎「但し、ノートを1ページ埋めることに発表しm」

エレン「お前ら!! 気合入れろ! 風太郎のあんな事やそんな事を知るチャンスだぞ!!」

一花・四葉「おー!!」

三玖・五月「お、お〜?」

風太郎（何か、複雑なんだが・・・）

四葉「はい！出来ました!!」

風太郎「ジャララララ・・・。第3位”いつも元気”!!」

三玖「はい、出来た。」

風太郎「ジャララララ・・・。第2位”料理上手”!!」

一花「終わったよ（^ω^）」

風太郎「よし・・・、第1位は・・・」

エレン（嫌な予感……。）

風太郎「お兄ちゃん想い”だ!!」

エレン「らいはちゃんの事じゃねえか!!」

二乃「それ、あんたの妹ちゃん!!」

エレン「お?」

風太郎「えっ?」

風太郎「な、何だよ二乃、盗み聞きして……。どうせならお前も、勉強するか?」

二乃「聞きたくなくても、耳に入るわよ！」

三玖（真逆・・・）

二乃「もう良いわよ!!、（ムム）ノ」

四葉「らいはちゃんだったなんて！頑張ったのにずるいです!!」

エレン「これは、すぐさま五つ子裁判を開かなければ!!」

風太郎「余計な事を言うな!!俺のスタンスは前にも言っただろ。恋愛なんて・・・。」

一花「わつ。すごつ！三玖、もう課題終わらせてるよ！」

エレン「頑張り屋には、御褒美だな！」

三玖「え、え？」

一花「はい、頑張りました。」

エレン（風太郎の掌が、三玖の頭の上に



一花「どう？ドキドキしない？」

風太郎「別に。」

一花「（— H —）。四葉、チエツク。」

四葉「わーっ！」

風太郎「何だ!やめろ!」

エレン「四葉二等兵!今だ!!」ハガイジメ

風太郎「エレン!?!お前く!!」

四葉「上杉さん。すごいドキドキしています!!」

風太郎「そりや、あんだけ走ればな!!」

五月「ち、因みに、イエーガー君はどうなのですか?」

エレン以外「「「あ。」」」

エレン「え?俺?」

一花「確かに気になるね。学校一のモテ男君のタイプ。」

エレン「別に良いが……。」

エレン「先ず、3位は黒髪」

一花「ふむふむ。」

エレン「2位は黒い瞳」

五月「黒い瞳ですか。」

エレン「1位は家族同然に育った幼馴染。」

二乃「いや、要は幼馴染なんでしょ!!」

エレン「というか、俺の初恋相手だった奴。ミカサ・アツカーマンっていう奴なんだけどな。因みに、ドイツと日本のハーフだぜ。」

三玖「は、初恋・・・！」

四葉「ロマンチックですねぇ。」

二乃「今も、連絡取り合ってるの？」

エレン「いや？もう死んだけど？」

二乃「何か、デジャブ。」

風太郎「軽いな。というか、疲れた。」

一花「じゃあ、ちよつとベランダに出ない？」

風太郎「お、おう。」

エレン「なあ、五月。」

五月「はい？」

エレン「勉強会に参加してくれたのは良いが、風太郎とは仲直りしないのかよ？」

五月「それとこれは、話が違います。」

エレン「そっか。まあ、あいつにも何かあったんだだろうし、長引かせんなよ。」

五月「はい……。」

エレン「よし、お前ら、後1時間したら寝るぞー。」

一・風以外「はい。」

悪魔の子、
どうしても初恋の相手を忘れられない。

別の視点から見て、分かる事もある。

チュンチュン

エレン「よっし。行くか。」

二乃「ふわあく、おはよう。ってエレン君？何処行くのよ？」

エレン「おはよう。二乃。ちよつとランニングに。」

二乃「そう。朝ごはんどうするの？」

エレン「今日は40kmくらい走るから、昼頃には帰ってこれるかな？」

二乃「・・・そう。」

エレン「……勉強する気には、やっぱなれないか？」

二乃「エレン君には道連れにする感じになってしまつて申し訳ないけど、私が赤点を取れば、上杉を辞めさせれる、絶好のチャンスなんだから。」

エレン「……二乃。どうしてお前はそこまでするんだ？普通に考えて、幾ら邪魔だからとはいえども、眠剤を盛るなんて事は出来ないはずだ。」

二乃「……言いたくない。」

エレン「そうか……。まあ、何時か話してくれる事を期待しているぜ。」

エレン「けどな、二乃。お前には一つ弱点がある。」

二乃「じゃ、弱点？教えてよ。」

エレン「それはな……。極端に視野が狭い事だ。」

二乃「し、視野が狭い!?ど、どうしてそうなるのよ!？」

エレン「前に三玖が言ってたんだよ。お前は面食いだってな。」

二乃「そ、それがどうしたのよ?」

エレン「なにも、面食いが悪いって言ってるんじゃない。けどな、お前は人の外面ばかり見て、中身を見ようとしないだろ?」

二乃「そ、それはだって、イケメンに越したことはないでしょ?エレン君もそうでしょう?」

エレン「まあ、確かに美人や美少女に越したことはない。ただ仮に、お前がある選択を迫られたとしよう。その選択は、「顔立ちは普通だが、家族を大切にす好青年」^{かた}方や一方は「絶世のイケメンだが、女癖も悪く、金遣いも荒い。家族を大切にしないD V男」この二人のどちらか一方と結婚しなければならぬ、離婚もしてはいけない。お前なら

どちらを選ぶ?」

二乃「そ、それは……。」

エレン「答えられないだろ?それは今まで、イケメンにしか興味が無いから、他の視点を持ち合わせていない事の弊害という訳だ。それに、姉妹が赤点を回避すれば、一人だけ取り残されちまうかもしれないぞ。」

二乃「……。エレン君はあるの?」

エレン「何がだ?」

二乃「別の視点から見て、考えが変わった事が。」

エレン「……ああ。あるよ……。それに社会に出れば、ある一定数の我欲に溺れ

た屑くずを除けば、誰かしら、何らかの正義や信念を持ち合わせているんだ。だから、意見の対立や戦争が起こる。それが世の理ことわりって奴なんだ。」

エレン「これ以上俺は何も言わない。お前が勉強しようがしまいがな。」

二乃「前々から思ってたけど、エレン君って何者なの？ホントに。」

エレン「ただの高校二年生だよ。じゃあ、行つてきます。」

二乃「え、ええ。行つてらっしゃい。」

二乃（朝ごはん作る間、英単語帳だけでも見ておこうかな。・・・別に上杉の為じゃないし!!あの子達が進級したとして、取り残されたくないだけなんだから!!）

五月「二乃、おはようございます。」

二乃「五月、おはよう。」

五月「今日のご飯は・・・って、二乃!? 何やってるんですか!?

二乃「何の事?」

一花「二人ともおはよー。」

五月「い、い、い、一花!! 大変です!! あの二乃が、勉強をしています!!」

一花「ええ! 嘘!? だ、大丈夫!? 熱でもあるんじゃない!?」

二乃「し、失礼ね!! 勉強してたら悪い!? ほら! ご飯出来たわよ!!」

五月「それにしても、彼は?」

一花「さあ？まだ寝てるんじゃない？」

二乃「あいつ、本当に泊まったのね。ま、それもあと少しの辛抱だわ。」

一花「二乃も、勉強参加すればいいのに。案外、楽しいよ。」

二乃「お断りよ。それに少しくらいならさつきしたし。五月、あんたもあんまり絆されるんじゃないわよ。」

五月「……………」

一花「素直になればいいのに。」

二乃「エレン君も、『別の視点から見て、分かる事もある。』って言ってたわ。あいつにも何かあったりして。」

一花「おお!?いつの間に風太郎君の事が好きになったのかな（・▽・）ニヤニヤ」

二乃「ち、違うわよ!!」

五月「どうも、彼とは気が合いません。この前も諍いさかいを起こしてしまいました。些細な事でムキになってしまいう自分がいます。」

五月「私は、一花や三玖の様にはなれません。」

一花「(*, ∇,) ヒラメイタ!!」

一花「なれるよ。」

五月「えっ?」

一花「ほら、ここの髪を持って来て……。三玖の出来上がり(ゝゝ♪)」

五月「私は真剣に言ってるんですが!!」

一花「ごめんごめん。五つ子ジョーク。」

二乃「二花！髪分け目が逆よ。もっと寝ぼけた目にして。」

一花「この毛が邪魔だなー」

五月「私で遊ばないでください!!」

一花「ちょうど三玖もないし、これで騙せるか試してみようよ。」

二乃「え……。マジ……。？あいつに私達の区別が出来る訳無いでしょ。」

風太郎「やべえ！寝すぎた!!いつもより40分オーバー……。せつかく泊まり込みしたのに、勿体ない。恐るべきベッドの魔力……。ん？」

三玖「(☒ω☒) スヤア」

風太郎(隣で寝てる……、誰だ!? そうだ、この服を着ていたのは……三玖なのか!? やばい、すぐさま逃げなければ……。ここで三玖が起きたら面倒だ、ましてや他の誰かに見られてもしたら……)。

ガチャリ

五月「」

風太郎「ど……、どうした五月。」

五月「!……分かるんですね……。」

風・五「……。」

ゴソゴソ

風太郎「!!」

五月「？」

風太郎「用がないならもう良いかな!?着替えるから！」

五月「ええっ!？」

五月「……（…、H…）。もう結構です!!」

風太郎（しまった…外で話を聞くだけで良かったか…。）

二乃「あーあ、やっぱり怒らせちゃった。」

一花「フータロー君、大丈夫？」

風太郎「ああ……。」

一花「そういえば、三玖が何処に行ったか知らない？」

風太郎「えーつと……。図書館かな？」

一花「じゃあ、私達も、気分を変えて図書館で勉強しよっか。」

風太郎「そ、そうするか。」

二乃「私も行くわ。」

風太郎「に、二乃!?やる気になってくれたのか!？」

二乃「勘違いしないで!!妹達に取り残されたくないだけよ!!あんたから教わる気は無いから!!」

風太郎「そ、そうですか。」

五月の部屋

五月「・・・」

二乃『別の視点から見て、分かる事もある。つて言ってたわ。』

五月「別の視点・・・。」

その頃エレンはというと・・・

チンピラ数十人　　○十へチーン

「エレン「何で、朝のランニング中にチンピラに絡まれるんだよ……。良い運動になったけど。」

朝からバトルしていた。

図書館

四葉「三玖は何処かなー？」

風太郎（五月と、このままで良いのか？いや、あいつはエレンには気を許している節がある。それに掛けるしかない。あー、思い出したらムカムカしてきた・・・。）

一花『フータロー君にしか、出来ない事があるから。』

風太郎「えー・・・、ゴホン。四葉、例えば・・・例えばだがな、この先5人の誰かが成績不良で進級できなかつたとする。その時お前は どうする？」

四葉「私ももう一回、二年生をやります。・・・といつても、私が一番可能性が高いんですけど。あはは。」

四葉「・・・でも。上杉さんとイエーガーさんが居れば、そんな心配いりませんね♪」

風太郎（中途半端な仕事をするわけにはいかないか・・・。あいつもきつと・・・。）

一花「フータロー君。私、うっかり筆箱忘れちゃったよ。」

四葉「一花!!書くものなら私がたくさん・・・。」

一花「私達だけで先に始めてるから、忘れ物取ってきてくれる？」

風太郎「ああ。行ってくる。」

二乃「・・・何のつもり？」

一花「ちよつとね。」

——マンション前——

風太郎（よし！）

スタスタスタ、ドーン

風太郎「のわっ！」

三玖「きやつ!!」

風太郎「三玖、起きたか。」

三玖「と、図書館に行ったんじや・・・。」

風太郎「忘れ物だ、一花達が待ってる。先に合流しててくれ。」

三玖「ふ、風太郎。もしかして昨日の夜／＼／」

風太郎「え？夜？夜と言えば昨日は良く眠れたか？俺はどうもベッドに慣れなくて、リビングの床で寝てたから腰がいてえよ。（棒読み）」

三玖「そ、そうだよね。良かった。」

風太郎（嘘だけど・・・おそらくは知らない方が良いだろう。それに俺は・・・。これから、もう一つ？をつかなければならないんだ!!）

三玖「じゃあ、私は先行ってるね／＼。行ってらっしゃい。」

風太郎「ああ!!」

五月「(☒)☒(☒)スヤア」

風太郎「おい、起きろ。」

五月「ああ……。すみません……。」

五月「……………」

風太郎「やっと見つけたぞ。三玖。」

五月「えっ？(あつ……ヘッドホン)」

風太郎「勉強サボって、俺から逃げてただろ！許さねえぞ!!」

五月「……っ。あの」

風太郎「ほら、ペン持て！」

五月「私は・・・」

風太郎「教科書広げろ！罰としてスパルタ授業だ!!お前には、絶対赤点回避してもら
うぞ！」

五月「だから、三玖じゃ・・・」

風太郎「そういや、五月の姿が見えねえな。今も部屋で勉強頑張ってるんだろうな。
間違っても転寝うたたねしてるなんて事は無いだろう。」

五月「・・・ッ」

風太郎「どうした、三玖？」

一花『素直になればいいのに』

五月「……何でもありません……。何でもないよ／＼／＼／＼」

風太郎「……。じゃあ、始めよう。」

風太郎「今は何処やってたんだ？」

五月「せ、生物」

風太郎「そのまま続けるか。分からなかった所はあるか？」

五月「えつと……。」

風太郎「あ、そうだ。」

五月「な、何？」

風太郎「一昨日は悪かった。」

五月「な、何の事？」

風太郎「あつ。そうだな。ははは、三玖相手に何言ってるんだか。」

五月「私こそごめんね。」

風太郎「み、三玖こそ何言ってるんだ？」

五月「そ、そうだね。」

五月「……。ここが分からないんだけど。」

風太郎「何だ。もうそこまで進んでいたのか。それはな……。」

リビングのドア前

??? 「う、嘘だろ。なんか和やかな雰囲気になってやがる。」

??? 「まあ、仲直りできたなら良いか。」

——リビング

風太郎 「二人でよく頑張ったな。」

五月 「／／／／」

——リビングのドア前——

??? 「エレン・イエーガーはクールに去るぜ。」 ↑ (40kmを2時間で走った人)

悪魔の子、某バトル漫画のセリフをいとも容易くパロる。

これぞ、前門の虎（先生）、後門の狼（時間）なり

チュンチュンアサダチュン（へへへ）

風太郎「夢みたいだ!!」

エレン「うるっせええ!!何だよ朝っぱらから!!」

風太郎「何だ、夢か……。ん!？」

エレン「どうして……。は!？」

五月「ふあゝ。お二人とも早いですね……。」

風太郎「五月……。確認だが、うちの学校は8時半登校だったよな?」

五月「そうですね。それから15分後に試験開始です。」

風太郎「ふむ……。あの時計壊れてたりしない？」

エレン「What time is it now？」

時計君「8時15分だよん♪ (ノ≧?≦) テヘペロ」

五月「i l — l i () . □ : i l () i l — l i」

エレン「総員!!起床!!」

四葉「何で、皆起きれなかったんだろ〜？」

三玖「後15分……。結構やばいかも……。」

五月「朝食どうしましょう？」

二乃「私のメイク道具知らない？」

一花「あー。眠いよー。」

エレン「カ、カオス・・・。」

風太郎「お前ら!!急いでくれ!!」

四葉「皆ー、遅いよー!!」

四葉「上杉さーん。イエーガーさーん。先に行っちゃいますよー!!」

エレン「四葉!!お前だけでも行っててくれ!!」

四葉「了解しましたー（、・ω・）ゞ!!」

風太郎「はぁ……。お前ら、車で通学してたんじやなかったのか……。」

三玖「江端さんは、お父さんの秘書だから。」

エレン「三玖、それに風太郎も鞆貸せ!!持ってやるから!!」

三玖「あ、ありがとう。」

風太郎「サンギュー、エレン。というか、お前車は?」

エレン「この前、半グレとCar chaseしてたら、タイヤとニトロがバグったから、メンテナンス中なんだよ!!せめて、グラップルブレスレットがあれば……!!」

一花「お父さん達が、家に居たら良かったのね。（カーチェイスって（・・・）」

風太郎「そ、そうだな！」

エレン「遅刻なんて馬鹿げた理由で、解雇になんてなつてたまるかよ!!」

風太郎「だが、このまま走れば間に合いそうだ!!」

二乃「あーっ!!」

エレン「どうした!!」

二乃「やっぱ、メイクしたいわ。スツピン見せたくないし。」

風太郎「他の四人がバンバン見せてるだろ!!」

風太郎「三玖、おばあさんの荷物を持ってやるのは偉いが、今じゃない！」

一花「最近、学校の入り口に生徒指導の先生立ってなかった？」

エレン「あんの、絶滅危惧種め!!」

三玖「な、何で絶滅危惧種?」

エレン「何となく、ニシゴリラに似てるからだよ!!」

二乃「エ、エレン君。失礼よ。(H ^)プルプル」

五月「もう駄目です……。」

風太郎「諦めんな!!」

エレン「Never give up!!!」

五月「いいえ……、もう限界です……。」

五月「お腹が空いて、力が出ません……。」

風・エレ「……。」

店員「らっしやいませー。」

五月「どれも美味しそう……。」

風太郎「悩んでる余裕なんて無いからな!!」

エレ「俺は、社畜の必須アイテム”エナドリ”にするぜ!!」

風太郎「現代社会の闇を言い表すな!!こんな時に!」

五月「あなたは、何にしますか?」

風太郎「いや……。俺はほら……。」

五月「……これくらい奢りますよ。何とは言いませんが、御迷惑をお掛けしましたので。」

風太郎「……！どれにしよう……。」

二乃「あんた達、急いでるんじゃないやなかつたの!? ったくどういうつもりよ。」

エレン「ホントにな……。ってどうしたそのチビツ子？」

三玖「迷子みたい……。」

一花「ママと逸れちゃったのかな？」

風太郎「急いでるんだ、他の人に任せて行くぞ。」

エレン「はあああああ
!!??」

一花「自分だって、おにぎり買ってるじゃん。」

三玖「道に迷ってる。可哀そう……。」

エレン「勉強の事しか頭に無い大魔王が!!」

一花「ボク々？お姉さん達にお話聞かせて？」

男の子「…… I w a n n a m e e t m y m o m m y ……」

一・三「……ハ、ハロー。」

風太郎「自分が路頭に迷うかって時に何やってんだか……？」

二乃「あんたもね。」

??? 「あれ？ エレンじゃない？ 何やってるの？」

エレン「へ？ つてユイさん!？」

ユイ「もしかして登校中？ 大変ね。 あら？ あなたは確か夏祭りのときの……。」

五月「ご、御無沙汰しております。」

ムロ「何やってるんだ？」

エレン「実は……。」

ユイ「分かったわ。 この子は私達に任せなさい。」

三玖「確か、病院に行きたいって言っていました。」

一花「恐らく、中央病院かと……。」

ユイ「教えてくれて有り難う。」

ユイ「Hi, boy. We are the police. Would you like to go with us to the central hospital (こんにはは、ボク。私達は警察よ中央病院まで、一緒に行かない?)」

男の子「……OK. Thank you.」

ユイ「You're welcome.」

ユイ「話が付いたわ。じゃあ、遅刻しないようにね。」

エレン「うっす。」

ムロ「えー、今日はせっかくのデートだったのn」

ユイ「黙れ。」

ムロ「さーせん。」

二乃（この人、本当に警察なの？）

一花「いやー。無事に送り届けれるみたいで何よりだね。」

風太郎「うんうん良かったね。ところで君達、何か忘れてないかい？」

風太郎以外「あ……。」

風太郎「タイムオーバーだ。試験も直じきに始まる。」

五月「ど、どうしましょう。」

三玖「でも、学校は直ぐそこだよ。」

一花「生徒指導の先生、許してくれるかなあ。」

エレン「もう駄目だ！俺たちは絶滅危惧種奴の餌食になるんだ！！」

二乃「大袈裟よ。どうするつもりなの？」

風太郎「もしもし四葉か？もう学校に着いてるのか？いや良い。そのまま学校にいてくれ。」

風太郎「大丈夫。俺に案がある。」

エレン「案って？」

風太郎「ドツペルゲンガー作戦だ。」

絶滅危惧種「ん？」

三玖「おはようございまーす。」

絶滅危惧種「お前！遅刻だぞ！」

三玖「おーつと。このリボンに見覚えはありませんか？」

絶滅危惧種「……。その顔にそのリボン、確かに数分前に見たような……。」

三玖「先生の手伝いで、また外に出たんです！」

絶滅危惧種「そうか、もう始業のチャイムは鳴っている。試験までに着席するんだぞ

！
」

三玖「はい。」

三玖「ふう。知りがたきこと影の如く。」

風太郎『四葉が学校にいるのは確認した。一度登校した生徒なら、生徒指導も厳しく
言え無いだろう。』

エレン『つまり、こいつらを四葉のドツペルゲンガーにするのか。』

風太郎『そういう事だ。』

一花「おはようございます。」

二乃「おはようございます。」

五月「お、おはようございます。」

絶滅危惧種「あの生徒何週も、何してるんだ・・・？」

五月「先生を騙すなんて、私は何て無礼を・・・。」

二乃「あんた真面目過ぎ。」

四葉「あ、良かった。皆入れたんだね。」

三玖「本物だ・・・。」

一花「ほら、切り替えないと、足元^{すく}掬われるよ。」

一花「ここからが本番だから。」

五月「いよいよですね・・・。」

三玖「大丈夫かな……。」

四葉「あれっ？上杉さんと、イエーガーさんは？」

一花「……。」

風太郎「おはようございます。」ヨツバリボン ソウチャク!!

絶滅危惧種「遅刻した上に、ふざけてんのか？」

風太郎「ですよn」

???「先生！おつはよーございます!!」

絶滅危惧種「またお前か!!何周して……。何か、背が高くなってないか？しかも制

服も男物だし……。」

??? 「先生……? 女性の体型や、服にとやかく言う事は、セクハラですよ(>?、)?
(目が笑って無い)」ゴゴゴゴ

絶滅危惧種 「す、すまん。行って良し!!」

??? 「有り難うございます。」

??? 「よっしゃ! 成功!!」

一花 「え!?! 背の高い四葉!?!」

二乃 「ど、どういう事!?!」

??? 「俺だよ、俺。」 ナノマスクバリバリ ウイツグポイツ

三玖「エ、エレン!？」

四葉「ど、どうやって私に化けたんですか!？」

五月「そのマスクの様な物は一体・・・!？」

エレン「俺が開発した、ナノマスク。表面は、ホログラムみたいになって、パソコン上の、データにある人物の写真を、マスクにアップロードしたら、その人物そっくりになって、ホログラムだから、マスクの下の口の動きも合わせてくれる優れ物だ。潜入調査とかで、役立つかもな。まだ、試作段階だが。後は、体型をどう変化させるかが課題だな。」

二乃「いや、普通にすごっ!」

三玖「そんな事より、フータローは!？」

絶滅危惧種 「さつきまでの奴は兎も角、お前は生徒指導室に来い!!」

三玖 「フータロー!!」

風太郎 「早く行け!!」

三玖 「・・・でも。」

風太郎 「俺が居なくても大丈夫だ。努力した自分を信じる。」

絶滅危惧種 「一人で何言ってるんだ!!」

エレン 「あの流れ・・・。今度こそ、「生徒指導室、男二人きり、何も起こらないはずもなくが・・・。」が起こるんじゃない・・・。」

二乃 「ないない。(ぐノーオー、)」

一花「良い点とって、フータロー君を驚かせちやお！」

三玖「うん!!」

四葉「ほら、二乃も!!」

二乃「な、何で私まで・・・」

五月「死力を尽くしましょう!!」

エレン「てめえら!! 気合入れろ!!」

風太郎以外「」「」「頑張るぞ!! おー!!」「」「」

悪魔の子地獄試験教室へと、歩を進める

娘を想う父V S 1182歳の高校生（元兵士）

教室

ハゲネズミ「……。残り10分」

風太郎「……。」

エレン「……(?)。?)ボ~~~~ツ」

ハゲネズミ（くつくつく……。悩んでいるな、上杉にイエーガー……。私の渾身のテストを、毎回澄ました顔で満点取りおつて。遅刻し、途中参加だったが知った物か。特別難易度の高い問題を用意した。さあ、思う存分堪能するが良い!!）

風太郎（くつ……！皆頼むぞ！）↑（答案全部埋めてる）

エレン（あー、この席からだど、ハゲネズミの頭で反射する光で眩しいんだよなー。早

く席替えされねえかなー。そういや、シャーデイス教官も剥げてたなー。(？。？) ↑
(答案全部埋めてる)

—— side 三玖 ——

三玖（難しい問題ばつか……。でも、歴史なら分かる。2人より良い点取ったら、どんな顔するかな。）

—— side 四葉 ——

四葉（うーん。・・・思い出した!! Σ(○, ㊦, ○) ハッ!!)

四葉（五択問題は、四番目の確率が高いつと。）

—— side 二乃 ——

二乃（討論、討論……。分かんないや、次。）

風太郎『でばて、と覚えるんだ。』

二乃（勝手に教えて来るんじゃないわよ。）

— side 一花 —

一花（終わつた。こんなもんかな。お休みー（☒ω☒）スヤア）

一花（……式の見直し位、しても良いかな。）

— side 五月 —

五月（あなた達を辞めさせはしません。）

マルオ『一人でも赤点なら、辞めて貰うと先程は伝えたんだ。』

五月『本当ですか、お父さん……』

五月（らいはちゃんの為です！念のため！）

— 数日後 —

風太郎「よお、集まって貰って悪いな。」

エレン「全員いるな。」

一花「どうしたの二人とも？改まっちゃって。」

四葉「水臭いですよ。」

三玖「中間試験の報告。間違えた所、また教えてね。」

エレン「オーケー、オーケー。まあ、とりあえず。」

風太郎「答案用紙を見せてくれ。」

一花「はい。私は……。」

五月「見せたくありません。テストの点数なんて、他人に教える物ではありません。」

個人情報です。断固拒否します。」

一花「五月ちゃん？」

風太郎「（、口、） 〓 3 フウ。ありがとな。五月。」

エレン「だが、俺らも男だ。覚悟はできてるぜ。」

四葉「ジャーン！他の3科目は駄目でしたが、国語と、理科が山勘が当たって、それぞれ、ちょうど30点でした。こんな点数初めてです！」

三玖「社会が68点で、数学が31点。そのほかはギリギリ赤点。悔しい。」

一花「私は数学と、英語の2つだけ。今の私じゃこんなもんなな。」

二乃「国数社が赤点よ。言っとくけど手は抜いて無いから。」

五月「合格ラインを超えたのは2科目・・・社会と理科のみでした。」

風太郎「・・・そうか。つたく。短期間とはいえ、あれだけ勉強したのに、全教科30点も取ってくれないとは・・・。改めてお前らの頭の悪さを実感して、落ち込むぞ・・・。」

二乃「う、うるさいわね。まあ、全員揃って赤点2つずつなんて、私達らしいけどね。」

四葉「あ、そうかも。」

三玖「それに、最初の5人で100点に比べたら・・・。」

風太郎「ああ。確実に成長している。」

風太郎「三玖、今回の難易度で68点は大したもんだ。偏りはあるがな。今後は姉妹に教えられる箇所は自信をもって教えてやってくれ。」

三玖「え？」

風太郎「四葉、お前はケアレスマミスが目立ってるな。焦ったらしまいだ。慎重に行け。」

四葉「了解しました！」

風太郎「一花。お前は一つの問題に拘こらなすぎだ。最後まで諦あきらめんなよ。」

一花「はい。」

エレン「五月、お前は一花と逆で、一問に時間を掛け過ぎなのが弱点だ。視野を広くしろよ。」

五月「はい。」

風太郎「そして二乃、お前は、最後の最後で勉強会に参加してくれたが、短期間でここまで点数を取れるとは、想定外だ。俺らが来れなくなっても、復習は心掛けろ…。」

二乃「グスツ……。」

二乃・エレン以外「????
!!!!!!」

四葉「に、二乃!?!?どうしたの!?!」

風太郎「何処か、痛むのか!?!」

一花「二乃が泣くななんて珍しい……。」

三玖「お薬買ってきた方が……!」

二乃「ち、違うわよ……。」

五月「で、では何故……。」

エレン「・・・悔しいんだろ。点数が取れなかった事が。」

風太郎「え・・・。」

二乃「ち、ちが・・・。」

エレン「違わねえよ。それ以外考えられねえ。」

エレン「確かに、お前は勉強する事を嫌ってた。最初はな。だが、家族を想うお前の性格からして、周りの姉妹が勉強に対して意欲的になつていくのに対し、自分は置いて行かれるかもしれないという恐怖感が勝つたんだろ。だから、澁々ながら勉強会に参加した。」

二乃「……。」

エレン「だが、勉強会を続けていくにつれ、お前は勉強をして、問題を解き、答えを得る快感を知ってしまった。だから、最後の最後とはいえ、勉強会に参加し続けた。そうだろ？」

一花「そうなの？二乃。」

二乃「そうよ……。その通りよ!!最初は、二人の事を追い出す事でいっぱいだった!!けど、その内に勉強してる四人が離れていくような気がして、不安だった!!それで、私も勉強会に参加してみたら、案外楽しくて、それで……。お世辞にも頑張ったとは言えないかもしれないけど、最後の最後は今までにない位に頑張った!!こんな事言ったら、自分に甘いって言われるかもしれないけど、本気でやったのよ!!」

風太郎「そうだったのか……。」

二乃「今では、はっきり言える。私はもう、あんた達をクビに何てさせたくない……。」

全員「…………。」

プルルル♪

五月「——っ。父です。」

エレ・風以外「!!!!」

エレン「…………。」

風太郎「上杉です…………。」

マルオ「ああ、五月と一緒にいたのか。個々に聞いて行こうと思ったが、君の口から結果を聞こうか。嘘は分かるからね。」

風太郎「つきませんよ。ただ、こいつらにはもつといい家庭教師をつけてやってくだ

さっ。

マルオ「ということは？」

風太郎「試験の結果は……。」

トントン

エレン「風太郎、変わってくれ（小声）」

風太郎「な、何すんだよ（小声）」

エレン「良いから。さっさとしろ（小声）」

風太郎「りよ、了解（小声）」

マルオ「何をしているんだい？試験の結果を……。」

エレン「マルオさん、御電話変わりました。」

マルオ「イエーガー君かい？何故上杉君と変わったのかは知らないが、僕が聞く事は一緒だよ。」

エレン「テストの結果ですよ。当然お教えします。但し、話した後には世間話でもしませんか？」

マルオ「……良いだろう。」

三玖「エ、エレン……。」

五月「三玖。まずは彼を信じましょう。」

エレン「単刀直入に申し上げますと、彼女らは全教科赤点回避を、成し遂げられませんでした。こちらに関しては我々の力不足です。電話越しで大変失礼だとは思いますが

でしようが、ここでお詫びを。」

マルオ「・・・そうかい。それで、世間話というのは？」

エレン「マルオさん、最近貴方は何時頃あのマンションに帰られましたか？」

マルオ「・・・覚えていないね。仕事で忙しいもので。」

エレン「そうですね・・・。なら、一つ此処で言わせてもらいますね。」

エレン「幾ら、仕事が忙しいと言えども、目の前の問題から逃げてんじやねえよ。このクソガキが。」

エレ・マル以外「????
!!!」

二乃「え、エレン君!？」

一花「いきなり何言って……」

マルオ「年長者に向かってその様な態度とは、褒められた物ではないね（低音）」

五つ子「っ!!」

四葉「ど、どうしよう。」

三玖「お父さん怒らせたら怖いのに。」

五月「と、というか。クソガキって……。」

風太郎「あいつ、年上に向かって何て態度だよ!」

エレン「年長者か……。たかだか、40年ほどしか生きてないくせして？」

マルオ「どういう事だ？」

エレン「じゃあ、仮に聞くけど、もしも俺があんたよりも年上なら、敬語を使うってことだよな？」

マルオ「それなら、敬語で話しても良い、だが君は高校生だろう？どう考えても僕より年上とは……。」

エレン「俺が、1182歳の爺だったとしてもか？」

風・五つ子・マル「は？」

マルオ「一体どういう……。」

エレン「病院長である、あんたほどの権力者なら知ってると思うが、約2年前に、とある大樹から、水晶に覆われた人間が、政府直下の歴史研究家達に掘り起こされた話を。」

マルオ「そんな話は……。いや、確か1年前に提携している病院の院長から、そんな話を聞いたことがある様な……。まさか君が!!」

エレン「せいかりい。改めて自己紹介させて貰う。俺の名はエレン・イエーガー。西暦835年に生まれ。西暦854年に眠りについた、元兵士だよ。証拠が欲しいんなら、送ってあげても良いけど？ 国家機密情報でも何でも無いし。」

マルオ「だ、だが……。それとこれとは話が……。」

エレン「話をすり替えんじゃねえよ、このボケが。」

マルオ「っ!!（な、何だ!!この電話越しにでも伝わる殺気は・・・!!）」

エレン「マルオ、あんた知ってるか？夏祭りで、五月が間接的にとは言えども、半グレに攫われそうになった事を。」

マルオ「そうなのかい？」

エレン「その様子じゃ知らねえみたいだな。じゃあ、この世で最も恐ろしい事が何か知ってるか？」

マルオ「な、何だというんだ・・・。」

エレン「それはな・・・。」

家族を失う事だよ。」

エレン「俺は、遙か昔の戦争で母親を失った。それも喧嘩騒動を起こして、外に出て行った数分後に、母さんは死んだ。今でも後悔している。あの時仲直りしていればと。」

マルオ「……。」

エレン「俺と、風太郎をクビにするのは構わない。雇い主のあんたの当然の権利だ。だが、それ以上に家族を大事にして欲しい。後悔しない様に。それだけ言いたかったんです。」

マルオ「……。イエーガー君。」

エレン「はい？」

マルオ「こうさせて貰おう。上杉君を雇い続ける代わりに、君を解雇する。」

エレン「そうですか。分かりまし・・・」

マルオ「その代わり、君の事をボディガードとして雇いたい。」

エレン「は？」

マルオ「近年、愚連隊と呼ばれる反社会勢力が活発になってきていると聞いている。勿論君が、組織対策4課に所属していることも知っている。業務時間外で構わないから、娘達を守って欲しい。元兵士であるならば、お安い御用だろう。」

エレン「再契約って事ですか・・・。」

マルオ「僕は少し急ぎ過ぎたのかもしれない。もう少し猶予を与える事にするよ・・・。それから、君の言う通り家族との時間も出来る限り取る事を考えるよ。」

エレン「その言葉が聞けたなら、結構です。では失礼しますね。」

マルオ「ああ……。娘達を宜しく頼む。」

エレン「了解です。」

エレン「（、旦、） || 3 フウ」

風太郎「エ、エレン。さっきの話は……？」

エレン「纏まとめると、これまでと同じ感じまじでやる。」

五月「先程の、年上というのは……。」

エレン「実は……。」

四葉「ええー!? イエーガーさんって、今の時代の人じゃないんですか!？」

三玖「じゃあ、戦国時代とか？」

エレン「いや、日本で言う所の平安時代生まれかな？」

二乃「もう、色々と情報が入ってきて、考える事を放棄しそうよ。」

五月「ですが、今までのイエーガー君の発言は何処か大人びているような感じでしたし。」

一花「そう考えたら、1000歳以上っていうのも納得かな。」

風太郎「というか、1年の付き合いとはいえ、話されなかつた俺って・・・。」

エレン「別に、おおやけ公にする事でもないし。」

風太郎「そ、そうか……。で、これから如何どするかだが……。とりあえず、えーと、パフェだったか？それでも食たいに行くか。」

エレ・五つ子「……。」

エレン「い、今お前何て言った？」

風太郎「いや、パフェって……。」

五月「プツ……」

「「「あはははははっ!!!」」」
!!!」

風太郎「な、何故笑う!？」

一花「フータロー君がパフェって!!」

風太郎「あー！見るなー！！」

五月「100点!？」

風太郎「あー！めっちゃ恥ずかしいわ!!」

五月「その流れ、気に入ってるんですか？」

エレン「もう、手遅れなレベルではな。」

二乃「エレン君は？」

エレン「漢文で2点落として、498点。」

一花「あらら・・・(；・D・)」

エレン「今日は俺の奢りだから、風太郎も好きなの頼めよ。」

風太郎「良いのか!?!ありがたいな!」

悪魔の子、秘密を話して、少し気が楽になる。

「林間学校？雪山登山訓練みたいなもんか？」
エレン先生のお料理教室

ピピピピピ♪

四課の時計君「昼飯の時間だよ（＾＾♪」

ムロ「飯だ、飯いいいい!!」

ユイ「五月蠅うるさいわね。落ち着さきなさいよ。」

ヒロ「もう、こんな時間か。」

ムロ「エレン!!飯!!早く!!Please!!」

エレン「はいはい、本日は、レタスのサラダに、ローストビーフ、縮ちりめんじゃこ緬雑魚ご飯です

よ。」

ユイ「相変わらずの料理スキルね。」

ヒロ「非番なのに悪いな。」

エレン「だって毎日弁当届けないと、3人とも直ぐに、コンビニ弁当に走るじゃないですか。」

ヒロ・ムロ・ユイ「(〇〇〇;) ギクウウウ!!」

エレン(凶星かよ……) (ㄉ、) 「ヤレヤレ」

ピコン♪

エレン「ん?」

三玖

エレン、

助けて。

フータローのお腹が!!

エレン「すみません!!ちよつと出ます!!」

ヒロ「お、おう?」

ムロ「何だ?」

ユイ「さあ？」

——五つ子リビング——

エレン「お前ら!!無事か!!って、ん? (・皿・)」

風太郎「▽十〇」

エレン「何があった？」

四葉「実は……。」

——
エレン「成程、三玖の料理を食って、こうなつたと……。」

三玖「ご、ごめん……。」

エレン「謝る事じゃないだろ。それに、五月にも言ったけど、最初から上手く出来る

奴なんてそうは居ないさ。(寧ろ、教えがいがある。)

エレン「じゃあ、腹痛の薬買ってきてやったから、四葉は風太郎に飲ませてやってくれ。三玖は俺と、料理レッスンな。」

三玖「う、うん。」

四葉「了解です!!」

風太郎「マジで、すまん……。」

エレン「じゃあ、始めるか。」

三玖「うん。それにしても、エレン。」

エレン「ん?」ペタペタ

三玖「エレンの生きてた時代に、コロツケってあったの？」

エレン「あつたかもしれないが、俺は食った事無い。そもそも、兵士として色々忙しかつたしな。まあ、この時代に蘇ってからは、料理する機会も増えたし、十分教えれるから、安心しな。」

三玖「そつか……。ありがとう。」

エレン「どういたしまして。」

エレン「じゃあ、タネは作ったから、一度さつき作った通りにやってくれ。」

三玖「うん。」

コロツケ「真っ黒になったZ・E★」

三玖「(・・・)」

エレン「んー。大体わかった。」

三玖「本当!？」

エレン「まず、コロッケを高温で揚げ過ぎだ。そして、中まで火を通す為にやってるかもしれないが、長時間揚げ過ぎてる。そりゃあ、真っ黒になる訳だ。」

三玖「うう・・・。」

エレン「まあ、料理も勉強と同じで、上手く作れない⇨伸びしろがあるって事だ。そんなに落ち込むなよ。俺も最初は、下手つぴだったからな。」

三玖「そうだったんだ・・・。」

エレン「じゃあ、タネ入れるぞ。」

三玖「う、うん。」

コロツケ「良い焼け具合☆」

三玖「で、出来た・・・(*,▽,)」

エレン「よし!! 四葉、食ってみな。」

四葉「はい!! (*,?) *) ?? // ?? //」

四葉「うん!! 美味しいよ!!」

三玖「良かった・・・(*,o,) || 3。」

エレン「じゃあ、後は愛しの風太郎に食ってもらっただけだなw（小声）」

三玖「い、い、い、愛しの!?!」

エレン「え？違うのか？（・▽・）ニヤニヤ」

三玖「か、揶揄わないで・・・!!」

エレン「はいはい。」

五月「何か、良い匂いがしますね。」

二乃「コロツケじゃない。一つ頂くわ。」

ワーワーギャーギャー。

エレン（三玖、俺みたいに後悔しないように頑張れよ。）

悪魔の子の、お料理教室閉幕。

人の頼みを聞く時は計画的に

四葉「林間学校♪林間学校（＾＾♪」

四葉「上杉さん！もうすぐ林間学校ですよ！！」

風太郎「四葉。」サツジンピエロカメン

四葉「うわああああああ！！Σ（・□・；）」

風太郎「俺だ。」

四葉「上杉さん！（*＾＾*）」

風太郎「」ピエロカメンソウチャク

四葉「誰ーっ!? Σ（・□・;）」

風太郎「俺だ。」

四葉「良かった。」

風太郎「」ピエロカメンソウチャク

四葉「助けて!!（>|<）」

先生「図書室では、お静かに!!」

四・風「すみません（・ω・）」

四葉「その金髪のカツラ、絶妙に似合ってますよ。こんなに仮想道具持つて来て、どうしたんですか？」

三玖 「肝試しの実行委員になつたんだって。」

四葉 「肝試しつて、林間学校の？へー、上杉さんが珍しく社交的ですね。」

五月 「違いますよ。彼、役決めるときに自習をしてて、押し付けられただけですから。」

四葉 「お気の毒に……。そういえば二乃は？」

風太郎 「同級生と、喫茶店に行くつてよ。」

四葉 「そうなんですか。」

三玖 「役決めに関しては、自業自得。」

風太郎 「とびつきり怖がらせて、この恨み晴らしてやる。忘れられない夜にしてやるぜ。」

三玖「ノリノリだね。五月は手伝わないの？」

五月「私には、私の役目がありますから。」

四葉「だとしても、ひどいです!!ちよつと、一組に抗議してきます!!」

風太郎「やめとけ、三玖と五月の言う通り、俺の自業自得だ。林間学校自体がどうでもいいしな。」

四葉「むう・・・(・_・)。」

四葉「では、林間学校が楽しみになる話をしましょう。クラスの友達に聞いたんですが、この学校の林間学校には、伝説があるのを知ってますか？」

五月「伝説？」

四葉「最終日に行われる、キャンプファイヤーのダンス。そのフィナーレの瞬間に

数十人の女子 「「「イエーガーくーん!!!」」」

四葉 「うわああああああ!!!」

数十人の女子 「「「あれ?居ない。」」」

モブ女子 「あ、五月さん。イエーガー君見なかった?」

五月 「い、いえ……。(ああ、私は何て嘘を……。)」

モブ女子2 「そつか!!ありがとね!」

モブ女子3 「向こうの方に行こ!!」

風太郎 「エ、エレン。もう、居なくなつたぞ。」

三玖「な、何だったんだろ・・・？」

エレン「さ、サンキュー（? ω、?） ゲツソリ」

五月「何があつたのですか？」

エレン「実はな、今回の林間学校には言い伝えつたもんがあるらしくて・・・。」

風太郎「あー、さつき四葉が言つてた奴か。」

エレン「『ダンスのペアになって下さい!!』って迫られた。」

四葉「そうです!!その事を考えれば、少しは楽しみに・・・。」

風太郎「非現実的だ、下らないな。」

五月「学生の間の際など、不純です。」

三玖「うん。」

ク
エレン「マジで、良い迷惑だぜ。誰だよこんな呪いジンクス作った奴……。」イグスリゴクゴ

四葉「冷めてる！現代っ子達!!」

エレン「俺は、爺だけどな。」

風太郎「学生カップルなんて、殆どほとんどが分かれるんだ。時間の無駄遣いだな。」

四葉「それでも、好きな人とはお付き合いしたいじゃないですか。兎に角、今日は教科書より、しおりをしつかり読んで気分を高めておく事!!」

エレ・風「えー……。」

三玖「……。何で、好きな人と付き合うんだろ？」

風・四「え？」

エレン「確かに……。何でだろな？」

一花「その人の事が、好きで好きで堪たまらないからだよ。」

エレン「あ!!一花!!」

一花「やあ、モテ男君。さつきは大変だったね☆」

エレン「見てたんなら、助けろよ……。」○(▽?メ)。○○○(許さん)。」

一花「ごめんごめん(*ゝ*)。それにしても、三玖にも心当たりがあるんじゃない

「？」

三玖「な、無いよ。」

風太郎「一花遅い!!もう、始めるぞ!!」

一花「えーつと。何が始まるのかなー?」

エレン「地獄の殺人ショー。」

一花「それなら、参加は止めとこうかな。それに、今日は撮影があるし。もう行かないか。今は何より、お仕事優先!寂しい思いさせてごめんね。」

風太郎「寂しくなんかねーよ。」

エレン「嘘こけ。毎日「一花がく、一花がく」って泣いてんじやん。」

一花「えっ!? そうなの!？」

風太郎「ちげえよ!! いらん事言うな!!」

三玖「頑張つて。」

五月「お気をつけて。」

四葉「一花、フアイト!!」

エレン「かましてこーい。」

ピコン♪

一花「……。あー、やば……。」

エレン「What happened?」

一花「クラスの子達に呼び出されちゃったんだけど、もう仕事行かないと。林間学校で、まだ決めて無い事があったみたい。三玖、いつものお願い。」

三玖「分かった。フータロー、ウィッグ借りるね。」

エレ・風「・・・?いつもの?」

風太郎「三玖の奴、何するつもりだ・・・?」

エレ「傍^{はた}から見たら、ストーカーだよな。俺らのやってる事。」

三玖「トイレニゴー

エレ「?」

三玖「イチカニチェーンジ

風太郎「まさか、入れ替わって事を済ませるつもりか？」

エレン「この時点で、胃痛が・・・!!」

風太郎「だが、下手な嘘をつくと・・・。」

エレン「しつぺ返しが来る。まあ、兎に角・・・。」

エレ・風「嫌な予感しかしねえ・・・。」

エレン「スクオートGいるか？」

風太郎「恩に着る。」

??? 「な．．．、中野さん。来てくれてありがとう。」

三玖 「あれ？えーっと、クラスの皆は？」

??? 「悪い、君に来てもらうために嘘ついた。」

エレン 「あれ？あいつって、前田じゃん。」

風太郎 「知ってるのか？」

エレン 「ああ、ヤンキーっぽいけど、情に厚い奴だよ。あんま話したことは無いけど。」

三玖 「．．．．私に用って？」

前田 「俺と一緒に、キャンプファイヤーで踊ってください！」

三玖 「え？私と？何で？」

前田「それは……。好き……。だからです。」

三玖（そうなんだ。一花、可愛いから良くあるのかな？）

三玖「ありがとう、返事はまた今度……。」

前田「今、答えが聞きたい！」

エレ・三玖「えっ？」

風太郎「おい！馬鹿！！（小声）」

エレン「す、すまん。（小声）」

三玖「まだ、悩んでるから。」

前田「ということは、可能性があるんですね。」

三玖「いやぁ……。」

エレン（しつこい、マスコミみたいだな。）

風太郎（やはりか……。自業自得だな。）

マスコミ前田「おっ？中野さん雰囲気、変わりました？」

三玖「！」

エレン（やべっ!!）

マスコミ前田「髪……ん？何だろ……。中野さんって五つ子でしたよね？もしかして……。」

ガラッ

風太郎「二花、こんな所に居たのか。」

エレン「こんな所で、油を売りやがって。」

三玖（エレン……。フータロー……。）

風太郎「お前の姉妹四人が呼んでたぞ。早く、行つてやれ。」

三玖「フータロー……。エレン……。」

マスコミ前田「何、勝手に登場してんだコラ。」

マスコミ前田「誰だよ、お前コラ。気安く中野さんを、下の名前で呼ぶんじゃねえよ
コラ。お、俺も名前で——」

合コンは。」

マスコミ前田「俺の事は忘れたのかよ!!」

エレン「お前が前田って事は知ってるけど、合コンに居たかは忘れた。」

マスコミ前田「俺の事も、覚えとけよコラ!!」

風太郎「お取込み中すまないが、前田だったか。返事くらい待ってやれよ。少しは相手の気持ちを考えろ。」

エレン「説得力の欠片もねえよ。」

風太郎「うるせえよ。行くぞ、一花。」

マスコミ前田「待てコラ!!俺は、い・・・中野さんと踊りてえだけだ!お前、関係無いだろ。」

風太郎「一応、関係者だ。」

マスコミ前田「はあ!?!」

三玖「ふ、二人とも落ち着い——」

前・風「——」

三玖（な、何。この殺気。）

マスコミ前田（な、何かやべえぞコラ。）

風太郎（こ、この感じまさか・・・）

三人（ゆっくり振り向く）

エレン「ゴゴゴゴゴ

エレン「落ち着く事も出来ねえのかガキ共が。」ゴゴゴゴゴ

前・風「すみません!!orz」

三玖「ま、前田君には悪いけど、この人と踊る約束してるから。」

風太郎「へ？」

三玖「あ。．．．えつと、違^{ちが}くて．．．。」

マスコミ前田「嘘だ。こんな奴、中野さんに釣り合わねえ!!」

エレン「あのなあ、人の惚れた腫れたに、釣り合うも糞もねえだろうが。さつさと帰るぞ、バカツプル。」

風太郎「もう、バカップルで良いよ……。」

マスコミ前田「ちよつと待て!!」

エレン「今度は何だよ。マスコミ前田。」

マスコミ前田「恋人同士なら、手を繋いで帰れるだろ。」

三・風「!」

エレン（そう来たか!!）

風太郎「そうとは限らないだろ。」

マスコミ前田「何だ？出来ないのか？やっぱり怪しいな。」

風太郎「あのなあ……。」

三玖「／＼／」ギョッ

エレン（三玖が行ったー!! キター——（。△。）——!!）

風太郎「み……、一花……!!」

マスコミ前田「ポカー（。◇。○）ーん」

三玖「えつと……。これは……。また手を繋ぎたかつたとかじゃなくて……。その……。と、兎に角、初めてじゃないから。本当にごめんね。後日ちゃんと……。」

前田「くそーっ！林間学校までに彼女を作りたかつたのに、結局このまま独り身かーっ!!」

エレン（お、マスコミモード終了か。）

三玖「……あの……。私が、今聞く事じゃ無いと思うんだけど。何で、好きな人に告白しようと思ったの？」

前田「中野さんが、それを言うか……。そーだな、とどのつまり。相手を独り占めしたい。これに尽きる。」

三玖「！」

前田「まったく。中野さんを困らせんじやねーぞ。」

風太郎「俺が今、絶賛困ってる最中なんだが……。」

エレン「お前は、一花の何なんだよ……。」（ハ、ハ）「ヤレヤレ」

三玖「何言ってるの、フータローにエレン？行くよ。」

風太郎「おいおい。そんなにくつつかなくても良いだろ……。」

三玖「今は私、一花だもん。これくらいするよ。」

風太郎「そ、そうか。」

エレン「あー、俺が居る事忘れられてない？」

三玖「あつ！えつと、これは……。／＼／＼」

風太郎「はぁ……。勝手に約束して……。キャンプファイヤーどうするんだよ。」

風太郎（林間学校か……。どうするかな。）

悪魔の子、沢山の女子から逃げおおせて、
疲労困憊^{ひろうこんぱい}

買い物（デートもどき）と看病

——デパート——

エレン「さあ、始めました!! 第1回・風太郎のファッションショー!! 司会は私わたくし エレン・イエーガーが務めさせて頂きます!!」

四葉「いえーい! (≡▽≡)」

エレン「エントリーNo. 1。中野四葉アア!!」

四葉「はい!! 私思うに、上杉さんは、地味目な御顔おかおなので派手な服をチョイスしました!!」

エレン「ここで、可愛い動物がプリントされている服を選択だあ! 風太郎密査員の反応は!？」

風太郎密査員「多分だけど、お前ふざけてるよな。」

エレン「中々の酷評だあ!!」

四葉「そ、そんなあ!!」

エレン「続いて、エントリーNo. 2。中野三玖ウウ!!」

三玖「フータローは、和服が似合うと思うから和のテイストを入れてみた。」

エレン「これは、中々渋めのチョイス!! さあ、審査員風太郎の反応は!？」

審査員風太郎「和そのものですけど!？」

エレン「何の捻りも無いツツコミ……。ツツコミ得点は2点だあ!!」

審査員風太郎「喧しいわ!!」

エレン「続いて、エントリーNo. 3 中野五月イイ!!」

五月「私は男の人の服が良く分からないので、男らしい服装を選ばせて頂きました。」

エレン「これは、某漫画のモヒカンの荒くれ者そっくりだあ!!」

審査員 風太郎「誰が、北〇の拳のモヒカン集団だよ!!」

エレン「切れの良いツツコミ!! 54点!!」

審査員 風太郎「地味に低いな!!」

エレン「最後は二乃選手だあ!!」

三玖「二乃、本気で選んでる。」

四葉「ガチだね。」

二乃「あんた達、真面目にやりなさいよ!!」

風太郎^{審査員}「……。」

エレン「……特に言う事無し!!だが面白みが無い!!」

二乃「何で、エレン君は面白みを求めているのよ!!」

エレン「(〜)?
?、(?) テヘペロ♪」

エレン「いやー、面白かったー。」

四葉「またやりましょうね!!ファッションショー!!」

風太郎「やらんわ!!」

五月「三日分となると、大量ですね。」

風太郎「それにしても、洋服に一万二万って……。俺の服、40着は買えるぞ。」

二乃「こんなの安い方よ。」

エレン「こいつ、1年前に一緒に買い物行ったとき以降、俺に選ばせてくれなくなっただぜ。酷いよな。」

風太郎「お前に任せたら、変なもん選ぶだろうが!!あのととき、親父とらいはに爆笑されたんだからな!!」

三玖「何買ったの？」

エレン「猫耳付きフード。」

二乃「ｗｗｗｗｗｗ」

風太郎「笑うな!!」

三玖「はい、フータロー。お金は良いから。」

風太郎「?しかし・・・。」

五月「林間学校も、いよいよ明日ですね。」

二乃「まだ、買う物あるわよ。」

四葉「うーん。男の人と、服を選んだり一緒に買い物するって・・・」

二乃「何やってんの？さっさと残りの買い物済ますわよ。」

五月「そうですね。二人は此処で待っていてください。」

風太郎「は？何でだよ。」

二乃「良いから待ってなさい!!」

エレン（この進行方向……。まさか!!）

風太郎「そうはいくか!!俺の服は勝手に選ばれたんだ!お前らの服も、モガガガガガ!!」

エレン「二人とも、ノレリカシ風太郎は止めとくから、行つてきな。」

ノレリカシ男
風太郎「何すんだよ!!」

エレン「お前にはあの看板が目に入らんのか!!」

<下着コーナー>

風太郎^{ノレデリカシュー男}「待ってまーす（・―・）。」

エレン「もうちよい視野を広くしろよ。」

風太郎「はいはい。もう帰ろっかな・・・。」

四葉「上杉さん！イエーガーさん！お二人とも、明日が楽しみでもしっかり寝るんですよ。」

エレン「御忠告どうも。」

風太郎「言われなくても寝るよ。」

四葉「しおりは一通り読みましたか？」

エレン「流し読みはした。」

風太郎「読んでねーよ。」

四葉「サボらずに来てくださいいね！」

エレン「了解したぜ、四葉二等兵。」

風太郎「あー、分かった分かった。」

四葉「うん、偉い!!最高の思い出を作りましょうね!!」

エレン「サーイエッサー（、・ω・）ゞ」

風太郎「……。」

プルルル♪

風太郎 「はい、上杉です。．．．え？らいはが．．．？」

エレン 「どうした？」

上杉家

風太郎 「らいは！大丈夫か!？」

エレン 「病人が居るんだぞ。静かにしろ。」

らいは 「うん．．．。エレンさんも、お出かけしてたのにすみません．．．。」

エレン 「気にすんな。気にすんな。」

らいは 「なんか、熱みたい．．．。」

風太郎 「お前は体が弱いんだ。無理すんな。色々買ってきたからな。」

エレン 「雑炊作ってあげるから、ちよつと待っててな。」

らいは 「はい……。お兄ちゃん、お薬飲ませて……。」

風太郎 「ああ。」

らいは 「汗拭いて……。」

風太郎 「ああ。」

らいは 「あと、学校の宿題やつといて……。」

風太郎 「これでもかと我が儘言うな。」

エレン「まあまあ、らいはちゃんがかここまで我が儘言うのも珍しいんだから、ちよつとはやってやんな。お兄ちゃん♪」グツグツ

エレン「ほら、らいはちゃん。雑炊少し冷ましたから、口開けな。」

らいは「はい……。あむっ。」モグモグ

風太郎「水も飲めよ。」

らいは「……。ありがとう。」

風太郎「冷えピタは……。」

エレン「待て、風太郎。無理に冷ますな。」

風太郎「な、何でだよ。」

エレン「熱が上がるのは、体内に侵入したウイルスや細菌を殺すための防御反応だ。体が熱を上げようとしている時に冷やすと、更に熱を上げようとしてしまう。その結果、発熱症状が重くなる可能性もある。発汗するタイミングでしか、冷えピタは使わん。」↑（父親の医学書を読破した奴）

風太郎「だ、だが……。」

エレン「ここが、正念場だ。我慢しろ。らいはちゃんもすまんな。」

らいは「いえ……。大丈夫です。」

エレン「少しでもやばくなったら、言ってくれ。」

らいは「はい……。でも、ちよつと楽になって来たかもです……。少し、寝て良いですか？」

エレン「おう。」

らいは「ありがとうございます……。お兄ちゃんも、お休みなさい……。」

風太郎「ああ。」

らいは「（――☒――）。ネムネム」

朝

チウンチウンアサダチウン（へ8へ）

勇也「らいは!!生きてるか!!って、エレン君?」

エレン「勇也さん。おはようございます。」

風太郎「親父、らいはがまだ寝ているんだ。静かにしてくれ。」

勇也「二人とも看病してくれてたのか。って、もう林間学校のバス出てんじゃないのか!？」

エレン「そうでしたっけ？」

風太郎「どうでも良すぎて忘れたぜ。しかし、これで三日間思う存分勉強できるな。」

エレン「俺は、ちょっとパトロールにでも行こうかな。」

勇也「・・・二人とも、忘れ物だぞ。早く帰れなくて悪かったな。一生に一度のイベントだ。今から言っても遅くないんじゃないか？」

風太郎「バスも無いし、別に大丈夫だ・・・。」

エレン「俺も、車がいかれてるので、無問題でs」

らいは「あー!!お腹空いた!」

野郎三人衆「」「」

エレン「え?は?い、勇也さん。らいはちゃんが全快してるように見えるのは、自分の幻覚ですか?（・ω・）」

勇也「だ、大丈夫だ。俺にも全快してる様に見える・・・。」

風太郎「え・・・。らいは・・・?熱は・・・?」

らいは「治った!何でお兄ちゃんにエレンさんも、まだいるの?ほら、早く行つた。」

風太郎「お前!俺の気遣いを返せ!!」

エレン「はあああ。良かったああ。」

「はいは「二人とも、私はもう大丈夫だから、林間学校行って来て（≡▽≡）。」

エレン（めっちゃ、良い子やん。）

風太郎「だからバスが・・・。」

???「バスは、もう出発してしまいましたよ。」

エレン「お、お前は・・・、

五月!？」

風太郎「五月・・・!?何で・・・。」

五月「それは、こちらのセリフです。すみません、お二人をお借りします。」
らいは「はい。」

エレン「バスは？」

五月「見送らせて頂きました。」

風太郎「何で家うちに来たんだ。」

五月「あなたの家を知っているのは、私だけです。イエーガー君も此処に来てい
るだろうと判断しての行動です。私にしか、此処へ案内できません。」

エレン「あ!!お前ら!!」

三玖「フータロー、エレン。」

一花「おそよー。」

四葉「こつちこつち!!」

二乃「つたく、何してんのよ。」

風太郎「……………」

五月「肝試しの実行委員ですが、暗い場所に一人で待機するなんて事、私にはできません。オバケ怖いですから、貴方がやって下さい。」

エレン「漢を見せる時だぞ!!風太郎!!」

風太郎「……………仕方ない。行くとする……………」パシヤ

風太郎「ん？パシヤ？」

俯いた風太郎の視線にはカメラが――

エレン「四葉見ろ!!仕方ないとか言ってる割には、笑顔だぞ!!」

四葉「本当ですか!？」

風太郎「ふざけんな!!何撮ってんだ!!消せ!!今すぐ消せ!!」

エレン「五つ子達に一齐送信しちゃったZ・E☆」

一花「わあ、良い笑顔（*^_^*）」

二乃「絶対に消さずに保存しといてあげるわ（目が笑って無い）」

三玖（フータローの写真／＼／＼）

四葉「イエーガさん!! 有り難うございます!!」

五月「しよ、肖像権の侵害ですよ!!」

風太郎「＼（＾o＾）／オワタ」

勇也「皆、気を付けてな!!」

らいは「行つてらっしやーい!!」

全員「「「「行つてきまーす!」」」」

四葉「それじゃあ、目的地に向けて」

全員「「「「しゅっぱーっ（ゝゝゝ）」」」」

悪魔の子、
未知^{林間学校}の行事に向けて一歩前進。

豪雪の中での泊り会

リムジンにて

五つ子「五つ子ゲーム!! いえーい!」

エレン「五つ子ゲームって、何だ?」

四葉「五つ子ゲームとは、隠した手から伸びる指を当てるゲームで、一花〓親指、二乃〓人差し指、三玖〓中指、四葉〓薬指、五月〓小指です!!」

二乃「私はだーれだ?」

三玖「二乃。」

一花「三玖かな。」

四葉「四葉！」

五月「二乃です。」

エレン「んー……、三玖かな。」

風太郎「……。」スススス……

二乃「ちよつと！触るの禁止！つーか触んな！」

風太郎「くっ……。二乃だ!!」

二乃「……。残念、三玖でした。」

風太郎「何故裏返ってる。」

風太郎「くそー!!次、俺な!!」

五月「やけに、ハイテンションですね。(; . ㄥ)」

エレン「マジで、何か違法ドラ●グでもやってんじやないかって位だな……。 (|
— ;) 」

風太郎「お前たちの家を除けば、外泊なんて小学生以来だ……。 もう誰も俺を止められないぜ!!」

エレン「気合が入ってるのは良いんだが……。 」

四葉「もう、一時間以上足止め食らってるんですけどね……。 」

エレン「雪山登山訓練を思い出すぜ……。 」

一花「雪山登山訓練って？」

エレン「訓練生時代にやったんだよ。豪雪の中、山小屋目指して班で行動する訓練な。」

三玖「危なくない・・・?」

エレン「危ないも何も、死人も普通に出たからなく。」

五月「今の御時世ごじせでしたら、確実に問題になりますよ・・・。」

エレン「まあなく。」

——道中の旅館——

エレン「ふいー。あのままエコノミークラス症候群になると思ったぜ・・・。」

風太郎「しかし、中々良い部屋だな!!」

五月「でも、四人部屋ですよ?」

二乃「ねえ、本当にこの旅館に泊まるの？ 幾ら何でも、年頃の男女が同じ部屋ってどうなのよ!! 車は!?!」

四葉「仕事があるって帰っちゃった……。」

二乃「ほら、旅館の前にもう一部屋あったでしょ。」

四葉「あ、明日死んでるよ……!!」

エレン「旭高校学年トップの上杉風太郎氏、極寒の中犬小屋にて凍死体として発見。っていうネットニュースが流れたりしてな。」

五月「縁起でもないですよ!!」

風太郎「旅館なんて、小学校の修学旅行以来だ。確かにあの時の部屋の方が広かったな。」

二乃「一旦、女子集合。」

エレン（何話すんだ？一応、蚊型のドローンで盗聴してみるか。）

二乃「不本意だけど、ご覧の有様よ。各自、気を付けなさいよ。」

四葉「気を付けるって何を……？」

二乃「それは、ほら……。一晩同じ部屋で過ごす訳だから……。エレン君も上杉も、男って事よ。」

四人「「「「!!!」」」」

エレン（中間試験で、打ち解けたかと思ったんだが……。まあ、当たり前か……。）

五月「……。そんな事ありえませんか。」

風太郎「やろうぜ!!」

五つ子「!!!!!!」

二乃「な、何を!？」

風太郎「トランプ持って来た!やろうぜ!!」

エレン（絶対そういう意味で、聞こえたんだろうな（*、口、）

一花「き、気が利くねー。懐かしいなあ。」

四葉「何やります?」

風太郎「七並べっしょ!!」

エレン「俺、ババ抜き以外のルール知らないんだよねー。」

三玖「意外……。」

五月（だ……、大丈夫ですよ……。私達は生徒と教師ですから……。・|・;）

一花「うわぁー。美味しそうだねー。」

エレン「日本酒と、喉透き通る、刺身かな。」

三玖「どうして、川柳を……。」

エレン「なんとなく。最近ヒロさんに句会に連れてって貰って、嵌はまったんだよね」

二乃「って言うか！何でしれっとお酒飲んでるのよ!!」

五月「た、確かに!!何やってるんですか!!」

エレン「だって、俺とつくに実年齢としては20歳越はたちえてるし?」

一花「へ、屁理屈……」

エレン「ばれなきや、犯罪じゃないんだよ(ゲス顔)。それに、屁理屈じゃないし。事実だし。あ、そうだ。風太郎、この日本酒を勇也さんの御土産として買ったから、渡しといてくれ。ハゲネズミと、絶滅危惧種にばれんなよ。」

風太郎「お、おう。サンキュー。しかし豪勢だな!!タッパーに入れて持ち帰りたい!!」

五月「止めて下さい……」

四葉「こんなの食べっちゃって良いのかなー?明日のカレーが見劣りしそうだよ。」

二乃「三玖、あんたの班のカレー楽しみにしてるから。」

三玖「うるさい。この前、エレンと練習したから。」

エレン「そうだぞ。頑張れよ三玖。」クピクピ

一花「そういえば、スケジュール見て無かったかも。」

風太郎「二日目の主なイベントは、10時オリエンテーション。16時はんこうすいさん飯盒炊爨。20時肝試し。」

エレン「三日目は、10時から自由参加の登山、スキー、川釣り、そして夜は殆どの学生の本命の、キャンプファイヤーだな。」

一花「何で、二人とも暗記してるの・・・(ω・ω)？」

四葉「あと、キャンプファイヤーの伝説の詳細が分かったんですけど。」

風太郎「またその話か・・・。」

エレン「まあまあ良いじゃねえか。せつかくのプチ旅行なんだしな。」ヒック

五月「すでに酔っぱらってる!？」

エレン「何言ってるんだ五月！俺は酒に飲まれた事は無いぞ!!」

三玖「酔っぱらった事がある人程そう言うんだとも思うけど・・・。」

一花「アハハ・・・。それにしても、伝説って？」

二乃「関係ないわよ。そんな話したってしょうがないでしょ。どうせ、この子達に相手なんていないでしょ。」

一花「あはは・・・。」

エレン（居るんだよなあ・・・。）

風太郎（そうだった・・・。一花と踊る破目はめになったんだった。縁結びの伝説なんて信じちゃいないが、どうしたものか。）

二乃「ま、伝説なんて下らない事どうでも良いけど。」

一花「あ、そうそう。ここ温泉があるって書いてあるよ。」

三玖「多分、二乃誰からも誘われなかったんだと思う。」

四葉「そっか、拗ねてるんだー。」

二乃「あんた達ねえ・・・。」

一花「えーつと・・・。」

えっ？ 混浴・・・？」

全員 「||||」・・・。「||||」

二乃 「はあ!? 2人と部屋のみならず、お風呂も同じって事？」

五月 「言語道断です！」

エレン 「まあ、当然の反応だよな。（*———）ノも 「酒」」

風太郎 「二乃・・・。一緒に入るのが嫌だなんて心外だぜ・・・。俺とお前はすでに
経験済みだろ？」

二乃「((; ≡ ≡ ≡ ; i)) カ、タカ、タ」

三玖「・・・つ。に、二乃。それどういふ・・・。」

二乃「わざと誤解を招く言い方すんな！」

風太郎「ははは！いつもの仕返しだ!!」

エレン「なんだかんだで仲良いよなお前ら。」

二乃「良くないし!!」

一花「あ、混浴じゃなくて温浴でした。」

男子風呂

エレン「いやー。中野家の風呂もデカかったが、露天風呂は別格だな（*，▽，）。」

風太郎「そうだな。つていうか、何で風呂にまで酒を持ち込んでんだよ……。」

エレン「良いじゃねえか。風呂で酒飲むのやってみたかったんだよ。一杯やるか？」

風太郎「いや、要らん。にしても……。」

エレン「何だよ？」

風太郎「いや、相変わらず、細く見えるのにすげえ筋肉してんなど思つて。」

エレン「そこいらの運動部と一緒にして貰っちゃ困るぜ。お前も鍛えろよ。いつか運動不足でぶっ倒れても知らんぞ。」

風太郎「善処します……。」

エレン「まあ、明日から本番なんだし、早めに寝るか。」

風太郎「そうだな。そのためにも・・・」

エレン「飲みまくるぞお!!」

風太郎「いや、おかしいだろ!!というか、男子風呂の描写って誰得なんだよ!!」

エレン「メタいメタい。」

女子風呂

二乃「今日のあいつ、絶対おかしいわ。」

一花「あー。気持ちいー。」

五月「みんなでお風呂に入るなんて、何年ぶりでしょう。」

四葉「三玖のおっぱい大きくなったんじゃない?」

三玖「みんな同じだから。」

四葉「上杉さんと、イエーガさん普段旅行とか行かないのかな？」

一花「まるで、徹夜明けのテンションだったね。」

二乃「兎に角、あのトラベラーズハイのあいつと、酔っぱらってるかもしれないエレン君は危険よ。・・・問題は、あの狭い部屋にぎりぎり御布団おふとんが七枚。誰が、二人の隣で寝るか・・・。」

一花「二乃、考え過ぎじゃない？私達、ただの友達なんだし。」

四葉「そうだよ。二人はそんな人じゃないよ!!」

二乃「じゃあ、四葉が二人に挟まれて寝るって事で良いわよね。」

四葉「！」

二乃「二人はそんな奴じゃないから、心配無いんでしょ？」

四葉「……………。それは…………、ちよつと、どうなんだろうね。」

二乃「はあ…………。」

五月「それでは、二乃ならどうでしょうか？」

二乃「は？何で私？」

五月「いえ、何となく。二乃なら殴ってでも抵抗してくれそうなので。」

二乃「…………。一花、あんたは気にしないでしょ。」

一花「私に来たかく。」

二乃「ただの友達なんですよ。」

一花「……うん。フータロー君とエレン君は……、良い友達だよ。」

二乃「なら良いじゃない。」

三玖「待って。平等……。みんな平等にしよう。」

二乃「成程、考えたわね。」

三玖「誰も隣に」

四葉「行きたくないなら」

二乃「全員が隣に行けば良い。」

五月「まあ、誰かが分からない相手に」

一花「手を出さないだろうし。」

二乃「何となく、エレン君には見抜かれそうだけど……。」

三玖「少なくとも、フータローには。」

五月「準備は良いですか？」

二乃「さあ!!行くわよ!!」

ガラララララ

風太郎「(☒ω☒)スヤア」

エレン「(⊠ ω ⊠) スヤア」↑ (一升瓶抱え込んで爆睡)

五つ子「……………」

二乃「えーつと。私達も寝よつか。」

四葉「そうだねー。」

悪魔の子、酒を飲んで無事爆睡

林間学校本番へGO!!

五月「ふう、中々早い時間に起きてしまいましたね。」

五月「やはり寒いですが、空気が美味しいですね・・・。」

??? 「そうだな。」

五月「ひやああ!!」

エレン「アハハ!なんだその声ww」

五月「イ、イエーガー君!ビックリさせないでくださいよ!!」

エレン「ごめんごめん。」

五月「あれ？」

エレン「ん？どうした？」

五月「いえ、目に隈くまが見られるので……。」

エレン「んー、ちよつと変な夢見たのと……。」

五月「見たのと？」

エレン「一人呑みに行くときはセーブしてんだけど、今回は、テンション上がって飲み過ぎた……。」

五月「自業自得じゃないですか。全く……。イエーガー君？」

エレン「ん？」

五月「どうして……、

泣いているのですか？」

エレン「……え？な、何でもねえよ。」

五月「そ、そうですか。失礼致しました！で、では皆を起こしましょうか。」

エレン「うーい。（こいつに俺の罪を吐くのは……、今じゃなくて良いか。）」

五月「皆さん、もう朝ですよ……。」

五月「!!」

エレン「五月? っっておわっ!! 急にドア閉めんなよ!!」

五月「ま、待っててください!! まだ、入らないでください!! (だ、誰かが上杉君に覆いかぶさって……。嘘、あれって……。)」

エレン「いったい何が……。」

???「中野! イエーガー! お前達、ここで何やってるんだ!!」

エレン「っつて、おわっ!! 先生……じゃなかった。ハゲネズミ!!」

ハゲネズミ「誰がハゲネズミだ!!」

絶滅危惧種「何故、言い直した！普通に先生と呼べば良かっただろう!!」

五月「えっ!?先生・・・?」

バス

バスガイド「例年より早い猛吹雪で、足踏みしてしまいましたが、一組の皆さんが揃ったという事で、今日こそ楽しい林間学校にしましょう!」

風太郎「まさか、こいつらも同じ旅館で泊まってたなんてな。良く会わなかったもんだ。」

五月「・・・。」

風太郎「どうした?」

五月「い、いえつ。(良く見て無いから判断がつかないけれど・・・、あれは・・・、

私達の誰かが・・・、上杉君を・・・。」

一花（休学も視野に入れる。か・・・。）

エレン「風太郎。」

風太郎「どうした？」

エレン「眠いからちよつと寝ても良いか？」

風太郎「良いぞ。寝れなかったのか？」

エレン「寝床が変わったから、全然寝れなかったんだよ。あと、調子乗って飲み過ぎたせいで、二日酔いの兆候が・・・。」

風太郎「そ、そうか・・・。（完全に自業自得じゃねえか。）」

エレン「サンキュー。お休みー。」

悪魔の子、調子に乗って二日酔い。

カレーを作ろう!!そして肝試しだ!!え、仕事?冗談だろ?
?

トントントン

エレン「おい、○○さん。そこの野菜の鍋見ててくれない?」

モブ女子「う、うん!」

エレン「男子達、薪取りに行くぞ。」

野郎衆「「応!!」」

モブ男子A「いやー、それにしてもありがとな。」

モブ男子B「俺たち料理に関してはからつきしだし・・・。」

エレン「そんな事はねえよ。現に薪を取りに行くの手伝ってくれてるじゃねえか。いつも助かってるぜ。ありがとな。(＊・＊)」

モブ男子C「お、応。(料理上手に、謙虚さも持ち合わせてるって、弱点無しか!!)」

モブ男子A「やっぱり女子から人気なもの、頷けるわ。」

モブ男子B(最早、嫉妬すら出来ねえよ……。)

モブ男子C(というか、よくよく見たらこいつ女顔だし、綺麗な黒髪ロングだし、料理めっちゃ上手いし……。)

モブ男子ABC(結婚して欲しい!!)

エレン「おーい。何考えてんのか知らんけど、戻ってこーい。」

エレン「ふいー、だいぶ煮込めてきたな。」

モブ女子A「本当に、御水おみず入れなくて大丈夫だったの？」

エレン「ああ、どうせなら無水カレーを作ろうと思つてな。余計な水もいれて無いから栄養満点だし、旨味も抽出される。辛さが足りないならスパイスでも入れれば良い。ほら、サービスエリアで買って来た香辛料が何種類あるから、使つてくれ。」

モブ女子B「あ、ありがとう。」

エレン「じゃあ、ちよつと他の班の所に出歯亀でぼうめしてくるから後宜しく。何かあつたら、大声で呼んでくれ。」

モブ女子C「はい。」

モブ女子A「はあー。イエーガー君、料理も出来て恰好良いなんて、最高だわ!!」

モブ女子B 「誰と踊るんだろう?」

モブ女子C 「噂では、中野さんと踊るらしいとか何とか。」

モブ女子B 「中野さんと!?!」

モブ女子A 「そういえば友達が、「中野さん達と一緒に登校してるっていうのを見た」って言ってたわ!!」

モブ女子C 「そ、だから心配しなくても、私達が相手にされる事は無いわよ。」

モブ女子A・B (私達……(ω・ω)……)

エレン「さーてあいつらは……。お、あれは一花か。」

四葉「あはは、これ楽しいですね(^ ^♪」

エレン(傍から見たら、嬉々として薪を割るやべー奴になってるって!!少しは落ち着
けよ!(・|・;))

モブ女子「そろそろ、煮込めてきたかな?」

五月「待つてください。後3秒で、15分です。」

モブ女子「細かすぎない?」

エレン(その会話をやってる間に、3秒過ぎたぞー。)

モブ女子「三玖ちゃん!?何、入れようとしてるの!?!」

三玖「お味噌、隠し味。」

モブ女子「自分のだけにして！」

エレン「三玖ー！ストーubb!!」

三玖「きやつ！エレン！」

エレン（放り出された味噌が鍋の中にー!!）

エレン「キヤーツチ!!」パシッ

エレン「せ、セーフ。」

モブ女子「イ、イエーガー君!？」

エレン「み、三玖。隠し味はどんな味に成ってしまうか分から無いから、また家でやろうな(^ | ^ ;)。」

三玖「う、うん。」

モブ女子「ちよつと!!なんで、ご飯焦がしてんのよ!!」

モブ女子「どーせ、ほつたらかして遊んでたんでしょ!」

モブ男子「ち、ちげーよ。少し焦げたけど食えるだろ!」

モブ女子「こっちは最高のカレー作ったのに!」

モブ男子「やった事ねーんだから、誰だってこうなるんだよ!」

モブ女子「なっ・・・!!二乃、どうする?」

二乃「じゃあ、他の班から余ってるかもしれないご飯貫いに行つて、私達だけでやつてみるから、カレーの様子見てて?」（? ? ?）」

モブ男子「お、おう……。 （目が笑つてねえ。）」

エレン「おーい、二乃。」

二乃「あつ、エレン君。丁度良かった、お願いがあるんだけど……。 」

エレン「白米だろ。ほら、さっきの会話聞こえてたから、余つた奴持つて来たぞ。」

二乃「本当!?! ありがとう!!」

エレン「どういたしました。それからそこのお前らも、せつかくの林間学校なんだから、喧嘩して無いで、心にゆとりを持ちな。」

モブ男子・女子「は、はい。ありがとうございます。」

エレン「おっす、風太郎に前田。」

風太郎「おう。さっきの見てたぞ。」

前田「良い感じに収めてたなコラ。」

エレン「それほどでもー（*^^*）」

前田「イエーガー、お前も協力してくれ。」

エレン「え、何に？」

前田「どうやったら、彼女が出来るのか。」

エレン「知らんな。」

前田「即答かよコラ!!」

四葉「上杉さん。肝試しの道具、運んじやいますね。」

風太郎「四葉……。お前確か、キャンプファイヤーの係だっただろ？」

四葉「はい！でも、上杉さんだけじゃ無理だと思つて、クラスの友達にも声を掛けました！」

風太郎「前田、エレン、俺の班の飯の世話をしてくれ。」

エレン「行つてらー。」

前田「あ？命令してんじゃねーよ！つか、俺の話の続きは……。」

風太郎「肝試しは自由参加だ。クラスの女子でも誘って来てみる。但し、こっちも本気で行くから、ビビッて小便漏らすなよ。」

エレン「おー、頑張れー。」

ピコン♪

エレン（ん?メール?そうか、あの人も着いたのか・・・。）

風太郎「この様に!!」サツジンピエロ

前田・松井「うわああああああ」

風太郎「くくく……」

四葉「絶好調ですね。ジャケットどうぞ!!私、嬉しいです。いつも死んだ眼をした上杉さんの眼に、生気を感じます。」

風太郎「そうか、蘇れて何よりだよ。」

四葉「……もしかしたら来てくれないかと思っちゃったから、後悔の無い林間学校にしましょうね。ししし(*^ω^*)」

風太郎「……」

四葉「あ、次の人が来ましたよ!」

風太郎「や、やってやらあ!」

四葉「食べちゃうぞー!!」

三玖「フータロー。」

一花「四葉もいるじゃん。」

四葉「一花に三玖!」

風太郎「なんだ、ネタがバレてる二人か。脅かして損したぜ。」

三玖「あ、ごめ・・・。」

一花「わあ、びつくり予想外だー(棒読み)」

風太郎「お気遣いどうも。」

一花「本当だよー（＾＾）」

風太郎「嘘つけ。」

一花「その金髪、染めたの？（小声）」

風太郎「カツラだ。（小声）」

三玖「／＼／＼」

風太郎「三玖、聞いているか？」

三玖「えっ？何？」

風太郎「看板が出てるから分かると思うが、この先は崖で危ない。ルート通り進めよ。」

三玖「分かってる。行こう、一花。」

一花「え?うん。」

風太郎「何だ?やけに素っ気ないな。」

四葉「三玖は、いつもあんな感じですよ?それより上杉さん。脅かし方にまだ迷いがあります。もっと凝った登場にしないと!」

五月「うううう……。やはり、参加するんじゃないでした……。」

二乃「ちよつと、離れなさい。」

五月「クラスメイトが言っていたのですが、この森は出るらしいのです。森に入ったきり行方知れずになっている人が、何人もいるのだとか。」

二乃「デマに決まつてるじゃない。伝説もそうだけど、信憑性しんぴやうせいが無さすぎるわ。こんな提灯お化けみたいなチープなおもちやで誰が驚くのよ。」

二乃「はあ……。林間学校って、もつと楽しいものだと思つてたんだけどなあ。」

五月「？まだ始まつたばかりじゃないですか。」

二乃「始まりから躓つまずいてたでしょ！昨日の事、忘れたとは言わせないわよ。」

五月「まあ……。それは……。」

二乃「何も無かったから良かった物を・・・。」

五月「!・・・という事は二乃じゃないんですね。」

二乃「え?何が?」

ギイイイイ

二・五「(・|・:;:;:;:;)」

風太郎「ブラーン

五月「わああああ!!もう嫌ですううう!!」

二乃「五月！待ちなさい！！」

風太郎「本当に苦手だったのか……。」

四葉「あちやー……。やり過ぎちゃいましたかね……。？」

風太郎「あれ……。？あいつら……。どっちに行つた？」

——肝試しのルートから外れた草むら——

エレン「ユイさん、ムロさん。お待たせしました。あれは……、羅洒弩の構成員？」

ユイ「全く……。遅いわよ。」

ムロ「まあまあ、今日は林間学校だったらいいし、少し遅れたぐらい良いじゃねえか。」

ユイ「むう（☒・ω・☒）。まあいいわ。しかし、まさか本当に栽培されていると
はね。」

ムロ「静かにしろよ、聞こえるだろ。」

半グレA「こりやあ、上物だな。」

半グレC「良い感じに育ってんじゃねえか。」

半グレB「さっさと、収穫しちまおうぜ。」

エレ・ムロ・ユイ「非合法の麻薬^{チヨコ}が！」

悪魔の子、林間学校でも仕事に直面する。

次女の初恋

半グレA 「よし！粗方あらかた収穫したぞ！！」

半グレB 「さっさと、ずらかろうぜ！」

半グレC 「これで、俺達も幹部だあ！！」

エレン 「もしーもし。」

ムロ 「いやー、美味しそうな葉っぱを育てているねえ。」

ユイ 「その糞みたいな生業なりわいを引退するには、良い夜じゃない？」

半グレA 「な、誰だ！！」

半グレB 「け、警察なのか!!」

ムロ 「せいかい☆」

ユイ 「こんな所で大麻を栽培してるなんて、大麻取締法第24条に基づいて、現行犯逮捕するわ!!」

半グレC 「てめえら! サツが来たぞ!! ぶっ殺せ!!」

半グレ達 「うおおおー!!!」

半グレE 「まずはてめえから・ぶげええ!!」

エレン 「誰に喧嘩売つとんじゃ!! このクソガキがあ!!」 ジョウダンマワシゲリ

半グレC 「畜生、そのヒョロガリをやってやる・ギャアア!!」

ムロ「誰がヒヨロガリじゃ!!ぶちのめすぞ、ボケがあ!!」セイケンツキ

半グレA・D「どぶればっふあ!!」

半グレB・F・G「なら女をやるぞ!!」

エレ・ムロ「あつ、そつちは止めやといた方が・・・」

半グレB「ギャーギャー喧しいわ!!」ムニツ

半グレB「ん?ムニツ?」

エレン（ユイさんの胸を揉みやがった!!）

ムロ（死んだなあいつ＼（^o^）／オワタ）

ユイ「おい」ゴゴゴゴ

半グレB・F・G「」

ドカツ バキツ ゴスツ
ズガガガガガガ
バキユーン

半グレ全員「〇十△」

ユイ「ったく。」

ユイ「近いぞ!!」

エレン「来るなら来——!!」

五月「わあああ——。二乃お……何処行つたんですかあ (T|T)。」

エレ・ムロ・ユイ「(。D)。」

エレン「え? 五月?」

五月「ふえええ? イエーガー君?」

エレン「おまえ、何でこんな所に居るんだよ!! コース外だろ!!」

五月「良かったあ。心細かったです。」

ユイ「あー。何か、御邪魔虫みたいだから、こいつら回収するわね。(や、やばい。この泣いてる子、小動物みたいでめっちゃ可愛い。)」

ムロ「じゃあ保健所に連絡入れとくから、後は御若い者達同士でごゆつくりー。」

エレン「う、ういーす。じゃあ、行こうぜ五月。」

五月「は、はび……。」

エレン「あ、いたいた。おーい、二乃おー！」

二乃「エレン君！五月!!無事だったのね。良かったわあ。もう帰るわよ。」

五月「二乃おく、見つかって良かったですく（T|T）。」

エレン「お前、良く一人で平気だったな。」

二乃「違うわ、私はさつきまでキンタロー君が・・・。」

エレン「え？ 鉞まさかり担いだ？」

二乃「違うわよ!! とってもカッコいい男の子だったんだから!! 最終日に、一緒に踊る約束もしたのよ!!」

エレン「そうか、後悔しない様に頑張れよ。応援してるぜ。」

二乃「ええ! ありがとう!! 絶対彼を振り向かせて見せるんだから!」

風太郎（どうしよう・・・（――・〜））。

悪魔の子、次女の初恋を応援する事を決める。

スキーと搜索。

——コテージ——

エレン「ふいー、悪いな。ロイヤルストレートフラッシュユだ!!」

モブ男子A「ぎやあぁー!!」

モブ男子B「やられたあぁー!!」

前田「ちくしよおぉー!!」

エレン「これで、2連勝。」

前田「もう一戦やるぞコラ!!」

エレン「あー、ごめん。疲れたから、部屋に戻るわ。」

前田「勝ち逃げかよコラ!!」

モブ男子C「お休みー。」

——最終日——

エレン「うおおおー。さむううー!! (((((* O *)))))」

風太郎「最終日か……。」

エレン「寝る前に、絶滅危惧種から聞いたぜ。昨日は、一花と災難だったみたいだな。お疲れさん。」

風太郎「ああ……、だるいし寝よう。」

四葉「上杉さん! イエーガーさん!」

風太郎「うおっ！四葉！」

四葉「自由参加だからって逃がしませんよ！スキー行きましょう！スキー！！（*ゝ*）」

——スキー場——

エレン「うおー！！一面の銀世界！！」

四葉「さあ！滑り倒しますよーっ！！」

風太郎「寒いし、寝かせてくれ……。というか、俺滑れねーし。」

四葉「寝るなんて、勿体無い！どうしても無理なら、私が手を引いて滑ってあげます！」

エレン「じゃあ、俺はその様子を写真で撮って、校内掲示板に張り出してやるぜ！！」

風太郎「や、やめろ!! よーし! 練習するぞ!! つーか、四馬鹿はどうした?」

四葉「二花は体調を崩して、五月が看病してくれてます。」

エレン「こんな気温の中、閉じ込められたんだ。当然だな。」

風太郎「確認してから、鍵かけろよ。」

四葉「? 何言ってるんですか? それより、二乃はもう滑ってて、私が教えるのは…。
あ、来た。」

??? 「どーも。」

風太郎「誰だ!？」

三玖「三玖。」

風太郎「み、三玖か……。顔だけだと、本当に分かりにくいな。」

三玖「！」ドテツ

四葉「あはは（*、▽、）」

エレン「派手に転んじまったな。」

風太郎「大丈夫か？」

三玖「……。うん、大丈夫。」

風太郎「……。」

四葉「よし、普段教わってばかりの私ですが、今日は教えまくりますよ！」

エレン「ふおおおー（≧▽≦）!!!」ザアアアア

四葉「流石は、イエーガーさんですね！私も、負けませんよ!!」ザアアアア

風太郎「おつとつ・・・。ははっ。」

???「わー、ぎこちないなー。」

風太郎「ん？」

???「寒いね〜。」

風太郎「ほんとに誰だ!？」

一花「一花だよ。」

三玖「!」

エレン「あれ？お前、体調は？」

一花「ゴホッゴホッ。まだ万全じゃないけど、心配しないで。後、五月ちゃんは顔合わせづらいから、一人で滑ってるってさ。」

風太郎「そうか・・・。」

四葉「一花ー！！イエーガーさんは兎も角、この二人、全然言った事覚えてくれない！」

エレン「まあまあ、二人とも初心者なんだからしょうがねえじゃねえか（； ^ _ ^）」

風太郎「それは俺が、いつもお前に思ってることだよ。」

一花「じゃあ、楽しく覚えようよ。」

エレン「具体的には？」

一花「追いかけてっ。上手な四葉が鬼ね！」

風太郎「お、おい！」

四葉「はい（*^_^*）。」

エレン「行かぜ！（それにしても、今日の一花を見ると何かもやもやするな。何だ・・・？）」

一花「えええっ！上杉君！」

エレン「どうし・・・、ってなんちゆうスピードで滑ってんだアイツー！！（って、あれ!?今こいつ・・・。）」

一花「いやー、悪いね。こんな時に体調崩すなんて、ついてないなー。」

五月「事故とはいえ、不注意が招いた結果です。反省して、日中は大人しくしといてください。」

一花「えー。あー・・・、五月ちゃんは私に付き合わなくて良いから、スキーしてきな。」

五月「ですが・・・。」

一花「大丈夫。私も回復したら、合流するから・・・それとも、フータロー君と顔合わせづらい？あの旅館から、ずっと警戒してたもんね。」

五月「やはり・・・、あれは一花でしたか。（*、◇、） || 3」

五月「あの日、食堂で勉強を教えて貰おうとした時には、考えもませんでした。まだ、3ヶ月です。まさか、こんな事になるなんて・・・。」

一花「そんなに、フータロー君とエレン君は悪い奴に見えるかな？」

五月「そ、そういう訳では……。イエーガー君は、根気強く勉強を教えてください……。」

五月「ただ、男女の仲となれば、話は別です。私は上杉君の事を知らなすぎます。ましてや、イエーガー君に至っては、1000年以上という想像すら付かない過去からタイムスリップしてきたような人……。上杉君以上に知る事が難しい……。」

五月「男の人はもっと、見極めて選ばないといけません。」

一花「五月ちゃんは、まだ追ってるんだね。大丈夫、フータロー君とエレン君は、お父さんとは違うよ。」

食堂

エレン「あ、あ、あ、赤だしが染み渡る、……。↑（逃げるのが早すぎて誰も来な

かった為、鬼ごっこを途中退場した奴)

前田「おっさんみてえな声だなコラ。」

エレン「放つとけ(半分正解だけど)。って、風太郎?」

風太郎「エレンに前田か。五月を見なかったか?」

前田「五月さんって、星のヘアピン付けてる子か?」

エレン「見てねえな。」

風太郎「ここに、五月がないとは……。」

三玖「失礼……。」

エレン「そもそも、今日が始まってから一回も見てねえな。(俺の予想が外れていれば

な・・・。）」ズズズ

風太郎「そ、そうか・・・」クラッ

前田「上杉!?!お前、大丈夫かコラ!!」

エレン「おっと、危ない。大丈夫か? 肩貸してやるよ。」

風太郎「さ、サンキュー。」

三玖「フータロー!?!大丈夫?」

風太郎（自分を騙し続けるのも限界か・・・。やはり、らいはから貰ってたか。という事は一花のも・・・。悪い事したな。）

三玖「休んだ方が良いよ。」

エレン「風太郎。とりあえず、椅子に座れ。」

エレン「前田、悪いが席を外しててくれねえか。風太郎の奴、風邪をひいてるかもしれん（小声）。」

前田「お、おう。先生呼んだ方が良いか？（小声）」

エレン「俺の思い違いの可能性もある。やばくなったら先生に連絡するわ。ありがとう。（小声）」

前田「了解だ。（小声）」スタスタ

エレン「風太郎。ちよつと、顔見せてく・・・」

タタタタタタタ

四葉「三玖と、上杉さん見つけ（*^_^*）！」

三玖「！」

風太郎「四葉。」

四葉「へへーん。こんな所で、油断してちや駄目ですよ。」

三玖（忘れてた……。）

四葉「後二人も捕まえたし、残るは五月を見つけるだけですな。」

風太郎「お前も見つけて無いのか。」

四葉「おーい、こっちこっち。」

二乃「全く……。私も人探ししてるのに……。」

三玖「二花、休んでてって言ったのに、（・H・）ノ」

一花「ごめーん。四葉に捕まっちゃって。」

三玖「フータローも、一花もコテージに戻るよ。」

エレン「・・・なあ、風太郎。」

風太郎「ああ。」

エレン「おい四葉、鬼ごっこ中に五月は見かけたのか？」

四葉「いえ、捜しましたが見かけもしませんでした。」

エレン「そうか・・・。（やっぱり・・・、間違いねえ!!）」

風太郎「事態は・・・、思ったよりも深刻かもしれない・・・。」

二乃「……話、聞かせなさいよ。」

一花「遭難？」

風太郎「ああ。いくら、広いゲレンデとはいえ、六人がこれだけ動き回って会わないのは不自然だ。」

三玖「五月は、スキーに行くって言ったんだよね？」

一花「え……？うん……。もしかしたら上級者コースにいるんじゃない？」

二乃「そこは、私も行ったけどいなかったわ。」

全員「……。」

一花「丁度入れ違ったのかも。私、見に行ってくるよ。」

四葉「あれ？ここまだ見てないかも。」

二乃「えっ？こっちは・・・、最初に先生が言ってたよね。まだ整備されて無いルートだから、立ち入り禁止だって。本当にいないか、コテージ見に行く。」

四葉「私は、先生に行ってくるよ！」

一花「ちよつと待って、もうちよつと探してみようよ。」

二乃「何ですよ？場合によつては、レスキューも必要になるかもしれないのよ。」

エレン「最悪、雪に埋もれていた場合は、15分過ぎれば生存率が大きく下がるとも言われている。急がないといけないんだぞ。」

一花「えつと・・・。五月ちゃんも、あんまり大事にしたいくないんじゃないかなーっ

て。」

エレン「あのなあ！雪山つてのは本当に危ないんだぞ！！雪山登山訓練でも、死者が出たつて言つただろう！！鍛えた兵士でさえも、死ぬ可能性がある位に雪山つてのは危険なんだ！！一般人の五月がこのまま見つからなかつたら如何どうするんだ！！（さて、しつぽを出すか否か・・・。）」

二乃「エレン君の言う通り、五月の命が掛かつてんのよ！！気楽になんていられないわ！！」

一花「・・・ごめんね。」

風太郎「何処まに居るんだ、五月・・・。（くそつ、あと少しなんだ・・・。駄目だ、考えが纏まとまらない）」

ピコン♪

風太郎（メール？エレンから？）

エレン

ヒント

呼び方

後は、自分で考えろ。

風太郎（呼び方・・・。）

一花『上杉君』

風太郎「!!」

二乃「もう良い。私が先生を呼んでくるわ。」

風太郎「待っててくれ、俺に心当たりがある。」

二乃「心当たりって……。」

風太郎「大丈夫だ。恐らく見つかる。」

二乃「……。信じて良いのよね。」

風太郎「ああ、一花。付いてきてくれ。」

一花「!!」

数分後

エレン「三玖からメール。やつぱ、一花はコテージに居たか。」

ブルルル♪

エレン「敵を欺くには味方から。その諺通り、姉妹の事も騙せていたようだが……
詰めが甘いな。さて、着信主は……。」

着信 中野五月

エレン「やつぱりな。……もしもし、五月？」

五月「イ、イエーガー君。た、助けて下さい。上杉君が、上杉君が……。」

エレン「……すぐに行く。そこから動くな。後、帰ったら説教だからな。」

悪魔の子、
末っ子に説教する事を決める。

苦杯（くはい）の炎（ほむら）と、誓いの炎（ほむら）

エレン「えーと、ドローンを飛ばしてみたが……。あ、ここから結構近い所に居たな。大体300mくらい先か。」

エレン「グラップルブレスレット、持って来て良かった。」パシユ

S i d e 五 月

私は、とんでもない事をしてしまった。今、頭の中にあるのは自責の念と後悔。焦燥感に、目の前にいる彼への謝罪の言葉。今思えば、三玖と共にいた彼は、とても苦しうだった事を思い出す。この様な事も想定出来ないなど、私は本当に大馬鹿者だ。

五月「上杉君!? 上杉君!! しっかりしてください!! そんな……。意識を失ってる!! どうしたら……。」

彼はきつと、この様な状態になっている体に鞭打って、私を探しに来てくれたのだろ

う。この様な場合、如何すれば良いのかが分からず。パニックになってしまいう自分が、今は途轍も無く愚かで滑稽のように思える。

エレン『五月。』

五月「!!イエーガー君・・・。」

このような時、彼なら助けてくれるだろうか。頑固で、融通の利かない私でさえも導いてくれた彼なら・・・。誰かの為に怒り、誰かの為に諭し、分け隔て無く誰かに希望を与えてくれる様な心を持つ彼なら、きっと助けてくれる・・・。けれども、彼にも多大なる迷惑を掛けているに違いない。そう思いつつも私は、震える手で端末の番号を押ししかなかった。

五月（お願いします!! イエーガー君!!）

エレン「……もしもし、五月？」

五月「イ、イエーガー君。た、助けて下さい。上杉君が、上杉君が……。」

エレン「……すぐに行く。そこから動くな。後、帰ったら説教だからな。」

電話口から話される彼の声は、落ち着いていながらも何処か力強くも感じる頼もしい物に、私は感じた。しかし、それと同時に今まで保って来た感情が崩壊してしまい……、

五月「う……、ひぐつ……、ご、ごめんなさい。ごめんなさい……。」

情けなくも泣いてしまった。

エレン「居た居た。おーい、二人とも無事かあ？」

五月「イ、イエーガー君……。この度はな……。」

エレン「話は後だ。風太郎の様態が、かなりやばい。急いで下山するぞ。」

五月「は、はい。」

エレン（しかし、グラップルブレスレット。やはり、立体機動装置よりはスピードが出ないな。改善点は……。また後で考えるか。）

コテージ

ハゲネズミ「良く連れて来てくれたな。上杉は一旦この部屋で安静にさせ、様子を見る。これ以上悪化するなら、私が病院に送ろう。イエーガー、こいつの荷物を持って来てくれ。」

エレン「うーす（ω・〃）ゞ」

一花「ごめん……、私のせいだ。」

三玖「一花！」

ハゲネズミ「お前たちは、着替えて広場に集合だ。じき、キャンプファイヤーが始まる。」

五月「わ、私も残ります。」

風太郎「……ゴホッ。お前たちが居ても、仕方ないだろ。一人にしてくれ。」

二乃「ちよつと、冷たいんじゃない？五月はあんたを心配して……。」

ハゲネズミ「という事だ。早く行きなさい。」

エレン「風太郎にうつされなくなかったら、さっさと散りな。」

二乃「でも……。」

エレン「二乃!!」

二乃「!」

エレン「風太郎は風邪をひいてるんだ。安静にするのが常識だろう。」

ハゲネズミ「これより、この部屋を立ち入り禁止とする! 見つけたら罰則を与えるかな! 無論、イエーガーも荷物を運び終えたら退出するように!」

エレン「了解つす。それから五月、説教の件だ。後で、テラスに來い。」

五月「はい……。」

風太郎「先生、待ってください。……二乃、話がある。」

——テラス——

エレン「……つまりは、風太郎や俺が家庭教師に相応しいかどうかを見極める為に、こんな事をしたと言うんだな。」

五月「……はい。どんな、罰でも受ける覚悟は出来ています。」

エレン「そうか。じゃあ、きついの一発行くぞ。」

五月「(〽)(〽)」

デコピンペチッ

五月「えっ?えっ?」

エレン「……はあく。何というか、お前は要らねえ所で肩の力を入れ過ぎなんだよ。確かに、お前のその気持ちは尊重したい。けどな、その結果こんな事になるんなら本末転倒だろうが。まあ十分懲りたみたいだし、これ以上は何も言わないけども。」

五月「は、はい。」

エレン「それに、何も今回の事案はお前だけの責任じゃない。風太郎の隣に居ながら、異変を見抜けなかった俺の失態でもあるし、話を聞かずに連れだした四葉も悪い。自己管理を怠った風太郎も悪い。まあ、他の三人についての落ち度は……。見当たらない。」

エレン「まあ、何が言いたいかというと、もつと誰かを頼れって事だよ。はい、説教終わり!!ほら、いつまでもそんな顔してんなよ。お前は笑顔が可愛いんだからさ。」↑
（天然たらし発動。）

五月「は、はい!」

エレン「しっかし、すごいなキャンプファイヤー。よくも、あんな巨大な炎が出来るもんだ。」

五月「そ、そうですね。」

エレン「それにしても、炎か……。あまり、炎には良い思い出が無いのだが……。」

五月「そうなのですか？」

エレン「ああ、そもそも戦時中だったから炎が出るのは当たり前、死んだ兵士の亡骸なきがらを燃やさなければならぬ時もあつたからな。同じ釜の飯を食つた仲間ですえも……。」

五月「そ、そんな……。」

エレン「戦争が起こつた時に得をするのは、いつも上で踏ん返り返る者達だ。そして、罪も無い一般人が泣きを見る事になってしまう。……だが、おのおの各々が持つ正義がぶつかり合う限り、戦争は無くならない……。本当は、あの時も話し合いで終わらせなければ

ばいけなかったんだ。もしもそれが叶っていれば、あの難民キャンプに居た少年も爺さん達も死ぬ事は無かったんだ。サシヤも、ハンジさんも、ライナーと居た戦士候補生達も!!それだというのに、俺は・・・っ!!」

五月「イ、イエーガー君?」

エレン「っ!・・・すまない。つい、感情的に・・・。」

五月「何があつたのかは分かりませんが、その様に自分を責めるような真似は・・・。」

エレン「いや、俺は自分自身を責め続けなければならないんだ。あいつらの為にも。今日は、済まなかったな。コテージに戻ろうぜ。」

Side 五月

イエーガー君は何時も堂々としており、とても強い。けれども今日の前にいる彼はとても弱々しく、何かに操られたかのように自らを責め続ける傀儡くわいの様だった。

私には、彼が1000年以上も過去に何をしたのか、何が原因であそこまで苦しみ続けているのかが分からない。知る術すべも無い。コテージに戻る彼の背中は、とても小さく見えた。

ただ、いつか話してくれることを願っている。彼が何故、あそこまで己おのれを責め続けるのか。そして何故、初日の旅館では涙を流していたのかを。

そして、勉強が出来ずに苦しんでいた私を助けてくれた様に、夏祭りの日に彼が私を助けてくれた様に、彼が苦しんでいたら助けてたい。

い。
例え世界中が彼を憎み、敵だらけになっても私だけは彼の味方でありたいと誓いた

だつて、こんなにも・・・

頬が熱く、胸の鼓動が高まっているのだから。

五月「お母さんは、男の人を良く見分けねばならないと聞かせてくださいましたね……。ですが、申し訳ありません……。もう、私の中で彼の存在は……。」

五月「約束を守れない、不甲斐無い娘で申し訳ありません。」

悪魔の子、林間学校を終える。

「本当に大切なものは、失ってから気付く。」
犯人は誰だ!!

エレン（風太郎から呼ばれて、何かと思っただけ来てみたら・・・。）

風太郎「・・・。」

五つ子「・・・。」

エレン「・・・。」

エレン「いや、何だよ!!この沈黙!!」

風太郎「待ってくれ、エレン!!今集中してるんだ!!」

一花「急にどうしたの?」

三玖「同じ髪型にしろって。」

二乃「今日は、家庭教師の日じゃなかったの？」

風太郎「なんだ二乃、らしくも無く前のめりじゃないか。」

エレン「おい、二乃はスカートにリボンがついてる奴だろ。お前が話しかけてんのは三玖だ。」

二乃「エレン君の言う通りよ。何で間違えんのかよ（呆れ）」

風太郎「（？ ㄷ？）キラーン」

風太郎「二花、二乃、四葉、三玖、五月だ!!」

エレ・二乃「二乃、三玖、五月、四葉、一花よ（だろ）!!」

二乃「顔を見れば、分かるでしょ！」

エレン「四葉に至っては、服に428よっぱって書いてるじゃねえか!!」

四葉「あ、確かに書いてます!!」

エレン「いや、本人も気づいて無かったのかよ！」

風太郎「……と、この様に何のヒントも無ければ、誰が誰かも分からない。最近のアイドルの様にな。」

一花「それは、フータロー君が無関心なだけでしょ（——；）。」

エレン「いや、アイドルはマジで分からなくなる。」

一花「もう一人いたよ（——；）。」

風太郎「エレン、これを見てくれ。」

エレン「?・・・全教科0点だと?名前は破られてるが、落とした犯人は分からないのか?」

風太郎「実はな・・・。」

——10分前——

風太郎「ふふふ、オートロックも使いこなしてきたぜ。(ハーン)ドヤッ!」

風太郎「さて、さっさとリビングに・・・」スタスタ

??? 「／／／」↑(バスタオル一枚)

風太郎「またかよ(・・・;)」

???
「変態！」

風太郎「ピンポン押しただろ!!」

風太郎「!こ、これは・・・っ。」

エレン「で、今に至ると・・・。」

風太郎「全員0点とは奇跡だ。ごく丁寧に、名前は破られている。バスタオル姿で分かっていなかったが、犯人はこの中にいる！」

エレン「名探偵コロンかよ。」

風太郎「うるせえ! 私が犯人だよーって人ー?」

五つ子「・・・・・・・・」

風太郎「四葉、白状しろ！」

四葉「当然の様に、疑われてる！Σ（。∩。）」

三玖「それで、この髪だったんだ。」

風太郎「顔さえ見分けられるようになれば、今回の事も、スキーのときみたいな一件も起きないだろうからな。」

エレン「成程ねえ。」イツキノハウチラツ

五月「は、反省しています・・・。」

二乃「あの五月は、マスクさえなければ私達も分かったんだけど。」

エレン「マジかよ！すげー！」

風太郎「なんで、お前らは顔だけで判別が付くんだ？」

二乃「は？」

三玖「何でって・・・」

二乃「こんな薄い顔、三玖しかいないわ・・・。」

三玖「こんなうるさい顔、二乃しかいない。」

三玖「薄いつて何？」

二乃「うるさいこそ何よ！」

エレン「おい。」

二乃（やばっ！）

三玖（また、参考書が・・・）

エレン「ホットチョコレート作ったから、それ飲んで落ち着け。お前らも飲むか？」

二乃「へ？え、あ、うん。」

三玖「あ、ありがとう。」

四葉「良いんですか!？」

一花「気が利くね。」

五月「有り難うございます！」

風太郎「・・・。」

四葉「あー、美味しいです。そうだ！良いこと教えてあげます。私達の見分け方はお母さんが昔、言っていました。」

エレン「ほう？何て？」

四葉「愛さえあれば、自然と分かるって。」

風太郎「……道理で分からない筈だ。」
はず

エレン「そもそも出会って、数か月しか経ってねえのにな。流石に今回ののは簡単だったか……。」

風太郎「やはり、顔は同じ……。」

一花「もう、戻しても良いかなー。」

エレン「えー、せっかくイメチェンしたみたいで、全員可愛かったのに（・3・）」

五月「なっ!!か、かわっ・・・／＼／」

二乃「あんまり、そういう台詞はバンバン言うもんじゃないと思うんだけど・・・。」

三玖「たらし・・・。」

エレン「え!?俺って、たらしなの!？」

一花「こりや、駄目だ。（?▽?;）」

五月「／＼／」

四葉（あれ?五月の顔が赤くなってる?）

風太郎「ん?」

エレン「どうした？」

風太郎「いや・・・、シャンプーの匂い・・・。」クンクン

エレン「えっ？（？ω？；）ドンビキ」

三玖「えっ？えっ？」

二乃「なんか、キモ・・・（？|？；）」

??? 『変態!!』

風太郎「これだ！お前達に頼みがある!!」

五つ子&エレン「???」

風太郎「俺を変態と罵ってくれ!!」

エレン「……。風太郎、脳外科か神経外科のどっちかを紹介してやろうか? (・|・、)」

風太郎「至って正常だよ!! 憐れみの眼を向けるな!!」

二乃「あんた……、手の施しようもない変態だわ……。」

風太郎「違う。そういう心に来る言い方じゃなくて。」

三玖「ほくろで見分ける事も出来るけど。」

風太郎「お手軽う! 何処にあるんだ? 見せてくれ!!」

三玖「!え、えつと……。フータローになら見せても良いよ。」

五月「ダメです!!」

エレン「止めろお!!そんな事したら、作者がR―18ルート書かないといけなくなるじゃねえか!!」

一花「メタいよ……(△^;)」。

二乃「心配する所そつち!」

五月「そもそも、犯人のほくろを見ていないと意味がないでしょう!」

風太郎「それもそうか……」。

一花「フータロー君、エレン君。もしかしたら、この中に居ないのかもしれないよ……」。

エレン「何い!!」

風太郎「どういう事だ？」

一花「落ち着いて聞いてね。」

エレン「(；；)ゴクリ…」

一花「私達には隠された六人目の姉妹……。六海^{むつみ}が居るんだよ。」

四葉「何だつてー!!む、六海は、今何処に……」

エレン「姉妹も知らない秘密かよ!!」

一花「ふふふ……。あの子がいるのは、この家の誰も知らない秘密の部屋……。」

エレン「まさか、地下室があるというのか!!」

風太郎「勝手にやってろ。つていうか、エレンまでそ^ポつち^ケに行くなよ!! ツツコミが追いつかん!!」

エレン「すまんすまん。」

風太郎「・・・、あー! ややこしい顔しやがって! もう、分からん!!」

五つ子&エレン「!!」

風太郎「最終手段だ。これは、そのテストの問題を集めた問題集。これが解けなかった奴が犯人だ。」

五月「そんな、無茶な!」

四葉「私も、分からない自信があります!!」

エレン「ドヤ顔で言うなよ・・・。time^時はis^金money^なだぞ。」

風太郎「エレンの言う通りだ。時間を無駄に使うな。一番最後の奴を犯人にしま
す。はい、スタート。」

五つ子「わーっ！」

??? (ふっふっふっ・・・)

一花(追い詰められたね、フータロー君。あの時はビックリして、らしくも無く追
返しちやっただけど、逆にそれが功を奏したかな。)

二乃「何で、こんな事になるのよ・・・。」

四葉「うわああ(@?@)」

三玖「今日のフータローとエレン、ちよつと強引。」

五月「ここは確か……。」

エレン「四葉分隊長補佐!しつかりしろ!!」

四葉「エレン分隊長。もう駄目ですうう(@?@)」

二乃「いつの間にか、二等兵から分隊長補佐に役職変わってるじゃない(*、口、)。」

一花「みんなには悪いけど、さっさと終わらせよっかな。小テストのときは油断しちゃったけど、私だってやれば出来るんだから。」

一花「……っ!待って、筆跡!!何食わぬ顔で、筆跡を比べようとしている!やるね、フータロー君。」

一花「危ない危ない……」ケシケシ

一花「はい。一番乗り。(あの短時間で髪を乾かせるのは私だけ。服を着る余裕はもう少し欲しかったけど……。)」

一花(君の敗因は、女の子をちゃんと見てあげない所だよ。)

風太郎「ふむ……。

お前が犯人か。」

一花「あれっ?なんで……筆跡だって買えたのに。」

風太郎「ここ、bの書き方。」

一花「!」

風太郎「一人だけ筆記体で書く事は覚えてた。俺はエレンと違って、お前たちの顔を見分ける事は出来ないが、お前たちの文字は嫌というほど見てるからな。」

一花「や・・・、やられた。」

風太郎「フハハハ!!」

エレン「顔がとんでもない悪人面になってんぞ。」

五月「あのー、一応私達も終わりました。」

風太郎「ご苦労。」

エレン「お疲れ、その箱の中にクッキー焼いてきた奴あるから食べな。」

五月「はい!!」

風太郎「さて、採点だ。エレンも手伝ってくれ。」

エレン「OK。・・・ん？」

風太郎「どうした？」

エレン「いや・・・、五月の「そ」の文字が犯人と同じ書き方だなんて思って・・・。」

風太郎「は?・・・良く見たら、二乃の「門構え」」

エレン「三玖の「4」の書き方もだろ？」

風太郎「四葉の・・・送り仮名。みんな犯人と同じ・・・、お前ら・・・。一人ずつ0点の犯人じゃねーか!!」

三玖「バレた。」

エレン「嘘やん・・・。」

二乃「何してんのよ一花。二人が来る前に、隠す約束だったでしょ。」

一花「ごめーん。」

風太郎「俺が入院した途端にこれか・・・。というか、エレンは教えなかったのか?」

エレン「いや、俺にも仕事があるし。けど一応、Zoomのミーティング機能を使って教えた筈はずなんだが・・・orz」

風太郎「はあ〜。」

五月「上杉君。(小声)」

五月「今日貴方が顔の判断にこだわったのは、昨日話してくれた五年前の女の子が関係しているのでしょうか。(小声)」

風太郎「・・・そうだ。・・・と、思ったが。(小声)」

風太郎「この中で、昔俺に会った事があるよーって人。」

一・二・三・四「！」

エレン「？」

二乃「何よ、急に。」

三玖「どういう事？」

風太郎 「そりやそうだ、そんなに都合よく近くにいる訳がねえ。それに……。」

エレン 「それに？」

風太郎 「お前らみたいな馬鹿が、あの子のはずがねーわ。」

五月 「ば……馬鹿とは何ですか!!」

エレン 「いや、今の成績を見る限りはなあ（苦笑）」

五月 「うう……。」

風太郎 「間違つてねーだろ五月。よくも、0点のテストを隠してたな。今日はみっちり復習だ。」ポーン

エレン 「おい、お前……。」

風太郎「は？」

三玖「もしかして、わざと間違えてる？（　・　；　H　・　；　）」

風太郎「・・・」

三玖「フータローの事なんて、もう知らない。」

風太郎「す、すまん！」

四葉「あはは。まずは上杉さんが勉強しないといけませんね。（それにしても、髪型を可愛いと言われた時の、五月のさっきの反応・・・、まさか!!イエーガーさんに恋を!!）」

悪魔の子、仕事に感^かま^まけていた事を、後悔する。

思い出の品

エレン「今日は勤労感謝の日か・・・。」

エレン「家庭教師の仕事は無いし、組対四課の仕事は・・・。」

プルルル♪

エレン「ん？(・ω・)」

エレン「もしもし?。」

ヒロ「エレンか。おはよう。」

エレン「ヒロさんじゃないっすか!!おはよう御座います!どうしたんすか?。」

ヒロ「ああ、いやな。今日は仕事が無いっていう事を伝えときたくて。」

エレン「え？無いんすか？」

ヒロ「ああ、最近のお前は頑張りすぎてるからな。今日は勤労感謝の日だから少し体を休めろ。」

エレン「う、うつす。それじゃあ。」

ヒロ「良い休日だな。」

ツーツー

エレン「仕事も無い、学校も無い、家庭教師も無い。あー、これは何とかあれだな。」

暇だ(・ω・)」

エレン「今の時間は・・・」

AM 11:00

エレン「出掛けよ・・・。」

エレン「あんま腹減って無いし、あそこに行くか……。」

らいは「あれ？エレンさん？」

エレン「あれ？らいはちゃんじゃねえか？一人でどうしたんだ？」

らいは「一人じゃありませんよ？」

エレン「へ？」

五月「らいはちゃんと。走ったら危ないですよ……。つてイエーガー君!？」

エレン「あれ？五月まで……。何で……？」

五月「らいはちゃんと、ショッピングに行ってたんですよ。」

「らいは「五月さんに、お洋服買ってもらったんです！どうですか？」

エレン「おう、似合ってるな。風太郎が見たら鼻血出すくらいには。」

五月「褒め方が独特過ぎませんか？」

エレン「二人は、もう飯は食ったのか？」

らいは「はい。とはいえ、小腹は空きましたけど……。」

エレン「そうか……。良かったら、一緒に菓子でも食いに行かないか？勿論、俺の奢りで。」

らいは「良いんですか？」

エレン「構わないぜ。五月は？」

五月「わ、私は……。ご、御一緒させていただきます……。これは、ただの食事。」

らいは「？」

店員「いらつしやいませー、イエーガー様ではありませんか？何人様でしょうか？」

エレン「3人だ。」

店員「では、こちらの窓際の席に。ごゆっくりどうぞ。」

らいは「ふあああー。すごい綺麗な御座敷ですね。」

五月「つて、ここ私の行きつけの高級和菓子店じゃないですか!!」

エレン「え？そうなのか？」

「はいは「エレンさんは良く来るんですか？」

エレン「流石に、月2・3回だよ。」

「はいは「はえ〜。」

エレン「はいはちゃんも、遠慮せずに好きなの頼みな。」

「はいは「いい、良いんでしょうか？」

エレン「女の子達の前で、見栄を張りたくなるのが男って生き物だからなw」

五月「何ですかそれ（呆れ）」

店員「お待たせしました。当店自慢の「粉雪」こなゆき二つに、「桜夢」さくらゆめです。ごゆっくりお過

「ごさくさいませ。」

エレン「来た来た（*^_^*）」

らいは「お、美味しそうです。ち、因みにお値段は・・・」

エレン「論吉さん一人と、一葉さん一人、英世さん二人かな。」

らいは「そ、そんな!!あ、あの。このお金はお兄ちゃんの給料から・・・」

エレン「気にすんな。それに、どんな高級和菓子も適わない、らいはちゃんの手作り料理を食わせて貰ってるからな。」

五月「そうですよ、こういう時は甘えるのも良いんじゃないですか?」

らいは「お二人とも、お上手ですね・・・。じゃあ、頂きます。(´・`・´) モグモグ」

らいは「お、美味しい!!普通の桜餅と全然違う!!」

エレン「そりゃあ良かった。じゃあ、俺達も・・・」

五月「はい。・・・頂きます。」

エレ・五「(´▽`)モグモグ」

エレン「・・・」

五月「・・・」

らいは「えーと、お二人とも?」

エレン「これは・・・」

らいは「これは？」

エレン「口の中で、餡あんが繊細な粒と成って溶けていく。」

五月「口当たりがまろやかで、優しい味わいの羊羹ようかんですね。」

エレン「ああ。後味はまるで、その名の通り粉雪の様だ。」

らいは（感想の質が、違い過ぎる!!Σ（。D。（））

エレン「食った食った。」

五月「ごちそうさまでした。」

らいは「美味しかったですね♪」

エレン「あ、ごめん。俺ちよつとトイレに。」

五月「分かりました。気を付けて下さいね。」

エレン「子ども扱いすんなよな。」

らいは「……。」

五月「桜夢どうでしたか？らいはちゃん。」

「はいは「あ、はい。美味しかったです。あの・・・、ところで五月さん。」

五月「はい？」

「はいは「五月さんって・・・」

エレンさんの事好きなんですか？」

五月「・・・？」

五月「え、えつと？らいはちちゃん、今何なんと？」

らいは「だから、エレンさんの事が好きなんですか？」

五月「????
!!!
///
///
///
」

らいは（四葉さんから、「五月がもしかしたら、イーガーさんの事を好きになったかもしれない」って、連絡がきたから確認してみたけど、マジのやつだった!!）

五月「す、好きという訳ではありませんよ!?!少し気になるだけと言いますか・・・!!
というか、誰からその様な情報を・・・。」

らいは「四葉さんから。」

五月（よ、四葉あぁ〜。）

らいは「五月さんが、エレンさんの事を好きかどうかは分からないですけど、もしも

好きなら、焦った方が良いと思いますよ？この前、エレンさんが夏休み前の荷物持ちの為に迎えに来てくれた時なんか、保護者の人達とか、同級生のお姉ちゃん達から、猛アプローチされまくってましたから。」

五月「そ、そんな……。」

らいは「一応、アドバイスってだけですからね!?そんなにショック受ける物でもないと思いますけど……。」

五月「そ、そうですよね……。」

エレン「おーい。」

五月「ひゃあああ!!」

エレン「な、何だよ。びっくりしたな!!」

五月「しゅ、しゅみましえん!!」

エレン「??」

らいは（五月さん、ごめんなさい。あと、エレンさんは早く気付いてあげて!!）

エレン「じゃあ、俺はこれで。」

らいは「今日は有り難うございました。」

五月「また学校で・・・。」

エレン「はーい。」

エレン「さてと、帰りますか。」

エレン「ぬーすんだバイクで走りだす〜♪。」

エレン「ん？置き配？何かを注文した覚えは無いんだが……。」

エレン「差出人は……。あれ？この名前って確か……。」

差出人：モブ歴史研究家A

エレン「俺を掘り起こした、歴史研究家じゃねえか……。中身は何だ？とりあえず、家の中に入るか……。」

エレン「さてと……。中身はつと。」

ビリビリビリバコッ

エレン「ん？手紙？」

1000年以上の眠りから目覚めた兵士君へ

今回、君の家に送らせてもらった荷物には、君が眠っていた大樹の付近で発掘された物が梱包こんぼうされている。黄ばんでいるものもあるが、どれも1000年以上昔の物とは思えないほど、綺麗な状態で保管されていたよ。迷惑でなければ受け取って欲しい。

親愛なる友人、モブ歴史研究家Aより。

エレン「保管されてたもの……？これは……っ!!」

エレン「反マーレ派の義勇兵達が来た時に撮った写真に、ジークが俺に渡した野球ボールじゃねえか!!」

アルミン『オニヤンコポン、この箱は何だい？』

オニヤンコポン『ああ、これはカメラだって言うんだ。これで、人を写すと精巧な絵を作る事が出来るんだよ。』

ミカサ『地下室で見た……。』

ハンジ『せっかくだ!!皆で撮ろうよ!!』

サシャ『良い考えですね!!』

コニー『よし!俺が一番前に入ってやるぜ!!』

ジャン『いや、それは俺だ!!』

フロック『何を争ってんだか……』

リヴァイ『つたく。騒ぎやがってこのガキ共が……。エレン、お前も入れ。』

エレン『……え？あ、はい。』

エレン「あの時は、カオスな状況だったな。結局、ミカサとリヴァイ兵長で暴れる奴らを無理やり座らせたんだったか……。」

エレン「この野球ボールも……。」

ジーク『エレン。必ずみんなを、救ってあげよう。』

エレン『ああ……。』ポロツ

ジーク『エレン、大丈夫か？』

エレン『ああ……。病院暮らしで、体が鈍っちゃったかな……。』

エレン「もしも、生まれた時代や環境が違っていけば、ジークとも実の兄弟の様に……。父さんが修羅場になりそうだけど……。いや、母さんの事だから案外受け入れそうか？」

エレン「時代や環境が違っていけば……。」

エレン「……。っ。一目で良い。どれだけ詰なられても構わない。ただ、もう一度一目で良いから……。夢じゃなくて……。」

エレン「現実で、あいつらに会ってえなあ・・・。」

悪魔の子、感傷に浸る。

亀裂

中野家

エレン「……遅い!!」

五月「確かに遅いですね……。」

二乃「寝坊じゃない?」

エレン「ちよつと、見て来るわ。」

五月「私も行ってきます。」

四葉「行ってらっしゃーい。」

五月「家庭教師の土曜日……、せっかくみんな集まってるというのに……。」

エレン「まじで道でぶつ倒れてたら、洒落しゃれになんね……。ん？」

五月「どうしました？」

エレン「いや……。あそこで倒れてんのって……。」

五月「上杉君!?ど、どうし……。まさかこれって……。死……。」

エレン「違うぞ、死んだ様に寝てるんだ。こいつまた徹夜で何かやってたな。おい、起きろ。勉強風太郎大魔王。」

風太郎「また、やってしまった……。勉強に集中しすぎて、気付いたら朝だった。しかし、朝勉強は効果的と聞くし、一概に悪いとは言えないのかも……。」

五月「朝まで勉強する事を、朝勉とは言いません。」

エレン「正まさに、馬鹿と天才は紙一重まじつてやつだな。」

風太郎「ううっ。あ、あいつらは・・・。」

エレン「もう先に始めてるぞ。」

五月「あなたが、あまりに遅いので。」

風太郎「お、応。試験まであと一週間だ。そこで・・・。これを用意した!!」

エレン「何だ？この紙束、広〇苑位の厚さはあるぞ。」

風太郎「今回の範囲を全てカバーした、想定問題集だ。人数分用意したので、課題が
終わり次第、始めて貰う。これを一通り熟こなせば、勝機はあるはずだ。」

エレン「風太郎。」

風太郎「何だ？」

エレン「五月の顔が真つ青を通り越して、真つ白になってるんだが……。」

五月「や、やっぱ今日の約束は無しで、お引き取り下さい。」

風太郎「逃げんな！お前がこれをお引き取るんだよ!!」

エレン「しっかし、なんつー量だよ。言ってくれば、人数分Wordで打ち込んで、印刷したつてのに。」

風太郎「それもそうか……。」

五月「……呆れました。まさか、これが原因で徹夜したんですか？」

風太郎「そ、そんな事どうでもいいだろ。作っちまったもんはしょうがねえんだから。お前達にやらせても、フェアじゃない。俺とエレンが、お手本になんなきやな。」

エレン「よっ!!風八先生!!」

風太郎「金八先生きんぱちみたいに言うな!!つか、誰か逃げ出さないうちに行こうぜ。」

五月「は、はい。そうですね。」

エレン「二乃を、物で釣って引き留める策は尽きたからな……。」

風太郎「もう逃げようとしてたんだ……。あいつ……。一言灸を据えてやらねばならんな!!」

五月「あの……。揉め事は勘弁してくださいね。」

エレン「中間試験のときみたいに、尻拭いをするのは勘弁だぞ……。」

五月「それに、時間は限られているんです。みんなで仲良く協力しましょう！」

風太郎「みんなで、仲良く・・・ねえ。」

二乃「三玖、この手をどけなさい。」

三玖「二乃こそ諦めて。」

二乃「はあ？あんたが諦めなさい！」

三玖「諦めない。」

エレン「待ってくれ。五月、数分前まで勉強してたよなこいつら。何で、キャットファイト口論verを開催してんの？」

五月「そ、そのはずですが・・・。」

エレン（胃薬何処にやったっけ……）

風太郎「お二人さん、何やってんの？」

二乃「リモコンを渡しなさい。今やってるバライテイに、お気に入りの俳優が出てるんだから。」

三玖「駄目、この時間はドキュメンタリー。今日の特集は見逃がせない。フータロとエレンはどっちの……」

エレン「何やってんだ。録画してやるからさっさと座れ。」

二・三「……はい。」

風太郎「チャンネル争いかよ。下らねえ。」

エレン「マジで、あいつら仲悪いよな……。」

一花「んー、どうだろう。犬猿の中って奴？特に二乃、あんな風に見えてあの子が一番繊細だから、衝突も多いんだよね……。」

エレン「あー、確かに。」

一花「はい、みんな再開するよ。それじゃあ、フータロー君にエレン君。これから一週間、私達の事をお願いします♪。」

風太郎「ああ、リベンジマッチだ。」

エレン「今度こそ、マルオさんをぎゃふんと言わせるぞ!!」

四葉「オーー!!」

二乃「……。」

エレン（二乃……、大丈夫か？）

二乃「それ、私の消しゴム。返しなさい。」

三玖「借りただけ。」

三玖「あ、それ私のジュース。」

二乃「借りるだけよ。ってマズツ!!」ブツ

エレン「あー、もう。一花、台所から布巾ふきん取ってきて良いか？」

一花「どうぞどうぞ。」

風太郎「……。アイデア募集中。」

四葉「はい！こんな作戦は如何どうですか？」

エレン「どんな作戦だ？」

四葉「題して、みんな仲良し大作戦です！！」

エレン「お、おう？」

四葉「きつと二人は、慣れない勉強でカリカリしているんです。上杉さんとイエーガーさんが、いい気分に乗せてあげたら喧嘩も収まるはずですよ。」

エレン「俺は机の掃除してるから、風太郎頼んだぞ。（もう、嫌な予感しかないけど。）」

風太郎「はっはっは。いやー、良いねえ。」

三玖「!?」

風太郎「素晴らしい!二人ともいい感じだね。何とか凄く良い。」

エレン(おいおい、冗談だろ?) キリキリ

風太郎「しっかりしてて……、健康的で……、良いね……、うーん。偉い!!」

四葉(褒めるの下手くそーツ!!)

エレン(拝啓、あの世にいるアルミンとミカサへ。俺は改めてお前達の苦勞を知る事が出来たよ……。ロー○製菓のパン○ロン健胃は何処行った?)

三玖「どうしたの?フータロー?」

二乃「気持ち悪いわね。」

エレン（健康的で……は、流石にきもかったな。セクハラ親父の常套句じょうとうぐだろ。）

三玖「気持ち悪くは無いら。」

二乃「本当の事を言っただけよ。」

三玖「それは言い過ぎ。取り消して。」

二乃「あれー？つて事は、あんたも少しは思ったんじゃない？」

エレン「お前ら、ホットチョコレート飲んで落ち着けよ。」

二乃「……。頂くわ。」

三玖「一時休戦……。」

風太郎「……………休戦って事は、失敗だよな。次。」

一花「こんなのはどーかな。」

エレン「What plan are you having?」

一花「第三の勢力作戦だよ。あえて、厳しく当たる事で、ヘイトがフータロー君へ向くはず。共通の敵が現れたら、二人の結束力が強まるはずだよ。」

エレン（共通の敵……………マーレ……………パラディ島……………共闘……………うつ！頭が……………）

風太郎「……………」

一花「どうしたの?」

風太郎「うーん……………一応それなりに頑張ってる、あいつらに強く言うのは心が痛

む・・・。」

五月「貴方にも、人の心があつたのですね。」

エレン「失礼過ぎるぞ、五月……。まあ、物は試しだな……。嫌な予感がするが……。」

風太郎「やれるだけやってみるか……。」

風太郎「おいおい！まだ、それだけしか課題終わってねーのかよ！」

二・三「！」

風太郎「と言っても、半人前のお前らは課題終わらせるだけじゃ足りないけどな！あ
！違った！半人前じゃなくて、五分の一人前か！フハハハハ！！」

一花（何だか、生き生きしてない？）

エレン（ぐおおお！頭がああ!!）

二乃「言われずとも、もう終わる所よ！ほら！」

風太郎「……ん？そこ、テスト範囲じゃないぞ。」

二乃「あれえ!?やば……。」

エレン「まあまあ、範囲ミスに気付けただけ良かったじゃねえか、取り返しは……。」

三玖「二乃、やるなら真面目にやって。」

エレン（三玖うう!!）

二乃「……っ!!こんな退屈な事、真面目にやってられないわ!!部屋でやるからほつ
といて!!」

風太郎「お、おい！くっ……。ワンセット無駄になっちゃった。」

三玖「！」

五月「弱気にならないでください。お手本になるんでしょう？頼りにしてますから。」

エレン「言い方には気を付けるんだぞ。風八先生。」

風太郎「真面目な顔で言うなよ……。待てよ二乃。まだ始まったばかりだ。もう少し残れよ。」

二乃「……………」

風太郎「あいつらと喧嘩するのは、本意じゃないだろ。唯ただでさえ、お前は出遅れてるんだ。四人にしっかり追いつこうぜ。」

エレン（姉妹と比べるのは、アウトだろ……。二乃の空気が変わったし……。）

二乃「……五月蠅うるさいわね、何も知らないくせに。とやかく言われる筋合いは無いわ。あんたなんかただの雇われ家庭教師、部外者よ!!」

五月「に、二乃……。」

エレン「……。」

三玖「これ、フータローが私達の為に作ってくれた。受け取つて。」

二乃「……。問題集作つたくらいで何だつて言うのよ。そんなの……要らないわ。バシツ

二乃「!……あつ。」

バサバサ

一花「ね、ねえ。二人とも落ち着こ？」

風太郎「そうだ、お前ら……。」

三玖「二乃。拾って。」

二乃「こんな紙切れに、騙されてんじやないわよ。今日だって遅刻したじやない。こんなもの渡して……。いい加減なのよ!!それで教えてるつもりなら大間違いだわ!!」

エレン（引っ込みがつかなくなってきたな……。）

三玖「二乃!!」

風太郎（まずい!）

風太郎「三玖!!俺は良いから!!」

五月「二乃……。」

一花（まずい！五月が二乃に平手を……!!）

ガシッ

エレン「五月、その手を下ろせ。それ以上やれば、取り返しがつかなくなるぞ。」

五月「イエーガー君。放してください。」

エレン「駄目だ、下ろせ。今すぐに。」

五月「……分かりました。ですが、二乃……。謝って下さい。」

二乃「五月……。！あんた、平手をしようとしたわね!!」

五月「この問題集は、上杉君が私達の為に作ってくれた物です。決して粗末に扱って良い物ではありません。」

五月「彼に、謝罪を。」

二乃「あんた……。いつの間にこいつの味方になったのよ……。まんまと、こいつの口車に乗せられたってわけね。そんな紙切れに熱くなっちゃって。」

三玖「ただの紙切れじゃない。よく見て。」

二乃「は？」

風太郎「待て、二乃の言う通りだ。俺が甘かった。」

五月「あなたは、黙ってて下さい。彼は、プリンターもコピー機も持っていません。本当に呆れました。全部手書きなんです。」

二乃「！だから何よ……。」

五月「私達も真剣に取り組むべきです。上杉君やイエーガー君に負けない様に!!」

二乃「……私だつて……。」

一花「二乃……。」

三玖「いい加減受け入れて。」

二乃「分かったわ……。あんた達は、私より二人を選ぶって事ね……。いいわ、こんな家出てってやる。」

風太郎「！二乃、冷静になれ!!」

五月「そうです！そんなの誰も得を——ツ」

エレン「おいコラ、二乃。」

二乃「な、何——ッ」

エレン「てめえ、なんにも学んでなかったんだな。俺は、お前に教えた筈だ。家族と喧嘩して、別れていくのがどんなに辛い事を。悔いのない選択をしろとも。最後に聞く。今のお前のやろうとしてる事は、本当に悔いの無い選択なんだろうな。あ、？」

エレン以外「——ッ」

風太郎（や、やばい。）

三玖（この殺気。林間学校・・・、いや、中間試験でお父さんと電話で話してた時以上・・・。）

四葉（ど、どうしよう・・・。）

二乃「え、ええ。そうよ!!」

エレン「そうか・・・。風太郎、帰るぞ。」

風太郎「お、おい。」

エレン「どうやら、俺らは部外者らしいからな。」

風太郎「だ、だが・・・。」

エレン「これ以上ガタガタ言わせんな。」

風太郎 「っ!!」

エレン 「帰るぞ。三玖と五月も頭を冷やしとけ。」

風太郎 「ああ……。」

三玖 「……。」

五月 「……はい。」

二乃 「……っ。」

悪魔の子、一日で胃薬一瓶消費する。

救出

——芸能事務所——

織田「一花ちゃんの控室はーつと……。あ、ここだ。」

エレン「なんか、すみません。仕事中的に。」

織田「気にしないでくれ、君にはアイドルと過激なファンの間の問題とかを、たびたび度々解決して貰ってるからね（*ゝ*）。じゃあ、休憩時間終了まで後30分程しかないけど、楽しんでってね。」

エレン「恩に着ます。」

——一花の控室——

エレン「そうか……。結局二人とも出て行ったんだな。」

一花「うん……。」

エレン「俺達が出て行つた後、どうだった？」

一花「とりあえず、一旦は二人とも怒りが鎮火したんだけど、時間が経つにつれて再燃しちやつたみたいでね……。ご飯のときにヒートアップしちやつて……。」

エレン「そのまま、家出決行と……。はあく……。」

一花「……ごめんね。」

エレン「は？何がだよ？」

一花「本当は、あるとき長女の私が止めに行かなくちゃいけなかつたんだらうけど……。二人に任せつきりにしちやつたから……。その、本当にごめ……。」

エレン「一花、ストップ。」

一花「え？」

エレン「それ以上は言うな。例え、あそこでお前が出て行ったところで、結果は変わらなかったと思うぞ。そもそも、怒りの原因は俺達二人にどーのこーの言われた事じゃ無いだろうし。」

一花「そ、そうなのかな・・・。」

エレン「それに、夏祭りのときにも言っただろう。長女っていう責任感を持つのは良い。だが、それに縛られ過ぎるなど。」

一花「あはは・・・そんな事を言われたこともあつたね。」

エレン「・・・そろそろ休憩時間が終わるな。じゃあ、俺も今日は仕事があるから、お前も頑張れよ。一花。」

「花「うん．．．、エレン君も頑張つてね。」

——仕事終了の帰り道——

ヒロ「そうか．．．、そんな事が．．．。」

エレン「全く、どいつもこいつも．．．。」

ヒロ「だが．．．。生徒のメンタル面も考えてやるのが、家庭教師の役目ではないのか？」

エレン「視野をもう少し広くするべき．．．でしょうかね。ていうか、何でそんなに早歩きなんですか？」

ヒロ「当たり前だろう？今日はユイが晩飯を作ってくれるんだ!!急がない理由がないだろう!!」

エレン「そ、そうなんですか。(相変わらず、愛されてんなあ、ユイさん．．．。)」

エレン「……ん？」

ヒロ「どうした？」

エレン「いや、あれ……。」

五月「や、やめて下さい！」

酔っ払い「良いじゃんか、お嬢ちゃん家出しちゃったのお？おぢさんの所で泊めてあげよつか？」

エレン「何で、段ボールが……。もしかしてあれにくるまって寝ようと……。つてあれ？ヒロさん？つて、もう酔っ払いのすぐそばに!？」

ヒロ「そこのお前、いい加減にしないか。なに良い年こいて未成年を攫おうとしてい
るんだ……。」

酔っ払い「ああ？良いじゃねえかよ。」

ヒロ「口で行っても分からんようだな……。ちよつと痛いぞ。」

酔っ払い「は？」

ヒロ「うおりやーーーー!!!山嵐じゃあーーーー!!!」

酔っ払い「ぐえええ!!!」

ヒロ「大丈夫か？お嬢ちゃん？」

五月「は、はひ……。」

エレン「だ・い・じょ・う・ぶ・かじやねえだろー!!!」トビゲリ

ヒロ「どわああ!!上司にいきなり何するんだ!!」

エレン「何するんだじやねえだろ!!なんで、柔道の危険技の山嵐を酔っ払いとはいえ一般人に仕掛けてんだ!!ったく・・・。五月、大丈夫だったか?」

五月「() > | < () コクコク」

ヒロ「と、取り敢えず。救急車だけでも呼んどくわ・・・。」

エレン「始末書頑張ってくださいね。」

ヒロ「う、うす。」

エレン「五月、大丈夫だったか？怖かっただろ。」

五月「大丈夫です……。」

エレン「そうか……、で？結局家出したんだな。」

五月「うう……。」

エレン「取り敢えず、家まで来い。」

五月「い、嫌です。帰りたくありません。」

エレン「違うって。俺の家だよ馬鹿。」

五月「イエーガー君の家ですか……。」

つて、ええええええー——
!!???」

悪魔の子、無事に末っ子を救出捕獲

過去を知る

——エレン宅——

エレン「取り敢えず、中に入れ。話はそれからだ」

五月「はい……。(物凄い広いです。それに、掃除が行き届いています……。)」

エレン「そこに座ってな。取り敢えず軽食探すから。」

五月「そ、そこまでしなくても……。」

エレン「ここでぶつ倒れたら、後味が悪くなるんだよ。それに、こここの家主は俺だ。俺の言う事は聞け。」

五月「は、はい……。」

エレン「取り敢えず、冷蔵庫に作り過ぎてたおからケーキがあったから、先ずはこれを食べ。」

五月「い、頂きます……。お、美味しい!!」

エレン「そうか。風呂掃除して、沸かしてくるから待つてな。」

五月「はい……。」

五月「……ひ、暇になりましたね。そういうえば、同い年……とは言えないでしょうが、同級生……ましてや異性の家に泊まるなど初めてです……。」

五月「もしかしたら……、ここにイエーガー君の、昔の思い出の品があったりして……。つて、私は何を考えているのですか!!人の所有物を勝手に漁るなど……。」

五月の脳内

天使五月（駄目ですよ！人のプライバシーを漁るなど!!）

悪魔五月（ちよつとだけなら良いんですよ。ばれなきや問題無いと、林間学校のとくにイエーガー君も言っていたではないですか!!）

天使五月（そ、それは・・・。）

悪魔五月（隙ありー!!）アクマビーム

天使五月（きやあぁー！ー!!）

— 現実世界 —

五月「す、少しだけなら……。」ススス……

ガタン!!

五月「ひやつ!……これは、写真?」

五月（ここに写ってるのは……、真ん中にいるのがイエーガー君でしょうか? 周囲にいる方々は……、イエーガー君の1000年以上過去の友人……? この隣の黒髪の女性は……。）

エレン『好みのタイプは先ず3位は黒髪、2位は黒い瞳、1位は家族同然に育った幼馴染。というか、俺の初恋相手だった奴。』

五月「まさか、この人がイエーガー君の初恋の……。……ッ。」ズキン

五月「今の胸の痛み……、まさか私は嫉妬を……?」

エレン「五月? 何見てんだ?」

五月「きやあ!!」

エレン「ああ、その写真か。1000年以上前の物とは思えないほど、綺麗に撮れているだろ。」

五月「は、はい。こちらにいる方々は皆……。」

エレン「ああ、昔の軍……って言うより、兵団の仲間だな。左からフロック・フォルスター、ジャン・キルシュタイン、コニー・スプリンガー、アルミン・アルレルト、そして俺、その隣がミカサ・アツカーマンで、その隣がサシャ・ブラウス。後ろの四人が、リヴァイ兵士長と、ハンジ・ゾエ分隊長。そして、イエレナとオニャンコポンだな。」

五月「?????
（な、名前が長くて。覚えられません!!）」

エレン「つて、一挙羅列しても覚えられないかw。まあ、昔の仲間だよ……。イエレナと、オニャンコポン以外の奴らは同じ屋根の下で飯を食った……。つ。」

五月（この顔……。林間学校のとときと同じ……。ただ昔の御仲間おなかまを想って悲しんでいるだけでは無い様な……。）

ピピピピ

エレン「お、風呂が沸いたな。五月、先に入って来いよ。」

五月「あ、は、はい!!」

チャプン

五月「我が家のお風呂よりは広くはありませんが……、何処か温かみを感じますね。まるで、お母さんが傍に居るかのような……。」

五月「イエーガー君が泊まらせてくれることになりましたが……、どの様なお礼をすればよいのでしょうか……。今は考えても仕方ありませんね。」ブクブク

末っ子、一旦考える事を放棄する。

想い人の旧友

エレン「そうか．．．、二乃に会いに行つたは良いものの、追い出されたと．．．。」

風太郎「ああ．．．。」

エレン「取り敢えず、五月はこつちで匿かくまつとく。お前は、自分に出来る事をしな。」

風太郎「ありがとな．．．お休み。」

エレン「ああ．．．。お休み。」

エレン「ふう．．．。前途多難だな．．．。だが、中間試験の認めてくれていた発言が嘘だったとは思えないが．．．。いや、認めていた気持ちと、家族との間に俺達異分子が混ざつた事に対する気持ちが入り混じつたのかもしれない．．．。」

一花『特に二乃、あんな風に見えてあの子が一番繊細だから……。』

エレン「あいつも、色々葛藤して悩んでたのかもしれないなあ……。」

エレン『ミカサ、お前がずっと嫌いだった。』

ミカサ『うう……。』

アルミン『エレン!!よくもミカサを!!』

エレン『お前と俺じゃ、喧嘩になんねえからだよ!!』バキツドゴツ

アルミン『ぐっ!』

アルミン『どつちだよ……。クソ野郎に屈した奴隷は……。』

エレン『ツ……。誰が……。奴隷だ。』

エレン「座標で、一応和解はしたが……。あいつには、俺と同じ思いはして欲しく無いんだがなあ……。」

エレン「こんな時、アルミンだったらどんな考えを出すんだ……。家族を想うミカサならどんな行動に出るんだ……。」

エレン「はあああああー……。 (クソデカ溜め息)」

五月「あ、あの……。」

エレン「ん？五月か……。湯加減どうだった？」

五月「はい。丁度良い湯加減でした。」

エレン「そうか。そいつは何よりだ。で？」

五月「はい？」

エレン「どこから聞いてた？」

五月「な、何をでしようか？」

エレン「会話と、独り言。」

五月「ききききき、聞いていませんよ!!会話など!!」

エレン「動揺しすぎだぞ。間抜け。」

五月「うう……。五月は、こっちでかくま匿つとくからです……。」

エレン「そうか。まあ、いいや。飯が出来たから食おうぜ。」

五月「はい！」

本日の献立：合鴨^{あいがも}焼き

アサリの酒蒸し

大盛蕎麦^{そば}

エレン「よし、完成!!」

五月「こ、こんなに。良いんでしょうか？」

エレン「良いんだよ。じゃあ、食うか。」

五月「はい。」

エレ・五「いただきます。」

五月「!!美味しいです!」

エレン「お嬢様のお口に合って何よりだよ。」

五月「何か、引つかかる言い方ですね。」

エレン「悪い悪い。」

五月「本当に謝っているのですか? 全く・・・」モグモグ

ホーホー

エレン「今日は、色々あつて疲れたな。もう少し書類整理したら、早めに寝るか。」

カラカラ

エレン「五月は・・・、寝てるな。」

五月「(☒☒3☒☒) z z z」

エレン「・・・今日はお疲れさん。お休み、五月。」

五月「・・・う、ううくん。ここは一体・・・？」

五月「辺り一面が砂だらけですね。ですが、何故私は砂漠のような場所に・・・？」

??? 「おはよう。中野五月ちゃん。」

五月「ひゃああ!!!」

??? 「やっぱり驚かれた。だから、いきなり話しかけない方が良いと言ったのに・・・。」

??? 「そんなにいきなりだったかなあ？」

五月「こ、この方々は一体!?フードを被られているせいで、顔が分かりません!!」

??? 「いきなり話しかけて、申し訳なかった。大丈夫？」

五月「ひゃ、ひゃい。あの、貴方達は一体・・・？」

??? 「私達が何者か・・・申し訳ないけど、今はそれに答えられない。」

??? 「強いて言える事と言えば、ここはあの世でも、夢の中でも無い座標という場所。そして、僕たちはエレンの旧友きゅうゆうとでも言っておこうか。」

五月 「旧友・・・。という事は、貴方達はイエーガー君の1000年前の友人という事でしょうか!？」

??? 「まあ、そんな所かな？君をここに呼んだのは、エレンに言伝ことづけてがあるからだよ。」

五月 「言伝ですか・・・?」

??? 「こう伝えて。「あなたを心の底から恨む者などもう居ない。時代が悪かっただけ。自分を追い詰め過ぎないで。少なくとも私達は余生を問題なく過ごせた。過去に縛られ無いで。もっと自由に生きて。」・・・と。」

五月 「は、はい!!」

???「それからもう一つ。近い内に、君はエレンの過去を全て知る事になる。けれども、これだけ約束して欲しいんだ。エレンを嫌わず、傍に居てやって欲しい。もう十分、彼は一人で戦い続けたから。」

五月「わ、分かりました!! イーガー君は、

私が幸せにします!!」

??? 「随分と大胆な発言。」クスクス

五月 「えっ？あつ。こ、これは・・・／＼／＼」

??? 「とにかく、エレンの事は頼んだよ。」

五月 「は、はい。お名前だけでも・・・。」

??? 「また、会えるさ。それじゃあね。」

五月 「え？きやあああー！！！！」↑（突如現れた黒い穴に吸い込まれた。）

??? 「ふう、中々面白そうな子だったね。しかし、良かったのかい？ エレンは君の……。」

??? 「流石に1000年以上経てば、恋心にけじめは付いている。何より、エレンには過去ではなく、今を生きて欲しい。あの娘は、エレンが過去から未来へ歩む為の、懸け橋に成ってくれる筈……。」

??? 「そっか、野暮な質問だったね。」

ミカサ。」

五月「はっ!!夢・・・?」

五月「まだ、真夜中・・・。」

エレン「んぐ。zzz」

五月（イエーガー君の友人は、心の底から恨む者などいない。と仰っていましたね・・・。という事は、イエーガー君は過去に恨まれる様な事をしたという事なのでしようか・・・。あの、優しいイエーガー君が・・・。想像が付きません・・・。）

エレン「・・・めん。」

五月「え?」

エレン「ごめん……。ごめんなさい……。」

五月「イエーガー君!？」

末っ子、想い人の初恋相手&親友と邂逅する。

月下の懺悔と涙と告白

——エレンの夢の中——

目の前に広がる景色は、混沌こんとんとした闇の世界。眼下がんかに広がる物は、無数の骸むくろ。その中には、幼馴染や親友の姿がある。

そして俺は、その無数の骸の頂に立っている。骸の正体は教えて貰わなくても分かる。俺が起こした地鳴らしの犠牲者達や、死んでいった仲間達だ。

自らの引き起こした所業は、世界史の教科書にも描かれていた。あの総理大臣は俺が報告した通りに、あの惨劇を文部科学省に描かせたらしい。

己おのれが犯した罪を客観的に見ると、「何と残忍な行いをしたんだ」と、自己嫌悪に陥ってしまう。

そして、こうも考える。「ユミルは『幸せになって欲しい』と言っていた。だが、自分

は本当に幸せになって良い人間なのだろうか？」と。「進撃の巨人の力で見た未来以外にも、和平の道はあったのではないのか？」と。

骸の一つに触れる。その骸は、難民キャンプに居た少年だった。触れた途端、肉が腐り骨だけの姿になる。

「ほつかりと空いた眼窩は、こよう訴えかける。「何故、お前のような悪魔がのうのと生きているんだ。」と。

少年の骸を筆頭に、次々と数多の骸の眼が呪詛を吐きかける。「時代や環境のせいにするな。早く死んでしまえ。」と。

こんな俺が、被害者面をするのは間違っている。だが、段々と心が蝕まれていく。

やめろ、ヤメロ。

やめてくれ!!!

??? 『・・・ガー君！イエーガー君!!』

誰かが、俺の名を呼びかける。

顔を上げると、無数の骸の先に一筋の光が見える。

助けて欲しい。

今なら、ライナー^あの気持ちも良く分かる。

こんな俺にも救いの手を差し伸べてくれる存在が居るのなら、こう願いたい。

俺を・・・

殺してくれと

エレン「……ん。……五月？」

五月「イエーガー君!!（……また、泣いてる。）」

エレン「……もしかして、うな魔まされてたか？」

五月「は、はい。」

エレン「そうか……。悪かったな。うるさくして。」

五月「い、いえ!!私も夢を見て、目が覚めてしまったので!!」

エレン「……………」。

五月「……………」。

エレン（……………何だよ、この沈黙。）

五月（き、気まずいです……………）

エレ・五「なあ。（あの!!）」

エレン「あー、そつちから……………」。

五月「い、いえ!イエーガー君の方から!」

エレン「……………いや、大丈夫だって。」

五月「え、えーと。お、お散歩に行きませんか？」

エレン「……え？」

エレン「……。」

五月「……。（さ、誘ったは良いものの、何を話せば……。）」

エレン「今日は、満月の筈なんだが……。曇っていて見えないな。」

五月「そ、そうですね。」

エレン「今日は、有り難うな。」

五月「な、何がでしょうか？」

エレン「俺以外の誰かが家に居るなんて、今まで無かったから。」

五月「そ、そうですか。ですが、御礼を言うのはこちらの方です。貴方が泊めてくれないければ、先程の酔われていた男性の様な人に攫さらわれていたのかもしれないのですから。」

エレン「……そうか。まあ、近い内に帰れよ。姉達に心配をかけてやるな。」

五月「……それは、出来ません。今回ばかりは、二乃が先に折れるまで帰れません。」

エレン「……。」

五月「も、もちろんイエーガー君にこれ以上迷惑を掛けない為にも、明日には出て行って……。」

エレン「勘弁してくれ。これ以上、面倒事を起こされたら敵かたわん。」

五月「うう……。も、もう少しだけ居させて下さい！何でも、お手伝いしますので！！」

エレン「……じゃあ、御嬢様には酷こかもしれんが、しばらくの間、泊めてやるよ。」

五月「あ、有り難うございます！！……それから、私は御嬢様ではありませんから……。」

エレン「……というと？」

五月「実は、私達も上杉君の様な生活を送っていたんです。」

エレン「初耳だな。」

五月「今の父と再婚するまでの私達は、極貧生活でした。当然です。五人の子供を同時に育てていたんですから。その頃の私達は、正に五つ子。見た目も性格も殆ど同じほとんどだったんですよ。けれども、女手一つで育ててくれた母は体調を崩し、入院してしまっ

て……。だから、私は母の代わりとなって、みんなを導くと決めたんです。」

エレン「……そうだったのか。」

五月「はい……。そう決めた筈なのに……。上手くいかない現状です。」

エレン（なら、二乃に平手をしようとしたのも、母親を真似ての事か……。）

エレン「その心意義を持つてるだけでも、上出来だろ。」

五月「……そう、でしょうか。」

エレン「……ああ、

実の母親を殺した俺なんかよりも、何百倍もマシだよ。」

五月「え……？そ、それって。」

エレン「五月。」

五月「は、はい！」

エレン「今日、俺を散歩に誘ったのは気分転換っていう訳じゃないんだろ？」

五月「はい……。」

エレン「何故、誘った？」

五月「・・・実は。」

エレン「そうか・・・、俺の知り合いを名乗る者から、座標で『過去に縛られるな』という言伝があつたと・・・。」

五月「・・・はい。」

エレン「その二人の正体に関しては大体想像が付くが、その願いは聞き入れられない。」

五月「そ、それは、イエーガー君が1000年前に行った事が関係しているのですか？」

エレン「ああ……。これから俺が話す事は、全て虚言ではなく真実だ。これを聞いた後、お前はシヨックを受けるだろう。そして、俺という存在に疑念を抱く筈だ。もし、この話を聞いて俺の事が嫌いになったなら、今後俺は一切お前に近づかない事を約束しよう。……聞く覚悟はできたか？」

五月「……はい。」

エレン「……分かった。じゃあ、教えてやるよ。俺が遥か昔に何をしでかしたのか。」

————— エレン side —————

それから俺は、全てを話した。

俺が戦っていたのは、人間ではなく人を捕食する巨人という存在であるという事。

俺は、人間でありながら巨人の肉を身に纏まとい、戦う事が出来る存在であったという事。

王家の血を受け継ぐ者に触れた事で、15歳の頃にこれから己の身に起こる全ての未

来を知ってしまった事。

仲間や親友、家族同然に育った幼馴染を突き放し、人類の8割を虐殺したという事。

そして、自らを全人類の敵に仕立て上げる事で仲間を世界の英雄に仕立て上げたという事。

その未来を実現させる為に、巨人を操り自らの母を捕食させた事。

包み隠さず全てを話し・・・。

こんな事になるなら、死ねば良かったとも言った。

きつと、目の前の彼女^{五月}は俺の事を軽蔑するだろうと顔を上げようとした。

だが、顔を上げるより先に温もりが体を襲った。その温もり^{正体}が分かるのに数秒も掛からなかった。

そこには……。

涙を流し、俺を抱きしめる彼女が居た。^{五月}

——五月side——

最初は信じられなかった。まさか、彼が世界史の教科書に載^のっている、「天と地の戦い」を引き起こした張本人であるなんて。

しかし、彼が？をついているとも思えなかった。勿論、彼のやっていた事は正しい行いではない。

けれども、気が付いた時には涙を流し、彼の体に抱き着いていた。あまりにも彼の生い立ちが辛く、悲しい物であつたから。

まだ、私達と変わらない年齢のときに、自らの未来を約束され、世界中の人々の約割を殺さなくてはならないという映像を見せられ、傷付けたくない筈の御仲間や、家族といえる程の友人さえも傷つけ、拳句の果てには自らの母親を殺してまでも、虐殺を行わなければならぬと言う使命を言い渡された様なものだから。それも、平和の為に。

恐らく、並の人間ならば気が狂ってしまうであろう運命に、涙が堪えられなかった。

座標と呼ばれる場所で、彼の友人が話していた事や、うな魔まされたいた事に合点がてんがいつたと同時に、胸が締め付けられた。

恐らく、彼はこの世界が作られてから、最も不自由な存在であったと言っても過言では無い。

今すぐにでも、「貴方は悪くありません。」「思いつめなくても良いんです。」「あなたの友人は、もう誰も怨^{うら}んでいる人は居ないと言っていましたよ。」「そう言っただけで良かった。」

けれども、私にそんな事を言える心の余裕は今は無くて。ただ、彼を抱きしめるしかなかった……。

エレン「五月……? どうしたんだ?」

五月「……さう。」

エレン「え？」

五月「死ねば良かったなんて、言わないでください．．．っ！だって、余りにも辛いじゃないですか！！未来に縛られて、自分の幸せを顧みないで大罪人に成らなくてはならないなんて！！悲しいじゃないですか！！」ポロポロ

エレン「五月．．．。そう言ってくれるのは嬉しいが、俺は．．．。」

五月「貴方に会わなければ、私は今でも勉強嫌いなままだった筈なんです！！あなたが私を変えてくれたんです！！あなたが居ない世界なんて、嫌なんです！！私の知っているイエーガー君は、優しくして強い人なんです！！平気で人を殺せるような人じゃないんです！！だから．．．、言わないでください。死ねば良かったなんて．．．っ。」ポロポロ

エレン「．．．はあく。悪かったよ。ちよつと、気持ちが悪くなった。」

五月「．．．本当ですか？」グスッ

エレン「ああ……。まさか、俺の事をそこまで思ってくれてるとはな。」

五月（……当然です。だって私はあなたの事が

好きなんですから。」

エレン「……。え？今、何て……。」

五月「え？（……。ま、まさか声に出た!?!）」

エレン「……。五月。今のつて……。」

五月（ど、ど、どうしたら!!!）

らいは『もしも好きなら、焦った方が良いと思いますよ？』

??? 『エレンを嫌わず、傍に居てやって欲しい。』

五月「……っ。あの！イエーガー君!!」

エレン「お、応!?!」

五月「私も、今から自分の気持ちを吐露とろします！ですが、私の独り言だと思って聞いてください！」

エレン「あ、ああ。」

五月「イエーガー君。私は、貴方の事が好きです。友達としてでも、家庭教師としてでも無く、異性として。ですが、貴方には1000年以上前に初恋の相手が居たという事も知っています。」

エレン「……。」

五月「ですから、今すぐにも返事を頂くつもりは毛頭もうとうありません。ですが、この気持ちだけ伝えたかったんです。」

エレン「・・・そうか、有り難うな。けど、すまない。いきなりだったもんで、今すぐに答えを出す事は出来ない。だが、きつと答えを出す。少なくとも、高校を卒業するまでには。だから・・・、少しだけ待っていてくれ。」ナデナデ

五月「・・・はい!!／／／」

エレン「じゃあ、帰ろうぜ。(まだ、完全には吹っ切れる事は出来ない。・・・だが、少しは希望を持ってみようか・・・。こいつの為にも・・・。俺が未来へ進む事を望んでいるかもしれない、あいつらの為にも・・・。)」

五月「はい。帰りましょう。」ニコッ

悪魔の子は罪を吐露し、
末っ子は愛を吐露する

一難去ってまた一難

チュンチュンアサダチュン（へ８へ）

五月「んー。ふわああ。」

AM 6 : 30

五月（昨日は、夜遅くに外出をしてしまったのに、早く起きれてしまいましたね……。）

五月（そして、イエーガー君と……。）

エレン『今すぐに答えを出す事は出来ない。だが、きつと答えを出す。少なくとも、高校を卒業するまでには。だから……。少しだけ待っていてくれ。』

五月「／／／」ボフィン

五月「せ、せつかくこんな時間に起きたのですから、何かお手伝いしないと……。」

——台所——

五月「……？ イエーガー君が居ません……。一体何処に……。」

「……ち、二……ン」

五月（な、何かの声の上の階から……。ま、まさか幽霊!？）

「……ク、チ……ユウ」

五月（で、ですが確かめない事には、始まりませんよね……。行ってみましょう）グツ

——三階——

「……ち、に……さん」

五月（このドアから聞こえますね……。数字でしようか？って、あれは!!）↑（隙間から覗き見る）

エレン「196、197、198……」↑（背筋中）

五月（筋トレですか……。す、すごく引き締まった筋肉ですね……。／／／）

エレン「199、200!!ふう、疲れた。おはよう、五月。」

五月「わああ!!気づいてたんですか!？」

エレン「気配が丸出しなんだよ。朝飯作るから、先に下に行っててくれ。」

五月「は、はい。（い、一生の不覚……。）」トコトコ

因みに朝の献立：わかめの味噌汁・シシヤモの七輪焼き・ひじき煮・白ごはん

五月「あ、あの……。」

エレン「どうした？」

五月「い、いえ！……その、どうして……」

手を繋いでるのでしょうか？／／／

エレン「いや、だって……。お前は昨日俺に告白をした。そうだろ？」

五月「うう……。し、しました。／＼／＼」

エレン「だから、手を繋いでるんだが……。それとも、嫌悪感でも抱いたか？」

五月「い、いえ!!そのような事は……。」

エレン「だったら、問題なくね？」↑（今まで告白された事が無かったので、距離感が掴めて無い奴。）

五月「は、はい／＼／＼。」↑（結構ぐいぐい来る想い人に、戸惑ってる娘）

風太郎「……俺の知らない内に、いつの間に告白して距離が縮まったんだ？」

五月「わあああ!!」

エレン「お、風太郎じゃん。おはよう。いつから居た？」

風太郎「数分前からだよ。」

エレン「あー。ごめんな、気付かなかった。」

風太郎「そうか……。」

エレン「……？ 様子がおかしいな。普段ならキレキレのツツコミが入るんだが……。」

五月「？」

風太郎「そういえばエレン、五月。四葉を知らないか？」

エレン「？知らないな……。連絡先は知ってるだろ？メール入れなかったのか？」

風太郎「いや、昨日は色々と疲れてて……。」

五月「え……。？お二人とも、知らないのですか？」

エレ・風「ん？（え？）」

五月「陸上部の助っ人で、大会前の練習があるそうですよ。」

風太郎「は？」

エレン（……やべえ、胃薬持ってくるの忘れてた。）キリキリ

特に理由の無い暴^胃力が、悪魔の子を襲う
——
!!

悪魔と五女の連携作戦

エレン（俺は今、五月に誘われて服屋に来ている……。なぜこうなったのかと言うと……。）

——電話中——

エレン『やつぱり、三玖もそう思うよな……。』

三玖『うん……。フータロー、なんか裏やぶれてつてる感じ……。エレンはどう思う？』

エレン『気丈に振る舞ってはいるだろうが……。少なくとも冗談抜きで、あいつの精神状態は追い込まれているな。』

三玖『そうだよね……。ごめんね……。私が二乃と喧嘩しなければ……。』

エレン『終わった事を嘆いても、仕方がない。取り敢えず、風太郎とかの事はこつちで何とかするから、お前と一花、四葉は……陸上部に行つてから無理か……。取り敢えず、二人だけでも勉強しといてくれ。複雑な事は、俺たち家庭教師に任せとけな?』

三玖『うん……。二乃と五月をお願い……。!』

エレン『了解。(何やかんや言つても、姉妹なんだよなあ……。)』ツーツー

五月『……。あの、イエーガー君。少し御相談が……。』

エレン『相談?』

エレン『風太郎を過去から解き放ちたい?』

五月『はい。恐らく彼は、五年前の事と今回の件が合わさって、雁字搦がんにしがらめに成つてい
ると思うんです。』

エレン『それで、お前がその子に変装をして、風太郎の前に進んで欲しいとお願ひす
るわけか……。』

五月「き、着替えましたが、如何いかがでしょうか？」

エレン「よし、白のコートに帽子。良いチョイスだな。これで五月だって事は、バレ
ないだろう。後は、染髪だな。ユイさん頼むぜ！」

ユイ「はいはい、任せなさい。じゃあ、私の家で染めていくわよ。」

渡辺家

ムロ「……で？なんで俺が呼ばれたわけ？」

ユイ「あんた、大学生の頃、頭髪を染めてたらしいじゃない。昔取った杵柄きねづかで、宜しく。」

五月「よ、宜しくお願いします!!」

ムロ「はあく。まあ良いけどさ。」

エレン「ちよつとでもミスったら、(自主規制)しますからね。」

ムロ「怖すぎるんだが!？」

ムロ「よ、良し!こんな感じか?嬢ちゃん。」

五月「はい!有り難うございます!!」

エレン「それにしても、付け焼刃の作戦だからな。成功確率は40・・・いや、良く

て30%程度かもな。それでもやるか？」

五月「はい……。」

エレン「そうか……。じゃあ、俺は二乃の所に。」

五月「では、私は上杉君の所に。氷室さんも渡辺さんも、有り難うございました。」

ムロ「どういたしまして。」

ユイ「頑張つてね。」

湖

風太郎「試験まで、残り四日……。どうしたら、あいつ等が纏まってくれるんだ……。」

風太郎「ここで俺が溺れたら、全員心配して集まってくれたりして……。あ、やばい考え方してるぞ俺……。でも、もしかしたら……。」

風太郎（いや、ありえねー。そんな訳無い無い。……俺のやり方が、間違ってたんだ。信用されて、頼られて、勘違いしていたかもしれない。他人の姉妹の中を取りもとうだなんて、今の俺には過ぎた役割だった……。）

風太郎『いや、むしろ……。』

二乃『あんたなんて。来なければ良かったのに。』

風太郎（そうだ、最初から間違ってた。ただ勉強してただけの俺は、何の役にも立たない。）

風太郎（中間テストで二乃がやる気になったのも、全部エレンのお陰だ。）

風太郎（・・・もしも、あいつが家庭教師なら、こんな事には成らなかつたんじやないのか・・・。人を見る目がある、あいつなら・・・。）

風太郎「あいつらに、俺は不要だ。」

ザアアア

??? 「また、落ち込んで。やっぱり君は変わらないね、上杉風太郎君。久しぶり。」

風太郎「・・・あー、はいはい。久し・・・ぶり・・・だなつ。ああ！俺、今から用事あるから、じゃあな!!」

??? 「全然思い出せてないでしょ。おかしいなー、頑張つて当時を再現してみたんだけど。」

風太郎「つーか、そう顔を隠されたら、思い出せるもんも思い出せん。」

??? 「あー、これは許して欲しいな。こっちにも事情があつてね。あ、そうだ。これならどうかかな？」

風太郎 「・・・！もしかして、そのお守り。京都の・・・。」

風太郎 「え、えっと、元気そうで何より・・・。」クルツ

??? 「？」

風太郎 「（・、口・） ㄥㄥ」ダツシユ

??? 「え!? どうして逃げるの？」

風太郎 「俺は、まだお前には会えない!!」

??? 「なんで！（かくなる上は・・・）」バシツ

??? 「生徒手帳れを返して欲しかったら、言う事聞いてね。」

風太郎 「くっ……。卑怯だぞ！」

??? 「そうだなあ。もう逃げられない様に……。あ、良いの発見。あれ乗ろっ。」

??? 「ほーら、あそこまで着いたら返してあげるよ。」

「ハア……。ハア……。もう限界……。ギーコギーコ

風太郎（信じられん。本当に目の前に、あの子がいるなんて。そうだ、名前をまだ……。）

風太郎 「……。名前……。知らない。」

??? 「えっ？ 私？……。そうだなあ。じゃあ……。零奈れな。私は零奈。五年ぶりだね。」

風太郎「零奈……。」

零奈「風太郎君も、元気そうで安心したよ。イメチェンはびつくりしたけど。高校デビュー？」

風太郎「……。なんで、ここに……。」

零奈「今の君に会う為。聞いたよ。あれから頑張つて勉強して学年一位に成つて、今は家庭教師してるんだつてね。凄いよ。」

風太郎「……聞いたつて、誰に!？」

零奈「こ、細かい事は置いといて、どんな生徒さんなの？教えてよ。」

風太郎「む……。信じて貰えるか分からないんだが、教えてるのは同級生の五つ子で……。」

零奈 「うんうん。」

風太郎 「意外と驚かないんだな。」

零奈 「あ！五つ子って本当にいるんだ！ドラマとかでしか見たことないよ！」

風太郎 「・・・そいつらが困った事に、馬鹿ばかりなんだ。」

風太郎 「長女は、夢追い馬鹿。どうせ叶いつこ無いと言つてはいるんだが。ま、根気だけは有るみたいだな。だが馬鹿だ。」

風太郎 「次女は、身内馬鹿。こいつは姉妹鼻根で、すぐ噛みついてくる。・・・だけかと思つてたが、今は良く分からない。だが馬鹿だ。」

風太郎 「三女は、卑屈馬鹿。はじめは暗くて覇気の無い顔をしてたんだが。近頃は見るたび生き生きして、安心できる。だが馬鹿だ。」

風太郎「四女は、脳筋馬鹿。やる気もあつて頼りになるが、一番の悩みの種だ。それに・・・、いや、俺の思い過ごしか・・・。だが馬鹿だ。」

風太郎「五女は、真面目馬鹿。こいつとはまず相性が悪い。だが本当はやれる奴で、補佐をしてくれてる、助っ人のお陰で成長はしてきている。だが馬鹿だ。」

風太郎「と、まあこんな所だが。・・・？」

零奈「／＼／＼」

風太郎「どうした？」

零奈「ううん、何でもないよ。でも、そうだなあ。びつくりした。真剣に向き合ってるんだね。きっと君はもう、必要とされる人に成れてるよ。」

風太郎「五月にも、同じ事言われた。」

二乃『あんたなんて、来なければ良かったのに。』

風太郎「いや・・・、俺はあの日から、何も変わっていない。」

零奈「・・・。そつか、じゃあ・・・君を縛る私は消えなきやね。」ボソツ

風太郎「・・・？何て・・・？」

ドツバアアア

零奈「噴水だ！」

風太郎「普通に危ねえ・・・。」

零奈「冷たーい。逃げろー！」

風太郎「また、俺任せかよ！」

零奈「風太郎君、遅ーい。」

風太郎「お前も少しは手伝え！」

ギコギコ

風太郎「つ．．．、疲れた．．．。」

零奈「お疲れ様、よいしょ。じゃあ約束通り、これは返すね。でも、写^こ真^れは返してあげない。」

風太郎「は．．．？どうして．．．。」

零奈「私は、もう君には会えないから。」

風太郎「なっ……！俺を呼び止めておいて、どういう事だ！待ってくれ！」

零奈「……」ゴソゴソ、ヒュツ

風太郎「！」

零奈「自分を認められるようになったら、お守^そり^れを開けて。」

風太郎「なっ……、どういう……待……！」グラツ

零奈「……さよなら。」

五月「これで、上杉君が前に進んでくれるなら……っ。ごめんなさい、上杉君。」

——ホテル——

エレン「いい部屋だな。流石はブルジョア。」

二乃「それでしょ……。っ。って、何でエレン君まで此処に居るのよ！というか、どうやって入った!!」

エレン「ナノマスクとウィッグ使って、お前に変装しただけだけど？」

二乃「ガバガバセキュリティ!!」

エレン「ははっ！結構元気にやってるっぽいじゃねえか!!ホームシックに成ってるかと思つて、損したぜ！（＾皿＾）m9」

二乃「う、うるさいわね!!」

エレン「で？」

二乃「・・・何よ。」

エレン「いつに成ったら帰つて来てくれる訳？」

二乃「か、帰らないわよ・・・。あんな家・・・。」

エレン「どうだろうな。今のお前には迷いが見える。吹っ切れて無いんだろな。」

二乃「何よそれ。兵士の勘つて奴？」

エレン「まあな。日常的に血生臭ちなまぐせくて、いつ誰が裏切るか分からない状況に居れば、次第に人を見抜けるようになる。」

二乃「そ、そう……。」

エレン「それに、お前がキレた原因は、五月がビンタしようとしたからじゃないだろ？まあ、半分それが原因だと思うが……。」

二乃「はあく。やっぱりエレン君は、何でもお見通しね。」

エレン「というと？」

二乃「……私達が同じ外見、同じ性格だった頃、まるで全員の思考が共有されている様な気でいて、居心地が良かったわ。でも、五年前から変わった。みんな少しづつ離れて行つた。一花が女優をしていたなんて、知らなかったわ。まるで、五つ子から巣立って行く様に、私だけを残して。私だけが、あの頃を忘れられないまま、髪の毛の長ささ

え変えられない……。」

二乃「だから、無理にでも巢立たなくちゃいけない。一人、取り残される前に。」

エレン「……ッ。ククク……。」

二乃「な、何よ！」

エレン「アーハッハハハ!!!」

二乃「ちよつと!!何で笑うのよ!こっちは真剣に話したのに!!」

エレン「クツクク……。わ、悪かったな。だが、本当に違っているとと思うのか？」

二乃「え？」

エレン「俺は、お前らと出会って数日しかたっていないが、根っこの部分は瓜二つだぞお前ら。いや、瓜五つか？」

二乃「はあ!?!何処を見てそう言えるのよ!!」

エレン「意外と泣き虫、母親の事を大事に思う、勉強が苦手。」

二乃「うゝっ」

エレン「そして……。家族を思い合うが故に、過去に縛られている。」

二乃「……。」

エレン「今から話すのは、多くの別れを経験した、しがない爺じいの個人的すぎる願望だ。だが、頭の片隅に入れといて欲しい。」

エレン「……喧嘩別れをするな。どうせ離れ離れになるなら、悔いのないように笑顔で別れて欲しい。お前には……俺と、同じ轍ちくを踏んで欲しくない。」

二乃「……。」

エレン「じゃ、言いたい事言ったから帰るわ。あ、それから。」

二乃「？」

エレン「この前は悪かったな。お前の気持ちも知らずに、怒鳴っちゃって。」

二乃「あ、いや。別に……。気にしてないわよ……。こっちも破っちゃって、ごめん。」

エレン「謝るのは俺じゃなくて、風太郎にだぞ。じゃあな。」

バタン

二乃「……。」

エレン「……さて、お疲れ様。五月。」

五月「はい……。」

エレン「元気がないな。」

五月「だ、大丈夫です！」

エレン「あー、もう！」ギョツ

五月「んむ？んえーあーんん!?（訳：イエーガー君!?!）」

エレン「馬鹿真面目な、お前の事だ。どうせ、風太郎を騙した事と、風太郎と本来出会っていた、姉に罪悪感を抱いてたんだろ？」

五月「……。」

ポ
ン エレン「今日は、思いつきり泣け。んで、明日から心機一転頑張ってくからな。」ポ
ン

五月「……はい。」グズツ

悪魔の子、メンタルケアラーと化する

勝ち取る自由と、仲直り。

運動場

エレン「あそこに居るのが、陸上部だな……。」

五月「その様ですね……。あのポニーテールの方が、部長でしょうか？」

エレン「ああ、江場っていう奴でな。強引な事で有名なんだよ。」

五月「く、詳しいですね。」

エレン「俺も、四葉みたいに部活の助っ人に呼ばれる事が多いからな……。」

五月「あ、成程……。」

エレン「しっかし、あの陸上馬鹿め……。強引さは相変わらずだな。」

五月「イエーガー君は、勧誘などはされたのですか？」

エレン「何回かされたよ。余りにもしつこいから、少しお話しして黙らせたけど。」

五月「お話ですか……。 (そ、想像はしない方が良いでしょうね。)」

エレン「あいつの場合、陸上の事しか頭に無いもんだから、「テスト期間を踏み潰しても、練習練習!!」ってうるさいんだよな……。四葉も面倒な奴に目を付けられちゃまって……。」

五月「四葉は、昔から断れない性格をしていますから……。」

エレン「……だろうな。」

五月「それで、どうするといふのですか？」

エレン「基本的な戦術を使う。」

五月「せ、戦術？」

エレン「本物の戦争においては、周囲を囲みつつ敵勢力の補給路を断つ。そうすると、敵は勝手に瓦解していく。実際に俺も、一回その戦術を、ウォールマリア奪還作戦っていう任務で、使われかけたからな。」

五月「えーと、つまり……？」

エレン「敵対勢力を揺らがし、潰すには周りからだ。あの部長に関する情報を、片っ端から集めていく。そして、弱みがあればそれを握り、不満がある部員が居れば、こっちに引き入れる。」

五月「な、成程……。」

エレン「そうと決まれば、すぐに実行するぞ。」

五月「ええ!?!今からですか!?!」

エレン「自慢じゃねえが、これでも顔は広いんだよ。思い立ったが吉日、さつさと行くぞ。」

1年生A「あの、イエーガー先輩。お久しぶりです。」

エレン「悪いな、こんな時間に来てもらって。最近どうだ?」

1年生B「はい!前に先輩がアドバイスしてくれたフォームで走った結果、見事レギュラー候補に成れました!今年は無理だろうけど、来年は駅伝にも出れるだろうって!!」

エレン「そりゃあ良かった。・・・で?勉強の方は如何なんだ?」

1年生C「……まあまあ、ですかね。」

エレン「そうか、少なくとも好成績は残せていないと……。」

1年生B「す、すみません！折角イエーガー先輩に勉強も含めて、色々教えて貰ったのに!!」

エレン「気にすんな。それにどうやら、成績不振になっているのはお前の問題でもない筈だ。」

1年生A「と……、言いますと？」

エレン「江場部長の、横暴なスケジュールに振り回されてんだろ？」

1年生B「……はい。一応、部長には話したんです。「もうそろそろで期末試験だから、早めに帰らせてくれ」って。」

エレン「部長は何て？」

1年生C「駅伝以上に重要な事なんて、今は無いよ！」と、言っていて……。」

エレン（駅伝が上手くいっても、赤点取ったら留年の危機じゃねえか……。あー、もう!!この時点で胃痛と頭痛がして、考えが纏まらない!!アルミーン！ミカサー!!あの世からキャベジ○コーワα送ってくれ!!）

エレン「今日は有り難うな。あ、それからこの機械を部室に持ってつてくれ。部活が終わったら捨てて良いから……。」キリキリ

1年生A「何ですか、これ？」

エレン「気にしなくて良いから。」

1年生B「わ、分かりました。」

エレン「……」

——エレン宅——

江場『朝の乱入者はあつたものの、今日は一日お疲れ様。だけど、皆まだまだ伸びしろがあると感じたよ。』

部員『中野さん、この後どっか行く?』

四葉『ごめんなさい。勉強したいので……』

江場『そこで……、この土日で合宿を行う。』

四葉『えっ?それはちよつと……』

1年生『土日は、休みだったと思うんですけど……?』

江場『あのね、一年生。そんな甘い考えじゃ、大会二連覇は出来ないよ。』

1年生『す、すみません!』

部員『合宿って……、どうする?』

部員『でも、何か楽しそう。』

部員『江場先輩も、やる気だし。』

部員『試験も、赤点さえ取らなきゃ良いもんね。』

江場『中野さん。貴方は走る為に生まれたきたの。私が、貴方を立派なランナーにしてあげ』ブチツ

エレン「1年坊に盗聴器を運ばせたが……。つたく、何が「走る為に生まれてきたの」だよ。相変わらず、視野の狭いクソガキが……。」

五月「全くです!! どうして、赤の他人のあの人に四葉の未来を決められなければならないのですか!!」

エレン「本当にそれな。とは言え、善は急げだ。早めに行動に移すぞ。(こんなに早く情報が集まるとは思わなかったがな・・・。)」

翌朝

エレン「おつす、お前らも来たな。」

五月「いよいよですね。」

一花「上手くいくかな・・・。」

風太郎「出来る出来ないじゃなく、やるしかないだろ。」

一花「あはは・・・、エレン君みたいなこと言ってる。」

プルルル♪

一花「え？どうしたの、三玖？助けて欲しい？」

エレン「おいおいおい、何してんだよ。トラブルか？」

風太郎「陸上部の奴等が、もうすぐ合宿に出発しちまう。つたく、試験前だったのにとことん勉強を疎かにしやがって……。」

五月「あなたの事なので、また突撃するのかと……。」

風太郎「……。」

五月「どうしましょう。直接お願いしに行きますか？」

エレン「お願いして、通じる様な奴だと思ってるのか？走る事しか頭に無い、脳筋ラニンング宇宙人を相手にする様なもんだぞ。」

一花「ひ、酷い言われよう……。ごめん三玖。こつちも手が離せなくて……。」

風太郎「待て一花。丁度良い、そのまま三玖を連れて来てくれ。」

一花「でも……。」

風太郎「これは、四葉の為でもある。急いでくれ。」

一花「……………分かった！待ってて！！」

五月「？」

風太郎「四葉が断れないなら、お前たちがやれば良い。」

エレン「おい、まさか……。」

風太郎「ああ、恐らくお前が想像してる奴だ。」

五月「え、えつと。何の事でしょう？」

エレ・風「ドツペルゲンガー作戦。」

五月「・・・！わ、私は少し苦手です・・・。前に一花の真似をした時も、心臓バクバクでした。」

風太郎「だから三玖を呼んだんだ。」

エレン「確かに、姉妹の中で変装のクオリティは、一番高いもんな。到着したら、五月のジャージを着て貰うって事か。」

風太郎「そういう事だ。となると、俺が本物の四葉を連れ出して・・・。」

エレン「風太郎!!」

風太郎「ど、どうしたんだよ!!」

エレン「んな事言ってる間に、出発しかけてんぞ!!」

風太郎「げっ! 駅に着く前に、どうにかしなければ。やりたくもない部活で、貴重な土日を潰されてたまるか!!」

五月「しかし、どうするんですか?」

エレン「……丁度、黄緑の布持ってるんだよね俺。」チラッ

五月「え?」

風太郎「……」ジー

五月「……え?」

五月「あはははは……。」ヨツバリボン、ソウチャクカンリヨウ!!

風・エレ（不安しかねえよ……。）

五月「一身上の都合により退部を希望します。」

風太郎「違う！もっとアホっぽく！」

五月「む、無理です！もうこんな役やめたいですう〜!!」

風太郎「それだそれ！五月、今のお前は四葉だ！誰がどう見ても四葉だ！」

五月「上手くいくでしょうか……。」

エレン「……」

風太郎「取り敢えず作戦はこうだ」カクカクシカジカ

エレン「つまり、どうにかして風太郎が陸上部から四葉を引き剥がし、その隙に五月が成り代わって退部をしたいと部長に伝えるか……」

エレン「風太郎、率直な意見述べても良いか？」

風太郎「どうした？不備でもあったか？」

エレン「この時点で、不備だらけだぞ……。五月の髪の長さを見ろよ？どう考えても四葉じゃねえだろうが……」

風太郎「そうか？少なくとも俺から見たら四葉そのものだが……」

エレン「風太郎。この件が終わったら、MRI検査で後頭葉

「大脳の後頭部で、主として 視覚に関係する領域撮つて貰え。」

風太郎「何でだよ！まあ、取り敢えず……。」スウー

エレ・五「？」

風太郎「痴漢だー！痴漢が出たぞー！！」ダツシユ！！

エレン「はあ!？」

五月「ま、まさか……。」

部員「え？痴漢？」

部員「まさか、あの人……。」

四葉「その人、止まりなさい!!」

部員「中野さん!？」

エレン「……風太郎。なんつーアホな作戦だよ……。取り敢えず、行つてこい。」

五月「は、はい。」

五月「ハア、ハア。あはは……。逃げられちゃいました。」

部員「もー、いきなり走り出したから、びっくりしたよ。」

部員「早くしないと、予定の電車行っちゃうよ。」

五月「すみません……。私、合宿にはいけません。」

江場「え？あなた……。何やってるの？」

五月「私、部活を辞めたいです……。」

江場「……！なんで？」

五月「来週は、試験ですし……。」

江場「違う違う。私が言いたいのは、何で別人が中野さんのフリしてるの？」

五月「あれっ……？」

エレン「頭痛い、胃が痛い……。」ブツブツ

通りすがりの男の子「ママー、あの人なにか言ってるよー。」

母親「しっ！見ちゃ駄目よ!!」

五月「わ、私は四葉ですよー。このリボンを見て下さい。」

江場「うん。似てるけど、違うよ。」

風・五（ど、どうして……。）

江場「だって、髪の毛の長さが違うもん。」

エレン（五月は兎も角、風太郎の奴なんでたまに、3阿の呆倍数になるんだよ……。仕方ない、行くか……。）

江場「あんなにやる気があった、中野さんがそんな事言うはずないもん。中野さんは五つ子だって聞いたよ。貴方は姉妹の誰かなのかな、何でこんな事するのか？」

五月「そ、それは……。」

エレン「おい、少し良いか？」

五月「い、イエーガー君……」

江場「あれっ？君は確か、エレン・イエーガー君だったかな？」

エレン「久しぶりっすね江場さん。相も変わらず、素晴らしい御指導をなさってるよ
うで。(皮肉)」

江場「君が言うと、随分な皮肉に聞こえるね。君も四葉さんを辞めさせたくて、ここに
来た訳？」

エレン「へえ？陸上の事しか頭に無かったと思っただけど、そこまで推理する事が出来
る脳味噌が残ってたとはな、実に驚いた。」パチパチ

江場「相変わらず、癩しかくに障る言い方をしてくるね。他人を馬鹿にすることしか頭に無
いのかな？」

エレン「テストのテの字も、思考回路に組み込まれて無い様なあんたと、比べないで欲しいな。実に不愉快だ。まあ、こちら側が騙したのは事実だ。そこは謝ろう。」

江場「へえ？随分素直だね。じゃあ、四葉さんを出してもらえる？こつちは君と違って、暇じゃないんだ。」

エレン「人の話を碌ろくに聞けねえようなあんたに、四葉を任せる事は出来ないな。それに、これはどういう事だろうな？」

録音テープ『この土日で合宿を行う。中野さん。貴方は走る為に生まれたきたの。私
が、貴方を立派なランナーにしてあげる。』

エレン「他人の意見も碌ろくに聞けねえような奴が、良く部長なんて務められるな。それとも何か？お前の様なリーダーシップの欠片も無い奴が務められるほど、陸上の世界ってのは甘いもんなのか？」

江場「さつきから、黙って聞いてれば聞き捨てならないね。陸上は、私達にとって重要な物なの。君にどうこう言われる筋合いは無い。」

エレン「ああ、そうだな。だが、四葉の人生を決めるのはあんたじゃ無い筈だ。だから、本人に聞いてみようぜ。どうしたいのかをな。」クイツ

四葉「お待たせしました。皆さんご迷惑おかけしました。」

五月「！（よ、四葉……。）」

エレン「……。」

部員「中野さん。」

部員「今度は、本物ですよね。」

四葉「あはは、ちよつとしたドツキリでした。五つ子ジョーク。」

五月「よ、四葉……。」

エレン「おい……。(小声)」

五月「イエーガー君。ですが……。(小声)」

エレン「今は、傍観するときだ……。(小声)」

江場「なんだ、冗談だったんだね。でも、笑えないからやめてよ。中野さんの才能を、放って置くんたて出来ない。私と一緒に、高校陸上の頂点を目指そう。」

四葉「まあ……。」

私が辞めたいのは本当ですけど。」

江・五「!!」

風太郎「え……?」

エレン「……。」

江場「な……中野さん?なんで……」

四葉? 「何でって、調子の良い事言つて、私の事考えてくれないじゃないですか。そもそも、前日に合宿を決めるなんて、ありえませんか。」

四葉? 「マジ、ありえないから。」

江場 「はい……。ごめんなさい。」 ドサツ

エレン 「よーし、お前らお疲れー!!」

五月 「三玖、間に合ったのですね。」

三玖「私は、何もしてない。」

五月「ええ!?!」

一花「私達はカツラがないと、髮型的にねー。」

風太郎「五．．．四．．．一．．．三．．．まさか．．．。」

一花「私がホテルに着いた時、はさみ鋏を持って、三玖が立ち尽くしていたの。詳しくは分からないけど、きっと何か、気持ちの変化があつたんだね．．．。二乃。」

エレン「しっかし、バツサリ切つたな。」

一花「もしかして、失恋ですかー?」

二乃「．．．ま、そんなとこ。」

エレン「あらやだ、奥さん聞きました!?!」

一花「聞いた聞いた!三玖、知ってる?」

三玖「知らない。」

二乃「内緒よ。」

風太郎「……。」

二乃「何?言っとくけど、あんたじゃないから!」

風太郎「お、おう。」

二乃「分かったわね。(さようなら。キンタロー君。そして、さようなら——)。(」

二乃「……それから、エレン君。」

エレン「どうした？」

二乃「エレン君は度々、悔いのない選択をしてるか私に聞いてきた。今までは、悔いのない選択をしたって言い張って来たけど、私はまだこの五人で一緒にいたい。いつか、バラバラの道を歩むことになっても、笑顔でいられるように。その為にも、私は家に帰るわ。これが真正正銘、私の悔いのない選択よ!!」

エレン「その言葉に……、二言は無いな。」

二乃「ええ!!」

エレン「そうか……、良い目をするようになったじゃねえか。」

二乃「ありがと。それから四葉。私は言われた通りやったけど、これで良いの？こんな手段取らなくても、本音で話し合えば彼女たちは分かってくれるわ。」

二乃「あんたも変わりなさい。辛いけど、良い事もきつとあるわ。」

四葉「……うん。行ってくる。」

一花「付いてこうか？」

四葉「ありがとう。……でも、一人で大丈夫だよ。」

二・五「……五。」

五月「あの……。」

風太郎「おい、二乃！こいつはな……。」

エレン「おーい風太郎。帰って期末試験の勉強すんぞ。」

風太郎「え？」

一花「そうそう、私達はこっちだよ。」

三玖「期末試験の対策練ろ。」

風太郎「・・・だな。だが、試験の心配ならしくて良い。俺に、取って置きの秘策がある。」

一・三・エレ（秘策？）

五月「二乃・・・、先日は・・・。」

二乃「待つて、謝らないで。あんたは間違つてない。悪いのは私、ごめん。あんたが間違つてるとすれば・・・。すぐに手を上げようとした事よ。まあそれも、エレン君に阻止されたけど・・・。すごく怖かった。」

五月「二乃お……。」ジワッ

五月「そ、そうです。お詫びを兼ねて、これを渡そうと思つてたんです。この前、二乃が見たがつていた映画の、前売り券です。今度、一緒に行きましょう。」

二乃「全く……なんなのよ。思い通りにいかないんだから。」

物陰

エレン「何とかなつてよかつたぜ……。」

一花「そうだね。フータロー君もそうだけど、エレン君も本当にありがとう。」

エレン「どういたしまして。それにしても、一花。」

一花「ん？どうしたの？」

エレン「あの二人の空間が、俗にいう「百合は尊い」って奴なのか？」

一花「んー、多分違うと思うな・・・。」

悪魔の子、喧嘩した仲を修復したが、世俗にはまだまだまだ疎い。

家族という事以上に、幸せな事は無い。

——中野家・玄関——

四葉 「この度は、御迷惑をお掛けしまして……。」

一花 「朝から大変だったねー。」

五月 「早朝だったので、ご飯を食べ損ねてしまいました……。」

四葉 「全ては、私の不徳の致す所です……。」

一花 「帰りに買ってくれば、良かったかなー。」

三玖 「でも今日は、シェフが二人もいる。」

二乃 「誰がシェフよ。」

エレン「あれ？もしかして、俺もシエフの頭数に入ってる？（：、㇗：、；）」

三玖「・・・そうだけど？」

エレン「・・・そ、そうか。」

四葉「大変、申し訳なく・・・。」

一花「その前に・・・、お帰り。」

二・五「・・・ただいま。」

二乃「早く、入りなさい。」

五月「お先にどうぞ。」

風太郎「忘れてないだろうな。明後日から期末試験だ。文句ある奴いるか？」

一花「も、もちろん。そう言おうとしたよねえ（；▽、）」

四葉「……。もー、みんな聞いて……。」

エレン「って、まだ土下座してたのかよ！」

風太郎「いつまで、そんなこと気にしてんだ。早く入れ。」

三玖「じゃあ、四葉が朝食当番。」

一花「さっ、行こ！」

四葉「うんっ！」

エレン「えー、俺も作りたかったな（・3・）。」

四葉「じゃあ、一緒に作りましょう（≡▽≡）!!」

エレン「よっしゃー（・▽・）bグツ!!」

朝の献立：おむすび、エレンの自家製野菜のサンドイッチ

エレン「そーいや、あの^江脳筋部^場長^{さん}とはどうなった？」

四葉「あの後、ちゃんとお話しして、大会だけ協力してお別れする事になりました。」

エレン「んー。もうちよい俺も、お話しした方が良かったか・・・？」

五月「イエーガー君が言う「お話し」がどの程度か、想像がつかないのですが・・・。」

エレン「そりゃあ、（自主規制）して、（自主規制）するだけだけど？」

一花（二乃が行って来てくれて良かった・・・。）

三玖（エレンが行ってたら、どんな事になってたか・・・。）

二乃（自分で言うのもなんだけど、ナイスファインプレーだわ。私。）

風太郎「大会も、断っちまえば良かったのに。」

四葉「一度お受けした以上、それは出来ません。」

五月「あの部長、諦め悪そうですし・・・。」

二乃「また何か言われたら、教えなさい。エレン君の（自主規制）程では無いにせよ、今度こそ教育してやるわ。」

四葉「ありがと、二乃（*^_^*）。」

四葉「でも、今度は一人でやってみる！」

二乃「あつそ。」

風太郎「さて、本題に移ろう。」

三玖「とりあえず、問題集は終わらせてるみたいだけど。」

一花「私達、ちゃんとレベルアップしてるのかな・・・。」

風太郎「元が村人レベルだからな、ようやく雑魚を倒せるレベルになったくらいか。」

エレン「この土日、チートアイテムを使ってでも、レベル上げしないとイケねえな。」

三玖「フータロー。確か秘策があるって、言ってたよね。」

風太郎「ああ、これは村人のお前らでも、ボスを倒す事に出来るチートアイテム：。」

風太郎「カンニングペーパーだ!!」

エレン「風太郎!お前マジで言ってるのか!?軽い冗談で言ったのに!!」

五月「あ・・・貴方は、そんな事しないと思ってたのに・・・。」

四葉「そんな事して点数を取っても意味ないですよ・・・。」

風太郎「じゃあ、もつと勉強するんだな!こんな物使わなくて良い様に、最後の二日間は俺とエレンで、みっちり叩き込む!覚悟しろ!!」

風太郎「・・・というように進めさせて頂きますが・・・、いかがでしょう?」

エレン（いや、そこで日和んじやねーよ！）

二乃「何それ。今まで、散々好き勝手やってきた癖に……。やるわよ、宜しく。」

エレン「一花、あれは……。」

一花「間違いないね……。」

エレ・一（ツンデレに成ってきてる……？）

二乃「始めるわよ。机、片づけて。」

一・三・四・五・エレ「はい。（ういーす。）」

風太郎「……。」

四葉『全部間違えてました。』
（≡▽≡）

三玖『頭良いつて言つてたけど、こんなもんなんだ……。』

一花『なんで、お節介焼いてくれるの？』

五月『あなたからは、絶対に教わりません。』

二乃『あんたなんて、来なければ良かったのに。』

風太郎「……。」

エレン「どうした？ 妙に、黄昏たそがれてるじゃねえか。」

風太郎「いや……。」

三玖「良かったね、フータロー。」

風太郎「まだ……、ここからだ。」

——上杉家前——

エレン「風太郎!! 起きろ〜! あつ、勇也さん。おはようございます!」

五月「勇也さん、おはようございます。」

勇也「おつ! 五月ちゃんに、エレン君か! ちよつと待つててな!!」

《数分後》

勇也「風太郎! 起きやがれ!!」

風太郎「うるせー! こつちは寝てねーんだ!!」

らいは「すみません、お二人とも。お待たせ致しました。」

勇也「ほら、風太郎。シャキツとしろ!!」

風太郎「いでっ!」

勇也「今日は、期末試験か! 風太郎は勿論、エレン君に五月ちゃんも頑張つて来いよ!!」

らいは「頑張つてね!」

五月「はい!!」

エレン「サーイエツサー!! よし、二人とも車に乗りな!!」

風太郎「ああ。(いよいよだな・・・。)」

三玖「ついに、当日だね。」

一花「大丈夫かなー？」

エレン「練習したことを、ぶつければ良いだろ!!」

四葉「イエーガーさんの言う通りだよ!!やれる事はやったんだよ!!」

五月「悔いの残らないようにしましょう。」

二乃「……。」

二乃『え!?赤点でクビの条件って、今回は無いの?』

風太郎『言われては無いな。ま、気楽に行こうぜ。』

二乃（早く言いなさいよ。深刻な顔してたから、勘違いしたじゃない。）

チャイム君「テストだー！テスト10分前だー！！」キーンコーンカーンコーン

三玖「10分前だ。」

二乃「じゃあ、みんな健闘を祈るわ。」

四葉「あれ？まだ、上杉さんが居ないよ？」

エレン「らいはちゃんに電話してくるってよ。」

一花「こんな時に？」

エレン「ああ。去年なら、テスト30分前には座ってたのに・・・。」

五月「きつと、今じゃないといけないのでしょうか。自身の携帯は充電切れなのに、私の物を借りて行った程ですから・・・。」

マルオ『そうかい、報告ありがとう。』

風太郎「ええ、五人とも頑張っていますよ。これは、本当です。」

マルオ『では期末試験、頑張ってくれたまえ。』

風太郎「そこで、勝手ですがお願いがありまして……。」

マルオ『何なんだい？』

風太郎「……。今日をもって、家庭教師を退任します。」

マルオ『……。』

風太郎「あいつらは、頑張りました。この土日なんて、殆ど机ほとんの上に居たと思います。しかし、まだ赤点は避けられないでしょう。苦し紛れの策を案じましたが、あんな物に頼

らない奴だつて事は、良く知っています。」

マルオ『今回は、ノルマを設けて無かつたと記憶しているが……。』

風太郎「本来は、回避できるペースだつたんです。それをこんな結果にしてしまったのは、自分の力不足に他なりません。」

風太郎「ただ、勉強を教えるだけじゃ駄目だつたんだ。あいつらの気持ちも考えてやる家庭教師……そう、エレンの様な。俺には、エレンあいつのやつてる事が出来ませんでした。エレンを、正式な家庭教師に任命してください。お願いします。」

マルオ『そうかい、引き留める理由はこちらには無い。君には苦勞を掛けたね。では、失礼するよ。』

風太郎「はい……。では、失礼します。」

ツーツー

風太郎 「二花、二乃、三玖、四葉、五月。お前らが、五人そろえば無敵だ。頑張れ。」

風太郎 「そして、エレン……。あいつらの事は、任せたぞ……。」

エレン (……。何だ？この嫌な感じは……。)

悪魔の子。後に、この嫌な予感が的中するという事は知る由もない。

さよならとは言わせない

中野家

一花「返って・・・きたね。」

四葉「ううう。緊張するよ。」

三玖「だ、大丈夫・・・だよね。」

二乃「な、何弱気になってんのよ！(((;;|——)))」

エレン「声が震えてるぞ。ホットチョコレート飲んで落ち着け。(呆れ)」

二乃「え、ええ。」クピクピ

五月「そ、それでは開けますよ！」

全員「せーのっ!!!」

中野一花	国24	数47	理41	社28	英36	計176
中野二乃	国19	数22	理38	社27	英45	計151
中野三玖	国35	数41	理40	社70	英20	計206
中野四葉	国35	数15	理22	社30	英26	計128
中野五月	国43	数28	理68	社26	英34	計199
エレン・イエーガー	国99	数100	理100	社100	英100	計499

五月「これは、酷い・・・。」

一花「あんなに勉強したのに、この結果かー。」

三玖「改めて、私達って馬鹿なんだね。」

エレン「俺は、改めて漢文の上中下点がラスボスだと思った。」

二乃「あ、あと一点で満点って……。」

四葉「ど、どんまいです。二乃も元気出して。」

二乃「あんたは、自分の心配しなさいよ。」

エレン「しかし、風太郎の奴遅いな。期末試験成績発表の日だから、時速^光30万k^速mで来ると思ったのに。」

二乃「光速って……、若干有り得そうだけど……。」

エレン「まあ、大気との摩擦熱で服が丸焦げになって、すっぽんぽんになるかもだけど。」

五月「怖い事言わないでくださいよ……。」

一花「まあ、ちょうど家庭教師の日だし、今日は期末試験の反省がメインだろうね。」

ピンポン

一花「お、噂をすれば……。」

三玖「フータローにしこたま怒られそう。」

四葉「だねー。」

エレン「よし。風太郎が来たら、スパルタ授業が開始するぞ。気合入れとけ。(それにしても、最近あいつからメールとかが来ないんだが……、大丈夫か?)」

二乃「や、やっぱりスパルタよね。で、四葉は何で嬉しそうなのよ。」

四葉「あはは……(*・^・*)。結果は残念だけど、またみんなと一緒に頑張れるの

が楽しみなんだ。」

五月「あれっ？」

エレン「What happened？」

五月「上杉君じゃありませんでした。」

江端「失礼いたします。」

一花「なんだー、江端さんかー。」

三玖「今日は、お父さんの運転手お休み？」

四葉「小さい頃から江端さんにはお世話になってるけど、家に来るとか初だよね。」

江端「ホホホ、何を仰る。私から見たら、まだまだ皆様小さなお子様ですよ。」

エレン「……（。D。）」

五月「イエーガー君？」

エレン「えつと……」

どちら様……？」

江端以外「ええ!？」ズコッ

三玖「江端さんは、お父さんの秘書だよ……。」

エレン「秘書、秘書……。(あ、そういえば中間試験のとき……。)」

三玖『江端さんは、お父さんの秘書だから。』

エレン「あ、三玖が言った人か。すみません、自己紹介が遅れました。自分は風太郎の家庭教師の補佐かつ、組対四課所属のエレン・イエーガーです。以後お見知りおきを。」メイシスツ

江端「御丁寧に有り難う御座います。私は旦那様……、マルオ様の秘書を務めさせていただいています。江端、と申します。以後お見知りおきを。」メイシスツ

四葉「おお……、名刺交換。」

二乃「江端さん。今日は、どうしたの？」

江端「本日は、臨時家庭教師として参りました。」

四葉「そ、そうなんだ。」

一花「江端さん、元は学校の先生だもんね。」

二乃「あいつ、サボりか。」

三玖「体調でも崩したのかな？」

エレン「しゃーねーな。雑炊でも作ってやるか・・・。」

江端「本日はお嬢様方と、イエーガー様にお伝えせねばならない事が。」

エレン「はい？自分もですか？」

江端「はい。上杉風太郎様は、家庭教師をお辞めになられました。」

五月「え？」

エレン「今、何て言いました（。ん）？」

一・二・三・四「・・・？」

江端「そこで、本日は私が務めさせていただきます。」

エレン「・・・いやいやいや。待ってくださいよ！あいつが!?辞めた!？」

三玖「何かの間違いだね・・・。」

一花「もー、ズレた冗談やめてよー。」

江端「事実で御座います。旦那様から連絡がありまして、上杉様は先日の期末試験で、

契約を解除なされました。そして、イエーガー様を正式な家庭教師に任命させると。」

エレン「……はあ!? ……って、すみません！ 年上に向かつて！」

江端「いえいえ、急にこの様な事を言われては、混乱するのも当然でございます。」

一花「え……？ つまり……フータロー君、もう来ないの？」

江端「……。」

三玖「嘘……。」フラツ

エレン「三玖!? 大丈夫か!!」ダキツ

三玖「え……？ あ……。」

エレン（やばい。俺もまだ状況が理解出来てねえけど、全員……特に三玖がまずい

事になつてゐるな……。」

二乃「やつぱり……、赤点の条件は生きてたんだ。」

エレン「赤点の条件つて……、中間試験の奴か？」

二乃「ええ、そうよ。パパに言われてたんだわ。」

江端「それは、違うと思われます。上杉様は自分からお辞めになられたと伺つております。」

四葉「自分からつて……。」

三玖「フータロー……。どうして……。」

五月「そ、そんなの納得がいきません！彼を呼んで、直接話を聞きます。」

江端「申し訳ありませんが、それは叶いません。」

エレン「それは……、何故？」

江端「自分は、二度とここには戻らない。彼がそう申し上げていたと、旦那様より、承っております。」

エレン「徹底してますね……。」

五月「何故、そこまで……。」

江端「上杉様曰く、「自分はエレンのように、人の気持ちを考える事が出来なかつた」と……。」

エレン「……っ！どういふつもりで、そんな妄言を吐きやがったんだ、あの馬鹿！」

三玖「分かつた。私が行く……。」

江端「……」スツ

三玖「江端さん、通して。」

江端「なりません。臨時とは言え、本日は家庭教師の任を受けております。勿論次回からは、イエーガー様おじなに行つて貰いますが……。最低限の教育を受けて頂かなければ、ここを通す訳にはいきません。」

二乃「ぐぐ……。江端さんの頭でつかち！」

江端「ホホホ、何とでも言いなされ。ですが、元兵士である彼の堪忍袋の緒が切れる前に終わらせた方が宜しいかと……。」

五つ子「え？」

エレン「……………」ゴゴゴゴゴゴ

エレン「了解です。（手を貸すなって、意味だらうな。）」

二乃「これ終わったら、行っても良いのよね。」

江端「ええ、ご自由になさってください。」

二乃「全く……。あいつ、どういうつもりよ。」

四葉「私はまだ、信じられないよ。」

一花「本人の口から、ちゃんと聞かないとね。誰か終わった？」

五月「私は、もう直ぐです。」

三玖「私も。」

一花「この問題、比較的簡単だよ。きつと江端さんも、手心加えてくれるんだよ。」

二乃「そうね。でも、前の私達なら危うかった。自分でも不思議なほど、問題が解ける。悔しいけど、あいつのお陰だわ。」

三玖「あと一問……。あと一問なのに……。(；ー；)」

五月「私も、後は最後だけです。」

エレン「……」ススス

江端「イエーガー様？勝手に教える事は、ルール違反ですよ？」

エレン「なんで、分かったんですか？まさか、江端さんって元心理学者だったり……。」

江端「ホホホ、ただのしがない元教師で御座いますよ。それにしても御嬢様方、その

程度も解けないようであれば、特別授業に変更いたしますよ。」

五つ子「くくくつ!!」

一花「これ、前にやったよね。」

三玖「うーん……。」

四葉「何だっけなー。」

五月「……。あの……。カンニングペーパー見ませんか?」

四葉「!」

二乃「それって、期末の?」

五月「はい。全員、筆入れに隠したはずですよ。」

四葉「い……良いのかな……。」

五月「有事です。なりふり構ってられません。(; ; ▽ ;)」

四葉「五月が上杉さんみたい！」

二乃「あんだ、変わったわね……。」

エレン「江端さん、この茶菓子に合う紅茶って、どれなんですか？」

江端「ホホホ、では探しましょうか？」

四葉「今だよ！」

五月「はいっ……。」

三玖「どうしたの？」

五月「……？これ……如何いう事でしょう……？何というか……、私のはミスがあつたようです。」

一花「じゃあ、私の使お。えーつと……、安？」

安易に答えを得ようとは愚か者め

五つ子「……。」

一花「なーんだ。初めから、カンニングさせるつもり無かつたんじゃない。」

三玖「でも……、フータローらしいよ。」

五月「ですが……、どうしましょう。」

一花「……！待って、まだ何か……。」

安易に答えを得ようとは愚か者め↓②

一花「②つて……。」

二乃「私のかしら。」

カンニングする生徒になんて教えてられるか↓③

二乃「自分で言ったんじゃない。」

四葉「繋がってる……。……！これ、上杉さんの最後の手紙だよ!!」

三玖「……。」

これからは自分の手で掴み取れ↓④

やつと地獄の激務から解放されてせいせいするぜ↓⑤

四葉「……あはは。やっぱり、辞めたかったんだ。」

一花「私達が相手だもん。当然と言えば当然だよね。」

二乃「最後、五月だけど。……？五月？」

五月「……だが、そこそこ楽しい地獄だった。じゃあな。」

四葉「私……、まだ上杉さんに教えて貰いたいよ。」

一花「……。」

三玖「私だって……。フータロー無しじゃ……。もう……。」

二乃「そうは言っても、あいつは此処に来られないの。どうしようもないわ。」

一花「……みんなに……私から提案があるんだけど。」

〈提案説明中〉

四葉「え……？」

二乃「それ……、本気……？」

一花「うん。ずっと、考えてたんだ。」

エレン「お前ら、順調か……？って、どうしたんだ。」

風太郎「はい！」

五月「一ホールください。」

他四人&エレン「くださーい。」ゾロゾロ

風太郎「」

———
店内
———

エレン「マジで、働いてるじゃねえか。絶妙に似合ってるぜサンタ服。」

一花「クリスマスイブだったのに、偉いねー。」

三玖「というか、寂しい。」

二乃「ケーキも遅いわ。」

風太郎「仕方ないだろ。今日は繁盛・・・」

エレン「待て待て待て、何だその口調。」

風太郎「・・・何だよ。」

二乃「私達お客。あんた、店員。」

風太郎「(#、|、)」

風太郎「さっさと、持ってお帰り下さいませ。(#、|、)」

二乃「あーら。出来るじゃない。」

エレン「スマイルのお礼に、この店のレビューに☆3付けといてやるよ。」

風太郎「なんだ、その絶妙過ぎる評価!!」

五月「すみません。ケーキの配達って出来ますか？やっぱり、家に届けて欲しいのですが。」

風太郎「はあ？配達なんてやって無いけど？」

一花「えー？」

エレン「この寒い中、持って行けっというのかよ。」

三玖「落としちゃうかも。」

五月「すぐそこなので。」

二乃「か弱い乙女に、持たせるつもり？」

四葉「お願いします。」

一花「良いでしょ?」

エレン「はーいたつ♪でーりばりいー♪F o o !?? ? (. . ω . .) ???」

風太郎「店长ー!!やばい客が居まーす!!」

店长「もう店も閉める。こっちはもう良いから、最後に行つてあげなよ。」

風太郎「はあ!?!店长!そんな事・・・。」

店长「上杉君・・・。メリークリスマス(・ωへ)ー☆。」

風太郎(・・・このバイトも辞めよつかないかな。)

一花「四葉、雪の上は危ないよ。」

二乃「お子様なんだから、滑っても知らないわよ。」

風太郎「なあ、エレン……。」

エレン「……何だよ。」

風太郎「怒ってるか？」

エレン「……かなりな。まあ、せつかくのクリスマスだし、そんなに激昂げっこうはしないが……。」

風太郎「……本当に、お前には出会ってから迷惑掛けてばつかだと思う。だが、これだけは譲れない。あいつらを導けるのは、お前だ……。」

エレン「お前さ、俺が少し特殊な存在だからって、神聖視してない？」

風太郎「そういう訳では……。」

エレン「あのなあ、俺も結構修羅場を潜り抜けたから、お前らよりかは人生経験豊富だけど、お前より優れているかと言われても、そうでもないぞ。何より、お前が居なくなつてから、あいつら……特に三玖を落ち着かせるの大変だったんだからな。」

風太郎「……。なあ、お前ら。黙つて辞めた事は悪かった。だが、もう俺は家庭教師には戻れねえ。」

エレン・五つ子「……。」

五月「見て下さい。この方が、新しい家庭教師です。」

風太郎「ま、待て。俺は、エレンを新しい教師に指名したはずだが……？」

エレン「あのなあ、俺も本業で忙しいんだよ。せいぜいのんびり補佐をやるのが関の山だ。良いから、見ろつて履歴書。」

阿多辺 丸男（65）

エレン「見てみろよ。すつげえ、チャラついてんの。」

風太郎「そ、そうか。意外と早く決まったな。東京の大学出身で、元教師。へえー、優秀そうな人で良かったじゃないか。見た目は怪しいがな。この人なら、お前達を赤点回避まで導いて……、」

エレン「本当にこれで良いのか？お前は。」

風太郎「……何がだよ。」

エレン「本当に、こいつに任せて良いと思ってるのか？」

風太郎「ああ……、俺はもう家庭教師を辞めた身だ。こいつらの教育方針にどうこう言う筋合いは……。」

エレン「……ろよ。」

風太郎「は？」

エレン「ふざけんのも大概にしろよてめえ！ちよつと、挫折したからって責任から逃れる!?そんなの、てめえの自己満足でしかないだろうが!!てめえが辞めて、こいつらがどんな気持ちだったか、考えた事はあんのかよ!!」

風太郎「……っ。俺は二度のチャンスで、結果を残せなかったんだ！次の試験だつて上手くいくとは限らない！だったら、プロに任せるのが一番だ!!」

エレン「そんな数日ちよつとで、この石頭の頑固娘共が、胡散臭そうな見た目してる新しい家庭教師に懐くと思ってるのか!? てめえみたいな、デリカーシ皆無の男にも懐くのに時間が掛かったこいつらがだぞ!!」

三玖「ふ、二人とも……。」

一花「い、一回落ち着こうよ……。」

風太郎「だが！これ以上、俺の身勝手にこいつらは巻き込めん!!」

エレン「そういう問題じゃ……。」

二乃「エレン君、ストップ。私からも色々言いたいから。」

エレン「……分かった。」

二乃「上杉、私からも色々言わせてもらおうわ。」

風太郎「な、何だよ……。」

二乃「さつき、あんたが自分で言ったように、あんたはずっと身勝手だったわ。そのせいで、したくもない勉強をさせられて、必死に暗記して公式覚えて、でも問題解けたら嬉しくなっちゃって。確かに、エレン君が居たからの結果もあつたけど、ここまで来れた殆どの結果は、全部あんたのせいよ。だったら、最後まで、身勝手にいなさいよ！謙虚なあんたなんて、気持ち悪いわ!!」

風太郎「……。悪い。でも、もう戻れないんだ。俺は辞めた。お前らの家に入らないと、お前らの父親に言つた手前……。」

一花「それが理由？」

風太郎「……。ああ、早く行こうぜ。」

一花「もう良いよ。」

風太郎「え？」

一花「ケーキ配達、ご苦労様。」

風太郎「いや・・・、まだ・・・。」

一花「ここだよ。」

風太郎「は？」

一花「ここが私達の、新しい家。」

風太郎「ど、どういう意味だ・・・？」

一花「借りたの。私だってそれなりに稼いでるんだから。手続きとかは、エレン君にも手伝って貰ったけど。」

エレン「ある意味、俺もまだ成人してねえから、アパートの契約者は別の人が……。」

一花「ま、まあね……。何はともあれ、事後報告だけとお父さんにも、もう言つたから。今日から、私達はここで暮らす。これで障害は無くなつたね。」

風太郎「嘘だろ……。たつた……。それだけの為に……。あの家を手放したのか……。？ エレン！ 何で止めなかつたんだ!!」

エレン「それが、こいつらなりの精一杯の覚悟の表明つて奴なんだよ。それに、口で言つても止まる感じじゃ無かつたし（—3—）〜♪。」

風太郎「馬鹿か！ 今すぐ前の家へ戻れ！ こんなの間違つてる!! このまま、あの家で新しい家庭教師を雇えば……。」

四葉「言いましたよね。大切なのは、何処に居るかではなく……。」

四葉「五人でいる事なんです。」バツ

風太郎「・・・ツ！マンションのカードキー・・・。やりやがった・・・！」

エレン『それが、こいつらなりの精一杯の覚悟の表明って奴なんだよ。』

風太郎（こいつらなりの精一杯の覚悟が、ここまでとは・・・。それに比べて俺は・・・つ

！）ツルツ

全員「??????」

!!!!!!

風太郎「あ。」

エレン「風太郎!? あ。じゃねーよ!! 何滑ってんだ!」

零奈『さよなら。』

風太郎（やべ・・・、落ちる。）

零奈『必要とされる人に成れてるよ。』

風太郎（走馬灯見えたわ。）

零奈『久しぶり』

風太郎（にしては、直近すぎる・・・。）

風太郎『どうしたら、あいつらが纏まってくれるんだ。ここで、俺が溺れたら。』

ドツボーンゴポポポポ

全員「> H <」ゴポポポ

ザパア

エレン「ぶっふああああー！！！！」

三玖「フータロー、大丈夫!？」

五月「ぜ、全員で飛び込んでどうするんですか?」

二乃「つて、寒ーッ!!」

風太郎「お前ら……。」

三玖「たつた、二回で諦めないで欲しい……。今度こそ、私達は出来る。フータローとなら出来るよ。成功は失敗の先にある。でしよ?」

風太郎「……。(つて、やばい。お守りが……。)」

零奈『自分を認められようになったら、それを開けて。』

エレン「おい!二乃!?大丈夫か!」

四葉「二乃!どうしたの!」

二乃「つ、冷たくて……。体が……。」

エレン「(やべえ、二乃から距離が離れすぎた!!この中で近いのは……。) 風太郎!!」

エレン「うううう。寒ううう。は、は、早く上がって来い。」ガタガタ

五月「だ、大丈夫ですか？」

風太郎「はあ．．．、上がれるか？ 掴んでろ、二乃。」

二乃「．．．．」ギョツ

風太郎「無茶苦茶だ．．．。お前ら．．．。後先考えて行動しやがれ．．．。これだから、馬鹿は困る。何だか．．．、お前らに配慮するのも馬鹿らしくなってきた。俺もやりたい様にやらせてもらう。俺の身勝手に付き合えよ。最後までな。」

二乃（違う．．．。これは違う．．．。これはまだ、キンタロー君の事を忘れられてないだけだわ。）ドキドキ

一花「そうと決まれば、早く家に入る。」

エレン「は、は、入ったら。ホットチョコレート作って良いか？」ガタガタ

五月「よ、良かったら、作るの手伝いしましょうか？」

エレン「さ、サンキュー」ガタガタ

五月「あ！ケーキは無事ですか!？」

一花「大丈夫（ 〃▽〃 ）bグツ！」

風太郎（さよならだ・・・。零奈。）

三玖「フータロー、早く。」

五月「ケーキ食べちゃいますよ。」

四葉「イエーガーさんの、ホットチョコレートも待つてますよー！」

風太郎「おう。でも良いのか？俺が入ったら、切るのが滅茶苦茶難しい、七等分になっちまうぜ。」

エレン「ぶっ……。」

五つ子「アハハハハ！」

風太郎「つーか、新しい家庭教師の人に謝んねえとな……。」

エレン「あー。その件なんだけどな……。ポリポリ

五月「お気になさらずに……。」

風太郎（どういう事だ？）

マルオ「江端、今日は遅かったね。」

江端「申し訳ございません。」

マルオ「いいさ。．．．しかし、その格好は．．．。」

江端「ホホホ。」

マルオ「まあ良い．．．。上杉君、君がこの先娘と如何ど関わうっていくのか．．．、見させてもらうよ．．．。」

江端「ホホホ。して、イエーガー様の方は．．．？」

マルオ「彼は．．．、少し苦手だ．．．。」

江端「ホホホ。左様で御座いますか（´・ω・｀）」

エレン「……（☒・ω・☒）。o?モヤモヤ。」

五月「イエーガー君?どうしました?（*?）*）モグモグ」

エレン「いや……。よく分からねえけど……。誰かに苦手意識を持たれたような気がして……。」

五月「はい?（*・q・*）モグモグモグ」

悪魔の子、雇い主に苦手意識を持たれる。

「あけおめ！ことよろ！姉妹戦争（シスターズウォー）――
開戦編」

明けましておめでとう！

――渡辺家――

4人「あけおめー。」

ムロ「いやー。今年も寒いなあー（>|<）」

ユイ「この程度の寒さで、音を上げないでよ。」

エレン「寒いく。寒すぎる。炬燵こたつと結婚したいく。」

ヒロ「さっさと、出んか！この軟弱者共が!!初詣に行くぞ!!」

エレ・ムロ「え〜。めんど〜い。p (ε q) ブーブー」

ムロ「俺は、二日酔いが・・・」

ユイ「おい。」

エレン「はい?」

ユイ「い・く・ぞ (# 。 ㇿ)」

ムロ「うっす。」

——— 神社 ———

エレン「では・・・」

ムロ「今年も」

エレン「誰一人欠ける事無く……」

ヒロ「良い一年に」

ユイ「成ります様に。」

ムロ「さて……。参拝したわけですが。この後の予定は、如何いか様ようにしましょうか？」

ユイ「んー。このまま蕎麦屋かどつかに……。」

五月「イエーガー君？ 渡辺さんに氷室さんまで!？」

エレン「五月じゃん。あけおめ〜。(´・`・´)」

ユイ「あら、久しぶり！」

エレン「今日はどうした？それから、その着物似合ってるな（#^ ^ #）」

五月「あ、有り難う御座います。今日は上杉君や、みんなと初詣に・・・。」

エレン「あー。なるほど。」

ヒロ「エレン。俺たちに構わず、行ってこい。」

エレン「あざっす。じゃあ、また職場で。」

ムロ「うーい。」

エレン「さて、五月。改めまして、明けましておめでとう。今年も宜しくな。」

五月「は、はい！おめでとうございませす！今年も宜しくお願ひします！」

二乃「五月ー!!」

一花「こつちだよー!」

三玖「あれ・・・? エレン・・・?」

四葉「イエーガーさんも居たんですね★!! 明けましておめでとうございます(´・`・´)
!」

エレン「おう、あけおめ! 今日には全員振袖姿か!」

五月「はい・・・。アパートの大家さんから借りた物ですが・・・。どうでしょ・・・」

エレン「全員良い感じにマッチしてるな! 特に五月は花飾りも相まって、美人って感じだな。」↑(素の感想)

五月「え!? あ、有り難う御座います・・・。／／／」

二乃（あれっ……?）

三玖（五月……。）

一花（もしかして……）

四葉（やっぱり……）

四人（エレン（君）（イエーガーさん）に惚れてる?）

四葉「あ、そういえば、イエーガーさんも家に来ませんか?」

エレン「良いのか? せっかくの正月なのに……、家族水入らずで過ごした方が……。」

二乃「良いから、厚意に甘えなさいよ。」

エレン「御意（、・ω・、）ゞ」

201号・中野

五月「キス……、しました……」。

二乃「ロマンチックだわ……」。

四葉「録画して、良かったね」。

風太郎「何の為に俺達は呼ばれたんだ……」。

エレン「さあ?」

風太郎「らいは、帰るぞ」。

エレン「何だよ。もうちょいゆっくりしてけよ」。

一花「そうだよ。せつかくのお正月なんだから。」

エレン「全く……。あ、三玖。そろそろあれ出そうぜ。」

三玖「うん。フータロー、これ御節。今年も宜しく。」

風太郎「お、おう。(あれ?結構旨そうだぞ?)」

エレン(俺が監督したんだ。当たり前だろ。)

風太郎(こいつ……。直接脳内!!?)

らいは「……………」

四葉「あれ?どうしたの?らいはちゃん。」

らいは「えっと……。私、勘違いしてたみたい。中野さんのお宅はお金持ちって聞

いてたから……。」

四葉「あはは……、色々ありまして……。」

一花「何もない部屋でごめんねー(; ^)。」「(; ^)。」

二乃「振袖も、大家さんに返しに行かなくっちゃ。」

エレン「あ……！」

三玖「ど、どうしたの!？」

エレン「やばい……!! 渡辺家に大事なもん忘れてきた! ちょっとごめん! 行つてくる!」

一花「いってらっしゃーい。」

風太郎「大事なもんって、何だろうな？」

一花「さあ……。」

二乃「……それにしても、エレン君が席を外してくれたのは好都合だわ。」

四葉「どういう事？」

二乃「……五月。」

五月「はい？」

三玖「聞きたい事がある。」

五月「聞きたい事ですか？」

一花「五月ちゃん……。」

全員「もしかして、エレン君（イエーガーさん）と付き合ってる?」

五月「……?」

風太郎「いや、隠さなくて良いぞ。俺は、お前がエレンに告白したのは知ってるし……。」

五月「
／／／／／
／／／／
!!
???

二乃「ビンゴね。」

五月「は、半分正解です……。」

四葉「半分?」

五月「実は……。」

三玖「そっか……。確かにエレン、初恋の子がいるって言ってた……。」

四葉「でも、卒業までには答えを出してくれるんだよね?」

五月「は、はい……。」

一花「ふむ……。なら、こうしてる場合じゃないよ!!」

五月「と、言いますと?」

二乃「決まってるじゃない！あんた、今からデートに行きなさい!!」

五月「で、デートですか!？」

風太郎「いや、それは時期尚早じきしようそうじゃないか!？」

「らしいは「いや、この位グイグイいかないと、イエーガーさんが取られるかもしれないと思う……。」」

五月「うつ……。」

二乃「よし、五月!」

五月「は、はい!!」

二乃「今から、デートにぴったりな服貸してあげるから、初売りにでも行ってきなさい」

いー!」

五月「え、ええく!？」

風太郎（二乃の奴、暴走機関車と化してないか？）

エレン「ただいまー。いやー寒かった。つて、五月？なんか、いつもより服装が大
人っぽくないか？」

五月「あ、あの……。」

エレン「ん？」

五月「い、今からお買い物に行きましょう！」

エレン「ああ、初売りって奴だな。福袋買ってみたかったから、行ってみようぜ。」

五月「はい！」

「いらっしやいませ〜。初売りセールやってるよ〜。」

「らっしやーせー。」

エレン「いや〜。賑わってるな。」

五月「そうですね。良い匂いもします♪」

エレン「あそこのデパートに行こうぜ。色々売ってるかもしれないし。」

五月「分かりました???

（???)

???' !

エレン「いやー、結構買ったな。」

五月「はい・・・、ですが本当に良いのですか？殆ど、イエーガー君のお金で・・・。」

エレン「・・・お前が家出した時に、俺の話を聞いてくれたお礼だよ。遠慮なく貰ってくれ。」

五月「分かりました・・・。では、有難く頂きますね。」

エレン「あと・・・、それから。これ、引っ越し祝いという名のプレゼント。」

五月「これは・・・、ペンダント？」

エレン「ああ、後ろ向いてくれ。」

五月「？」クルッ

エレン「……」クビモトイジイジ

エレン「よし、鏡見てみるよ。」

五月「はい！……この紫の花は？」

エレン「ベルフラワーっていう花だよ。つつても金属製の造花だけだな。あ、でも学校とかには持つてくなよ。校則とか面倒臭そうだし。因みに、さっき言つてた忘れ物つてこれの事だったんだよな（？▽？；）ハハハ」

五月「有り難う御座います！大事にしますね！」

エレン「どういたしまして。じゃあ、帰るか。」

五月「はい！」

一花「五月ちゃん!どうしたの?そのネックレス!？」

四葉「似合ってるよ(・▽・)bグッ!!」

三玖「綺麗な花・・・。」

二乃「二人きりで何してたか、聞かせて貰うわよ(・▽・)！」

五月「あわわわ・・・(〽)〽。」

らいは「五月さん、大変な事になってるけど良いのかな?」

エレン「良いんじゃないのか?」

風太郎「仲よし姉妹らしくて良いじゃねえか。」

ベルフラワーの花言葉は、「感謝します」。

末っ子。想い人と買^デい物^トした結果、尋問される。

それぞれの道、それぞれの夢

チュンチュンアサダチュン（^ 8 ^）

二乃「もう、こんな生活うんざり!!」

Σ（。 8 。）チュウウウン!?

風・エレ「・・・。」

二乃「なんで、私の布団に潜り込んでくんのよ!」

五月「さ、寒くって!」

二乃「あなたの髪が、くすぐったいのよ! さつぱり切っちゃいなさい!」

五月「あー！自分が切ったからって、ずるいです！」

風太郎「こいつら・・・。」

エレン「まさかの雑魚寝ざこねか・・・。」

四葉「でも、お布団は久々で、まだぐっすり寝られてません。」

三玖「四葉は、もう少し寝付けない方が良いと思う。」

二乃「ふかふかのベッドが恋しいわー。」

五月「慣れるまで、我慢しましょう。でも、私のお布団が消えたのは不思議です・・・。」

三玖「本当に不思議。」

四葉「ベッドから落ちなくなったのは良いよね。」

二乃「四葉、あんただけよ。」

エレン「先が思いやられるな……。」

風太郎「新生活始まって、早々だからな……。これだけの騒ぎの中、ぐっすり寝てる一花を見習え!!」

エレン「二番参考にしたら、いけない奴だろう……。」

五月「既に、汚部屋の片鱗が見えています……。」

風太郎「二花!朝だ!起きて勉強するぞ!」

五月「あ!上杉君!!」

エレン「(……まさか!)先に出とくわ。」↑(逃走)

一花『あ、フータロー君おっは。』

五月『一花!!』

三玖『見ちゃ駄目!!』

二乃『つていうか。仮にも乙女の寝室に入ってくんな!!』

風太郎「……」。ピューン

エレン「見事に追い出されたなw」

風太郎「うっせ。」

エレン「まあ、何やかんやで全員集合したな。」

風太郎「早速、始め……。」

一花「(☒○☒) ウトウト」

風・エレ「……。」

四葉「一花。」

一花「あつ。ごめん。フータロー君も、先程は御見苦しい物をお見せして、申し訳ない。それとも御褒美だったかな？」

風太郎「冬くらい服着て寝ろ。」

エレ「お前、裸族だったのかよ……。風邪ひいても知らんぞ。」

一花「おや？もしかやエレン君も私の裸が見たかったり？」

エレン「その時は、公然猥褻罪こうぜんわいせつざいで現行犯逮捕してやる。」

一花「じよ、冗談だよ。でも、習慣とは恐ろしいもので、寝てる間に着た服を脱いじゃってるんだよ。」

エレン「マジかよ……(。D。;)」。

四葉「授業中とか大丈夫……？」

一花「あはは、家限定だから(ノ、ヾ、*)」

五月「授業中に寝る前提で、話が進んでる……。」

風太郎「なんだと……？」

一花「これからは勉強に集中できるように、仕事をセーブさせてもらってるんだ。次

こそ赤点回避して、お父さんをギャフント言わせたいもんね。」

三玖「うん。」

四葉「私も今度こそ……！」

五月「そうですね。」

風太郎「ふん。赤点なんて低いハードルに、これほど苦しめられるとは思わなかった。」

エレン「だがしかし、三学期末のテストが泣いても笑つてもラストチャンスだな。」

風太郎「エレンの言う通りだ！早速始めよう！先ずは、俺達と一緒に冬休みの宿題を片付けるぞ！」

五月「え？」

風・エレ「あ？」

四葉「ふふ。」

一花「あはは。」

三玖「フータロー、エレン……。」

二乃「二人とも舐めすぎ。課題なんて、とっくに終わってるわ。」

風太郎「あ。」

エレン「さいですか。」

風太郎「じゃあ、通常通りで……。」

五月「あなた達は、今まで何をやっていたのですか？」

風・エレ「……。」

四葉「私達が手伝ってあげましょーか？」

風・エレ「うっせー、（ムッ）ノ！」

五月「イエーガー君。ここを教えて頂けますか？」

エレ「OK。これは……、自由落下か。ここはな……。」

五月「成程……、つて一花？」

エレ「ん？おい。一花？」

風太郎「何、寝落ちかけてんだ。起きろよ。」

一花「あ……。いやー、ごめん。寝て……。無い……。よお……。」

エレン「一花が落ちかけている……。」

風太郎「この野郎……。何が、ぎゃふんと言わせるだ……。」

二乃「少しは寝かせてあげなさい。」

風太郎「は？」

エレン「炬燵の魔力に完全敗北か……？」

二乃「違うわよ。一花、さつきはあんな風に言ってたけど、本当は前より仕事を増やしてるみたいなの……。」

五月「生活費を払ってくれてますもんね。」

四葉「貯金があるから、気にしなくて良いって本人は言ってたけど……。」

三玖「こうやって、フータローとエレンに教えて貰えてるのも、全て一花の御陰^{おかげ}。」

風太郎「だからって……。」

エレン「まあまあ、40分位寝かせてやろうぜ。こんな状態のこいつにやらせても、いたずらに時間が過ぎるだけだろう。」

風太郎「むう……。」

五月「あの……、私達も働きませんか？」

二・三・四・エレン「え？」

五月「も、勿論、勉強の邪魔にならない様に。少しでも・・・、一花の負担を減らせたらと思います・・・。」

風太郎「・・・。今まで働いた経験は？」

五月「あ、ありません・・・。」

風太郎「勉強と両立できるのか？赤点回避で必死なお前らが。」

五月「うつ・・・。」

エレン（面接会場の幻覚が見える・・・。）

五月「それなら・・・、私もあなたのように、家庭教師をします!!」

エレン（、、ω・・・）ンンンン？）

五月「教えながら学ぶ！これなら自分の学力も向上し、一石二鳥です!!」

エレン「人に教えるって事は、自分も教える箇所を理解しとかないといけないぞ。学力は勝手には上がっていかないぞ。そこん所大丈夫か？」

五月「うっ……。」

四葉「それなら、スーパーの店員は如何どうでしょう？近所にあるので、すぐに出勤できますよ？」

風太郎「即クビだな。」

三玖「私……。メイド喫茶やってみたい。」

四葉「い、意外と人気でそう……。」

二乃「却下却下!」

三玖「二乃はやっぱり女王様？」

二乃「やっぱって何!？」

エレン「……。」

二乃「な、何よ？」

エレン「いや……、ボンテージスーツ着たお前を想像したけど……、あんまり違和感が仕事してないなと思って……。」

二乃「し、失礼ね!!」

エレン「いや、ホントごめん。」

四葉「アハハ……。二乃はお料理関係だよね。」

二乃「ふん。やるとしたらね。」

四葉「だって、二乃は自分のお店を出すのが夢だもん。」

風太郎「へえ・・・、初めて聞いたな。」

二乃「こ、子供の頃の戯言よ。本気にしないで。」

エレン「けど、二乃が料理やるなら繁盛しそうだけだな・・・。」

二乃「褒めても何も出ないわよ。」

五月「わたし、美味しいケーキ屋さんを知っていますよ。」

二乃「！」

風太郎『ミルフィーユ、エクレア、モンブラン』

二乃『メルシーボク』

二乃「いやあああ!!おえー・・・。」

エレン「大丈夫か？」サスサス

風太郎「居酒屋、ファミレス、喫茶店。和食に中華、イタリアン。ラーメン、そばにピザの配達。様々なバイトを経験してきたが、どれも生半可な気持ちじゃこなせなかった。」

四葉「食べ物系ばかり。」

五月「まかな賄いが出るからでしょう。」

風太郎「仕事を舐めんなって事だ！試験を突破し、あの家に帰る事が出来たら、全て

解決する。その為にも、今は勉強だ。一花が女優を目指したい気持ちも分からなくてもないが、今回ばかりは無理の無い仕事を選んで欲しいもんだ……。」

一花「んー……。」モゾツヌギヌギ

三玖「フータロー!!」

五月「一度ならず、二度までも……。」

二乃「変態!!」

風太郎「俺だけかよ!! エレンは……。って居ねえ!! ん? 置手紙?」

Aさrよrなrらiだ by Ellen·Yeager

風太郎(この仕事……。舐めてたぜ……。)

数日後

エレン「ふいー。ランニング50Km疲れたー。運動終わりだし・・・、シャワーも浴びたし、喫茶店でも行くか・・・。えーと確かこの辺りに良い感じの店が・・・。つてうわっ!!」ドンッ

??? 「きやつ！す、すみません!!」

エレン「いえ！こちらこそ・・・。つて二乃!?!」

二乃「エレン君!?!」

風太郎「大丈夫か？二乃・・・。つてエレンじゃないか？どうしたんだ？」

エレン「ランニング終わりに、喫茶店に行こうと思つてな。買い物か？」

風太郎「まあ、そんな所だ・・・。四葉を見なかつたか？」

エレン「いや……？見て無いが……。五月ならあそこに居るんだが……。」

二乃「え？何処？」

エレン「あそこの喫茶店の中……。」

二乃「本当だわ。なんで、あの子がここに……。」

エレン「誰か居るな……？」

二乃「ていうか、あれパパよ。」

エレン「マジで!?あれが!?!」

風太郎「あれ？あの時……病院の……。」

エレン「は？(; ;) (ω)」

風太郎（あの人が……、こいつらの父親……！）

マルオ「君たちのしでかした事には、目を瞑つぶろう。しかし、どうやら満足いく食事も、摂れていないようだ。」

五月「……ッ」

マルオ「すぐさま、全員で帰りなさい。姉妹全員に伝えといてください。」

五月「……それは、彼らも含まれるのでしょうか？」

マルオ「上杉君の事かい？彼は君たちの友人なのだろう？節度を持って付き合うのなら、好きに呼ぶと言い。ただ……、イエーガー君に関しては……。」

五月「イエーガー君に関しては……？」

マルオ「はつきり言つて、僕は彼が苦手だ。」

エレン「Σ（？ロ？ー！ー）ガーン」

二乃「お……。」

五月（大人げない!!）

風太郎「ちよつ、何でエレンが苦手意識持たれてんだよ！」

二乃「し、知らないわよ！」

店員「お客様、着席前に御注文をお願いします。」

風太郎「あ、じゃあコーヒーの……。シヨ……。ショート……。」

二乃「私はアップルティー。」

店員「そちらの方は……。」

エレン「orz」チーン

二乃「……抹茶フラペチーノで。(前に、甘党って言ってたわよね。ていうか、物凄
いシヨックを受けてるわね……)」

五月「まだ……、帰れません。彼らを部外者と呼ぶには、もう深く関わり過ぎてい
ます。せめて、次の試験までの間、私達の力だけで暮らして……」

マルオ「君たちの力とは、何だろう。家賃や生活費を払って、その気に成っている様
だが、明日から始まる学校の学費は？ 携帯の契約や保険は、どう考えているのかな？ 僕
の扶養に入ってる内は、何をしてでも自立とは言えないだろう。」

五月「それは……」

二乃「……」

マルオ「では、こうしよう。上杉君とイエーガー君を再雇用し、家庭教師を続けて貰

う。」

風太郎「！」

五月「え？」

マルオ「ただし、僕の友人のプロ家庭教師との三人体制。上杉君とイエーガー君には、彼女のサポートに回って貰う。君たちにとっても、メリツトしか無い話だ。二対五では、カバーできない部分もあるだろう。」

五月「しかし、皆この状況で頑張つて……。」

マルオ「四葉君は、赤点回避できると思うかい？」

五月「……！」

マルオ「二学期の試験の結果を見せて貰ったが、どうだろう？とてもじゃないが、僕

には出来ると思えないね。」

風太郎「……っ!!」

二乃「駄目よ。あんたが行っても、状況が悪くなるだけだわ。」

風太郎「しかし……。」

二乃「それに、パパの言ってることも間違いない。」

五月「そう……、ですね……。二人体制の方が確実ですが……。」

四葉「やれます。私達と、イエーガーさんと上杉さんなら、やれます。」

五月「四葉。」

四葉「七人で成し遂げたいんです。だから、信じて下さい。もう、同じ失敗は繰り返

しません。」

マルオ「では、失敗したら？東京に、僕の知人が理事を務める高校がある。」

四・五「？」

マルオ「あまり大きな声で言えないが、無条件で三年からの転入が出来る様に話を付けているんだ。」

四葉「え．．．？」

マルオ「もし、次の試験で落ちたら、その学校に転校する。プロの家庭教師と二人体制なら、そのリスクは限りなく小さくなると保証しよう。それでも、やりたい様にやるのなら、後は自己責任だ。分かってくれるね。」

四葉「．．．．。」

五月「……分かりました。」

二乃「！」

マルオ「では、こちらで話を進めておこう。五月君なら分かってくれると思つてたよ。」

五月「いいえ。もし、駄目なら転校という条件で構いません。素直で、物分かりが良くて、賢い子じゃなくてすみません。」

マルオ「そうかい。どうやら、子供の我儘わがままを聞くのが親の仕事らしい。そして、子供の我儘を叱るのも、親の仕事。……次は無いよ。」

四葉「前の学校のと看とは違ふから。」

マルオ「僕も期待しているよ……。それから、イエーガー君には苦手なだけで、嫌つてゐる訳では無いと伝えてくれたまえ。」

風太郎「行ったか。」

四葉「うわっ!!」

五月「見てたのですか？」

風太郎「想像通りの、手強そうな親父だったな。」↑（気絶してるエレンの首根っこを掴んでる。）

エレン「苦手・・・苦手・・・(T|T)。」

五月「い、イエーガー君!?!だ、大丈夫ですよ!お父さんは嫌っている訳では無いらしいですから!!」

エレン「ホントに・・・(; | ;)?」

五月「はい!!ゞ(・ω・) ヨシヨシ」

風太郎(軽く、キャラが崩壊してるな・・・)

二乃「まあ、あの人が言ってる事は正しい。だって、仕事で忙しくて、滅多に来てくれないエレン君もそうだけど、あんたも大概不安なもの。あーあ、プロの家庭教師がいてくれたらな。」

風太郎「……………」

五月「す、すみませんっ。」

二乃「私達が、ここまで成長できたのもパパのお陰。当然、感謝しているわ。…けど、あの人は正しきしか見ていないんだわ。」

風太郎「しかし、転校なんて話まで出て来るとはな。責任重大じゃねえか。」

五月「我が家の事情で、振り回してしまつて申し訳ありません。」

四葉「転校……したくないね。」

風太郎「だが、どうでもいい。お前らの事情も、家の事情も、前の学校も、転校の条件もどうでも良いね。」

風太郎「俺は俺のやりたい様にやる！お前達を進級させる！この手で全員揃つて笑顔で卒業!!それだけしか眼中にねえ!!」

五月「ふふっ。頼もしいですね。」

エレン「頑張れよー（；ω、）ゲッソリ」

風太郎「いや、お前も頑張るんだよ!!」

悪魔の子、メンタルに10000ダメージを受ける。

何故夢を、目指すのか。

エレン（今日、俺は暇だった。久しぶりの非番の日。風太郎には悪いが、家庭教師を休んで、家でゆっくりしようと思っていたが・・・）

五月「イエーガー君。お母さんの御墓は、こっちですよ。」

エレン「ああ・・・。（中野母の墓参りに行く事になってしまった（・ω・））」

エレン「ここが・・・。」

五月「はい。私達の母の墓です。荷物持ってください、有り難う御座います。」

エレン「良いって。線香とか入ってるんだろ？それにしても今日が、母親の命日なのか？」

五月「いえ……。そういう訳では無くて……。」

エレン「……月命日か。」

五月「はい。それに私は母の様に……。」

???「お、先客なんて珍しいな。って、エレンか？」

エレン「あれ？下田さん？」

五月「イエーガー君？お知り合いですか？」

下田「うげっ……。先生……？」

下田「わっはっは！悪い悪い！お嬢ちゃんがあまりに先生にクリソツだったから、間

違えちまった。よく考えたら、とつくの昔に先生は死んでたわ！」

エレン「ちよつ。言い方。」

下田「悪い、悪い。にしても久しぶりだな！エレン！！1年ぶりか!？」

エレン「いえ、1年と3ヶ月13日ぶりです。」

下田「よくもまあ、そんな正確に覚えてんなwww」

五月「あの・・・、お二人はどういった知り合いで・・・?」

エレン「俺が蘇った時に、高校に通う為の学力をつける為に通ってた塾講師の先生。つまり、俺の秘密も知っている。」

下田「私も、1000歳越えの爺さんに教える事になるとは思わなかったがな!!ワハハ!!」

エレン「五月蠅いっすね。これでも心は少年ですから。ていうか、声がでかいです。」
下田「すまんすまん。」

エレン「五月、大丈夫か？さつきから固まってるが……。」

五月「な、なんとか……。」

下田「ここで会ったのも何かの縁だ!!先生の恩返しで、好きなだけケーキを奢ってやるよ!!」

五月「す……好きなだけ……。」

下田「遠慮すんな!此処のケーキ屋はうめえぞ!店長は、ちよつと感じ悪いがな!!」

エレン「因みに俺は？」

下田「自腹に決まってるんだろ!!ワツハツハ!!」

エレン「ですよー。」

下田「なんなら、勉強の基盤を教えてやった礼として、奢ってくれても良いんだぜ!!私より稼いでるんだろ?」

エレン「自分の分は自分で払います。調子に乗って、すみませんでした。」

五月「あの・・・、下田さんはお母さんの・・・。」

下田「元教え子だな!お母ちゃんには、何度ゲンコツを貰ったか覚えてないね!!」

エレン「自慢げに言う事ですか・・・。」(ム)「ヤレヤレ」

下田「おー?生意気言う口はこの口か!!」

エレン「いででで!!年長者に何すんですか!!」

五月「そ、それです!!お母さんがどんな人だったのか、教えて頂けませんか?」

下田「覚えてないのか?五年前だから……、結構大きかったろ?」

五月「ええ……そうですが、私は家庭でのお母さんしか知りません。お母さんが、先生としてどんな仕事をしていたのか知りたいのです。」

下田「ふーん。まあ、聞きてえなら幾らでも話してやれるが。何分先生とは、高二の一年間だけの思い出しかねえ。私が少々……お転婆だったからかもしんねえが、とにかく怖^{こえ}ー先生だったな。愛想も悪く、生徒にも媚びない。学校で、あの人^{こえ}が笑ったところを一度も見たことがねえ。」

五月「はは……。さぞ、生徒さんには怖がられていたのでしょうね。」

下田「いや……。それが違うんだよなあ。どんなに恐ろしくても。鉄仮面でも許されてしまう。愛されてしまう。慕われてしまう。先生はそれほどまでに……。」

エレン「それほどまでに？」

下田「めっちゃ美人だった」

五月「……！めっちゃ美人……！」

エレン「……マジ？」

下田「マジもマジの、大マジよ。ただでさえ新卒の年の近い女教師、しかも美人。それだけで、同学年のみならず学校全ての男子はメロメロよ。」

五月「メ……メロメロですか……。」

エレン「セレクトワードが昭和臭いっすね。」↑（偏見）

下田「御年^{おんどじ}1183歳のお前に言われたくねえよ。ま、そんな事は言わずもがなか、お嬢ちゃんも先生似だしいけるんじゃねーか？」

五月「わっ、私なんてそんな……！」

下田「ファンクラブもあつたくらいだ。とにかく、女の私でさえ惚れちまう美しさだった。あの無表情から繰り出される鉄拳に、私ら不良は恐れ戦いたもんだ。正^{まさ}に鬼教師。だが、その中にも先生の信念みたいなもんを感じて、いつしか見た目以上に惚れちまつてた。結局、一年間怒られた記憶しかねえ。ただ、あの一年が無ければ……、教師に憧れて、塾講師に何てなつてねーだらうな。」

五月「……下田さんの話を聞いて踏ん切りがつかしました。学校で、進路希望調査が配られたのです。下田さんの様にお母さんみたいに成れるのなら……。やはり私には

これしかありません!!」

下田「ちよいと待ちな。」

五月「え?」

下田「母親に憧れるのは結構。憧れの人に成ろうとするのも、決して悪い事じゃ無い。私だつてそうだしな。だが、お嬢ちゃんはお母さんに成りたいだけなんじゃないのか?」

五月「・・・!」

下田「成りたいだけなら、他にも手はあるさ。とはいえ、人の夢に口出す権利は誰にもねえ。生徒に勉強を教えるのも、やりがいがあつて良い仕事だよ。目指すといいさ。「先生」に成りたい理由があるならな。」

エレン「下田さんの言う通りだ。人生は長いんだ。そして、これはお前の人生であり、

お前が始める物語だ。ゆっくり考えた方が良いでしょう。後悔しないようにな。」

下田「深い事言うじやねえか。まあ、1000年以上爆睡してたら悟りも開けるわなw。」

エレン「年齢で弄ってきやがりましたね。エイジハラスメント。略してエイハラですよ。」

下田「おいおい、訴えてくれるなよ。」

五月「私は……。」

下田「おっと、こんな時まで説教だなんて、先生の悪い所が出ちゃった。連絡先交換しようぜ。(めっちゃ食ってる……。)」

下田「お母ちゃんの話がまた聞きたくなったら、また会おうな。エレンも、勉強サボんなよ。」

エレン「へーい。」

悪魔の子、彼女(?)の母親の墓参りに行く。

姉妹戦争（シスターズウォー）の戦いの火蓋は切られた。

——中野家——

エレン「……だからな、四葉。此処の文章はこうなってるから——」

四葉「す、すみません。もう一度……。」

エレン「大丈夫か……?」

二乃「エレン君……ここ教えて……。」

エレン「五月の問題を確認してからな……。」

五月「イエーガー君……。出来ました……。」

エレン「おう。」

風太郎「……」ハナジツ

エレン「風太郎……。鼻血出てるぞ……。」

風太郎「マジで？」

二乃「どうしたのよ。」

一花「エツチな本でも見たんじやない？」

四葉「もー。みんな勉強するよ。試験まで、あと二か月なんだから。」

風太郎「そうだ！お前ら四葉を見習え！試験まで、残り一ヶ月を切った。いいか、良
く聞け。」

風太郎「……ということで、ここでは作者の気持ちを答えるというより、読者のお

前らが感じたことを書く訳で……。

エレン「はあく……。 i l — l i (* || ㇿ ||) i l — l i。 o o」↑（職場の膨大な量の書類整理と、家庭教師補佐をしてる奴）

五つ子「……。。 i — — — (。 | ω |。 ;) — — — i」

エレン「温めたタオルを顔に乗つけて欲しい奴、手え挙げて！。」

五つ子「……はい。」

風太郎（くそっ……。行き詰った！）

三玖「えーっと、私を感じた事って何だろう……。」

風太郎（いつかは来るだろうと思ってたが……。教師としてのノウハウの無い俺の限界……。何が分からないのか分からない！どう教えたら良いのか分からない！）

エレン「あ、あ、あ、ー。」↑（秘技！胃薬一瓶一気飲み！！良い子はマネしちや駄目だぞ！！☆（ゝω・）vキヤピ）

風太郎（俺の負担を降らす為に、有給休暇取ってくれたエレンの為に進めなければならんのに……。くつ……。IQの差とは、なんと残酷……。）

二乃「良く分からないけど、失礼な事言われてる気がするわ。」

一花「……。というか、問題を解く以前に……。みんな集中力の限界だよねえ……。」

四葉「わ、私はまだできるよっ!!」

五月「連日、勉強漬けですからね……。」

風太郎「ムムム……。……！時には飴も必要か……。」

エレン「あ？ 飴？」

風太郎「決して余裕がある訳では無いが……。明日は一日だけオフにしよう。」

エレン「……。一花。疲れすぎたせいかな、風太郎の口からオフにするって幻聴が聞こえたぞ。」

一花「同じく。」

風太郎「幻聴じゃねえよ！ 明日は、オ・フ・だ！！」

風太郎以外「……。マジで!?（嘘!?）」

一花「ふふ。休日デートに此処を選ぶなんて、フータロー君もベタだねえ。」

三玖「デート……。！」

エレン「遊園地に来るのって、何気に初めてかもしれないねえ。」

五月「では、イエーガー君のデビューも兼ねて思い切り遊びましょうか。私達も久しぶりなので楽しめそうです。」

二乃「ママに連れてって貰った以来かしら。」

四葉「……(。o。)」

風太郎「今日だけは、勉強の事を忘れる事を許そう。思う存分羽を伸ばせ。」

<ジェットコースター>

エレン「うっひよおおおー!!!」

一花「わあああー!!!」

五月「~~~~~っ!!」

<お化け屋敷>

五月「イ、イ、イ、イエーガー君!!ぜ、ぜ、絶対に手を離さないでくださいね!!」

エレン「分かった分かった。ちゃんと繋いでやるから・・・。」

オバケ役「うらめしやあー!!」

五月「きやああ!!」

エレン「いきなり抱き着くなよ!お前の叫び声にびっくりしたわ!」

五月「しゅ、しゅみましえん。」

二乃「・・・(いや・・・、あれで付き合っただけなのよね・・・。)」

風太郎「……(らしいな……)」

二乃(直接脳内!?)

五月「イエーガー君！一花！次は、あれに乗りましょう!!」

一花「五月ちゃん、ちよつと待って……」

エレン「すまん。少し、休憩させてくれ。」

エレン(まさか、五月があそこまでアクティブになるとは……。……。一花には後で何か奢ってやる。)

二乃「あれ？四葉は何処かしら？」

エレン「花でも摘みに行ってるんじゃないわねの？トイレに行く事」

二乃「あー、そうかもしれないわね。」

三玖「四葉ならお腹が痛いからって、トイレだって。」

風太郎「何故、直接言わない。」

エレン「そういうとこだぞ。お前……。」

二乃「デリカシーが無いわね……。」

風太郎「……！じゃあ、俺も便所。」

二乃「あっそ。先行ってるわよ。」

風太郎「おう。」

二乃「……。」

エレン「……。三玖。野口英世千円札を一枚やるから、ジュース買って来てくれねえか？お釣りは御駄賃おだちんとしてやるから。」

三玖「……？うん。」タッタッタ

エレン「さてと……、二乃。」

二乃「何？」

エレン「単刀直入に聞かせて貰いたい。」

二乃「何よ。」

エレン「風太郎の事、どう思ってる？」

二乃「・・・家庭教師。」

エレン「Final answer?」

二乃「・・・。」

エレン「キンタロー君。」

二乃「・・・何でそれを今言うのよ。」

エレン「いや？悩んでそうだったから。」

二乃「違うわ。私が好きになったのは、キンタロー君で……。」

エレン「なあ、二乃。なんかお前らしくねえぞ。」

二乃「……。あいつの事を好きだなんて……。」

エレン「ありえないか？」

二乃「あいつの事を私が好きだと思つてたとしても、私はあいつの生徒よ。あいつも私の事を生徒としてしか見て無いわよ。」

エレン「五月みたいなこと言つてんな。」

二乃「そりゃあ姉妹だもの……。正直言つて、あいつがキンタロー君に変装してたつ

て知った時は、腹が立ったわ。けど、今は分からない……。」

エレン「なら、あいつがキンタロー君だったっていう事実を丸ごとひっくるめて愛したらどうだ？現に同一人物だった訳だし。それに、家族以外の事でうじうじしてるなんてお前らしくねえよ。あいつの耳元で「好きよ」って言ってみろよ。あいつは不器用で、デリカシーの欠片もねえが、やるときはやる奴だぜ。それは、短い付き合いのお前も知ってるだろ？」

二乃「……。」

エレン「強制するつもりはねえよ。人の恋路にあれこれ言うのは野暮だからな。ただ、俺みたいに後悔だけはすんなよ。」

二乃「……分かった。」

エレン「五月一、一花一。もうそろそろで、閉園時間だぞ。」

二乃「帰るわよー。」

一花「はい。(ーωー)／＼

五月「うう……。柄にも無く、はしやぎすぎてしまいました……。」

エレン「ストレスが発散できたなら良いじゃねえか。よっこいせ。」↑(五月をおんぶ)

五月「お、下ろしてください……。」セナカポカポカ

エレン「あー、もうちよい右叩いてくれ。」

一花「あはは……。五月ちゃん、肩叩きに成ってるよ……。(それにしても、傍から見たら二人ともカップルだよもう……。)」

風太郎「おい！エレン!!」

エレン「どうした？風太郎。」

風太郎「希望が舞い降りてきたぞ!!」

エレン「希望？」

風太郎「これからは、全員が家庭教師だ!!」

エレン「・・・は？」

カクカクシカジカウマウマ

エレン「成程、それぞれの得意科目を教え合うって事か。」

風太郎「ああ!!その通りだ!!」

エレン「それなら、今までよりも効率よく進められるな!!お前ら!聞いたか!!」

全員「う、うん。(は、はい。)(え、ええ。)」

風・エレ「今日からは全員が、家庭教師だ!!!やるぞー!!!」

五つ子「お、おー!!」

——時は流れ、成績発表の放課後——

五月「四葉！やりましたね！！」

三玖「おめでどう。」

エレン「偉いぞ！四葉！！」

四葉「えへへ。私史上、一番の得点です！合計184点と、ギリギリでしたけど……。」

エレン「それでも、合格であることに変わりはない！！自信を持って！」ナデナデ

四葉「そ、そうですね（＾＾）！！因みにイエーガーさんは……？」

エレン「ふっ……。500点だった！！」

三玖「という事は・・・、漢文・・・。」

エレン「無事に、駆逐してやったぜ!!」

四葉「やったじゃないですか!!五月は？」

五月「私は、計224点。少し危ない科目もあつたのが今後の課題ですね。・・・三玖は如何でした？」

三玖「私は・・・。238点。」

四葉「えー!凄い!」

五月「さすが、三玖ですね。」

エレン「成長速度凄すぎねえか!?ていうか、普通にすげえ!!」

カランカラン

エレン「お、四人目到着。」

四葉「二乃はまだでしょうか？」

五月「試験結果が返ってきたら、ここに集まると伝えている筈ですが……もしかして……。」

風太郎「三玖。間違えたな。やはり、お前が一番の成長株だ。」

三玖「フータロー／＼／＼」

四葉「良かった。一花も赤点無かったんだ。」

三玖「私……。」

エレン「ひとまず安心つてところだな。」

四葉「合計何点だったの？」

一花「えーっとね……。240点。」

三玖「……………。(えっ……………。)」

四葉「つてことは……………」

五月「一花が一番じゃないですか！」

エレン「良かった……………な？(三玖……………?)」

一花「あ、そうなんだ……………。やった。」

四葉「今のところ、一花が一番だね。」

エレン「あとは、二乃か……。」

一花「いや。頑張りました。」

五月「本当に……、お仕事もあるのに凄いです。私は、てつきり今回も一花が一番かど。」

一花「え……？」

三玖「……。」

一花「三玖……。私……。そんなつもりじゃなくて……。」

三玖「一花、おめでとう。私もまだまだだね。」

一花「……っ。」

エレン（あー。やつぱり、点数が一番高かったら、風太郎に告るつもりだったのか……。それで、それを聞いた一花は罪悪感に襲われてると……。三玖には悪いが、勝負じみた事は忘れて告ればよかったのに……。）

五月「私達ばかりではなく、貴方は何点だったのですか？」

風太郎「あ！やめろ！見るな！」

五月「……！あ、危ない……。また罠にかかって、1000点の自慢をされる所でした……。」

風太郎「チツ！無駄に賢く成りやがって……。」

エレン「お前さ……。その性格直せよ……。」

四葉「やっぱり、気に入ってたんですね。」

店長「みんな、試験突破おめでとう！今日はお祝いだ！上杉君の給料から引いておくから、好きなだけ頼むと良いよ。」

風太郎「もー、店長ったら冗談ばかりー。（*・^・）」

四葉「有り難う御座います。」

五月「でも、まだ一人来てないんです。」

店長「二つ結びの子なら、君達よりも先に此処に来て、これを置いて行っただけ。」

五月「え？」

エレン「試験結果の紙だけ……？」

五月「どうしたのでしょうか……。」

エレン「……さあ？」

五月「つて、こんな事してる場合じゃありませんでした!!」

四葉「え？」

五月「あ、あの。イエーガー君。」

エレン「ん？どうした？」

五月「そ、その。一度店外に出ませんか？」

エレン「別に良いが……？」

エレン「外はそこまで寒く無くなってきたな。」

五月「そ、そうですね／＼／＼。」

エレン「どうした？ 妙にしおらしいじゃねえか。」

五月「イ、イエーガー君!! そ、その！ こ、これを!!」

エレン「ん？ ……これは。（マフラーか？ 少し歪いびつだが……。まさか！ 手編みか!!）
けど、なんで……。あ、もしかして。」

エレン「バレンタインデーか？」

五月「は、はい！ 少し遅れてしまいましたが……。そ、その！ 今まで編み物などはした事が無かったので、二乃に教えて貰いながら作ったものですが……。ああ!! でも少し歪いびつなので、迷惑でしたら……。／＼／＼。」

エレン「五月。」

五月「ひゃ、ひゃい!!」

ギュッ

五月「ふえ？」

エレン「ありがとな。今まで着けたマフラーの中で、一番あたた温たかげえ。」

五月「あ、有り難う御座いましゅ……。／＼／＼」

エレン「礼を言うのはこっちだよ。冬の季節は毎日付けるからな。」

五月「は、はい！」

エレン「じゃあ、店に戻るか。」

五月「はい／＼／＼♪」

エレン「あ、それから……。ちよつと耳貸してくれ。」

五月「はい？」

エレン「ホワイトデーは、覚悟しとけよ。基本、3倍返しらしいから」

五月「ふ、ふあい・・・」プシユー

四葉「二人ともお帰りー。って、五月どうしたの!？」

五月「(＠～＠)」

三玖「だ、大丈夫？（目が、渦巻き状に成ってる・・・。）」

エレン「あー、すまん。ちょっと、やり過ぎた。」

一花「……エレン君。」

エレン「ん？」

一花「ちよつといい……？」

エレン「話つてのは、風太郎の事か？」

一花「うっ……せ、正解……。」

エレン「そうか。じゃあ、さっさと告つて来い。」

一花「ええ!? そんなにあっさり言わないでよ!!」

エレン「好きなんだろう!? だったら日和つてねえで、告れば良いじゃねえか!! あの実面

目氣質の五月でさえも、俺に告ったんだぞ!!というか、何気に告白するという行為をしたの、姉妹の中で五月が初めてなんじゃねえの？」

一花「こ、声が大きいよ！」

エレン「寧ろ、たじろいでお前にはびっくりだわ!!さっさと告って、睡付けとけよ人に取られてしまわないように手を付けておく事。!!」

一花「つ、睡って……い、言い方……。と、とにかく、不安だから見てて欲しくて……」

エレン「あー、うるさいうるさい。さっさと風太郎のどこに行く……」

二乃『あんたを好きって言ったのよ。』

エレン「一」

!!!???

風太郎『は……？え？何？』

二乃『返事なんて、求めて無いわ。ほんと、ムカツク。対象外なら、無理にでも意識させてやるわ。あんたみたいな男でも好きになる女子が、地球上に一人いるって言ったわよね。それが私よ。残念だったわね。』

一花「……嘘。」

エレン「あー。知らない知らない。（∩。∪。∩）アアアアキコエナイ」↑（秘技！胃薬一瓶一気飲み！！良い子はマネしちや駄目だぞ！！☆（ゝω・）vキヤピ）

エレン（しかし、ここまで綺麗な「後の雁かりが先になる」後から来た者が先に行った者を追い越す状態は見た事ねえぞ……。）

風太郎「なあ……、エレン。」

エレン「何だよ」モグモグ

風太郎「俺、マルオさんに嫌われたかも・・・。」

エレン「ドンマイとしか言えねえ。」

エレン「じゃあ、俺そろそろ職場に行かないとだから。」

二乃「ええ、私達ももう少して帰るわ。」

四葉「また学校で会いましょう!!」

エレン「フンフフフフーン♪車も良いが、バイクに乗るのもまた一興……。」

エレン「それにしても、交通量が少なくなつて……。」

ブーン

エレン（何だ……？あの車こつちに猛スピードで……。）

ブーン

エレン（横に張り付きやがった。）

ウイーン↑（窓が開く）

???「どうも、初めまして。組対四課のエレン・イエーガーさんですね。」

エレン「そうだけど、運転中に話しかけんな。道路交通法違反だぞ。」

??? 「安心してください。用件は単純シンプルです。」

??? 「死んでください。」 ↑ (銃を構える)

エレン「マジか。道路交通法違反に加えて、銃刀法違反……。」

バアン！

エレン「危ねえ!!! だが、ギリギリでかわ躲ああす」↑（バイクから倒れてかわ躲す）

エレン「うおおお!! 必殺! 地面を転がって移動!! てめえ! その面ツラ覚えたからなあ
!!! 銃刀法違反と、道路交通法違反で、いつか現行犯逮捕してやるからな!!（五月のマ
ラー、リュックに仕舞ってて良かった。）」ゴロゴロ

??? 「ちいつ! 移動されたか……。だが、次は殺す。組織対策第四課の主戦力……。
エレン・イエーガー……。」

組対四課

エレン「ただいまです」↑（血ダラダラ）

ユイ「定期テストお疲れエエエ
!!???」

ムロ「どうしたんだ？つて、エレエエエン
!!!?!??」

ヒロ「エ、エレン!!どうしたんだ!!」

エレン「あー、なんか殺し屋っぽい奴に狙われたんですよ。多分羅紗弩関係でしょうね。他の職員にも気を付けるように言つといてください。風呂入って、ちよつと仮眠室行つてきます。」

ユイ「ちよつ！あんた治療は!？」

エレン「24時間寝てれば治りますよ。明日学校休みだし。」スタスタ

四課トリオ「三」。
。四「三」

悪魔の子、襲撃される。

「旅館で五つ子ゲーム！姉妹戦争（シスターズウォー）——
旅館編」

旅行ですか？いいえ、出張です。と思つたら、五つ子ゲームです。

エレン「はあく。太陽光が反射して、めっちゃチカチカする……。」「ザザーン

エレン（目の前に広がるのは、きれいな海に砂浜……。単純に旅行だったら良かったんだが……。）

話は遡る事数日前……。

ユイ「エレン。ちよつと良い？」

エレン「ユイさん。どうしたんですか?」

ユイ「パパ……。じゃなくて、お父さんから伝言があつて……。」

エレン「伝言……?」

ユイ「ええ。単刀直入に言うと、出張よ。」

エレン「というと……、羅紗弩関連?」

ユイ「正解。最近とある地域で、羅紗弩の構成員がうろついているっていう情報が入つたの。けど私達は別の所に行かなきゃならなくて……。」

エレン「暇そうだった俺に頼もうと……。」

ユイ「大正解。行つてくれる?」

エレン「良いですよ。この前、俺を弾いた銃で撃つ事奴にも会えるかもですし。(*
*)」

ユイ「・・・怒ってる?」

エレン「怒ってませんよ(^^)」

ユイ「そ、そう・・・」。

エレン「もうそろそろで、頭の血管が切れそうですけど(^^#)」

ユイ「ヒエッ(;;ω;;)」。

エレン「・・・」ブチッッー

エレン「あ、血管切れちゃいましたね。アハハハハ(??ω^)」

ユイ「(。D ;) ガタガタ」

エレン「はあく。単純に旅行が楽しみたかった・・・。」

エレン「まあ、綺麗な場所だし、そこまでストレスが溜まつたりとかは・・・。」

??? 「イエーガー君？」

エレン「・・・まさか。」クルッ

五月「な、何故あなたが此処に・・・？」

エレン「マジか・・・。」

今日は三玖が商品券を当てたことにより、数年ぶりにおじいちゃんの旅館に来る事に成った。とはいえ、お母さんが亡くなってからはあまり来る事が無かったのだが……。

二乃「いやー。久しぶりね。」

一花「お爺ちゃん元気にしてるかな。」

三玖「早く会いたい……。」

四葉「早く行つて驚かせちゃおう!!」

みんな久しぶりの旅館という事で、テンションが上がっていて、このまま家族だけで過ごす事に成るのかと思つていた矢先……。

目の前に、既視感があり過ぎるお団子ヘアが見えた。

エレン「五月……?お前何でここに?」

五月「何故って……、三玖が当てた温泉チケットがお爺ちゃん……、祖父の旅館だからですよ。」

エレン「へえー。祖父さんが旅館の経営者か……。それにしても……」

五月「はい?」

エレン「おじいちゃん。」

五月「んなっ／＼!!」

エレン「お前、お爺ちゃんっ子だったんだな。」

五月「うう／＼／＼良いじゃないですか!お爺ちゃん呼びでも……!」

エレン「いや、呼び方が意外だったからさ。てつきり御爺様おじいさまって呼んでんのかと……ほら、お前って敬語キヤラだから。」

五月「敬語を使ってる方々への、偏見がすさまじいですね……。あ、そういえば。はいはちゃん達も来てるんですよ。」

エレン「つまり、いつもの面子めんつって事か……。」

五月「ふふつ。良いではないですか。」

エレン「まあな。じゃあ、また後でな。」

五月「はい（´、´）。」

旅館内

エレン「チエックインも終わったし……。えーつと、居た居た。ふ・う・た・ろ・う」
ポント

風太郎 「おわああ!!」

エレン 「女子便所の前で何やってんの？」

風太郎 「お、お前も来てたのかよ!!」

エレン 「ああ、仕事でな。取り敢えずここから離れるぞ。不審者と思われかねん。」

風太郎 「あ、ああ……。」

エレン 「で、何であんな所に居たんだお前は……。」

風太郎 「いや、五月から話があるって言われて……。」

エレン 「で、あつちこつちに五月がテレポートしてると……。」

風太郎「ああ……。」

風・エレ「……。」

風・エレ「……取り敢えず、風呂入ろうぜ。」

混浴

エレ「はああ……。幸先さいさき悪いな……。」

風太郎「そうだな……。」

エレ「ここって、幽霊物件だったりしねえよな……。番台の爺さんも、こう言っちゃなんだが、死んでるか死んで無いか分からない程無言だったし……。」

風太郎「それは無いだろう……。だがあいつ、自分から話があるって言ったくせに、
どういふ事だ……？」

エレン「知らね。」

勇也「ふい、極上!混浴があつたおかげで、家族で風呂に入れたな。」

らいは「お兄ちゃんとエレンさんも、逆^{のほ}上せる前に出なよー。」

エレン「うーい。」

風太郎「ああ。」

——— 脱衣所 ———

エレン「はあく。こっちは仕事で来てなのに、また面倒そうな……。」

風太郎「取り敢えずまずは、レポートしまくってる五月の正体を暴く事だ。」

エレン「ああ……。早く終わらせて、仕事に集中したい……。」

風太郎「そうか……、つて、これは……？」

エレン「何だ……0時 中庭？……。」

エレン「あー、何でこんな事に……。」

風太郎「俺が一番聞きてえよ……。だが、後で話があると言ったのはあいつだぞ……。」

エレン「はあく。……つて、うおっ!! 番台の……!!」

風太郎「び、びつくりした……。な、中庭つてこつちですよね……？」

お爺さん「……。」

風・エレン「……。」

エレン「え?まさかマジで……。」

風太郎「死んでる……?」

五月? 「あ。」

エレン「いー……?つきか?」

五月? 「は、はい!五月です!!」

エレン「……………(ω、ω) ジーーツ。」

五月? 「……………(ω、ω)」

風太郎「丁度良かった。俺もエレンを連れて中庭に行くところだったんだ。何だよ、話つて……。」

五月? 「……上杉君達は、私達の事をどう思っていますか?」

風太郎 「え……、それは……。」

エレン 「俺にとっては、五月は告白してきた恋人(仮)? それ以外の姉妹は単純に生徒。」

風太郎 「お、俺にとっては……、パ、パートナー……か? そう言っただだろお前。」

五月? 「いいえ。私達は、もうパートナーではありません。」

風太郎 「確かに最近はずに授業はしてないから否定も出来ないから、まだ少しくらい俺達が教えてやらなきゃ、また落ちちまうぞ。進級できたとはいえ、俺の受けた依頼は、お前達の卒業までだ。それまでは、一応家庭教師として……。」

五月? 「もう結構です。後は私達だけで、できそうです。」

五月? 「この関係に終止符を打ちましょう・・・。」

風太郎 「・・・は!?!何言ってるんだ!!ちゃんと説明しろ!!」 ガツ

五月? 「痛っ!」

エレン 「おい! 風太郎!! 落ち着け!!」

風太郎 「父親に言われたのか? なぜ今こんな事を言ゆんんん!!????」 ダアン!!

エレン 「???
!!」

お爺さん 「……次。」

エレン 「風太郎!! くそっ!!」 バシッ↑ (合気で受け流す)

エレン (危ねえ……、受け流してなったら、叩きつけられてた……!)

お爺さん 「……。ほお……。」

風太郎「……?……。?爺さん……。死んでたはずじゃ。」

お爺さん「……」

風太郎(なんか言ってる!!)

お爺さん「……」

風太郎「え!?なんですか!?!」

お爺さん「……」

風太郎「はあ!?!」

エレン「え、何て言ってますか?」

お爺さん「わしの孫に手を出すな……。殺すぞ……。そこの御仁ごじんも例外無くな……。」

エレン「うっす……。 (か、帰りにええ。)」

風太郎 (意味わかんねえよ……。)

エレン「因みに、さっきの奴は絶対変装してる奴だ……。」

風太郎「なんで分かるんだよ？」

エレン「なんとなく……。 ていうか、自惚うぬぼれる訳じゃ無いが、あいつは俺に好意を寄せている。それに恋愛経験も皆無だ。そんなあいつが、俺を目の前にして、恋人っていうワードを言ったのにも関わらず、テンパらない事自体がおかしい……。」

風太郎「へ、へえ。 お前が五月じゃないと察せたのは、愛って奴か……？」

エレン「多分な……。 って、五月からメール……。」

来てください

海岸沿いで、姉と私の5人で
待っています。

エレン「・・・面倒事に巻き込まれる予感しかしねえ・・・。」

海岸沿い

エレン「おーい、来たぞ。出てこい偽五月共。」

五月? 「お待ちしておりました。」

五月? 「遅かったですね。」

五月? 「ですが、挑戦から逃げなかった事は、褒めましょう……。」

エレン 「いや、何様……。」

五月? 「イエーガー君……。」

五月? 「あなたは……。」

五月×5 「誰が本物の五月か、分かりますか?」

エレン（海岸に 五人の五月 いとあやしとても不思議。
心の川柳） by エレン・イエーガー。

悪魔の子、切に単純に旅行を楽しみたいと願う・・・。

それぞれのお惑

エレン（俺の名前は、エレン・イエーガー。出張で、とある島に来たと思ったら……。）

五月？ズ 「ニニ」さあ！誰が本物の私か、分かりますか!?!「ニニ」

エレン（五つ子ゲームに巻き込まれた……。）

エレン「えーと、取り敢えず……。風太郎が『五月がワープしてる。』って言うてた理由は察せた。で？なんで俺まで巻き込まれなきゃならないんだ？」

五月？「イエーガー君。あなたは私が家出した時に、告白を保留してくれましたよね？」

エレン「ああ。」

五月? 「そこで、どの私が本物なのかを当てて欲しいのです。」

エレン 「な、成程。五月に対する愛があるかどうかの確認を込めてか……。 (プレツ
シャー、えげつねえ……。)」

五月? 「さあ! 誰が本物の私か分かりますか!？」

エレン 「……。 (さあ、どうするか……。)」

エレン 「まず、一番向かって右の五月に質問。」

五月 (一番右) 「はい。」

エレン 「俺がお前を泊めたとき、晩ごはんは大盛蕎麦と……。？」

五月 (一番右) 「合鴨焼きと、アサリの酒蒸しでした。」

エレン「次……、隣の五月。」

五月（右から二番目）「はい。」

エレン「俺の家に飾っていたものは？」

五月（右から二番目）「写真立てででしょうか？」

エレン「……次の五月」

五月（真ん中）「はい。」

エレン「写真立ての他に飾っていたものは？」

五月（真ん中）「はい。野球ボールです。」

エレン「次だ……。」

五月（左から二番目）「はい。」

エレン「俺達が初めて会った時、俺が食堂で食べていたものは？」

五月（左から二番目）「チーズハンバーグです。」

エレン「最後……。」

五月（一番左）「はい。」

エレン「最低でも二人だけで良い、俺の元同期の名前を、ミカサ・アツカーマン以外で答えよ。」

五月（一番左）「ジャン・キルシュタインさんと、アルミン・アルレルトさんでしょうか……。」

エレン「……………。取り敢えず、情報を共有したからかどうかは知らないが、全員正解だ。」

五月ズ「……………。……………」

エレン（奥の手を使うか……………）

エレン「取り敢えず、全員ポニーテールにしてくれ。」

五月？「それは、何故でしょうか……………？」

エレン「良いから。」

五月？「出来ました。」

エレン「よし。なら一人ずつ、俺の目の前……………最低でも俺との距離が10cmにな

る場所に来てくれ。」

五月? 「ええっ!？」

五月? 「何故ですか!!??」

エレン「早くしろ。もしも、俺が変な事しようとしたら、五月に変装してる二乃が俺をぶっ飛ばすだろ。」

五月? 「あなたは、二乃を何だと思ってるのですか……」(´Д、´)「」。

五月? 「まずは、私ですね……。」スタスタ

エレン「……。」

五月? 「……。」

エレン「よし、良いぞ……。これを全員終わるまで繰り返す。良いな。」

五月ズ「はい。」

エレン「……………。本物が分かった……………」

五月ズ「……………」。

エレン「本物は……………、右から二番目のお前だ。」

五月（右から二番目）「……………」。

五月（右から二番目）「……っ。正解です!!」

エレン「よし!!」

五月（右から一番目）「参りましたね。」

五月（真ん中）「ですが、どうやって分かったのですか?」

エレン「簡単だよ。まず、お前らをポニーテールにさせた理由は、耳を見る為だ。そして、本物の五月は真面目過ぎるが故に、四葉以上に嘘が苦手な節がある。」

五月ズ「……。」

エレン「平静を保っていたようだったが、右から二番目は耳が赤くなっていたからな。それから……。」

五月（一番左）「それから？」

エレン「汗をかいていた。」

五月（左から二番目）「汗？」

エレン「発汗は、人体の不随意的な現象……、つまりは己の意志でコントロールする事が難しい物だ。そして、本物の五月は多少だが、汗をかいていた。それが決め手となったんだよ。」

五月（本物）「か、完敗です……。」

エレン「風太郎に何しようとしてるかは知らないが、今のダメ出しを教訓にすると良

いぞぞ。」

五月（一番右）「分かったわ。」

エレン「その喋り方、お前二乃か。あ、それから五月……。」（手招き）

五月（本物）「はい？」

エレン「……。」↑（頭に手を乗せる）

五月（本物）「イ、イエーガー君!？」

エレン「浴衣姿、似合ってるぜ」ナデナデ

五月（本物）「ふ、ふあい／＼／＼／＼／プシュー

エレン「うん。やっぱ本物だな。」

五月（二乃）（いや、どんな確認方法・・・。）

五月（一花）（これから先、五つ子ゲームはエレン君には通用しないかもね（*、△、）
アハハ・・・）

悪魔の子、五つ子ゲーム無事クリア。

少年達と、少女達の関係……。それは一体……？

チユンチユンアサダチユン（へ８へ）

エレン（何とかクリアしたは良いが……。）

風太郎「お、エレン。おはよう。」

エレン「おう。おはよう。今から朝風呂に入りに行くんだが、一緒に行くか？」

風太郎「ああ、そうさせてもらう。」

エレン「あとそれから、これ渡しとくぜ。」

風太郎「これは……、胃薬……か？」

エレン「多分、この旅行中に数回は飲む事になるだろうからな。」

風太郎「ど、どういう意味だよ……。」

エレン「すぐに分かる。さ、気を取り直して風呂に行くぞ。あいつも女湯に来てるだろうし……。」

風太郎「あいつ……?」

風太郎「男湯に着いたは良いが……。今から何を?」

エレン「良いから見てろ……。デミグラス？」

五月『は、ハンバーグ……。(*ノωノ)』

風太郎「うお!!五月か？」

五月『は、はい……。』

風太郎「五月か!?昨日のあれはどういう事だ!？」

五月『それはこちらの台詞です。何故昨日中庭に来て下さらなかったのですか？ イエーガー君と会った後に、中庭に向かったのですが……。？因みに、昨日風太郎とエレンが出会った偽五月に出会ったのは、風呂上り直後。エレンが五つ子ゲームをしたのは9時くらい。五月ちゃんはその後、0時に中庭に行った感じですよ。時間軸グダグダですみません』

エレン「お前ら、取り敢えず落ち着け。それぞれに誤解が生じてる。」

風太郎「……ふうく。そうだな。すまん五月、ヒートアップしすぎた。」

五月『い、いえ。こちらこそ……。』

エレン「取り敢えず。状況を整理するぞ。」

風太郎「ああ……。昨夜、俺はフロントで五月に会い、家庭教師を辞めるように促された。」

エレン「まあ……。あれは変装した姉の誰かだな……。」

風太郎（決まりだな。あの中で誰かが俺を拒絶している。一体何故……？）

風太郎「誰か怪しい奴はいなかったか？つーか、わざわざ五月に変装した理由は何だ？」

エレン（何であいつらがこんな事してるかって顔してるな・・・。無論五月も、その理由を凡^{おおよ}そ察してるだろうが・・・。）

——エレンが五つ子ゲームをした後——

エレン『さて・・・、俺は終わったわけだが、あいつらが五つ子ゲーム^こをしてるのはまだ、風太郎にはばらすなよ。』

五月『えっと、それは何故？』

エレン『五つ子ゲームをしている理由は、あいつ自身が気付かなきゃいけないからな。心配する必要は無いが、口を滑らせてくれるなよ。』

五月『・・・分かりました（ー、ロー）キリッ』

五月『私に変装している理由はですね……。』

ガララ

エレン「ん？」

二乃「あら？あんたとはよくお風呂で会うわね。って、エレン君も居るじゃない」

風太郎「!!」

五月（二乃!?!?どうして……。）

エレン「どうした二乃？逆出歯亀出歯亀とは、男が女の風呂を覗く事。今回はその逆
verの為、逆出歯亀か？」

二乃「違うわよ……。というより、何で混浴に入ってるのよ。」

風太郎「そ、それは仕方なく……。(;・:・:~)」

二乃「まあいいわ……。どうせ一緒にでもなつたんだし、体でも洗ってあげよつか？」

エレン「良かったな。風太郎(*^~^*)」

五月(ええええええええええ!!というより「良かったな」じゃないですよ!!不純ですよ!!
イエーガ君!!)

エレン(俺が洗ってもらうんじゃないから、不純じゃなくね?)

五月(直接脳内!!?)

風太郎「ちよ……。ちよつと待て。一つ良いか？」

二乃「？」

エレン（やべえ……。胃酸分泌が促進された結果、胃粘膜防御機能が低下が起こり、胃の粘膜が損傷する事による、胃痛が生じる気がしてならねえ……。頼む!! 風太郎!! お前ならでできるはず……。!）

風太郎「誰だ？」

エレン「……。」。ザッパーン↑（あまりに風太郎が鈍感すぎて、ショックで湯に倒れこんだ）

風太郎「五月じゃない……。となると……。いやしかし……。」

五月『(。・—ω—)ン……。？』

二乃「~~~~~ツ……。馬鹿!!」ピシヤ（風呂桶をぶん投げる）

二乃「ハア……。ハア……。勇氣出したのに……。許さないわ……。!!」

風太郎「エ、エレン……。大丈夫か？」タンコブプク

エレン「逆に俺はお前に、二重の意味で頭大丈夫かと問いただしい……。(?)
「?」
ジト」。キリキリ

風太郎「何でだよ!!」

五月『私も、イエーガー君に同意見です。貴方の失態ですよ。』

エレン「今のは髮型的に二乃しかいないだろ……。前髪切りそろえてるんだし……。女性語「くだわ。」「くかしら?」「くわね。」等の口調を話すのも、姉妹の中ではあいつだけだろうが……。」

風太郎「うっ……。た、確かに……。言われてみれば……。」

五月『それに、全てが同じという訳では無いと思いますよ。現に私達は見分けられていますし、きっと貴方にもできるはずですよ。』

エレン「俺も、よく観察しながらだが、本物の五月を見分けられたしな……。」

五・エレ『『愛さえあれば!!』ってやつだろ?』

風太郎「出たよトンデモ理論……。エレンも感化されかけてるし……。」

五月『しかし、疑問です。あれほど貴方を嫌っていた二乃が、どういう風邪の吹き回しでしょう？』

エレン「……。」↑（告白現場を目撃した人）

五月『二乃だけではありません。一花も、三玖も、四葉も、春休みに入ってからどこか変なのです。昨夜はそれを訪ねる為に、貴方を呼び出しました。何か、御存じありませんか？』

エレン（多分……、というか、あいつら風太郎に惚れてるんだろかなあ。まあ、言わない方が面白いだろうけど……。）

風太郎「ご存じないな。直で聞いてみればいいだろう。」

五月『身内の私より、貴方の方が適任かと……。』

風太郎「俺に言われてもなあ。エレンは如何なんだ？何であいつらはお前に相談し

ない?」

エレン「さてなあ〜(?!?!?)。〇(酒)。」

風太郎「いつの間に酒を持ち込んだんだこいつは!!」

風太郎「ん? って・・・、何で前向きに俺が解決しようとしてんだ!! そんな事やってる場合じゃねえ!!」

エレン「いきなりでかい声出すなよ!! 危うく酒を溢こぼすところだったじゃねえか!!」

風太郎「わ、わりい。だが、俺にとつては偽五月の方が最優先だ。あいつの真意が理解できないままじゃ、本当に家庭教師解消になりかねない。お悩み相談は後だ!」

五月『そ、そうですよね・・・。しかし、実は私も偽五月に共感できる所もあるので。私達は、もうパートナーではありません。』

風太郎「ええー……、お前も……？」

五月『偽五月の真意は私にも分かりませんが、もう利害一致のパートナーではないという事です。だってそうでしょう？数々の試験勉強の日々、花火大会、林間学校、年末年始などなど。これだけの時間を共有してきたのです。それはもはや……、友達でしよう？』

風太郎「……。」

エレン「……と、家出時に告白してきた人が仰っています。」

五月『か、揶揄わないでください!!／／／』

風太郎「恥ずかしい事を堂々と……、せっかくの旅行が台無しだ。」

エレン「どうするんだ？風太郎先生？」

風太郎「やるか・・・、お悩み相談。」

エレン「よく言ったぞ。風八先生。」

風太郎「そのニツクネーム久しぶりだな・・・。37話参照」

エレン「だってよ、五月。」

シーン

風太郎「・・・?聞こえてな・・・?」

五月「有り難う御座います!!」

風太郎「!!!????」

エレン「(ノ、3、)ノへ...;...;ブーツ」↑(酒を吹き出した)

風太郎「お前！何でこっち来てんだ!!」

五月「混浴なので問題ありません！」

エレン「俺も居るんだが!？」

五月「何言ってるんですか!？友達ならこれくらい……当り前……。ではありませ
んね／／。って、あ……。」

エレン「……………」

五月「い、イエーガー君は見ないでくださいあああい／／／!!!」

エレン「理不尽過ぎんだろ!!!」

五月「す、すみません……。忘れて貰えると助かります……。／／／。」

風太郎「とにかく、お前にはやって貰わない事があるんだ。」

五月「え・・・？」

カクカクシカジカ

五月「わ、分かりました!!」

エレン「そういう事なら、俺も協力できるかもな。マルオさんに話しておきたいことがあったしな。」

風太郎「エレンもか!?!恩に着る!!」

風太郎「じゃあ、俺はもう上がるぞ。」

五月「私はもう少し……。」

エレン「俺も酒が残ってるから、もう少し残る。」

風太郎「そうか……。また後でな。」

エレン「うーい。」

五月「……。」

エレン「……。」

五月「そ、その……い、良いお湯加減ですね……／＼／＼」

エレン「そうだな。満月の夜とかだったら、もっと良いんだろうが……。」

五月「月見風呂という奴ですね。」

エレン「五月は、大人になっても酒に弱そうだなw」

五月「むう……、偏見にも程がありますよ……。」

エレン「だったら、俺はお前がジョッキ一杯で酔いつぶれるに、花●院の魂を賭ける
!!」

五月「なら私は、酔いつぶれない方にアヴ●ウルの魂を賭けます!!」

エレン「Good!!!……まあ、お前が教師になったお祝いに飲むってのも良いかも
な……。」

五月「ええ!?でも大学に入学したとしても、まだ未成年ですよ!?!」

エレン「大丈夫だろ?俺も、19の頃には飲んでたし……。」

五月「それはあくまでも、遙か昔かつ、異国での話でしょう……。今の時代は、平成ですよ……。」「……」

エレン「ちえく……。けどまあ、今度こそ親しい苦楽を共にした者達同士で、酒を飲み明かしたいもんだ……」

五月「……。叶いますよきつと。その夢は……」

エレン「まあ、その為には勉強しまくって、卒業しねえとな!!」

五月「そ、そうですよね!!」

エレン「さて……。そろそろ出るか。」ザパア

五月「そうしましょう。」ザパア

エレン（・・・？なんだこの感じ・・・。何か、もやつく・・・。・・・つまさか!!）

エレン「五月!!伏せろ!!」↑（五月を押し倒す）

五月「え!?!きやあ!!」

バァン!!

五月「ひっ!? な、何が!？」

エレン（銃声!! やっぱり来てやがったか!! 狙撃か!? あれは……!! カートリッジの種類は50BMG 12.7 x 99mm!! McMillan TAC—50か!! 確か、有効射程距離は約1800m!!）

エレン「五月!! 大丈夫か!？」

五月「は、はい!!」

シーン

エレン（あの垣根が邪魔で視線から外れたせいかな、もう撃ってくる事は無さそうだな……。少なくとも今は……。）

五月「……あ、あの。今は……。」

エレン「後で説明する。とりあえず今は……。」

ガラガラ

勇也「いやー、やっぱ風呂は朝風呂に限るぜ……。」

らいは「もう、お父さん。おじさんみた……。」

現在の状況：バスタオル姿のエレン（酒のせいで上気している）が、同じくバスタオル姿の五月（エレンの顔が近くて上気している）を押し倒してる。

勇也「……あーっと。避妊はしっかりな……、二人とも……。（マルオには黙っていてやる……）」ススス

らいは「し、失礼しました……。」ススス

「五・エレ「ご、誤解ですー!!」

悪魔の子。末っ子を守った結果、勘違いされる。

父と悪魔の覚悟

エレン「五月、大丈夫だったか？」

五月「は、はい!!」

エレン「取り敢えず、マルオさんの所に行くぞ。さっき起こった事も含めて、話しておきたい事がある。」

五月「・・・っ。分かりました。」

エレン「あ、居た。マルオさん。」

マルオ「・・・？イエーガー君か？何故五月君と居るんだい？」

エレン「さつきまで混浴に居たので。」

マルオ「……どういう事かな？五月君……。」

五月「ち、違うんです!!私が勝手に入っただけで、イエーガー君に非はありませんから!!」

マルオ「……まあいいだろう。それで、僕に何用かな？五月君は部屋に戻りなさい。」

エレン「ちよつと待ってください。今から話す事には、バリバリ五月も関わってるんですよ。」

マルオ「……どういう事かな？」

五月「じ、実は……。」

マルオ「そのような事が……。怪我は無いだろうね。」

五月「はい……。イエーガー君が庇ってくれたので……。」

エレン「それから、マルオさん。実を言うと俺がここに来た理由は、旅行じゃなくて仕事なんですよ。」

マルオ「それは例の……。羅紗弩だったかな？それ関係かな？」

エレン「そうですね。というより、自分少し前に襲撃されたので。」

五月「聞いてませんが!？」

エレン「言う必要も無かったし……。」

マルオ「それはいつの話だい？」

エレン「この前にテストが終わった後、ケーキ屋で祝賀会あげたんですけど、その帰り道ですね。」

マルオ「病院には行ったのかい？」

エレン「撃たれたと言っても、発砲と同時に倒れこんだので、主な怪我はバイクから落ちた際の擦り傷と打撲傷ですよ。」

マルオ「そのような怪我を負ったのに、病院に行かないのは職業柄感心しないね。」

エレン「うっ……す、すみません。少し寝たら回復すると思ったので……（ω・・）。というか、一日寝たら治りましたし……。」

マルオ「……はあく。まあ良い。そうなるとう今回の旅行は中止にするべきか……。」

五月「そ、そんな!!」

エレン「待つてくださいいよ!!それはちよつと……。」

マルオ「愛娘まなむすめが危険にさらされているかもしれないんだ。そのような状況下に、身を置く親が居ると思うかい？」

エレン「そ、それは……。 (どうする……。 マルオさんの言う通り、上杉一家も含めて帰らせた方が……。)」

五月「そんな……。 せっかくお爺ちゃんに会えたのに……。」

エレン「……。 (五月……。 つ!!)」

マルオ「僕はフロントに行って、チェックアウトの手続きをしてくる。五月君は他の姉妹たちを……。」

エレン「待ってください。」

マルオ「待ってくれとは、どういう事かな？」

エレン「俺に、チャンスをくれませんか？」

マルオ「チャンスとは・・・？」

エレン「まも護ります。」

五月「え・・・？」

エレン「何があつても護りますよ。というか、護ってみせます。五月も、一花も二乃も三玖も四葉も。風太郎に、らいはちゃんに勇也さん。番台の爺さん。そして、あんたも……。全員纏めて護つてやる!!兵士の意地に掛けて!!」

マルオ「…………出来るのかい？」

エレン「前にも言ったでしょう……。出来る出来ないじゃない。やるんですよ！」

五月「…………つ。」

エレン「…………。」

マルオ「…………いいだろう。チエックアウトは予定通りにする。…………ただ但し。」

エレン「…………。」

マルオ「娘達に何かあれば、僕は君をどうするか分からないよ……。」

エレン「承知しています。それに……、

五月からの告白も保留の状態ですしね（？）スンツ。」

五月「……
!!!!???
い、イエーガー君!!??」

マルオ「……どういふことかな？」

エレン「どういう意味も何も、そのままの意味ですよ。五月が俺に告白したつてだけの話ですが？」

マルオ「五月君、今の話は本当かい？」

五月「え？あ、は、はい！」

エレン「安心してくださいよ。まだ付き合ってるわけじゃ無いんで。」

マルオ「……」。

エレン「まあ、高校卒業までには返事をするつもりなんで。宜しく願います。それじゃ。」スタスタ

マルオ「五月君……。」

五月「は、はい？」

マルオ「君達はまだ学生だ……。」

五月「は、はい。(ま、まさか……、別れるとか……。)」

マルオ「清い付き合いを心掛けるように。」

五月「え？そ、それだけですか？（。ん）」

マルオ「勘違いしないでくれたまえ。認めるかどうかは保留にしているだけ。君と彼の振る舞い方次第だ。」

五月「で、ですよ。（。ω。）」

マルオ「それから、安全のためにも、姉妹達を含め、なるべくイエーガー君の元に居るように。では。」スタスタ

五月「……。」（い、一気に疲労が来ました……。）「ヘナヘナ

エレン「そういや、風太郎は大丈夫か・・・？」

一方風太郎は・・・。

風太郎「五月の森……。何で全員五月になってんだ!？」

風太郎
家庭教師。五つ子ゲーム……。スタアアアアト!!

警告

五月「イエーガー君!!」

エレン「五月か!!勇也さん達を見なかったか!？」

五月「い、勇也さんですか?どうして……」

エレン「今回の半グレの襲撃の犠牲者に成るかもしれない以上、忠告しない訳にはいかねえ!!」

五月「た、確かに……。では探しま……」

勇也「呼んだか?」

エレ・五「わああああ!!」

「はいは「ちよつと、お父さん!!」

風太郎「驚かせてどうすんだよ……。」お爺さんに見分け方を教えてくれと頼んだ後、家族と合流した

エレン「風太郎もいるのか!!丁度良かった!!」

五月「御三方に話さなければならぬ事があるんです!!」

勇也「ど、どうした!?!」

エレン「じ、実は……。」

勇也「な、成程。てつきりあの時はその……、そういう事をしてるもんだと思ってたが……。」

エレン「す、すみません……。」

らいは「つていうか、大丈夫なんですか!? 撃たれたつて……つ。」

風太郎「マジで撃たれたのかよ!!」

エレン「恐らく、弾丸の形状から察するに、BMG 12.7 x 99 mm。長距離狙撃に利用される事もある弾丸だ……。恐らくあの場から1000m近く離れた場所に居た。ついでに言うと、ケーキ屋でやった祝賀会の帰り道に、半グレに襲撃された。恐らく同一犯と見て良いだろうな。」(風太郎達に弾丸を見せる)

勇也「マジか……。本物の弾丸……。」

らいは「銃刀法違反の、この日本で……。」

風太郎「エレン。俺達はどうすればいいんだ。」

エレン「恐らく、^{やっこ}奴さんの狙いは俺だ。だが、人質を取る為にお前たち家族を狙わないとも限らない……。この旅行中はなるべく俺の目の届く範囲に居てくれ!!頼む!!こんな事に巻き込んで済まないとは思ってる!!」

勇也「……頭を上げてくれ。エレン君。」

エレン「……。っ。」

勇也「俺達は君の事を恨んじやいない……。この状況になったのは、反社共のせいだろうか？君が責任を負う必要が何処にある？」

エレン「ですが……。」

勇也「だが、これだけは約束してくれ!!」

エレン「は、はい!!」

勇也「らいはと、風太郎を守ってくれ!!そして、君も絶対に死なないでくれ!!」

エレン「……分かりました。と言いたいですが、それは却下します……。」

勇也「ど、どうしてだ!？」

エレン「勇也さんの事も、絶対に守るからに決まってるじやないですか!!これは、覚

悟じやありません。意地みたいなもんですよ!!」

勇也「そ、そうか・・・。」

五月「ええ!!それに、イエーガー君は元兵士ですからね!!」

勇也「……………は？」

らいは「え……………？五月さん……………、今何て……………？」

五月「……………あ。(……………)」

風太郎「お、おい……………。五月……………」

五月「あ、あ、あ、あ、あの違うんです!!今のはジョークと言いますか!!兵隊さん位強いから安心して欲しい……………」

エレン「もういい。」

五月「え？」

エレン「丁度良い機会だ。勇也さん達にも全部話す。隠す事でもないし、勇也さんと

らいはちゃんだけ仲間外れにすんのもなんだからな……。勇也さん。らいはちゃん。」

勇也「お、おう!？」

らいは「な、何でしょう!!」

エレン「今から信じ難い事を話しますが、最後まで聞いて下さい。もしも、信用が出ないのであれば、証拠も見せますので……。聞く覚悟はありますか……。？」

らいは「え？あ、はい!!」

勇也「お、応!!」

らいは「……（。D。D）」

勇也「……（。D。D）」

エレン「えーつと、一応全部話しましたが……。信用いただけたでしょうか……？」

風太郎「返事がない。ただの屍の様だ……。」

五月「い、勇也さん!?らいはちゃん!!」

勇也「……はっ!!す、すまん!!ぼーつとしてた!!」

らいは「わ、私も!!」

勇也「えつと……、整理すると。イエーガー君は今から千年以上前に生きた人間で……、兵士として活動していたと……。」

「はいそれで、19歳のときにコールドスリープのような状態になって、現代に蘇った……？」

エレン「まあ、概ねおおむそんな感じですね。信用できないなら、資料とかも送りますか……。」

勇也「い、いや。大丈夫だ。……ふう。兎に角、そんな元兵士のエレン君が守ってくれると……。」

エレン「そんな感じですね……。もしも不安に感じられるのなら、別の策を……。」
「はい「ううん。大丈夫ですよ。」

勇也「戦闘を熟知している元兵士に護ってもらう……。こんなに心強い事はねえな!!」

エレン「……そうですか。風太郎は？」

風太郎「……俺もお前を信じる。」

エレン「……そうか。……と、重たい話になっていますが。俺の目の届く範囲に居れば問題ありません。なるべく、らいはちゃんは風太郎か勇也さんの傍に居る事。これを守ってくれ。」

らいは「サーイエツサーです!! (´・ω´)ゞ」

エレン「一応、勇也さんとも連絡先を交換しときましょう。これ、俺のアドレスです。」

勇也「お!ありがとな!!」

風太郎「その弾丸はどうするんだ?」

エレン「証拠として、持って帰る。手袋を嵌めて掴んでるから、問題ねえよ。」

勇也「おお……、刑事ドラマみたいだな……。」

エレン「今は警察ですから（*ゝ*）。では、心配せずに旅行を楽しんでください。
失礼します……。」スタスタ

勇也「いやー。いまだに夢かと思ってるぜ……。」

五月「過去からタイムスリップしてきた存在のような人ですからね……。」

らいは「で？五月さん……。」

五月「はい？」

らいは「あの後、エレンさんと何処まで行きました？」

五月「……／／／／／」

!!!!????

勇也「こら！らいは！そんな事を聞くんじや……。」

五月「し、失礼しますー!!」ピューン

らいは「ありやりや……。」

勇也「……というか、あの二人が結婚したら。年の差のギネス記録更新するんじやね……?」

風太郎「もう、記録更新不可だろ……。 (そういえば、あいつらの爺さんに釣りに誘われてたんだった……。 後でエレンも誘うか……。)」

悪魔の子。取り敢えず知り合い全員に素性共有完了★

襲撃

釣場

エレン「……………」。

風太郎「……………」。

お爺さん「……………」。

エレン「爺さん……………。此処本当に釣れるんですか……………?」

お爺さん「根気強く待てば、魚うおの方から来る……………」。

エレン「風太郎は……………?」

風太郎「何の魚か知らんが、数匹釣れたぜ……………。爺さんには及ばないが。」

エレン「なんで俺だけヒットしねえんだよ……！（#、ム、）」イライラ

お爺さん「気を乱せば、来るものも来んわ……。」

エレン「うつす……。」

お爺さん「孫から聞いたぞ……。無法者に狙われている様だな……。」

エレン「……。」

お爺さん「孫の、毛髪もうはつ一本にでも傷を付けさせてみる……。ただでは置かんぞ……。」

エレン「はい……。」

風太郎「というか、さつきから幾ら何でも、ピリつきすぎだろ……。少し落ち着けよ……。」

エレン「いつ刺客が現れるか分からねえんだぞ……。気を抜ける訳ねえだろうが……!!」イライラ

お爺さん「……周囲に、神経を張る。それもまた敵の動きを探るのに良い……。だが、疲労が溜まる一方なのも、また事実……。儂も若い頃は、御主と同じように、敵を探る為に気を張り付かせておった……。」

エレン「あんたも、戦争に……?」

風太郎「爺さんの年齢からするに……。第二次世界大戦……。か?」

お爺さん「如何にも……。若い頃に徴兵に行つてな……。そこらじゆうを駆けずり回つた……。敵に狙われている気がして、休息を取る事もままならんかったわ……。」

エレン「心中御察しするぜ……。」

お爺さん「だがある日、遂に疲労が来て儂は朦朧もうちろうとする日が続いてな……。当時、島で流行していた感染症などにも掛かり、意識が無くなりそうじゃった……。」

風太郎「そんな状況下で如何やって……？」

お爺さん「……風が教えてくれた。」

エレン「……風？」

お爺さん「その時までには、敵を探そうと神経を集中させる余り、視野が逆に狭くなつておつた……。だが、力が抜けると同時……、世界が鮮明になつた気がしたのだ……。風が……、草木が……、教えてくれる様になつた……。」

エレン「……。」

風太郎「つまり……、逆に力を抜くと良い……つて事か？」

お爺さん「如何にも……。」

エレン「……(力を抜く……か……)。」

エレン「ふうく……。(――)」

風太郎(きゅ、急に静かに……。死んでねえよな……。・――;)。

風太郎「あ、そういえば。五つ子の見分け方……。教えて貰えませんか？」

お爺さん「……。今、来たのが一花と二乃。」

風太郎「えっ？」

お爺さん「あれが三玖。」

風太郎「えっ？」

お爺さん「その隣が四葉……。」

風太郎「えっ？」

お爺さん「……………」

エレン「……………（———）」

風太郎「……………。（全然分からん!!早く偽五月を見つけないといけないのに。もう見分けるのは諦めて、足の傷からの特定に集中すべきか……………?）」

五月「イエーガー君。釣れてますか？」

エレン「……………」

五月「イエーガー君……………?」

エレン「……………」

五月「イエーガー君!」

エレン「はっ!!いい、五月か……。どうした?」

五月「逆にあなたがどうしたのですか?」

エレン「少し待ってくれ……。今集中してる……。」

四葉「集中って……。何する気ですか……?」

エレン「俺は風になる……。空気になる……。」

三玖「く、空気……?」

エレン（全身の脱力……。）

五月「と、取り敢えず、歩きましょう。良いですね?イエーガー君。」

エレン「ああ……。」

——その頃、他姉妹より、先を歩いてる二乃&一花——
一花「そ、それで……二乃は如何するの……？」

二乃「取り敢えず、無理やりにも意識させてやるわ。やっぱり、口付けは……さすがに気が早すぎるわね……。頬にキスでもしようかしら……。」

一花「……っ（やっぱり、止まらない!!）」

二乃「それとも……、ってあら？」

一花「ど、どうしたの？」

二乃「誰かいるわね……。」

一花「あ……本当だ……」

二乃「あのく。どうかしましたか……?」

??? 「ん? ああ。少し困った事がありましたね……」

一花（なんか怪しい……。っ! そういえば!!）

マルオ『姉妹全員集まったね……。今回の旅行。なるべき単独行動は控える事。そして、イエーガ君といつでも連絡が取れるようにする事。』

一花（まさか、夏祭りのときの危ない人達の事を指してるんじゃないやあ……）

一花「待って二乃!! その人怪しい!!」

二乃「えっ!? ど、どういう事!？」

一花「良いから止まって!!」

??? 「いきなりどうしたんですか？ 私は彼女に助けて貰う所なんですけど。」

一花「・・・っ!! (何か分からない!! けど、この人ヤバイ!!)」

———その頃のエレン———

エレン「・・・。」

五月（どうしたのでしょうか・・・？ さつきから静かになって・・・。まるで空気と一体化してる様な・・・。）

エレン「・・・っ!! 風太郎!! それからお前らも!!」

風太郎「ど、どうした!!」

エレン「一度だけ!!そして端的にしか伝えん!!早急にマルオさんと、勇也さんとはちやんと合流!!二乃と一花が厄介事に巻き込まれている!!連絡、そして合流!!良いな!!」ダッ

風太郎「・・・分かった!!」

五月&他姉妹「は、はい!!(うん!!)」

お爺さん(ほう・・・)。この短期間でものにしたのか・・・。

一花「あなた・・・、まさかエレン君が言つてた半グレ・・・？」

??? 「ははっ！何を言うのかと思えば・・・。私は善良な一般人ですよ。」

一花（この笑い方・・・どこかで見た事があると思つたら、ドラマで悪役を演じていた先輩俳優の笑い方に似てるんだ。）

一花「そんな、胡散臭い笑い方をして騙されると思つてるの・・・？」

??? 「初対面の人に対して、その口の利き方は良く無いですねえ・・・。そんな子達には・・・。」

??? 「お仕置きをしなくては……。」（銃を取り出す）

二乃 「じゅ、銃!？」

一花 「二乃!! 走って!! 逃げて!!」

??? 「もう遅いですよ……。君達がエレン・イエーガーの知り合いという事は知っています……。残念ですが、ここで死んで貰いますよ。彼の絶望に歪む顔を見るのが楽しみですよ……。では……。」

二乃 （そんな!! こんなところで死ぬなんて!!）

一花（私はまだ・・・。）

エレン「何やってんだてめええエエエ!!!」トビゲリ

??? 「ぬう!」（バックステップで蹴りを避ける）

エレン「お前ら!!無事か!」

二乃「え、ええ!!」

一花「う、うん!!」

??? 「あれだけ離れた距離から短時間で着くとは……。侮れませんね……。」

エレン「……その面。てめえ、この前道路交通法違反しながら、弾いてきた奴だな……。」

??? 「ええ、その通りですよ。」

エレン「何者だ。」

??? 「ああ……。自己紹介が先でしたね。私は……。」

リ
??? 「愚連隊『羅紗弩』総帥。東人^{あすまびとげんや}玄弥と申します……。以後お見知りおきを。」ニヤ

エレン「……は？アズマ……ピト……？」

悪魔の子、目標と邂逅。

激突

五月「二乃!!一花!!」

三玖「大丈夫!?!」

四葉「怪我してない!?!」

一花「だ、大丈夫!」

二乃「問題無いわ!!」

マルオ「一花君、二乃君。取り敢えず僕の後ろに来たまえ。」

二乃「分かったわ……。」

エレン（マルオさんも合流……。遠目に見えるのは、爺さんと上杉家の面々か……。さてと。）

エレン「東人玄弥だったか……。どういふつもりで、一花と二乃を狙った。先刻の、狙撃の件は如何いふ事か、説明してくれるか……。」

東人「敵に情報開示請求ですか……。良いでしょう。特別に答えて差し上げます。」

エレン「……。」

東人「先程の狙撃の件は、実を言うと私の指示では無く、暴走した部下によるものですよ。」

エレン「何……?」

東人「私の目的は、組対四課の主力である、あなたを抹殺する事。それ以外の一般人は極力狙わない事にしています。ですので、彼に關しては命令違反という事で、肅清致

しました。」ニコニコ

一花「ならさっきの私達を狙ったのはどういう事!？」

風太郎「お、おい一花!あんまり刺激は・・・。」

東人「ああ・・・、その事ならエレン・イエーガーを誘き出す為に行った事。彼のように正義感の高い人物なら、まんまと乗ってくれるでしょうからねえ。」

東人「まあ、来ないなら来ないであなた方二人を殺しはしないものの彼が来るまで、大声を出して貰えるように少し怪我をして貰・・・。」

エレン「おい」「ゴゴゴゴゴ」

勇也「——ッ（おいおいおい……。何だよこの腹の底から痺れる感じは……。）」

らいは（ぜ、全身から汗が止まらない。）

マルオ（これは、僕に怒鳴った時が可愛く見えるほどの……。）

お爺さん（殺気か……。）

エレン「いい加減にしろよ。この糞野郎。」ゴゴゴゴ

東人「おつと、刺激しすぎてしまいましたね……。それにしても、クソ野郎ですか……。貴方がそれを言えた義理ですかね……。」

エレン「クソ野郎は、お互い様だろうが。海沿いで　阿呆を一匹　お片付け……。」「(六尺棒装備)

東人「辞世の句という訳ですか……。では……。先手必勝で行かせてもらいますよお!!」バアン

エレン(射線がバレバレ。打つ!!)ガアン

マルオ(銃弾を鉄棒で弾いただ!!)

エレン「弾の軌道がバレバレなんだよ!!お近づきの印に六尺棒でもどうぞお!!」(六尺棒を投擲する。)

東人「チィィ!!」(六尺棒が頬を掠る)

エレン「大口叩いてた割には、反射能力が御粗末みてえだな!! 大将がこれじゃあ、部下が雑魚なものも納得がいくな!! 今度はこつちから行くぜ!!」(距離を詰める)

東人(銃が通じない……。ならば近接で行きますか……。)

エレン「貰った!!」

東人「甘いですね!」

エレン「(眼前にナイフ! いつ取り出しやがった!!) くそっ!」(首を捻って避ける)

東人「隙が出来ましたね……。貰いましたよ!!」(腹に蹴りを入れる)

エレン「ぐっ!! くそっ。」

東人「自ら後ろに飛び、威力を軽減しましたか……。素晴らしい!!」

エレン「そりやあどうも！あんたみたいな野郎じゃなくて、五月みたいな美少女に褒められるんだったら、もつと嬉しいんだがな!!」

五月（せ、戦闘の最中に何を言ってるのですか！あの人は!?!?!）

らいは（あれ？もしかして、エレンさんって元兵士なだけあつて、軽口叩く余裕があるほど、こういう状況に慣れてる・・・？）

エレン（首を捻って躲したが、まあまあザツクリいったか・・・。まあ、マーレに潜入した時に左目と左足を潰したときよりはマシだな・・・。あれをやるか・・・。）

東人「ぼーっとしている暇があるのですかね!?!」（ナイフを振り上げる）

エレン「かかったな!!間抜け!!」（振りおりしてくる腕を掴む。）

東人「ぬう!?!」

エレン「腹を固める……。じゃねえと、ぞうもつ臓物がぐちやぐちやになるかもな……。
はああああ!!!」

バアアアアン

東人「ぐおおおお!!!」

一花「あれって……。発瘧!?初めて見た……。」

勇也「すげえ音したぞ!人が出して良い音じゃねえ!」

二乃「けど、エレン君の頬から結構血が……。」

東人「ははっ……。今の衝撃。内臓が全部破裂したかと思いましたよ……。(腹が
引きつりますね……。)」

エレン「マジか……。(夏祭りのあの兄ちゃんとは比べもんならない位の威力で叩き込んだんだがな……。)」

東人「しかし、分かりませんね……。何故そのような実力を持つているにも関わらず、警察組織に所属しているのかが。そして、そんな取るに足らない後ろに居る有象無象の弱者を守るのかが……。ああ、もしや警察が持つ”大義”という、反吐が出るような言葉からですか？1000年以上前に、パラディ島以外の人間の約8割を塵殺ちゆうさつしたあなたが？」クツクツク

エレン「ははっ。……あなた、俺がそんな良い子ちゃんじみた理由で戦つてると思つてんのかよ。」

東人「は……。？」

エレン「何事にも限りがあるのが、この世の理ことわり。そして、それは人の命にも当てはまる……。不老不死の人間なんて、存在しねえ。人間いつかは老いて朽ち果てるもんだ。俺達警察がどれだけ働こうが、人は死んでいくんだよ……。だったら、手の届く範囲

の人間を守った方が効率的だろう……。そして何より!!」

エレン「本来、この世に存在しえない不純物な俺を、初めに受け入れてくれた風太郎。そして、素性を聞いても受け入れてくれた、勇也さんにはちゃんに、マルオさん。馬鹿で泣き虫な連中だが、俺にとって心地が良く温かい毎日を送らせてくれた五つ子。」

エレン「俺は、そんな奴らと出会った奇跡に、感謝する。そして、共に生きれる事を誇

りに思う。」

エレン「それに、生憎俺は自己中心エゴイスト的なクソ野郎だからな。大事な仲間との平和を邪魔するってんなら、邪魔する奴の住んでる国……いや、世界を真っ平らにして根絶やしにしても良いと思ってるだよ。他の連中が何処で死のうが知ったこつちやねえからな。」

エレン「来いよ、先祖の仇討しか考えられない、過去に囚われ続けるクソガキ。一回死んだこの俺が、本物の殺し合いって奴を教えてやる。」クイツクイツ

風太郎（エレン・・・！）

東人「・・・っ。ふ、ふん・・・、その虚勢がいつまで続くかは見ものですが、お喋りして、油断してるんじゃないですか!？」

エレン「ちっ!!」

東人「さあ!!その状況で守り切れますかね!？」（銃を構える。）

エレン「あの射線は……、……!!」五月!!」

五月「……っ!!」

バァン!!

風太郎「え、エレン・・・？」

四葉「イ、イエーガーさん？」

エレン「・・・っ。(良かった・・・弾は通り抜けなかったか・・・)」ポタポタ

らいは「エレンさん!! 脇腹が・・・!」

東人「足手纏いを守るなど愚の骨頂!! 貰いましたよ!! そのまま死んでください!!」(距離を詰める)

エレン「そう来るのを……、待ってた!!もう一発食らつとけよ!!」(東人の腹に指を置く)

東人「……おっと、不味いですね。」

エレン「破あああああ
!!!!!!」

東人「ぐぼおおお!!」

エレン(ワンインチパンチで吹っ飛ばして距離は稼げた……) スタスタ

東人「あの怪我から、ワンインチパンチを放つとは……っゴフツ!!何という精神力……ぶげえ!!」↑(顔を殴られる)

エレン「……どうした?もう終わりか?」ゲシイ

東人「がはあ!!」

ドガツバキイゴスウ

東人「がああああ!!」

エレン「あー、なんか懐かしい感覚がすると思ったら、マールで移民の少年を苛めた奴をぼこぼこにして時と似てるんだわ。それにしても、てめえは、先祖の復讐って言つてたな。確かに俺は、昔の戦争で大勢のお前の先祖を殺した。だが、お前は如何だ?先祖の復讐?なら、堅気を狙う理由が何処にある?お前はただ、俺への復讐という大義名分を立てて、無関係な人間を巻き込んでるだけにすぎねえんだよ。世界中が戦争していた約1000年前とは、勝手が違い過ぎるんだよ。そんなてめえが正義を語るなん

ぞ、反吐が出る。」

風太郎「お、おい。何かエレンの様子が変だぞ!!」

二乃「ちよっ、あのままじゃホントに死んじやうわよ!!」

勇也「エレン君!!辞めるんだ!!」

周囲の制止の声を聞かず

血に飢えし獣が弱き獣を襲うが如き猛攻

悪魔

その様は
さま

東人「……がはっ。ははっ……、素晴らしい猛攻ですね。」

エレン「……。」

東人「さあ、殺してみてくださいよ。私の先祖を殺したときの様に……。」

エレン「そうだな。五月を傷つけようとした罰だ。さつさとくたばれクソ野郎。」（手に掴んだ石を振り上げる）

五月「止めて!!」(エレンの腕を掴む。)

エレン「……。」

五月「止めて下さい!!それ以上すれば、戻れなくなりますよ!!」

エレン「……。」ちっ!!」ポイツ

五月「もう彼は、気を失っています。それ以上やるのは……。」

エレン「……分かった。……うっ！」グサツ

エレン「……は？」

東人「……油断しましたね。」

エレン（腹に、ナイフ……。）

東人「私の先祖を踏みつぶした罰です。とは言え私も体が限界なので、ここで引きましよう」ボウン

エレン「逃げやがった……。煙玉で逃げるとか忍者かよ……。」

五月「イエーガ君!!早く怪我を……。」

エレン「ごめん五月……。」

五月「……え？」

エレン「巨人化能力があれば再生出来たんだが……。」

エレン「さすがに死んだかな。」ダラリ

五月「イエーガー君!!」

風太郎「おいエレン!!大丈夫か!!」

マルオ「勇也!!急いで彼を運ぶぞ!!一花君と二乃君は清潔な布団を!!三玖君と四葉君は、僕の部屋からイエーガー君の部屋に鞆たもとを運んできてくれ!!中に医療器具が入ってる!!五月君と上杉君に勇也の娘の君達は、煮沸しゃぶつした湯を用意するように!!急いでくれ!!」

全員「了解!!」

五月（お願いです!!神様!!イエーガ君を助けて!!）

悪魔の子、終了のお知らせ。

五女の慟哭（どうこく）

??? 『これは・・・、無茶をするのは、昔から変わらないか。ま、怪我の回復を早めてあげる位はしてあげようかな♪』

カラン

マルオ「銃弾の摘出完了。後は、縫合するだけ……。」

エレン「……。」

マルオ「……。脇腹に銃痕、頬に深い切り傷、腹部に深い刺傷^{ししやう}……。イーガー君。幾ら君が元兵士とはいえ、ここまでする必要があつたのかい……。いや、それより縫合をしなければ……。」

シュウウウウ

マルオ（銃痕の傷跡から蒸気!?何が起こっている!?）

シュウウウウ

マルオ（・・・っ!?これは・・・、傷口が塞がっている!?こんなスピードで傷が塞がるなど、聞いた事も見た事も無いぞ!!）

エレン「んー。つてあれ？宿の中？」

マルオ「目を覚ましたのか・・・。」

エレン「あ、マルオさん。おはよう御座います。．．．？どうしたんですか？そんな、鳩が豆鉄砲を食らった様な顔して．．．。」

マルオ「え、あ、いや．．．。すまない。何でも無いよ。」

エレン「お、また傷口が治ってる。じゃあ、起きま．．．イデデデデデ!!!」

マルオ（傷口が塞がっても、痛みは残ってるのか。何とも、摩訶不思議な．．．。）

マルオ「痛みがあるのなら、無理をするべきではないだろう．．．。少し休んでると．．．。」

タタタタタタタ

エレン「ん？誰か近づいてきてませんか？」

マルオ「何だと？」

スパーン

五月「イエーガー君!!お父さん!イエーガー君は!?!」

マルオ「あ、ああ。五月君か。イエーガー君なら、今しがた目を覚ましたところだ。」

エレン「五月、だいじょう「イエーガー君!!」ぐえええええ!!!」

マルオ「五月君。彼はまだ痛みが残っているんだ。今抱きつくのは……。」

五月「……か。」

エレン「え？」

五月「馬鹿、バカバカバカア!!どれだけ心配したと持つてるんですかあ!!。 (つ口
≡)。(。ワーン!」ポカポカ

エレン「わ、悪かったって。ま、マルオさん。Help me。」

マルオ「君の自業自得しか言いようがないね……。僕は他の娘達の所に行ってくる。
今の状態の五月君を、部屋に帰す気は無いが……。くれぐれも間違いは犯さない様
に……。」

エレン「は、はい……。 (この人、雰囲気がりヴァイ兵長に似てるから怖いんだよな
)(。?。;)(」

エレン「えーと、落ち着いたか?五月……。?」ポンポン

五月「……………」フルフル（顔を埋めてる）

エレン「ホントにごめんて……………。心配掛けたとは思ってるし……………」

五月「だ、だつてえ……………。ひつ……………。イエーガ君が死んじやうかつて、ふぐ……………。思つてたからあ……………」グスグス

エレン「悪かったよ。あーあー、こんなに目元を腫らして……………。ほら、拭いてやるよ。」ハンカチデゴシゴシ

五月「……………グスツ。イエーガ君……………。お願いします。もう、こんな危ない事はやめて下さい……………。イエーガ君は幸せにならなきゃいけない人なんです……………。お願いします!!」

エレン「ごめん……、それは出来ない。」

五月「……っ。」

エレン「あいつが、俺に対して復讐心を抱いているのなら、俺はそれを止めなきゃならない……。何故なら俺は刑事で、奴が復讐に囚われているのは俺のせいだ。だから、責任を取らなくちゃならない。」

五月「……でも!!」

エレン「……すまなかつた。」

五月「……え?」

エレン「俺は・・・お前の事を危険に晒してしまった・・・。俺はマルオさんに、お前ら姉妹のボディガードとして雇われたも同然だ・・・。だからお前の事を守り抜く義務がある・・・。だが、それも違う様に思えてきた・・・。」

五月「・・・？」

エレン「俺は、お前・・・そして、他の姉妹や風太郎を守り抜きたい・・・。特にお前は、俺にとって大事な存在だ・・・。姉妹の中で、特に勉強なども見てやっている面も含めて。・・・だから、仕事や依頼や義務などを抜きにしても、俺はお前という存在を守り抜く。絶対に、何も失わせない。俺と同じ思いはさせない。」

エレン「約束だ。」（小指を差し出す）

五月「・・・分かりました。破ったら針千本飲ませますからね!!」（差し出された小指を、自分の小指と絡ませる）

エレン「そいつは勘弁して欲しいな．．．（．．．；）。」

エレ・五「せーの。ゆーびきーりげーんまーん．．．。」

悪魔はまだ気付いていない
・
・
・
。

自身は自覚をしていないが・・・。

五月^{彼女}を命を掛けても守りたい・・・。

そう思えるほどの、淡^{あわ}い恋心を、心の奥底^{いだ}に抱^{いだ}いてるといふ事を・・・。

悪魔の子。末っ子と指切りげんまんをする。

しやあああ!!試合終了(ゲームセット) オオオ(CV:子
安 武人)

チュンチュンアサダチュン(ゝ8ゝ)

—— エレンの部屋 ——

風太郎「大丈夫か？」

エレン「痛みは残ってるけどな。お前らの命を救えたんだ、脇腹に穴を空けるのなんざ、安い安い。」

風太郎「……あんま無理はしないでくれよ。五月だけじゃなく、あいつ等や、らいはに親父まで心配してたからな。それに、番台の爺さんも。」

エレン「……ああ、にしても。」

風太郎「(・|・?)」

エレン「勉強の虫のお前が人の心配するなんて、明日は雹ひょうでも降るんじゃないのか?」

風太郎「(#^ω^)」プツチーン

風太郎「そうかそうか、せっかく痛み止めの薬をマルオさんから貰って来たのに要らねえんだな?」

エレン「マジすんませんでした。痛み止めを御恵み下さい風太郎様。orz」

風太郎「つたく。けどまあ、そんな冗談言える位には回復したみてえだな。」

エレン「まあな。で?ここに来た目的は『鎮痛剤処方しときますねー』って言いに来た訳じゃねえんだろ?」

風太郎「ああ・・・、実は。」

エレン「次のお前の台詞は、「あいつらの、見分け方を教えて欲しい。」だ!!」

風太郎「あいつらの、見分け方を教えて欲しい。・・・はっ!! って、何言わせんだ!!」

エレン「一回、言わせてみたかった。」

風太郎「何だよそれ……。まあ良い。あいつらを見分けるコツは何だ? おまえは、一花が犯人のときも言い当ててただろ?」

エレン「あー、それな。コツはな……。」

風太郎「コツは・・・?」

エレン「分かんらん。」

風太郎「分かんねえのかよ!!」

エレン「実際、あの時はまだ簡単な部類だったから、見分けただけだ。ただ、今回はマジで一挙一動を慎重に観察して、ようやく五つ子の中でも、特に一緒に居る五月を見分けられた位だからな……。」

風太郎「嘘だろ……。温泉のときの二乃は？」

エレン「あれはあの時言つたように、あいつの喋り方とかの問題だ。『愛があれば見分ける。』……。まあ、あの爺さんや五月が言つてる事も、あながち間違いじゃねえかもな。愛つて言うのは、悪く言えば呪縛。しかし、良く言えば、そんな呪いを作つちまうほど、互いを繋ぐこの世で最も強い絆つてもんだし。少なくとも俺は、『愛』つていう存在をそう捉えてる。俺も、未だに昔の初恋相手の事も少し吹っ切れたとはいえ、100%忘れる事が出来たつて訳じゃ無いからな……。五月には悪いが……。」

風太郎「……。」

エレン「なあ、風太郎。お前だつて、何も考えずにあいつらと約一年の間過ごしてきた訳じゃ無いだろう。家庭教師を行う過程であいつらの癖を、番台の爺さんに比べりゃミジンコ程度だが、無意識の内に目に焼き付けてきた筈だ。」

風太郎「……。むう……。ふう〜、分かった。終わらせて来る。」

エレン「今の台詞だけ切り抜くと、悪役ムーブかましてるみたいだな。ま、頑張れよ。学年一位。」

風太郎「おう。あと、今の学年一位はお前だろうか。」

風太郎「……と、啖呵を切ったは良いもの……。不安だ……。」

ピロン♪

風太郎「ん?メール?」

エレン

一応俺は正体を知ってる。

お前はタダでさえ、温泉の
二乃の件で、前科があるか
らな。

間違えんなよ。

頑張れ。

※女つて生き物は、基本的に
察してちゃんがが多いからな。

(偏見)

風太郎(プレッシャー掛けんなよ……。それにしても、『頑張れ』……か……。お前が俺にそんな言葉を掛けるなんて、^{ひょう}雹じゃなくて、地震でも起こるんじゃないか?)ガラッ

偽五月「……。」

風太郎「……。お前は初日の夜、俺と話してた五月つて事で良いんだな?」

偽五月「……はい。私の正体は……。」

風太郎「待て。五つ子ゲームを、結局俺はクリアできなかった。降参だ。……、だが負けっぱなしってのも癩しやぐだな。リベンジだ。せめてお前だけは、俺から正体を暴く。（それが、今俺が示せるお前達と向き合う態度だ。）」

偽五月「……。」

風太郎「五月から話は聞いてるな？」

偽五月「ええ……。」

風太郎「それなら、あいつに頼まれた件を含め、順を追って説明していこう。」

風太郎「最初は四葉。あいつの悩みは、この旅行自体にあった。よって、今日が終われば自動的に解決する。そして、お前は四葉じゃない。あいつは、お前ほど完璧に変装できないからな。」

偽五月「正解です。」

風太郎「……………」ゴクツ

風太郎「続いて二乃でもない。あいつは少々甘かった。足の先に塗るマニキュア……………」

偽五月「ペディキュアですね。」

風太郎「そ、それを落とし損ねていたんだ。今確認した。」

偽五月「待ってください。顔の判別が付かないのに、なぜペディキュアを塗っているのが、二乃だと分かったのですか？」

風太郎「そ、その話は置いてくれ……………」

偽五月「まあ良いでしょう。正解です。では、二乃の悩みというのは？」

風太郎「それは恐らく……。そうだな、これだけは言えない。」

偽五月「……分かりました。聞かない事にします。これで私は一花と三玖に絞られた訳ですが……。」

風太郎「……つと、その前に……。デミグラス。」

偽五月「えっ!?! デッ、デミツ？」

風太郎「いや、その反応で安心した。念のため……。な。話を続ける。お前が一花か三玖か……。まだ、分からない。」

偽五月「そう……。ですか……。(私は何を期待して……。)」

風太郎「……。(一花と思えば、一花に見える。だが、それは三玖も同じ……。今、

ここで特定するしかない。俺にその資格は無いが、このまま終わらせるわけにはいかない!!)」

風太郎 「お前さ・・・、俺の事呼んでくれない？」

偽五月 「・・・! 『上杉君』 その手にはかかりませんよ。」

風太郎 「Σ(?ロ?ーー) ガーン」

風太郎 「徳川四天王って、酒井、本多、榊原とあと誰だっけ?」

偽五月 「分かりません。」

風太郎 「内緒話があるから、耳を貸してくれ。」

偽五月 「左耳ならどうぞ。」

風太郎（んくくくくつ！中々ボロを出さねえ！という事は三玖・・・、いや、女優の
一花の可能性だっでありうる。）

偽五月「・・・。」

五月(三玖)(もうやめて、フータロー。こんな事、意味無いよ。フータローに、私は見つけられない。)

風太郎「駄目だ、分からん。お手上げだ。」

五月(三玖)「そう．．．、ですよね．．．。」

風太郎「ああ．．．、あいつを呼んでくれ。」

五月(三玖)「．．．?あいつ．．．?」

風太郎「ほら、あいつだよ。お前らの末っ子の．．．。今、お前が変装してる．．．。名前は．．．えーつと．．．五．．．五．．．。」

五月(三玖)(ああ．．．、そういうこと．．．。)

風太郎「……」ゴクツ

五月（三玖）「五月ちゃんね。」

風太郎「ハハハハハ！ かかったな！ 五月をちゃん付けで呼ぶのは、一花のみ！！ つまりお前が一花って事だ！」

五月（三玖）「あはは、まんまとやられちゃったなあ。（*・▽・）」

風太郎「つたく、手間かけさせやがって。ま、お前だけ悩みの見当がつかなかったから、そうじゃないかと睨んではいたがな。」

五月（三玖）「へえ、凄い。」

風太郎「仕事絡みか？ 忙しくなつたと聞いてはいたが。」

五月(三玖)「ま、そんなとこ。じゃあ、私もう行くね。」

風太郎「え、いや・・・。」

五月(三玖)「帰り支度があるからまたね。」

風太郎「・・・ふう。(ぎりぎりだったな。)」

お爺さん『長い月日を経て、相手の仕草、声、ふとした仕草を知る事。』

エレン『愛って言うのは、悪く言えば呪縛。』

風太郎（結局俺は、こんな方法でしか判別できない。だがそれで良い。これで一件落着。偽五月、お前の正体は……。）

お爺さん『それは、もはや愛と言える。』

エレン『良く言えば、そんな呪いを作っちゃまうほど、互いを繋ぐこの世で最も強い絆つてもんだし。少なくとも俺は、『愛』っていう存在をそう捉えてる。』

五月（三玖）「・・・。」ギユツ

風太郎「・・・!!」

風太郎 「三玖か？」

五月(三玖) 「……なんで？一花って言ったじゃん。」

一瞬。お前が三玖に見えたんだ。風太郎 「いやつ、すまん。何故か自分でも分からんが、気のせい……かもしれんが、

五月（三玖）「
・
・
・
っ
!!!!」
バサッ
ダッ

三玖「当たり」

ドサツ

風太郎「マジか……。」

三玖「一つ聞いても良い? 私の悩みは、心当たりが有りそうだったよね。私が偽五月
じやなかったら、何に悩んでると思ってた?」

風太郎「間違えてると分かった今となつては恥ずかしい話だが、バレンタイン、返し
てない事に腹立ててんのかと思った。」

三玖「……あはははは。」

風太郎「笑うなつて言つただろ!!お、お前こそなんで俺に辞めて欲しかったんだよ!」

三玖「あ、やっぱそれ無し。」

風太郎「はあ!?!」

三玖（フータローは教師。私は生徒。それは変わらない。でも、全部が変わらない事は無いんだ。）

三玖（私を見つけてくれて、ありがとう。）

——風三玖が居る、部屋の襖の前——

エレン(うーむ。風太郎を朝風呂に誘って、飲みたかったんだが……、邪魔しちゃ駄目だよな(；・▽・) ↑(一升瓶装備)

悪魔の子、親友を誘えに誘えない。

盟約の鐘

— 女子風呂 —

四葉「らいはちゃん。」

らいは「なーに？ 四葉さん？」

四葉「今日で旅行もお終いだけど、どうでしたかー？」

らいは「んー。途中で危ない目にもあったけど、エレンさんが守ってくれたし、それを帳消しにできる位に、面白い所がいっぱいあって。物凄く楽しかった！昨日は、お父さんと沢山遊びに行ったんだー。お兄ちゃんが居なかつたのは残念だけど、凄い所にブランコがあつてね。この旅館も、最初は驚いちゃつたけど……、とっても良いとこだったって、学校が始まったら友達に言うんだ。」

四葉「わあー！ やつぱり、らいはちゃんは良い子です！ 戸籍の改善という犯罪ギリギ

りの手を使つてでも、自分の妹にしたいです！」

五月「思いつきり犯罪ですが（ハ、ハ）」

らいは「そういえば・・・、三玖さんと一花さんは何処？」

四葉「二人なら、そこのサウナじゃないかな？」

らいは「へー、そんなのあつたんだ。」

四葉「でもちよつと、長すぎる気が・・・。」

一花「三玖・・・、もう限界なんじゃない？」

三玖「ま・・・、まだ平気・・・。」

一花「凄いね……、お姉さんは、そんな無理できないよ。降参……。」

三玖「一花……。期末試験、本当は悔しかった。多分、顔に出てたから気付いたよね。」

一花（いつもの無表情だったけど……（・・・；））

三玖「でも……。もう良い。私達は生徒と教師だけど、勉強だけが全てじゃないと分かったから……。私を好きになってもらえる、何かを探すんだ。」

一花「……、よっこいせ。」

三玖「降参。したんじゃないっけ？」

一花「なんだか、負けたく無くなっちゃった。」

二乃「……」ブクブク

五月「二乃、どうしたのですか？」

二乃「してやられたわ……。まさか、三玖だけじゃないなんて……。もう、なりふり構ってられないかも。五月、あんたは私に内緒にしてる事無いでしょうね。」

五月「あつたとしても、言えないから隠し事なんですよ……。」

二乃「それもそうね。」

五月（言えない……。！混浴でイエーガー君に押し倒されて、そういう気持ちになっ

たなんて・・・／＼／＼！)

ゴゴゴゴゴゴ

らいは「なんだかこの温泉、入った時より熱くなつたような気がする！」

四葉「そうかなー（^ ^ ; ）」

らいは「お兄ちゃん達、逆^{のほ}上せて無いと良いけど・・・。」

ヒユウウウ

風太郎「・・・。」

勇也「カーツ！堪んねーな!!マルオに、エレン君も一杯どうだ!!」

エレン「じゃあ、頂きますかね。この、陽○鳥も旨いですよ。」

勇也「おお！秋田の銘酒か!!」

マルオ「上杉、僕を名前で呼ぶな。それに、君達と違って酒は苦手だ。特別な日にだけと決めている。イエーガー君も、あまり飲むと体に悪いぞ。」

エレン「大丈夫ですよ。昔、敵情視察した時に難民キャンプで飲みまくったんですが、ジョッキ10杯ほどはいけましたから!!マルオさんも、こんな日なんだから、飲めばいいのに。」

勇也「エレン君の言う通りだぞ。お前は昔から堅えーんだよ。長湯して少しはふやかしたらどうだ。」

風太郎「じゃ、俺先に出るから・・・。」

勇也「おー。」

エレン「また後でなー。」

勇也「そういや、仲居さんから不思議な話を聞いたんだが。」

エレン「オカルト関連ですか？」

マルオ「やめてくれ。世間話をする間柄でもないだろう。」

勇也「まあ、聞けって。それと、オカルトじゃねえからな。」

勇也「知つての通り、この旅行は家の息子と、お前んとこの嬢ちゃんが偶然当てたもんだ。そんな事あると思うか？五組限定だぜ？」

風・エレ「!!」

勇也「そこで、仲居さんに質問したんだ。この旅行券は何組来ましたかってな。驚いたね。俺らより先に、既に四組来てたんだとさ。」

マルオ「……不思議な話もあつたものだね。」

勇也「だろー!?!」

エレ「うしっ!忘れ物ゼロ!!」

エレ「この旅館とも暫くおさらばか……。最初は、仕事だったから乗り気じゃなかったけど、何やかんや楽しかったよな……。あ、爺さん。」

お爺さん「今日で帰るのか……。」

エレン「ええ。偶然か知りませんが、あいつらとチエックアウトの日まで被りましたからね……(^^;)」

お爺さん「……先刻も、御主とは別の、孫達の教師に伝えたのだがな……。孫達は、わしの最後の希望だ。零奈を失った今となつては……。孫達を、宜しく頼む。」

エレン「……なにを言ってるんですか。あいつらは強い。五人いれば人類最強の姉妹達ですよ。それに、俺が傍に居る内は、何も失わせませんから。じゃ、また来ます。」

お爺さん「御主の覚悟……。しかと見届けたぞ……。」

江端「それでは撮りますよ。」

風太郎「おいエレン!!俺の頭の上でピースを作るな!!」

エレン「お前が仏頂面なのが悪い!!」

勇也「お前もやるか!!マルオ!!」

マルオ「勘弁してくれ・・・。」

らいは「もう!お父さん達、動かない!!江端さんが困っちゃうでしょ!!」

エレ・勇「はい(´・ω・｀)」

江端「はい、チーズ。」カシャ

四葉「よかったー、皆で撮ったときたかったんだ。」

五月「この姿のままでも良かったのでしょうか・・・？」

一花「これは、これで記念だね。」

勇也「いやあ、じっくり見ても、誰が誰か分かんねえな。」

五月「お父様も見分けられますよ。愛があれば!!」

勇也「愛を^{eye}目で補うってか？ガハハハツ！」

エレン「勇也さん・・・。今ので、気温が2℃程下がりました・・・。」

勇也「お！マジか!!」

マルオ「さあ、行こうか。この辺りは地面が滑りやすく危険だ。」スタスタ

五月「イエーガー君。」

エレン「五月？どうしたんだ？」

五月「先日の、東人という彼との関係は……。」

エレン「ああ。お察しの通り、地ならしの被害者の、生き残った一族の子孫だろうな。」

五月「彼を……如何するんですか？」

エレン「……復讐という名の森で迷う奴を救う。って、奴の先祖を殺して、昨日ボコにした俺が言うのもなんだがな……。」

五月「……勝算はあるのですか？」

エレン「ある訳無いだろう……。だが、復讐の連鎖はいつか終わらせなければならぬ。それが、大量虐殺した悪魔である俺の、為すべきけじめだ。」

五月「……死なないでくださいね。」

エレン「ああ……。じゃあ、あの誓いの鐘を鳴らして死なないって誓ってやる。時間もないし、鳴らそうぜ。」

五月「分かりました。せーの。」

ゴーン、ゴーン。

エレン（こいつと居ると、胸が温まる……。この気持ちがおかには分からない。）

エレン（けれども、いつかは分かって見せる。その為にも……。こいつは……。）

エレン（兵士としてではなく、一人の男として守り抜く！）

悪魔の子、旅行無事（？）終了。

帰郷

——中野家——

エレン「そうだ、故郷に行こう。」

風・五つ子「(・ω・?)」

五月「故郷……ですか？」

四葉「という事は、イエーガーさんが掘り起こされた島……。えーつと、何て名前でしたっけ？」

二乃「確か、パラダイ島……だったかしら？」

エレン「そうそう。」

三玖「でも、どうしていきなり……。」

エレン「いやー、実はこんな事言うのもなんだけど、蘇ってから一回も足を踏み入れたなかつたなと思って。」

一花「成程、里帰りみたいなものだね。」

エレン「そういう事だ。もうそろそろで、春休みも終わっちゃうだろうしな。」

風太郎「けど、良いのか？」

エレン「何がだ？」

風太郎「ニュースでやってたらしいが、あそこは関係者以外立ち入り禁止じゃなかったか？」

エレン「大丈夫大丈夫。一応、俺も関係者って事になってるから。」

風太郎 「な、成程？」

エレン 「それに、暫しばらくしたら一般公開されるらしいからな。」

三玖 「誰に聞いたの？」

エレン 「現総理大臣から。」

風太郎 「こ、これがコネって奴か……！」

エレン 「そんな大層なもんでもねえよ。……良かったら、お前らも来るか？」

二乃 「え!?! 良いの!?!」

四葉 「せっかくの里帰りなのに……。」

エレン「良いって。それに昔の仲間の墓が残ってたら、お前らの事を紹介したいしな。」

五月「そ、それなら……。」

——パラディ島の船着き場——

一花「という訳で……。」

四葉「着いたー!!」

エレン「ただいまー!!^{愛しき故郷}パラディ島ー!!」

二乃「結構すぐに着いたわね……。」

三玖「やっぱり誰もいない……。」

風太郎「や、やっぱり来たら不味かったんじゃないのか? (; . ω .)」

五月「今更、その様な事を言ってもしょうがないでしょう……。」

エレン「お前ら、何してんだ？早く行くぞー。」

五月「あ！はい！」

風太郎「結構、足場が不安定だな。」

二乃「あちこちでビルが倒壊してるわね……。」

エレン「……。」スタスタ

四葉「そこまで大きくは無いけど、所々の瓦礫が障害物に……。」ヒヨイヒヨイ

一花「三玖？大丈夫？」

三玖「う、うん……。きや！」ズルツ

風太郎「三玖！」ガシツ

三玖「フ、フータロー。」

風太郎「大丈夫か？」

三玖「う、うん／＼／＼。」

二乃「あー！ずるいわよ!!」

エレン「そこ。イチヤイチャするな。足元しつかり見ろ。」

風太郎「イチヤイチャしとらんわ!!」

三玖「い、イチヤイチャ／＼／＼／」

五月「こちら辺にある家の中に、イエーガー君の実家などは……」

エレン「あれから、千年以上が経ってるんだ。俺の実家だった土地はあっても、別の建造物が建っただろうな。」

四葉「見て見て！あそこに大きな樹があるよ！！駆けっこしよ！」

一花「よーし！負けないぞ！！」

二乃「二人とも！走ったら危ないわよ！！」

エレン「……。（あの樹……、まだ残ってたんだな。歴史研究家達あに研究の為に切り倒されたと思ってたんだが……）」

エレン（10）『ミカサ！アルミン！あそこの樹まで駆けっこしようぜ！！』

アルミン（10）『エレン！待ってよー（TOT）／＼／＼！』

ミカサ（10）『アルミン、背中押してあげる。』

アルミン（10）『え？うわああ！！』ドビューン

エレン（10）『あー！ずるいぞ!!』

エレン「……………」。

五月「イエーガー君？」

エレン「ん…………？」

五月「大丈夫ですか？」

エレン「ちょっと昔の事を思い出してな…………。大丈夫だ。」ナデナデ

五月「そ、そうですか…………。／＼／＼」

エレン「って、もうあんな遠くまで行ったのか、早過ぎるだらあいつら…………。」

五月「四葉が、引つ張っていききましたから．．．（へ、へ；）」

エレン「まじで、生まれた時代が違つたら、ミカサが居た南方訓練兵団は無理だろうが、他の所だつたら主席は取れるんじゃないやねえのあいつ．．．？」

五月「あはは．．．。（しゅ、主席つて．．．。）」

四葉「うわあああ。草叢くさむらがふかふかです。」

二乃「服ぶくが汚れるわよ。全く．．．。」

三玖「つ、疲れた．．．。」

風太郎「汗あせが張り付いて気持ち悪い．．．。」

一花「み、みんなお疲れ様．．．。」

エレン「早かったなお前ら……。」

五月「つ、着きました。」

一花「見てよ2人とも！物凄い大きい樹だね!!」

五月「た、確かにすごい大きいです!!」

四葉「何か、御墓っぽいのが……。何て書いてるんだろ？」

E l l e n · Y e a g e r , M i k a s a · A c k e r m a n a n d A r m i n · A
r l e r t . T h e y r e s t i n p e a c e .

風太郎「な、何て書いてあんだ？」

エレン「ああ。この文字は、パラディ島独自の文字だな。見せてみる……。『E l l

en・Yeager, Mikasa・Ackerman and Armin・Arlet
ert. They rest in peace.』。訳すると、『エレン・イエーガー、
ミカサ・アツカーマン、アルミン・アルレルト。安らかに此処に眠る。』だな。この世に
居る俺としては複雑なんだが……。』

三玖「あれ……？よく考えたら、エレンを掘り起こしたのって、墓荒らしと同義
じゃ……。」

二乃「三玖。それ以上はいけないわ。」

三玖「う、うん。」

エレン「じゃあ、線香渡してくれ。」

一花「了解。」

エレン「アルミン、ミカサ。長い間墓参りに来れなくて済まなかった。こつちは元気にやつてるよ。あつちでも、コニー、ジャン、マーレの奴等と仲良くな。お前らが安息に暮らしてくれる事が、俺にとって何よりの幸せだ。それから、サシャ。お前の事を助けれずに申し訳なかった。あの世で、ニコロの料理を鱈腹食たらぶくつてる事を祈つてるよ……それから母さんも、和平を実現させる為とはいえ、見殺しにして済まなかった……。それから今日はな、お前らに友人を紹介しに来たんだ。」クイツクイツ

風太郎「上杉風太郎です。イエーガー君には随分と世話になっていきます。たまに迷惑を掛けてしまう事もありますが、どうか宜しくお願いします。」

一花「中野一花です。宜しくお願いします。」

二乃「中野二乃です。イエーガー君には色々と為になる言葉を貰いました。宜しくお願いします。」

三玖「な、中野三玖です……。よろしくお願いします。」

四葉「中野四葉です!! イエーガーさんからお話は聞いています!! よろしくお願ひします!」

五月「中野五月です。イエーガー君には度々助けて貰っています。宜しくお願ひ致します。」

エレン「見た通りの個性的な連中だが、なんとかやつてるよ。だから、温かい目で俺の行く末を見守ってくれ。それじゃあまたな。」

——大樹の前の草原——

四葉「上杉さーん!! そっちにフリスビーが行きましたよー!!」

風太郎「うわああああああ!!」

三玖「四葉、飛ばし過ぎ・・・。」

二乃「フー君! 私が取って来るわ!!」

一花「転んじや駄目だよー！」

エレン「……………」↑（樹にもたれ掛かっている）

五月「イエーガー君。隣、宜しいですか？」

エレン「ああ……………」

五月「どうでしたか？久々の故郷は……………」

エレン「英気を養えた気がするな。何より、車がわんさか走ってる町よりも空気が綺麗だ。」

五月「そうですか……………」

エレン「この樹……………」

五月「え？」

エレン「この樹はな．．．、ガキの頃に幼馴染と一緒に掛けっこしたり、薪割りしに来た後に昼寝をしてた場所だったんだ。」

五月「そうだったんですか．．．。」

エレン「今思えば、あの頃は楽で良かったな。何も考えず夢と希望を抱いて、走り回って、悪ガキと喧嘩して、家に帰って母さんに叱られて．．．。平和な日々だった．．．。」

五月「イエーガー君．．．。」

エレン「つて、悪いな。こんな女々しく思い出話しちまって。」

五月「思い出話をする事は、女々しくありませんよ。それだけ、幸せな思い出が籠こもっているのは良い事なのでは無いのですか？」

エレン「そうだな……。」

五月「ですが……。」

エレン「ですが？」

五月「少し、妬けてしまいますね。」

エレン「ハハッ。悪い悪い。」

五月「ふわぁ……（汗）」

エレン「ん？眠いのか？」

五月「少しだけ……。」

エレン「なら、肩を貸してやるから少し寝な。」

五月「ふあい、おやすみなひやい・・・(☒ω☒)スヤア」

エレン「俺も少し寝よ・・・。」

ザアアアアア

エレン「……ん？ここは……？五月？つて居ねえ!!……よく見ると周りの景色も少し違う……？」

エレン「遠目にだが……、あれは家……か？だが、さつき見た限りでは無事な建造物は無かった筈……。」

ネエネエアソコニダレカイルヨ？

ダレナンダロナ？

エレン（誰かが走ってこっちに来ている……。あれは、子供？……つて、は？）
。 ㇿ ㇿ ㇿ

??? 「お兄ちゃんだあれ？」

??? 「ぶっ倒れてたけど、大丈夫か？」

エレン「・・・ジャン？それに、ミカサ・・・か？」

???「ジャンじゃねえよ!!俺の名はジエイクだ!!」

???「お兄ちゃん、何でパパの名前知ってるの？」

ジエイク「おい！ミア！知らない人と話しちゃ駄目って親父達から言われて・・・。」

エレン「お前ら知ってるのか!?ミカサとジャンを!!というか、ジャンが親父!？」

ミア「お兄ちゃん・・・、パパの知り合い？」

エレン「あ、ああ・・・。一つ聞いて良いか？」

ジエイク「何だよ・・・？」

エレン「お前らの父親はジャン・キルシュタインで、お前らの母親はミカサ・アツカー

マン・・・か？」

ジェイク「そ、そうだけど？」

エレン「西暦は・・・？」

ミア「872年だよ・・・？」

エレン（オイオイマジかよ・・・。爆睡かましてタイムスリップとか笑えねえよ・・・。
（・・・ω・・・）

ジェイク「・・・兄ちゃん大丈夫か？つてか、どこかで見た事あるな・・・。」

エレン「い、いや。人違いだろう。」

ミア「取り敢えず、私達のお家に行こう。泥だらけだから。」

エレン「いや、それもどうかと思うが……。」

ミア「いいから行くの!!!」

エレン「……分かった。(強引な所は、ミカサ似だな。)」

——シガンシナ区——

ザワザワワイワイ

エレン「暫く見ない内に、変わっちゃまったな……。此処も……。」

ジェイク「昔、住んでたのか？」

エレン「ああ……。つて、ミアは!?!」

ジェイク「え? さつきまで此処に……。つて、居ねえ!!」

ミア「ただいまー。」

ジェイク「ミア!!何処に行つてたんだよ!!」

ミア「ジェイク!!お兄ちゃん!!はいこれ!」

エレン「・・・アップルパイ?」

ミア「美味しいよ!!」

エレン「いただきます・・・。お、うめえ。」

——少し歩いた丘の上——

ミア「もうちよつとで着くよ!!」

ジェイク「相変わらず、市場から家までの距離がやべえ・・・。」
「ゼーハー」

エレン「ここが……。市場がある所では、暮らさないのか？」

ジェイク「……。親父と母さんは、”英雄” エレン・イエーガーを殺した反逆者らしいから……。」

エレン「……。つ。そうか……。学校とかはどうしてる？」

ジェイク「ヒストリア陛下が、専属の教師を付けてくれてる。勉強には困ってねえ。」

エレン「……。ジェイク。」

ジェイク「何だよ。」

エレン「お前は、エレン・イエーガーを怨むうらむのか？」

ジェイク「……。はあ!?!何でだよ?」

エレン「英雄」エレン・イーガーを親が殺した事で、肩身が狭い思いをしているんじゃないのか？」

ジェイク「別に？家族と居れば、それで良いし。」

エレン「……そうか。（裏表が無さそうな所は、ジャン似だな。）」

ミア「見えた!!」

ジェイク「早く行こうぜ!!」

エレン「……。」

ジェイク「兄ちゃん？」

エレン「済まないジェイク、ミア。これ以上先には進めない。」

ミア「な、何で!？」

エレン「何でもだ。それに……。」スウウウ

ジエイク「体が薄れて……!!」

エレン「そろそろ、お別れの時間らしいな……。」

ミア「……っ。ジエイク!! 耳貸して!!」

ジエイク「何だ!?! …… 成程。じゃあ、早く行くぞ!! 兄ちゃん!! 少し待ってて!!」

エレン「……?」

エレン（もって、あと数分……。何しに帰ったんだ……。? って、お?）

ジェイク 「兄ちゃん!!これ!!」

ミア 「パパとママからの!!」

エレン 「これは・・・、花? ローダンセとライラック?」

ミア 「ママとパパに、お兄ちゃんの事を話したら・・・。」

ジェイク 「心当たりがあるみたいで、これを渡してくれつて。」

エレン 「そうか・・・。お前ら。」

ジェイ・ミア 「?」

エレン 「父さんジャンと母さんミカサの事、大事にな。」

ミア「うん!!」

ジェイク「応!!」

フツ

ミア「行っちゃったね・・・。」

ジェイク「そうだな・・・。」

ミカサ「二人とも。」

ジャン「花はちゃんと”お兄ちゃん”に、渡せたのか？」

ジェイク「親父!!母さん!!」

ミア「うん♪お兄ちゃん、喜んでた!!」

ミカサ「・・・そう。良かった。」

ジャン「何というか、あいつは心配性だよなあ・・・。ま、そこがあいつの長所でもあるんだが・・・。」

ミカサ「ふふつ。確かに・・・。さ、二人とも。お家に帰って、おやつの時間。」

ミア・ジェイク「やったー!」

ミカサ（エレン、聞こえてる？）

ジャン（こっちは平和に暮らしてるぞ・・・。）

ミカサ（もしも、輪廻転生というのがあれば・・・。）

ジャンミカ（あなた（お前）にも、幸せに暮らしていて欲しい・・・。）



ガーくん、イエーガーくん

エレン「……ん？」

五月「起きられたのですね（＾＾）」

エレン「どのくらい寝てた？」

五月「数時間ほどでしょうか？私は先に起きていたので、四葉達とfrisbeeをして
いましたが……。」

エレン「……そうか。」

五月「さ、誘った方がよろしかったでしょうか！」アセアセ

エレン「いや、俺も久々に落ち着いて過ごされた……。もうそろそろで帰りの時間
か？」

五月「そうですね。」

エレン「ところでこれは……？」

五月「ひ、膝枕です……。お気に召しましたでしょうか……。／＼／＼」

エレン「あー、なんか頭が柔らかいと思っただけ……。まあ、首も痛まないし、ちょうど良い高さだな……。」

五月「よ、良かった……。」

エレン「けど、そろそろ起きねえと……。よっこいせつと。」

五月「……？ イーガー君？ 肩から何か落ちましたよ？」

エレン「え？ マジで？」

五月「これは……、はなびら花弁……？」

エレン「ローダンセと、ライラックの花弁……？（まさかな……）」

二乃「二人ともー、船が出ちやうわよー。」

五月「す、直ぐに行きまーす!!」

エレン「今行くぞー!!（またな……、ジエイク……。ミア……）」

ローダンスの花言葉は、変わらぬ想い。
ライラックの花言葉は、大切な友達。

悪魔の子、墓参りをして、タイムスリップをかます。

「新学期も一筋縄ではいかない！姉妹戦争（シスターズ
ウォー）——新学期編」

新学期に出会うは、キラキラ系男子★

新学期が始まる……。

それは、新入生からすれば新たな門出の祝いであり。

上級生からすれば、新しい後輩が入って来る、両者にとって心躍る日である。

しかし、今まで親しかった友人と、離れ離れになる危険もある。

それは、無論五つ子にも当てはまる。いや、寧ろ家族だからこそ、別クラスになると、
悪魔エレンと勉強人風太郎は踏んでいた。

駄菓子菓子!!世の中はそんなに甘くは無い!!

エレン「・・・風太郎、・・・クラス表見たか？」

風太郎「ああ・・・。」

エレン「なんで・・・。」

一花「まさか、皆同じクラスとはねー。」

四葉「日頃の行いが良いから、神様が御褒美くれたのかも (≡▽≡)」

二乃「神様なんて、居る訳無いわよ。」

三玖「でも、こうして皆と同じクラスになれたのは事実。」

五月「これから、楽しくなりそうですね♪」

風太郎（五つ子だぞ・・・！ありえねえ!!）

エレン（マルオさんが、何かしたんだろうな・・・。（・|・；））

風・エレ（同じなのは、顔だけにしてくれ。）

江端「旦那様。無事、お嬢様方が同じクラスに配属されたとの事です。」

マルオ「そして？」

江端「彼も、同じクラスです。」

マルオ「・・・ご苦労。」

ワイワイガヤガヤ

モブ「わあゝ。」

モブ「中野さんが、五つ子なのは知ってたけど。」

モブ「実際、揃ってる所を見るのはすげえな。」

モブ「やっぱり、そっくりなんだねー。」

モブ「名字だと分かりづらいから、名前で呼んでいい？」

一花「うん、その方が私達も分かりやすいかもー。」

モブ「あれやってよ。同じカード当てる奴！」

二乃「ごめんねー。テレパシーとか無いから。」

モブ 「三玖ちゃんも似てるんでしょ？もっと、顔見せてよ。」

三玖 「……………（； ……）」

ドタバタ

風太郎 「どいてくれ。」

三玖 「フータロー。」

四葉 「た、助けて下さい。」

モブ 「何？上杉君も、中野さん達の事が気になる？」

風太郎 「トイレだ。邪魔だからどいてくれ。」

モブ「え．．．、何あれ。」

モブ「あの人、感じ悪っ。」

エレン（ああ．．．、また尻拭いを．．．。）キリキリ

二乃「ふ．．．、フータロー。」

一花「あはは．．．、私達は無視．．．（；；）。」

五月「相変わらずですね。」

エレン「一年のときから変わんねえな。あえて人と関わらないスタイル。」

四葉「そういうえば、林間学校の係も、一人でやろうとしてた！」

五月「そういう人なんです。」

一花「根は良い子って、みんなに知って貰えば良いんだけど・・・。」

エレン「本人がそういうスタンスだ。無理に関わらせようとのすんのも酷だろ。」

モブ女子「それにしても、イエーガー君と同じクラスなんて夢みたい!!」

モブ女子「写真撮って良い!？」

モブ女子「連絡先交換して!!」

エレン「待て待て待て!!情報量が多い!!」

五月「(・；H・)ムムム」

一花(あらら・・・、ヤキモチ焼いちやった・・・。)

モブ男子「ねえ中野さん。あれやった事あるでしょ。幽体離脱って奴。」

二乃「！」

モブ「シンクロしたりとか。」

モブ「何処に住んでんの？」

二乃「いい加減に……（言、#）」

一花「まあまあ……。（*、*、*）」

???「みんな止めよう。ね？」

一・二「？」

???「そんなに一気に捲し立てたら、中野さんやイーガー君も困っちゃうよ。」キラキ

ラ

モブ女子「武田君！」

武田「ね？」キラキラ

二乃「あ、ありがと……。」

モブ「確かに、武田の言う通りだな。」

モブ「はしやぎ過ぎちやった。……ごめんね。」

武田「だけど、気持ちちは分かるよ。五つ子に加え、文武両道の学年トップ。みんな君達の事が、もっと知りたいんだよ。ね？」キラキラ

二乃「は……ははは……(???)」。

一花「どーもー。」

武田「ははっ。どういたしまして。」

先生「席につけー。オリエンテーションを始めるぞ。」

エレン「席に着こうぜ。武田、ありがとな。」

武田「どういたしまして。じゃあまた。」キラキラ

四葉「武田さん！なんて、親切な人なんでしょう！！」

二乃「そう？胡散臭いわ。」

一花「コラコラ。」

三玖「ていうか、エレンの知り合い？」

エレン「あー、まあな。」

先生「今日からお前達は、三年生だ。最高学年になった自覚を持ち、後輩達に示しの付くような学校生活を送る様に心掛け……。」

エレン「ふわあ〜。」（五月の隣）

五月「ちよつと、イエーガー君!!」

エレン「話長い……。っていうか、後ろ。」

五月「え?」

四葉「(・・)ノ」

五月「……。」

エレン「……。」

四葉「（・―・）ノ」

先生「それから……。」

四葉「（・―・）ノ」

先生「……なんだ？」

四葉「このクラスの学級長に、立候補します!!」バーン

エレン「ジ●ジョの擬音が付きそうな位にバーンつといたな。」

一花「そうだね……。」

先生「ええー、まだ、誰も聞いてないけど……。」

四葉「そこをなんとか！やらせてください!!」

先生「反対もして無いけど……。まあ、他にやりたい奴が居ないなら……。」

四葉「皆さん、困ったら私に何でも言ってくださいね!」

パチパチ

先生「じゃあ、ついでに男子の方も決めとくか……。立候補する奴はいるか。」

四葉「いますかー?」

先生「推薦でも良いぞ。」

四葉「良いぞっ!!」

一花（もー、四葉ったら。恥ずかしい・・・。）

モブ「お前やれよ。」

モブ「いや、男子の学級長なんて、エレンか武田ぐらいだろ。その内誰か推薦するつて。」

モブ「エレンはやらねえのか？」

エレン「面倒くさいし、仕事があるから無理。」

モブ「じゃあ、武田しかいねえな。」

武田「全く・・・、やれやれ・・・。」キラキラ

エレン（早く休み時間来ーい。喉乾いたー。水飲も。）グビグビ

四葉「先生。私、学級長にびったりな人を知っています！」

モブ「ほらな。」

四葉「上杉風太郎さんです!!」

エレン「ゲホッゴホッ!!」

風太郎「ハア!？」

武田「……。キラキラ

ザワザワ

モブ「えっ、上杉君で大丈夫？」

モブ「武田君や、イエーガー君を差し置いてだなんて……。」

モブ（いったい何者なんだ……。）

風太郎（四葉・・・、なんて事を・・・。）

先生「よし！次の係も決めるか！」

風太郎「先生！俺はまだやるとは言ってません!!」

エレン「・・・。」（風太郎に視線をやる）

風太郎（エレン！助ける!!）

エレン（・・・。）

エレン『が・ん・ば・れ（ *・ω・ ） b グツ☆』（口パク）

風太郎（この・・・、裏切りもんがあああ!!）

悪魔の子。
台詞を。パクられる。

本日の天気は、トイレときどきキラキラ男子。その後
デート（もどき）と成るでしょう。

エレン「ふうー。スッキリした。」ジャーゴボゴボ

風太郎「ちよつと待て、俺はまだ終わってない。」

エレン「早くせんと、授業始まるぞ……」

風太郎「急かすな。つたく、四葉の奴も余計な真似を……。」

エレン「なあ……。風太郎。」

風太郎「……。なんだよ。」

武田「……。キラキラ

エレン「絶賛、右からキラキラオーラが当たってる事には気付いてるよな。」

風太郎「ああ……。……。何だよ。」

武田「上杉君、イエーガ君。君達は随分、彼女達に信頼されているみたいだ。ね？」

エレン（やべえ。風太郎と武田の温度差があり過ぎて、すげえシユール。）

風太郎「だから何だ？学級長なんて、勉強の足枷でしかねえ」

武田「ふふふ。昔から変わらないね、君達も。流星は、僕のライバルだ。」

風太郎「何だったんだ？」

エレン「さあ？……。先行つとくぞ。」

風太郎「応。」

エレン「それにしても、あいつが学級長か……まあ、これでデリカシー無し男から、少しはマシに成ってくれば良いんだが……、それにしても、旅行のときのあの男。次いつ現れるか分からない以上、対策を立てとかねえと。」

東人『1000年以上も前に、パラディ島以外の人間の約8割を塵殺おうさつしたあなたが？』

エレン「耳が痛てえな……。」

三玖「エレン。」

エレン「ん？三玖か？」

三玖「考え事？」

エレン「あー、まあな。この前の件で。」

三玖「そつか・・・、あまり気にしすぎると禿頭とんどくになるよ？」

エレン「ははっ。ハゲになるのは勘弁して欲しいな（ω・・）」

三玖「・・・この前の、旅行のこと気にしてるんだよね。」

エレン「・・・何気にお前って、洞察力高いよな。」ナデナデ

三玖「むう・・・、子供扱い。（。・・、H・）」

エレン「悪かったって。あー、それからあの男が言つてた件なんだが・・・。」

三玖「大丈夫。エレンが居た時代は戦時中で、エレンは兵士だったんでしょ。」しよ
うがなかった”事なんじゃないの？”

エレン「三玖……。」

三玖「それに、エレンは悪魔じゃなくて、私達の家庭教師……。この捉え方で皆も納得してる。」

エレン「ああ……。ありがとな。で？本題は？」

三玖「フータローには内緒にしてて欲しいんだけど……。」

エレン「あいつの誕生日プレゼントか……。――」

三玖「エレンなら、何か知ってるかなと思って……。去年渡したりしなかったの？」

エレン「んー。そもそも、あいつと今ぐらいの仲になったのは、4月の終わりぐらいだったからな……。あいつの誕生日って、4月15日だろ？だから一回も渡した事が無いんだよ……。」

三玖「そつか……。わ、わ、」

エレン「なんか悪いな……。」

三玖「気にしないで……。じゃあ、エレンも一緒に考える？」

エレン「分かった。その作戦乗ったぜ。」

教室

風太郎「えー、我々も三年生になったという事で。」

武田「すみませーん、上杉学級長。声が小さくて何を言ってるのか聞き取れません。」

もう少し大きくお願いします。ね？」

エレン「風太郎、ガンバ。」

風太郎「一学期のメインと言って良い、あのイベントについて話し合いたいと思います！（茶々を入れやがってー!!）」

四葉「いよいよ始まります・・・。」

風太郎「全国実力模試が!!」

四葉「修学旅行ですね!!」

五月「見事にばらばらの発言ですね・・・。」

エレン「大丈夫か？あの凸凹^{でこぼこ}学級長コンビ？」

一花「多分……（；・ω・）。」

四葉「皆さん、全力で楽しみましょー。」

エレン（今日は休日……。神奈川県全域に、サーモグラフィを搭載した蚊型のドローンを飛ばしたが、一向に尻尾を出す気配なし……。）

エレン「あー、狙ってんならさっさと襲撃してくりやあ良いだろ!!」

ピンポーン

エレン「ん？はいはい。（来客？）」

五月「あ、居らっしゃいましたか。」

エレン「おう、居らっしゃったぞ。何か用か？」

五月「え、えと／＼。い、一緒にお出かけなどは如何でしょうか？」

エレン「別に構わねえけど・・・、急に如何した？」

五月「み、道すがら話します！早く用意を!!」

エレン「何で誘われてなのに、俺が急かされてんだよ!!」イソイソ

エレン「待たせたな。」

五月「いえ、急に申し訳ありません。」

エレン「で、何でいきなり？」

五月「理由は二つほどありまして・・・。まず一つ目は、とあるお店のレビューを付

ける為。そしてもう一つは・・・。」

エレン「もう一つは？」

五月「イエーガ君の、気分転換です。」

エレン「？」

五月「ああは言っていました、今のあなたは思い詰めている様子です。大方、旅行時に出会った彼の事でしょう。」

エレン「・・・まあな。」

五月「その気晴らしのためです！今日は私がエスコートしますからね！！（？　～　▽
～）??・??」
「フンス」

エレン「はいはい。宜しくな。」

エレン「ここは、ゲーセンか。」

五月「楽しむなら、先ずは此処でしょう！」

エレン「これは・・・。」

RESIDENT DEVIL

エレン「ゾンビのゲームか？」

五月「はい！とある製薬会社が人間がゾンビになる薬を開発したのですが、その薬が漏洩してしまい、人々がゾンビになってしまう映画が元になっているんです！」

エレン「それは分かったんだが・・・、大丈夫か？」

五月「はい？」

エレン「いやお前……。まあ、いいや。」↑（お金投入）

ゲーム画面「GAME START」

五月「?」（*、*）☒「チーン

エレン「なんで、ホラー苦手なのにこんなゲームをチョイスしたんだ・・・。」

五月「?」（*、*）☒「チーン

エレン「大丈夫か？」

五月「じ・・・。」

エレン「じ?。」

五月「自分がホラー嫌いな事を忘れてました・・・orz」↑（二人きりのお出かけが嬉しくて、その事を失念していた。）

エレン「だろうと思ったぜ・・・。」（ん、ん）「ヤレヤレ」

五月「し、暫く、シューティングゲームがトラウマになりそうです……。」

エレン「一生の不覚って奴かw」

五月「うう……。 (T ◇ T)」

エレン「しょうがねえな……。ちよつとこつち来い。」

五月「ふえ？」

エレン「なんか欲しいのあるか？取ってやる。」

五月「こ、これは……。クレーンゲーム！で、では……。あそこの人形を……。」

エレン「あれは……。」

神奈川県のマスコットキャラ えびく●や

エレン「ぶふっ!!な、成程な・・・」プルプル

五月「わ、笑う事無いじゃないですか!!（；；H・）」

エレン「い、いや、数あるぬいぐるみの中で、食い物海老を選ぶとは・・・。分かった、取ってやるから機嫌直せって。」

五月「♪」ホクホク

エレン（結局3回目で取れた・・・。しかし、これだけで機嫌が直るとはチョロすぎないか？）

五月「決めました！この人形は、私の枕の傍に置きます！」

エレン「お、おう。で、今からケーキ屋に行くんだったな。」

五月「はい。そのお店のレビューは前々から付けたいと思ってまして。」

エレン「店名は？」

五月「REVIEWALです。二乃と、上杉君が働いてるところですよ。」

エレン「そうか・・・、で？そのグラサンとマスクは？」

五月「変装用です！（？）「■」。ドヤア」

エレン「な、成程・・・？」

五月のアホ毛「やあ、こんにちは。」ピョコピョコ

エレン（進撃の巨人の力を使わずとも、即落ち2コマになる未来しか見えねえ……。）

カランカラン

店員「いらつしや……。、（M、M・A・Yさん!）」

M・A・Y「2名です。」

店員「こ、こちらの席にどうぞ……。。」

エレン「入ってすぐに座れるとはな。」

M・A・Y「空いている時間帯で良かったです。」

エレン「さて、何にするかな……。お、期間限定のチーズケーキ。俺これにする。飲み物は……。、アールグレイで。」

M・A・Y 「では、私はこのショートケーキとチョコレートケーキで。飲み物はレモンティーで。」

エレン 「じゃあ、店員を呼ぶか？」

M・A・Y 「・・・その前に、イエーガー君。」

エレン 「ん？」

M・A・Y 「一つお聞きしても宜しいでしょうか？」

エレン 「急に如何した。まあ、答えてやらねえ義理も無いが。」

M・A・Y 「・・・戦争による復讐心というのは、そう簡単に無くならない物なので
すか・・・？」

エレン「……。」

M・A・Y「私には分かりません。……いえ、それは恐らく私が地獄戦争を体験した事が無いからでしょう。だとしても……、旅行のときに出会った彼は、常軌を逸してました……。」

エレン「確かに俺は、あの時奴の故郷を潰した。……だが、今になると、奴の復讐心も分かる気がする。」

M・A・Y「な、なぜですか？」

エレン「……なら、逆に聞くが……。」

M・A・Y「え？」

エレン「仮に今が戦時中だでしょう。もしも今この瞬間に、他の姉妹が殺されたならば、お前はその国の人間を恨まないと言えるのか？」

M・A・Y 「……っ。そ、それは……。」

エレン 「人間の復讐心というのは、愛と同じものだ。」

M・A・Y 「愛と同じ?」

エレン 「ニュースでたまに、紛争地帯の中継が流れるだろう? あれを見てお前は どう思う?」

M・A・Y 「……可哀そうと思います。」

エレン 「なら、その可哀そうな目にあってる国を虐げる国に復讐心は抱くか?」

M・A・Y 「抱きません……。」

エレン 「そうだな? ならその違いは何だろうか?」

M・A・Y 「愛してる人が死ぬかそうでは無いか・・・。」

エレン「正解。恐らく奴の家系は、国を、民を愛していたんだろう。だから俺が踏みにじつた事に家系の一部の人間達が代々怒りを募らせた。今が2018年だから俺が死んでからの年月は1164年。その間に募らせる恨みは相当なものだろう。」

M・A・Y 「・・・その恨みを、話し合いで受け止めれるのですか？」

エレン「話し合いだけでは無理だ。奴の頭を冷やさせねえとな。」

M・A・Y 「・・・そうですね。」

エレン「暗い話は、ここらで終いだ。さつさと注文をしねえと質の悪い客に思われ・・・。」

二乃「そちらのカップル二名様ー。御注文をお伺いに来ましたー。」

エレン「げ！二乃！！」

二乃「げ！とは何よ！！五月も何やってんのよ・・・。」

エレン「何言ってるんだ？此処に居るのは天下のM・A・Y様だぞ！」

二乃「アホ毛でバレバレよ！！」

五月「あうう・・・。(; ω ;)」

悪魔の子、デートを楽しむ。

新家庭教師のライバル

トイレ

エレン「頑張ってるみたいだな、学級委員長。」

風太郎「まあな……。」

キラキラ

エレン「横を向け。」

風太郎「いやだ。」

エレン「話が進まん。む・け。」

武田「上杉君、イエーガー君。」キラキラ

風太郎「毎回なんだよ!!」

武田「大変そうだね、中野さん達の家庭教師。」

風太郎「・・・!」

エレン「その情報・・・、どっから。」

武田「ふふつ、どうだい？僕が変わってあげても良いけど・・・ね？」キラキラ

武田「中野さんのお父さんから話は聞いたよ。成績不良の五つ子の皆さんを赤点回避させるべく、学年1，2を争う君達に白羽の矢が立ったとね。」

風太郎「何故、お前があのお父親と面識があるんだ。」

エレン「武田の父親が、学園の理事長だからだよ。金持ち繋がりであれじゃね？」

風太郎（ボンボンコミュニケーションニティーめ・・・。）

武田「そんな事は置いといて、君達は他でもバイト・・・イエーガー君は警察官という責任が伴う仕事をしているみたいじゃないか。」

エレン「半グレをぼこぼこにする不良警官でしかないけどな・・・。」

武田「それでも、市民の安全を守っているのは確かだ。しかし、大変だろう？僕が変わってあげるよ。」

エレン「生憎、二足の草鞋を履くのが上手くなってきたな。お先に失礼。」

武田「へえ・・・。（イエーガー君の方は、さして問題じゃなさそうだね・・・。）」

三玖「ここで集まって勉強するのも久しぶり。」

二乃「最近は、皆バイトなものね。」

四葉「二花は今日も仕事だけど、試写会私も行きたかったな〜。ところで……五月はバイト……。」

五月「ギクリ!!」

エレン（声に出す奴初めて見たな……。）

二乃「あんた、まだ見つけて無かったの？」

五月「もう少しだけ、考える時間をください。」

風太郎「お前ら、口より手を動かせ。」

エレン「風太郎の言う通りだ。時間は有限だぞ。月末の全国模試も迫ってんだし。」

二乃「一通り埋めたわ。はい、答え合わせ宜しく。フー君っ。」グイッ

三玖「私も終わってる。」バッ

二乃「邪魔なんだけど……。」

三玖「何で？」

二乃「は？」

エレン（おっと、キャットファイトの予感……。）

ファイッ!!

ポコポコポコ

四葉「模擬試験、結構難しかったねー。」

五月「そうですね。しかし、それほど不安でもないというか……。」

エレン「学年末試験を乗り越えたからな……。」↑（ホットチョコを二人に飲ませる）

三玖「そうだね……。」ズズズ

二乃「一度超えた壁だもの、余裕だわ。」ズズズ

四葉「こうなると、いよいよ卒業も見えてきましたね！上杉さん！イエーガーさん！！」

風太郎（こいつらの言ってる事も間違いではない。試験の難易度なんてそう変わるものでも無い。という事は、本当に見えてきたのか……？あの時彼方に見えたゴールが……！）

風太郎 「よっしやー！ 答え合わせするぞー！」

四人 「はーい!!」

エレン 「どうしてこうなった……。冗談だろ……。」

風太郎 「ほとんど赤点じゃねーか……。」

エレン 「お前らあれか。鳩と同じように三歩歩いたら、忘れるタイプか？ 前世は鳩なのか？」

四葉 「成程、道理で!!」

風太郎 「納得するなよ。」

三玖 「出来たと思ったのに……。」

二乃「言い訳になるかもだけど、ここ最近仕事ばかりで、あんま自習できてないのよね。」

エレン「確かに、五月の点はそこまで下がってない……。」

五月「すみません！すみません！」

風太郎「無事卒業とか、言ってる傍からこれだ。俺達の模試勉強もあるって言うの……じゃあ、間違えた箇所を順番に修正していくぞ……。」

四人「……お願いします！」

エレン（1年間で変わったな……。昔なら「自分で何とかしろ」とか言いそうなのに……。責任ある学級長という立場に着いた事で、責任感が付いたか……。いや、五つ子のお陰か……。）

五月「イエーガー君、ここなのですが……。」

エレン「この問題は、案外簡単だ。お前は難しく考えすぎてるが、頭をソフトにして、ここを簡略化すれば良い。」

五月「分かりました。」

二乃「エレン君。ここは……。」

エレン「文章をよく読んでみる……、ここは一見過去形に見えるが……。」

ピンポーン

五月「！はい。」

三玖「フータロー。ここだけど……。」

ガチャ

エレン「へ？マ、マルオさん……？」

マルオ「失礼するよ。」

風太郎「!？」

三玖「お……、お父さん!？」

二乃「どうしたのよ急に……、というかこの家……。」

マルオ「もうすぐ全国模試と聞いてね、彼を紹介しに来たんだ。入りたまえ。」

エレン「お、お前……。」

武田「お邪魔します。申し訳ない、突然押し掛ける形に成っちゃって……。」

エレン「武田……?」

二乃「え……君って……。」

三玖「どういう事?」

四葉「わ、私。何がなんだか……。」

げんば は こんらん している▼

マルオ「今日から、この武田君が君達の新しい家庭教師だ。ああ……、イエーガー君はそのまま続けて貰うがね。」

エレ・二乃「はあ!?!」

五月「どういう事でしょう？説明してください。」

マルオ「・・・上杉君。先の試験での君の成績は大きい。成績不良で手を焼いていた娘達だが、優秀な同級生に教わるという事で、一定の効果を生むと君は教えてくれた。」

三玖「それなら、フータローを変える必要なんて・・・。」

エレン「・・・まさか!!」

二乃「・・・あ。」

マルオ「イエーガ君と、察しの良い二乃君は気付いたようだね。」

エレン「それは、あくまで成績一位をキープしていた・・・から・・・？けど、風太郎は五教科の点数が、急激にじやないが緩やかに下がってっている・・・。そして、俺と並ぶ学年同率一位に成ったのは・・・。」

マルオ「彼という訳だ。ならば、家庭教師に相応しいのは……、分かってくれるね。」

武田「ふつ、ふつふつふ……。くくく……。ヤッター！勝ったー！勝ったぞー！！
Yes! Oh, Yes!!」

エレン「もしかしてオラオラですかーっ!?」

武田「Yes! Yes! Yes!!」つて、間に入らないでくれるかな……。」

エレン「ジョジ●ネタをやってみたかった……。悪いと思ってる、けど後悔はして
いない……。」

武田「と、とにかく上杉君！長きに渡る僕らのライバル関係も今日で終止符が打たれた!!遂に僕は君を超えた!!この家庭教師も、僕とイエーガー君でやってあげよう!!」

風太郎「……。」

エレン（風太郎・・・まさかお前・・・。）

武田「始まりは二年前・・・、学年トップを目指して・・・。」

風太郎「いや、お前誰だよ。」

エレン「はあく・・・。」

武田「えっ・・・、ほら・・・ずっと学年三位で君達に迫ってた武田祐輔・・・。」

風太郎「あんなに突つかかかってきたのは、そういう訳か。ずっと分からなかったんだ。今まで満点しかとって無かったし、勉強仲間だったエレンはともかく、エレン以外の下の順位の3位以下は気にした事無かったわ（・・・）スンツ」

武田「三位・・・以下・・・!!三位以下・・・。」

エレン「武田・・・涙拭けよ。」

二乃（憐れだわ・・・。）

五月「分かりました。学年で一番優秀な生徒が家庭教師に相応しいというなら構いません。恐らく、それだけが理由では無いのでしょうか・・・。しかし、それなら私にも考えがあります。私が三年生で、一番の成績を取ります！」

エレン「What!？」

四葉「え？」

二乃「え？」

三玖「え？」

マルオ「ふむ。良いだろう。」

三玖「ちよ、ちよつと待って!!お父さんに、何言われても関係ない。フータローは私達が雇つてるんだもん。」

二乃「そうよ!ずっとほつたらかしてた癖に、今になって……。」

武田「上杉君が、家庭教師を辞めるといふ事。それは、他ならぬ上杉君の為だ。君達のせいだ。君達が上杉君を凡人にしたんだ。」

マルオ「彼には彼の人生がある……、解放してあげたらどうだい?」

三玖「……っ!」

二乃「でも……っ。」

風太郎「その通り……だな。」

四葉「上杉さん……。」

風太郎「お前が俺達を過剰に評価してんのは分かった。お前が言ってる事も間違いではない。だか、去年の夏までは・・・あるいはエレンと一緒にこの仕事を受けて無かったら・・・、俺は凡人にもなれて無かったらよろよ。教科書を最初から最後まで覚えただけで、俺は知った気になっていた。知らなかつたんだ、世の中には単純に馬鹿な奴・・・。それに、大切な奴らの為に文字通り命を捨てて戦う、エレン^{老兵}が居た事も。俺が、こんなに馬鹿だったことも。こいつらが望む限り、俺は付き合いますよ。解放なんてして貰わなくて結構。」

マルオ「そこまでする義理は無いだらう。」

風太郎「義理はありません、ですが・・・。この仕事は、俺とエレンにしかできない自負がある!!こいつらの成績を落とす事はしません、俺の成績が落ちてしまった事に關しては、ご心配おかけしました。俺はなつて見せます。そいつに勝ち、またエレンと肩を並べ一位に成つて見せます!!・・・全国模試1位に!!」

全員「・・・・・・・・。」

風太郎「そして・・・、モガア!!」

四葉「う、上杉さん!」

風太郎「何だよ!!」

五月「全国は無茶ですって!!」

三玖「フータロー、もう少し現実的に・・・。」

エレン「・・・武田、ちよつと俺からも・・・。」

武田「どうしたんだい?」

エレン「武田が、孤高な天才の風太郎を超えようとしたのは分かった。それは、すげえ尊敬できるし、お前の気持ちも分かる。・・・でも、俺は今の風太郎も十分魅力的だと

思う……。あ、因みに俺にそっちの気は無いけどな……。」

武田「……。」

エレン「今少し、あいつらを見守っててくれないか？」

武田「テストの結果次第だね……。」

エレン「あと単純に、ノーデリカシー野郎に戻られて、胃薬を増やされたくない。」

マルオ「それが本音かい……。」

風太郎「全国で10位以内!!これですか!おい!離せ!!」

武田「大きく出たね……、無理に決まってる。それも五人を教えながらなんて……。」

エレン「そうか?俺も昔、絶対に不可能な事全世界の一次的な休戦をやり遂げた事があるんだが……罪

悪感はんばなかったけど、何とかなつたぜ。」

武田「……。」

マルオ「分かったよ……。もし、この全国模試でそのノルマをクリアできたのなら、改めて君が娘達に相応しいと認めよう……。」

エレン「じゃあ、俺もついでに10位以内目指します。」

マルオ「了解した……。」

悪魔の子、10位以内宣言完了!!